主要地方道成田松尾線 I

小池麻生遺跡
小池向台遺跡

昭和58年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線Ⅰ

小池麻生遺跡
小池向台遺跡

昭和58年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序　文

千葉県の主要地方道成田松尾線建設事業は、道路整備により計画された事業で、当該計画地は北総台地を縦断しており、古くから多くの遺跡が所在することで知られております。

このため、千葉県教育委員会では、遺跡の分布調査を実施し、その取扱いについて土木部をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、工事区域内に所在する遺跡については、止むを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整いました。

昭和53年度に発掘調査を実施した小池麻生遺跡・小池向台遺跡は、きわめて限定された調査範囲でしたが、縄文時代から古墳・奈良・平安時代に至るまでの遺構が確認され、当該期の人々の生活を知る上で欠くことのできない貴重な遺構・遺物を検出することができました。

これらの資料は教育資料あるいは文化財保護普及のための資料として広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理に至るまで多大な御協力、御指導をいただきました千葉県土木部、千葉県成田土木事務所、千葉県教育庁文化課をはじめ、関係諸機関に感謝の意を表わすとともに発掘調査、整理に協力された調査補助員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和58年 3月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今井　正

例　言

1．本書は、主要地方道成田松尾線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コード番号は、小池麻生遺跡を409－001、小池向台遺跡を409－002とした。

2．発掘調査は、昭和53年４月１日から10月23日まで実施した。整理作業は、昭和57年度事業とし、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。

3．作業の分担は、発掘調査を折原　繁・萬崎博昭が担当した。整理作業及び報告書刊行作業は、萬崎博昭・奥田正彦・伊藤智樹が共同であたり、班長　斎木　勝が加筆・補正し、編集した。

4．本書の執筆は、以下のように分担した。

萬崎　第Ⅰ章第１節、第Ⅱ章第１・第２・第３節、第Ⅲ章第１・第２・第３節、第Ⅳ章第１節。

奥田　第Ⅰ章第２節、第Ⅱ章第４節１項、第Ⅲ章第４節。第Ⅳ章第１・第２節。

伊藤　第Ⅱ章第４節。

5．発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜わり、深く謝意を表わす次第であります。

千葉県教育庁文化課・千葉県土木部道路建設課・千葉県成田土木事務所・千葉県山武土木事務所・芝山町教育委員会・山武考古学研究所・成東警察署・折原　繁・杉山晋作・越川敏夫・地元諸氏。

6．現場発掘調査にあたり、酷暑の中、調査に従事して頂いた調査補助員の方々及び室内整理作業にあたって頂いた調査補助員の方々には、終始調査に対する御協力を頂き感謝致します。

凡　例

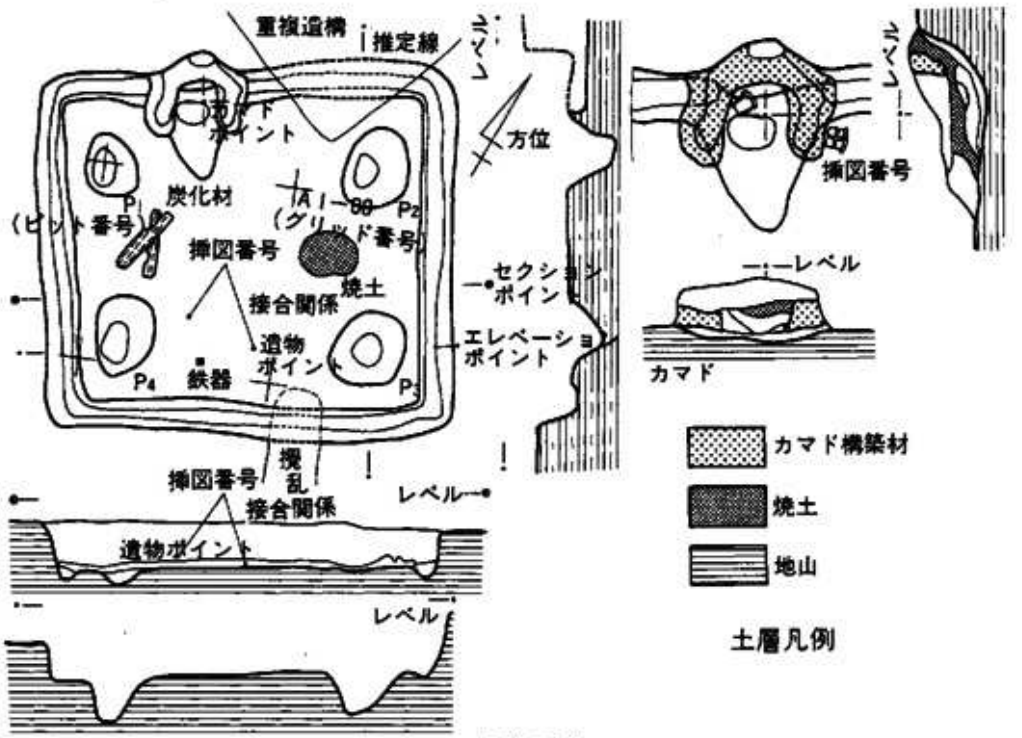
1．本書中における各遺跡の遺構・遺物番号は、現場作業において使用したものをそのまま使用している。

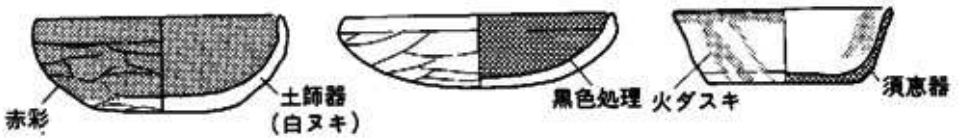
2．方位は座標北を示す。

3．本書で使用した地形図は国土地理院著作発行の5万分の1地形図（N1－54－19－10・昭和53年6月）である。

4．遺構と遺物の実測図は、下記の縮尺で統一している。

住居跡　1/60、カマド　1/40、柱穴群　1/60、土器 1/4、（1部1/3、1/6を使用）拓影図　1/3、石器1/2、鉄器　1/2、鉄器　1/2、土製品　1/2。





遺物凡例

目　次

序　文
例　言
凡　例
第Ⅰ章　総　説
第1節　調査の経緯……1
1項　調査に至る経過……1
2項　主要地方道成田松尾線の概要……1
3項　調査の組織……2
第2節　地理と環境……4
第Ⅱ章　小池麻生遺跡
第1節　遺跡の位置……13
第2節　調査の方法と経過……15
第3節　遺　構……20
1項　住居跡……21
2項　その他の遺構……60
第4節　遺　物……63
1項　遺構出土土器……63
2項　その他の出土遺物……84
第Ⅲ章　小池向台遺跡
第1節　遺跡の位置……98
第2節　調査の方法と経過……98
第3節　遺　構……100
1項　住居跡……100
第4節　遺　物……113
1項　住居跡出土土器……113
2項　その他の出土遺物……125
第Ⅳ章　小　結
第1節　小池麻生遺跡……127
第2節　小池向台遺跡……130

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図（１/50,000）…… 5
第２図　芝山町遺跡分布図（１）（１/62,500）…… 9
第３図　芝山町遺跡分布図（２）（１/62,500）……10
第４図　芝山町遺跡分布図（３）（１/62,500）……11
第５図　調査区周辺地形図（１/5,000）……14
第６図　グリッド分割図……15
第７図　遺構配置図（1A：1/2,000・B：1/200）……16
第８図　遺構配置図（2A：1/2,000・B：1/200）……17
第９図　遺構配置図（3A：1/2,000・B：1/200）……18
第10図　土　層　図……19
第11図　001住居跡実測図（１/60）……20
第12図　001号住居跡カマド実測図（１/40）……21
第13図　002号住居跡実測図（１/60）……22
第14図　002号住居跡カマド実測図（１/40）……23
第15図　003号住居跡・011号跡実測図（１/60）……24
第16図　003号住居跡カマド実測図（１/40）……24
第17図　004号住居跡実測図（１/60）……25
第18図　004号住居跡カマド実測図（１/40）……26
第19図　005号住居跡実測図（１/60）……27
第20図　005号住居跡カマド実測図（１/40）……28
第21図　006号住居跡実測図（１/60）……29
第22図　006号住居跡カマド実測図（１/40）……29
第23図　007号住居跡実測図（１/60）……30
第24図　007号住居跡カマド実測図（１/40）……31
第25図　008号住居跡実測図（１/60）……31
第26図　009号住居跡実測図（１/60）……32
第27図　010号住居跡実測図（１/60）……33
第28図　012号住居跡実測図（１/60）……34
第29図　012号住居跡カマド実測図（１/40）……35
第30図　013号住居跡実測図（１/60）……36
第31図　013号住居跡カマド実測図（１/40）……36
第32図　014号住居跡実測図（１/60）……37
第33図　015号住居跡実測図（１/60）……38
第34図　015号住居跡カマド実測図（１/40）……39
第35図　016号住居跡実測図（１/60）……40
第36図　017号住居跡実測図（１/60）……41
第37図　017号住居跡カマド実測図（１/40）……42
第38図　018号跡実測図（１/60）……43
第39図　019号住居跡実測図（１/60）……44
第40図　019号住居跡カマド実測図（１/40）……45
第41図　020号住居跡実測図（１/60）……45

第42図　020号住居跡カマド実測図（1/40）……46
第43図　021号住居跡実測図（1/60）……47
第44図　021号住居跡カマド実測図（1/40）……47
第45図　024号住居跡実測図（1/60）……48
第46図　025号住居跡実測図（1/60）……49
第47図　025号住居跡カマド実測図（1/40）……49
第48図　026号住居跡実測図（1/60）……50
第49図　026号住居跡カマド実測図（1/40）……51
第50図　027号住居跡実測図（1/60）……52
第51図　027号住居跡カマド実測図（1/40）……52
第52図　028号住居跡実測図（1/60）……53
第53図　028号住居跡カマド実測図（1/40）……54
第54図　029号住居跡実測図（1/60）……55
第55図　029号住居跡カマド実測図（1/40）……55
第56図　030号住居跡実測図（1/60）……56
第57図　030号住居跡カマド実測図（1/40）……57
第58図　031号住居跡実測図（1/60）……58
第59図　031号住居跡カマド実測図（1/40）……58
第60図　032号住居跡実測図（1/60）……59
第61図　032号住居跡カマド実測図（1/40）……59
第62図　101号柱穴群実測図（1/60）……61
第63図　102号柱穴群実測図（1/60）……62
第64図　009号住居跡出土土器実測・拓影図(1/3)……64
第65図　014号住居跡出土土器実測図(1/3)……66
第66図　014号住居跡出土土器実測図（1/4）……67
第67図　018号跡出土土器実測・拓影図（1/4）……68
第68図　001号住居跡出土土器実測図（1/4）……69
第69図　002号・003号・004号・005号住居跡出土土器実測図（1/4）……71
第70図　006号・007号・012号・013号住居跡出土土器実測図（1/4）……72
第71図　015号住居跡出土土器実測図（1/4）……73
第72図　016号住居跡出土土器実測図（1/4）……75
第73図　017号住居跡出土土器実測図（1/4）……76
第74図　019号住居跡出土土器実測図（1/4）……77
第75図　020号・021号住居跡出土土器実測図（1/4）……79
第76図　024号住居跡出土土器実測図（1/4）……80
第77図　025号・026号・027号・031号・032号住居跡出土土器実測図（1/4）……82
第78図　出土土器拓影図（1/2）……83
第79図　土製品・グリッド出土土器拓影図(1)……85
第80図　グリッド出土土器実測図(2)（1/4、1/6）……88
第81図　グリッド出土土器拓影図(3)（1/3）……89
第82図　グリッド出土土器拓影図(4)（1/3）……90

第 83 図　グリッド出土土器実測・拓影図(5)(1/3)……91
第 84 図　グリッド出土土器拓影図(6) (1/3)……92
第 85 図　石器実測図(1) (1/2)……94
第 86 図　石器実測図(2) (1/2)……95
第 87 図　石器・石製品・土製品実測図 (1/2)……96
第 88 図　鉄器実測図 (1/2)……97
第 89 図　小池向台遺跡調査区周辺地形図 (1 /5,000)……99
第 90 図　遺構配置図 (A：1/2,000、B：1/200)……100
第 91 図　土　層　図……101
第 92 図　001号住居跡実測図 (1/60)……102
第 93 図　001号住居跡カマド実測図 (1/40)……103
第 94 図　002号住居跡実測図 (1/60)……104
第 95 図　002号住居跡カマド実測図 (1/40)……104
第 96 図　003住居跡実測図 (1/60)……105
第 97 図　003号住居跡カマド実測図 (1/40)……106
第 98 図　004号住居跡実測図 (1/60)……107
第 99 図　004号住居跡カマド実測図((1/40)……108
第100図　006号住居跡実測図 (1/60)……109
第101図　006号住居跡カマド実測図 (1/40)……110
第102図　008号住居跡実測図 (1/60)……111
第103図　008号住居跡カマド実測図 (1/40)……112
第104図　012号住居跡実測図 (1/60)……112
第105図　001号住居跡出土土器実測図(1) (1/4)……114
第106図　001号住居跡出土土器実測図(2) (1/4)……115
第107図　002号・003号住居跡出土土器実測図……116
第108図　004号住居跡出土土器実測図(1) (1/4)……117
第109図　004号住居跡出土土器実測図(2) (1/4)……118
第110図　004号住居跡出土土器実測図(3) (1/4)……119
第111図　006号住居跡出土土器実測図 (1/4)……120
第112図　008号住居跡出土土器実測図(1) (1/4)……121
第113図　008号住居跡出土土器実測図(2) (1/4)……122
第114図　011号跡・012号住居跡出土土器実測図(1/4)……123
第115図　出土土器拓影図 (1/2)……124
第116図　石器・石製品実測図 (1/2)……125
第117図　鉄器実測図 (1/2)……126
第118図　出土土器集成図(1)……128
第119図　出土土器集成図(2)……129
第120図　小池向台遺跡出土坏の口径、底径の関係……131
第121図　住居跡出土坏の口径、底径関係図……132
第122図　古窯跡出土須恵器坏の口径……133

表 目 次

表 1　遺　跡　表……6
表 2　小池麻生遺跡遺構一覧表……136
表 3　001号住居跡出土土器表……137
表 4　002号住居跡出土土器表……137
表 5　003号住居跡出土土器表……138
表 6　004号住居跡出土土器表……138
表 7　005号住居跡出土土器表……139
表 8　006号住居跡出土土器表……139
表 9　007号住居跡出土土器表……140
表10　012号住居跡出土土器表……140
表11　013号住居跡出土土器表……140
表12　015号住居跡出土土器表……141
表13　016号住居跡出土土器表……143
表14　017号住居跡出土土器表……143
表15　019号住居跡出土土器表……145
表16　020号住居跡出土土器表……146
表17　021号住居跡出土土器表……147
表18　024号住居跡出土土器表……148
表19　025号住居跡出土土器表……149
表20　026号住居跡出土土器表……150
表21　027号住居跡出土土器表……150
表22　031号住居跡出土土器表……150
表23　032号住居跡出土土器表……151
表24　石器、土製品表……151
表25　鉄　器　表……153
表26　小池向台遺跡遺構一覧表……154
表27　001号住居跡出土土器表……154
表28　002号住居跡出土土器表……157
表29　003号住居跡出土土器表……158
表30　004号住居跡出土土器表……158
表31　006号住居跡出土土器表……165
表32　008号住居跡出土土器表……166
表33　011号跡出土土器表……170
表34　012号住居跡出土土器表……170
表35　石　器　表……170
表36　鉄　器　表……171

図版目次

図版 1　主要地方道成田松尾線関係遺跡航空写真
図版 2　小池麻生遺跡(航空写真)同遺跡近景
図版 3　調査中全景、調査後全景
図版 4　001号住居跡全景・同遺物出土状況
図版 5　002号住居跡全景・同遺物出土状況
図版 6　003号・004号　住居跡全景
図版 7　005号・006号住居跡全景
図版 8　004号・008号・009号住居跡全景
図版 9　012号・013号住居跡全景
図版10　014号住居跡全景、同遺物出土状況
図版11　015号住居跡全景・同炭化材出土状況・同調査完了全景
図版12　017号・019号住居跡全景・019号住居跡遺物出土状況
図版13　020号住居跡全景・同カマド内遺物出土状況
図版14　遺構配置状況・021号住居跡全景
図版15　024号住居跡全景・同遺物出土状況
図版16　遺構配置状況・025号住居跡全景
図版17　026号・027号住居跡全景
図版18　026号・028号・029号・032号住居跡全景
図版19　030号・031号・住居跡全景
図版20　009号住居跡出土土器
図版21　014号住居跡、018号跡出土土器
図版22　001号・002号・003号・005号・006号住居跡出土土器
図版23　006号・012号・013号・015号・016号住居跡出土土器
図版24　016号・017号・019号住居跡出土土器
図版25　019号・020号住居跡出土土器
図版26　020号・021号・024号住居跡出土土器
図版27　024号住居跡出土土器
図版28　024号・025号・026号住居跡出土土器
図版29　012号・015号・016号・026号・027号・031号・032号住居跡出土土器
図版30　グリット出土土器(1)
図版31　グリット出土土器(2)
図版32　グリット出土土器(3)
図版33　グリット出土土器(4)
図版34　グリット出土土器(5)
図版35　グリット出土土器(6)・土製品
図版36　石器(1)
図版37　石器(2)・石製品・土製品・鉄器
図版38　小池向台遺跡近景・同調査後全景
図版39　001号住居跡全景・建物跡遺構群を望む
図版40　002号・003号住居跡全景
図版41　004号住居跡全景・同掘方全景
図版42　004号住居跡遺物出土状況
図版43　006号住居跡全景・同掘方全景
図版44　008号住居跡全景・同遺物出土状況
図版45　012号住居跡全景・調査風景
図版46　001号・003号・004号住居跡出土土器
図版47　004号住居跡出土土器
図版48　004号住居跡出土土器
図版49　006号・008号住居跡出土土器
図版50　008号・012号住居跡出土土器・墨書土器(1)
図版51　墨書土器(2)
図版52　石器・鉄器

第Ⅰ章　総　　説

第1節　調査の経緯

1項　調査に至る経過

主要地方道成田松尾線は、千葉県土木部道路建設課が千葉県東部地区に建設を進めている総延長約7.58kmに及ぶ道路改良事業の一貫として計画されたものである。この地方道の建設は、空港騒音の影響を受ける北総南部地域と空港及び九十九里沿岸地域を直結する唯一の幹線道路として、地域開発の推進を目的としたものである。

道路が計画されたこの地域は、高谷川・木戸川・栗山川などの流域に沿って、古くから埋蔵文化財が豊富に所在する地域でもあった。千葉県土木部より道路建設に先立ち、路線内に所在する埋蔵文化財の有無について照会があった。千葉県教育委員会では、現地踏査を実施し、対象面積10万㎡以上・発掘調査による記録保存を要するもの30数か所を確認し、千葉県土木部と慎重な協議を重ねた。

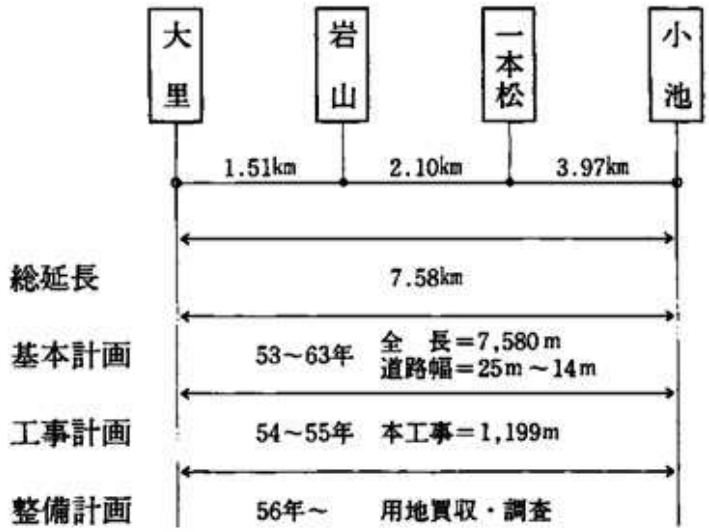
その結果、昭和52年12月に両者の間で「主要地方道成田松尾線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定」が締結され、路線敷内に所在する埋蔵文化財について、記録保存の措置がとられることとなった。千葉県教育委員会から記録保存のための発掘調査を実施する機関として、財団法人千葉県文化財センターが指定を受けた。これに基づき昭和53年4月、千葉県土木部と千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約がとり交わされ、発掘調査が実施される運びとなった。

2項　主要地方道成田松尾線の概要

主要地方道成田松尾線は、千葉県成田市を通る国道51号線から分岐した新東京国際空港南側の山武郡芝山町大里を起点とし、樹枝状に広がる北総台地を南東に南下する。芝山中学校付近を経て一本松に於て、地方道成田松尾線に連結し、さらに北総台地を南下し、芝山町高田に入る。小池麻生・小池地蔵を通過し、横芝町境界に接した芝山町小池に至る総延長7.58kmのバイパス道路である。

・区間及び延長

千葉県・芝山町大里～芝山町小池に至る。



・道路幅員構成

3項　調査の組織

昭和53年度、当千葉県文化財センターでは主要地方道成田松尾線の発掘調査及び整理作業等について、下記の通り組織編成された。

昭和53年度

4月1日付で、千葉県土木部と主要地方道成田松尾線に係る埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、調査部第四班（班長 杉山晋作、調査員2名）が担当となった。調査地内は芝山町及び横芝町である。調査対象総面積10,894㎡を示す。

小池麻生遺跡（409—001）芝山町小池麻生2,503他　3,500㎡（4月1日～9月20日）

小池向台遺跡（409—002）芝山町小池字向台155他　1,700㎡（9月20日～10月23日）

鯉ヶ窪遺跡（408—001）横芝町鯉ヶ窪1,437—1他　5,694㎡・古墳3基（10月23日～3月31日）

調査部長　西野　元

班　　長　杉山晋作

調査研究員　折原　繁

調査研究員　萬崎博昭

昭和54年度

千葉県土木部と委託契約を締結し、調査部第四班(班長　杉山晋作・調査員2名)が担当となった。調査地内は横芝町及び芝山町である。調査対象総面積は11,600㎡である。中台貝塚はバイパス道路進入路に伴う発掘調査であった。

遠山天の作遺跡（408—002）横芝町遠山字天の作294—1他　2,100㎡（4月1日～6月9日）

小池新林遺跡（409—003）芝山町小池字新林937他　1,400㎡（6月10日～8月1日）

小池地蔵遺跡（409—004）芝山町小池字地蔵876—1他　2,400㎡（8月2日～10月31日）

中台貝塚（408—003）横芝町中台字宮台1,362—1他　1,700㎡（11月1日～2月20日）

中台柿谷遺跡（408—004）横芝町中台字柿谷123—2他　4,200㎡（1月14日～3月31日）

調査部長　白石竹雄

班　　長　杉山晋作

調査研究員　折原　繁

調査研究員　萬崎博昭

昭和56年度

4月1日付で、再び千葉県土木部と委託契約を締結し、調査部第六班（班長　斎木　勝、調査員3名）が担当となった。調査地内は芝山町である。調査対象総面積14,480㎡（確認調査6380㎡）馬土手25mであった。

上宿遺跡（409—012）芝山町岩山字上宿1,737—2他　14,400㎡のうち2,880㎡の確認調査（6月1日～8月31日）4,000㎡の本調査（9月1日～11月30日）

柳谷遺跡（409—013）芝山町大里字柳谷32—1　他2,500㎡・馬土手25m(11月15日～1月31日)

小池元高田遺跡（409—010）芝山町小池元高田字向台1,584他 3,500㎡のうち1,500㎡の本調査（3月1日～3月31日)

調査部長　　白石竹雄

調査部長補佐　天野　努

班　　長　　斎木　勝

主任調査研究員　萬崎博昭

調査研究員　　奥田正彦

調査研究員　　榊原弘二（10月1日より）

昭和57年度

千葉県土木部と委託契約を締結し、調査部第六班（班長　斎木　勝、調査員3名）が担当となった。前年度より引き続き小池元高田遺跡を業務とし、整理作業及び報告書刊行作業を実施した。調査地内は芝山町である。調査対象総面積7,180㎡。

小池元高田遺跡（409－010）芝山町小池元高田字向台1,584他2,000㎡（４月１日～５月31日）

井森戸遺跡（409－014）芝山町岩山字井森戸134－1他　5,000㎡（８月１日～11月30日）

上宿遺跡（409－012）芝山町岩山字下宿1,699－１他 確認調査180㎡（1月4日～1月31日）

昭和53年度調査分の整理作業及び報告書の刊行作業。

小池麻生遺跡（409－001）芝山町小池麻生2,503他（４月１日～３月31日）

小池向台遺跡（409－002）芝山町小池字向台155他（6月1日～3月31日）

調査部長　　白石竹雄

調査部長補佐　岡川宏道

班　　長　　斎木　勝

主任調査研究員　萬崎博昭

調査研究員　　奥田正彦

調査研究員　　伊藤智樹

以上のような組織が編成され、発掘調査及び報告書刊行作業が続いている。

第２節　地理と環境

芝山町は千葉県の北東部に位置し、地形的には、下総台地の南東部になる。下総台地南東部では、九十九里海岸へ流れ出る各河川の侵食により、複雑な地形を示している。木戸川、高谷川のような南東へ流れる河川に沿って台地がならび、各台地から河川に向って細長く樹枝状に舌状台地がのびている。標高は30～40mで、台地上はほぼ平坦である。第２、３、４図のように台地の平坦部には、ほとんど全域といってよいほど遺跡が確認されている。とくに芝山町南部には古墳が多く、発掘調査も古墳を中心に行われてきた。過去の発掘の主なものは次表の通りである。(1)

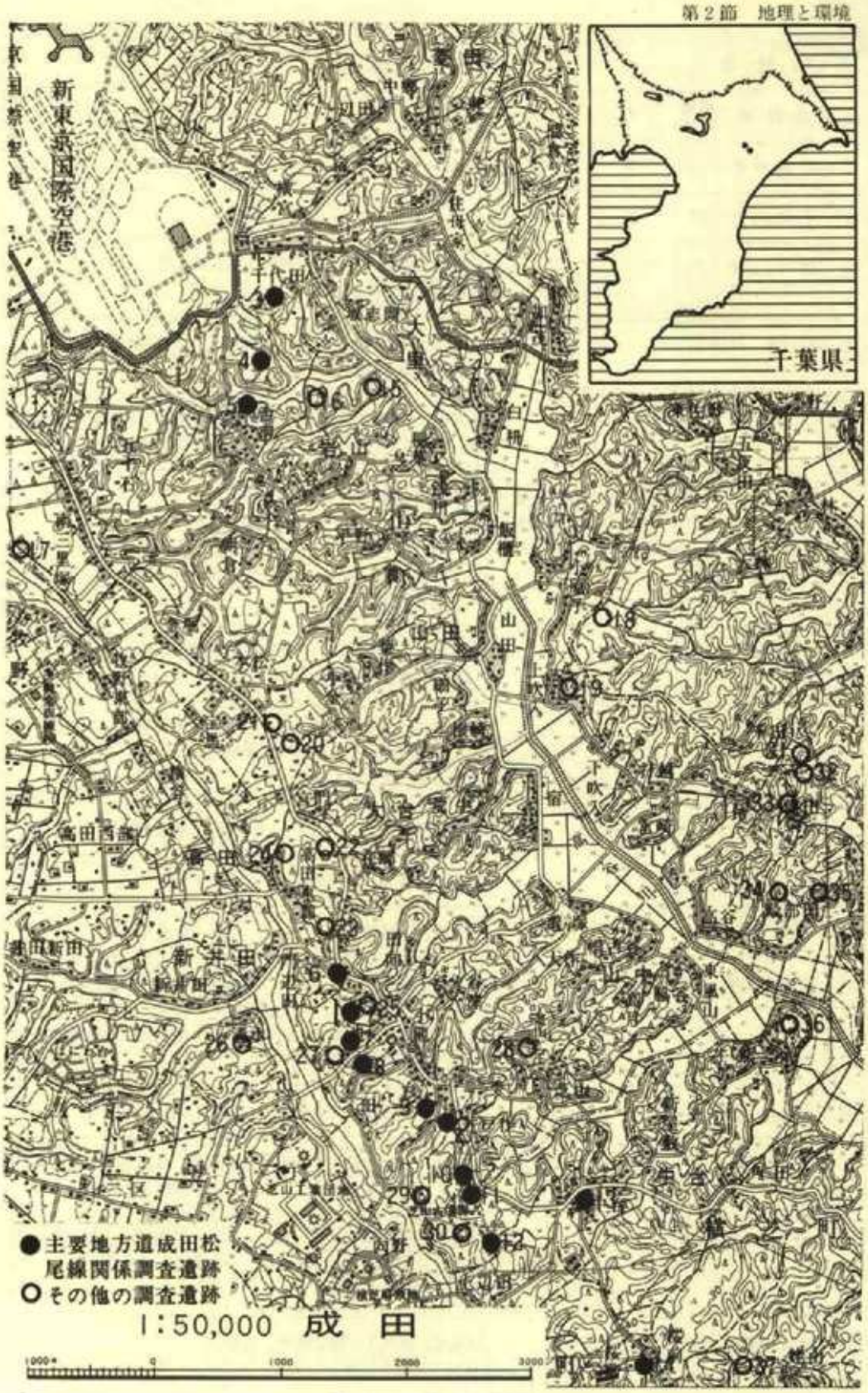
小池麻生、小池向台の両遺跡も木戸川に向ってのびる舌状台地上にある。(2)

註

（１）周辺地形図、芝山町遺跡分布図、遺跡表の作成にあたり、下記の文献を参考にした。

・周辺地形図（第１図）

『芝山町の遺跡』芝山町教育委員会　1982



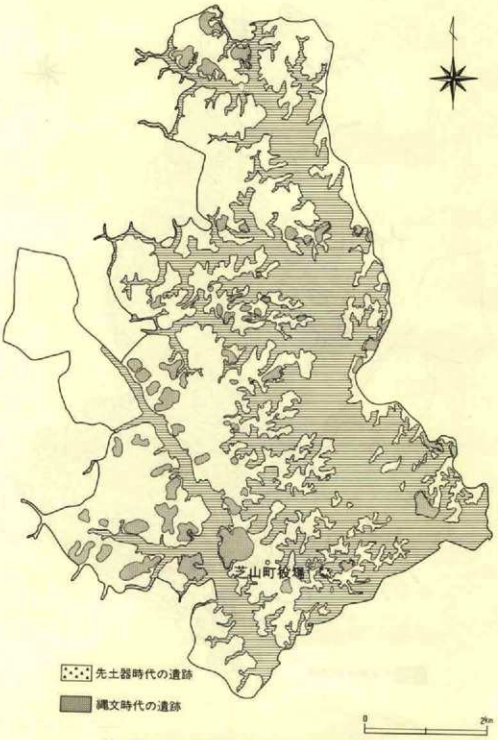
第1図　周辺地形図

表1　遺　跡　表

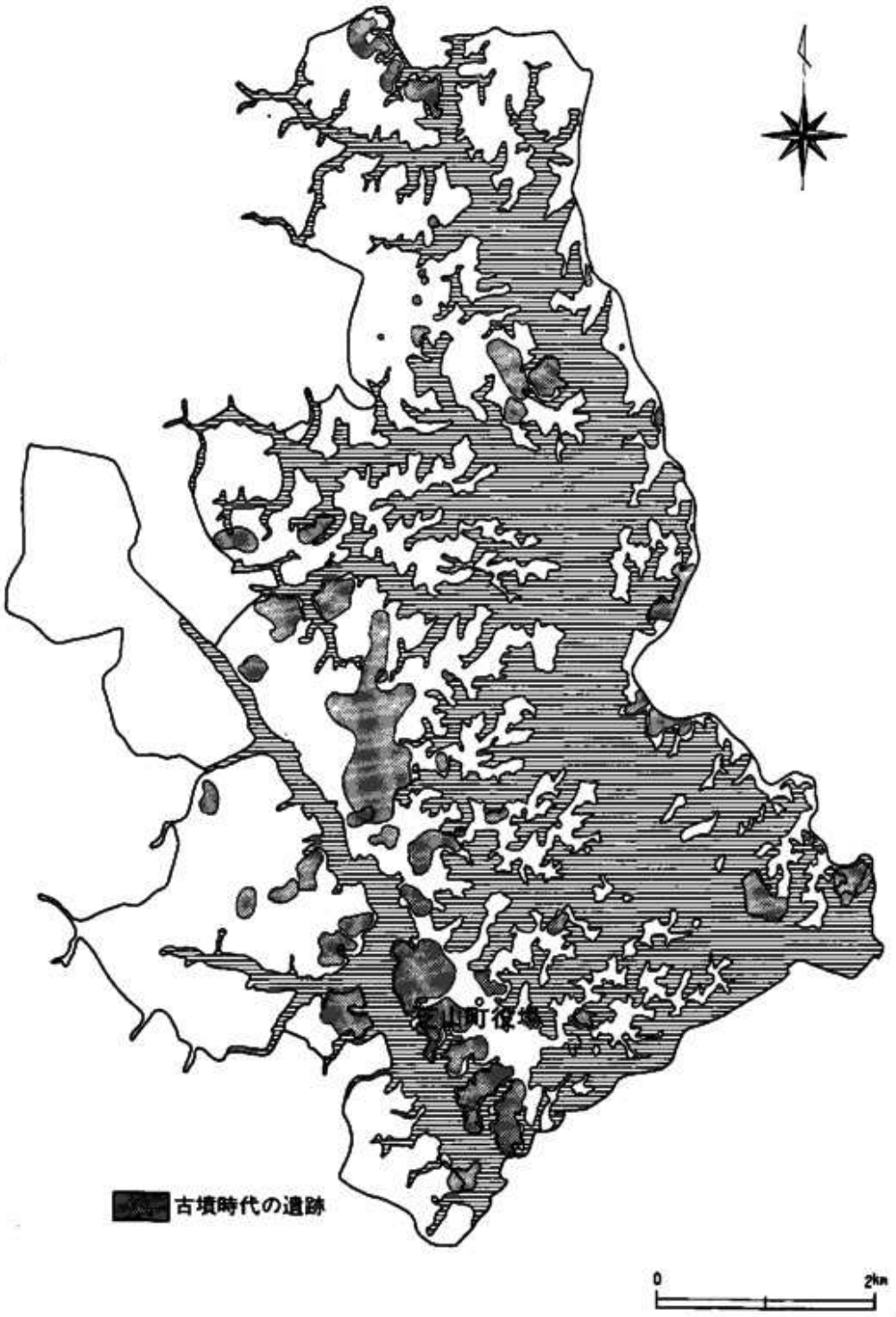
No.	遺跡名	調査年度	文　献	備　考
1	小池麻生	53	本　書	
2	小池向台	53	本　書	
3	柳　谷	56		包蔵地。馬土手。近世。炭窯3基。溝2条。土壙1基。(財)千葉県文化財センター。
4	井森戸	57		集落址。包蔵地。縄文、古墳時代。住居跡3軒。(財)千葉県文化財センター。
5	上　宿	56		集落址。包蔵地。先工器、縄文、古墳時代。近世。住居跡1軒。炭窯5基。溝2条。(財)千葉県文化財センター。
6	猪ノ堤	52	『山武猪ノ堤遺跡』猪ノ堤跡発掘調査団 1978	集落址。古墳時代。住居跡3軒。
7	小池地蔵	54		集落址。古墳、奈良、平安時代。住居跡22軒。溝1条。(財)千葉県文化財センター。
8	小池新林	54		集落址。古墳、奈良、平安時代。住居跡11軒。(財)千葉県文化財センター。
9	小池元高田	56		集落址。包蔵地。縄文、古墳、奈良、平安時代。ユニット1か所。住居跡11軒。掘立柱建物跡2棟。(財)千葉県文化財センター。
10	鯉ヶ窪	53		古墳3基。　(財)千葉県文化財センター。
11	鯉ヶ窪	53		包蔵地。縄文、古墳時代。　(財)千葉県文化財センター。
12	中台柿谷	54		包蔵地。古墳時代。　(財)千葉県文化財センター。
13	中台貝塚	47		近世。炭窯跡。　芝山はにわ博物館。
		54		貝塚、集落址。先土器、縄文時代。土壙200基。住居跡1軒。(財)千葉県文化財センター。
14	遠山天ノ作	54		包蔵地。先土器、縄文時代。　(財)千葉県文化財センター。
15	大　里	54		包蔵地。古墳、奈良、平安時代。近世。溝2条。土壙2基。ピット4基。炭窯1基。　(財)千葉県文化財センター。
16	後田台	55		包蔵地。先土器、縄文、古墳、奈良、平安時代。中近世。石器集中地1か所。住居跡5軒。土壙4基。溝2条。(財)千葉県文化財センター。
17	南三里塚稲神	57		包蔵地。馬土手。縄文時代。近世。(財)千葉県文化財センター。

No	遺跡名	調査年度	文献	備考
18	林	52	『成田用水』林遺跡調査会 1979	集落址。先土器、縄文、古墳、平安時代。住居跡8軒。土壙20基。掘立4棟。多古町林遺跡調査会。
		53		集落址。平安時代。住居跡1軒。溝2条。林遺跡発掘調査会。
		54		集落址。古墳、奈良、平安時代。住居跡。土壙。溝。多古町林遺跡調査会。
19	上吹入	52	『成田用水』上吹入調査会 1979	集落址。古墳時代。住居跡5軒。溝4条。
20	山田古墳群	37	「千葉県芝山町山田古墳群調査報告」『金鈴』17 早稲田大学考古学研究会 1963	古墳。古墳時代。円墳3基。墳形不明1基。
		55	『山田・宝馬古墳群』山田古墳群遺跡調査会 1982	古墳。古墳時代。前方後円墳1基。円墳1基。形象埴輪。
21	宝馬古墳	52	『宝馬古墳発掘調査概報』宝馬古墳発掘調査会 1979	前方後円墳1基。形象埴輪。
22	大台西	52	『成田用水』大台西遺跡調査会 1979	集落址。古墳時代。住居跡14軒。溝2条。製鉄遺構。
23	宮門	48	『宮門』山武考古学研究会 1974	集落址。縄文、古墳時代。住居跡10軒。炉穴2基。溝2条。
24	高田権現	52	『成田用水』高田権現遺跡調査会 1979	塚群。中世。塚41基。
25	小池麻生	50	『小池麻生遺跡』山武考古学研究会 1976	集落址。縄文、古墳時代。住居跡13軒。
26	清水台No.1	53	『清水台No.1遺跡発掘調査報告』清水台No.1遺跡発掘調査会 1980	集落址。縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡17軒。
	清水台No.2	53	『清水台・三榎遺跡確認調査概報』清水台、三榎遺跡発掘調査会1978	包含地。縄文時代。
27	小池台	44	『千葉県山武郡芝山町小池台遺跡調査　第一次概報』芝山町教育委員会 1970	包含地。縄文時代。

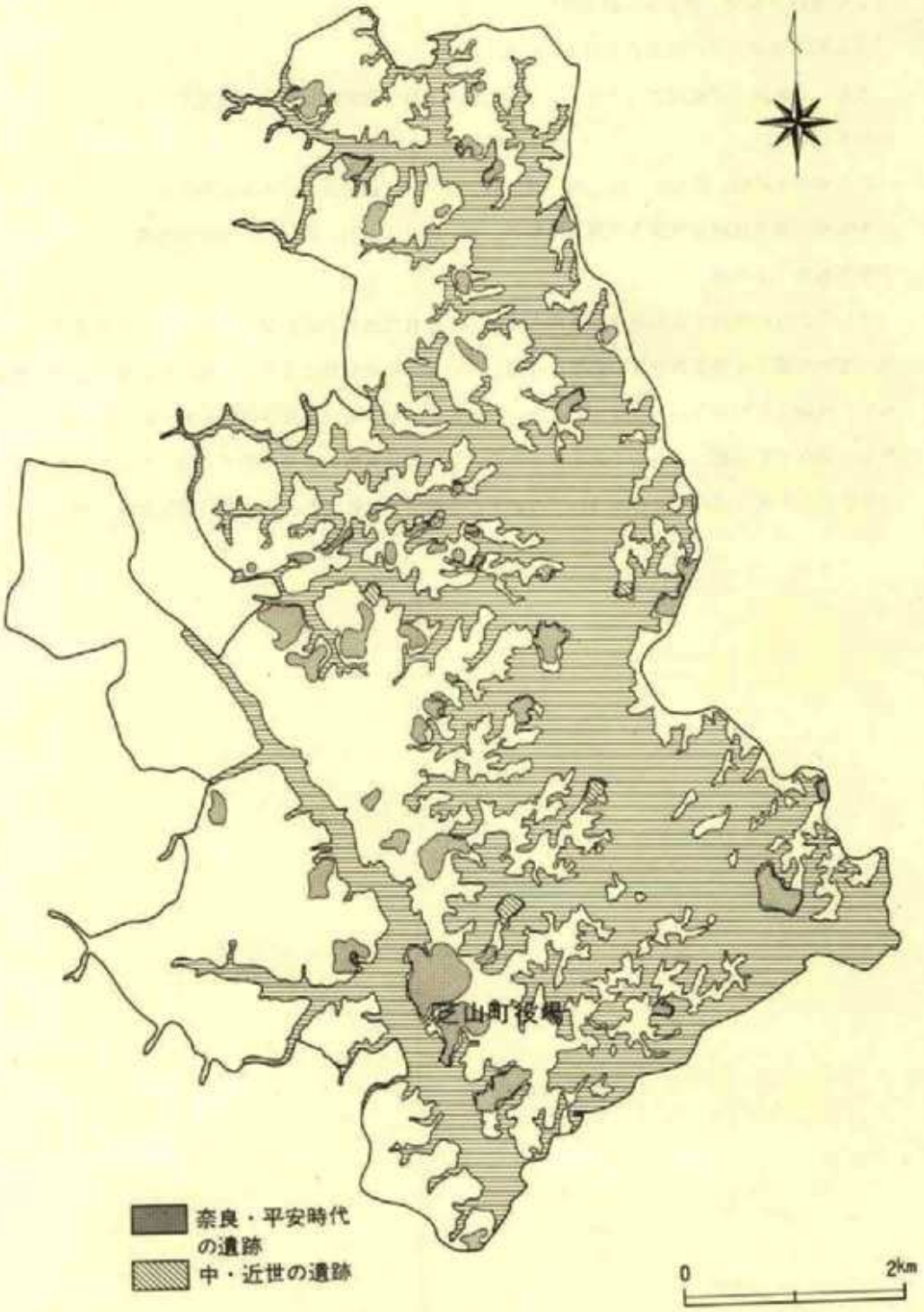
No.	遺跡名	調査年度	文献	備考
28	新起	55	『東京電力送電鉄塔建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』山武考古学研究所　1981	集落址。古墳時代。住居跡1軒。土壙3基。
29	小池大塚	41		前方後円墳。調査者、滝口宏、中村恵次、市毛勲。
30	芝山古墳群	31	「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』第19・20号早稲田大学考古学会 1956	前方後円墳 2基（殿塚、姫塚）、形象埴輪。
31	船越桔梗地	52		集落址。古墳～平安時代。住居跡33軒。土壙127基。ピット3か所。溝2条。船越桔梗地遺跡調査会。
32	儀田台	51		集落址。縄文、古墳時代。住居跡1軒。儀田台遺跡発掘調査団。
		52		集落址。縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡12軒。土壙66基。溝2条。牛尾儀田遺跡調査会。
33	境　No.1	54	『境遺跡発掘調査第Ⅰ・Ⅱ地点』同調査会 1979	包蔵地。古墳時代。境遺跡発掘調査会。
	No.2	54	同上	貝塚。包蔵地。縄文時代。住居跡1軒。土壙13基。ピット13基。溝2条。境遺跡発掘調査会。
	No.3	54	『境遺跡発掘調査報告書第3・4・5地点』同調査会　1979	包含地。縄文～古墳時代。溝1条。境遺跡発掘調査会。
	No.4	54	同上	包含地。縄文～古墳時代。溝1条。境遺跡発掘調査会。
	No.5	54	同上	包含地。縄文～古墳時代。溝1条。境遺跡発掘調査会。
34	殿部田	47		集落址。縄文、古墳時代。住居跡23軒。芝山町教育委員会。
35	殿部田古墳 第1次	47		前方後円墳 1基。
	第2次	47		前方後円墳 1基。
	殿部田1号墳	50		前方後円墳。円筒埴輪。形象埴輪。芝山はにわ博物館。
36	牛熊貝塚	29		包含層。縄文時代(中期～後期)。慶応義塾大学考古学研究室。
37	姥山	35		包含層。縄文時代(晩期)。清水潤三。慶応義塾大学学生。
		38		縄文時代(晩期)。慶応義塾大学考古学研究室。
		42		包含層。縄文時代(晩期)。慶応義塾大学考古学研究室。



第2図　芝山町遺跡分布図(1)(1／62,500)



第３図　芝山町遺跡分布図(2)(1／62,500)



第4図　芝山町遺跡分布図(3)(1／62,500)

『千葉県多古町埋蔵文化財分布地図』多古町教育委員会　1981

・芝山町遺跡分布図（第２図～第４図）

『芝山町の遺跡』芝山町教育委員会　1982

なお、分布図上で横線のスクリーントーンの部分は、標高30m以下の地域である。

・遺跡表（表１）

『日本考古学年報』昭和27、28、29、31、34、35、41、42年度　日本考古学協会

『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和47、48、49、50、51、52、53、54、55年度

千葉県教育庁文化課

（２）芝山町の所在する台地は、東側と西側とで舌状台地の発達が異なっている。白井哲之氏は、舌状台地を形成する侵食谷を５つの型に分類している。氏の分類によると、芝山町小池付近は、東側にB型、西側にD型が多い。B型は幅の広い崩壊谷で、地下水の湧水が停止した化石化した谷である。B型は現在でも侵食がさかんである。この違いが、舌状台地の発達の差の一因になったと思われる。

白井哲之「下総台地の侵食谷についての若干の考察」『房総研究』第14、15集記念号　1977

第II章　小池麻生遺跡

第1節　遺跡の位置（第5図・図版1、2）

小池麻生遺跡は、山武郡芝山町小池麻生2,503番地に位置する。北総台地の中央やや東寄りで、県内でも小雨地帯である。三里塚周辺は背稜部を形成しており、利根川水系と太平洋水系の分水嶺に位置する。太平洋水系としては、台地の南部を高谷川が支谷の流れを集めて栗山川に合流する。また三里塚付近に源を発する木戸川により、肥沃な水田地帯を形成し、さらに九十九里の低い数条の砂丘を縦断して太平洋に流れている。

本遺跡は、栗山川・木戸川によって開析された樹枝状台地の基部にあたる標高40m前後の平坦な台地上で、南北端にかけて緩やかな傾斜を示す。畑地として利用されており、地表面には縄文土器片や土師器片が密に散布している。遺跡の広がりは、本遺跡台地上周辺をはじめ、小突起状縁辺部まで所在する。木戸川流域には本遺跡をはじめ、縄文時代中期から古墳・歴史時代の集落跡が存在する[1]。本遺跡はじめ、東側同一台地上に確認された小池麻生遺跡[2]、北側には祭祀遺物を伴なった山武猪ノ堤遺跡[3]がみられる。北側には「彦忍人命（ひこおしひとのみこと）」を祭神とした宮門神社が所在し、付近より宮門遺跡[4]が確認されている。また、南西方向には、縄文時代後期・晩期の小池台遺跡[5]木戸川流域対岸には、古墳時代鬼高期の集落跡が存在する清水台・三榎遺跡[6]と、調査によって確認された遺跡は多い。このように、木戸川流域には縄文時代中期から古墳・歴史時代を通して、大規模な遺跡があることが判明した。

註

（1）『芝山町の遺跡』芝山町教育委員会　1982

（2）戸田哲也・平岡和夫『小池麻生遺跡』芝山町教育委員会　1976

（3）柿沼修平・村山好文『山武猪ノ堤遺跡』猪ノ堤遺跡発掘調査団　1978

（4）平岡和夫他『宮門』山武考古学会　1974

（5）戸田哲也・神山　崇『芝山町小池台遺跡調査』第一次概報　芝山町教育委員会　1970

（6）柿沼修平・村山好文『清水台・三榎遺跡確認調査概報』清水台・三榎遺跡発掘調査会 1978
柿沼修平・村山好文『清水台No.1遺跡発掘調査報告』　1980

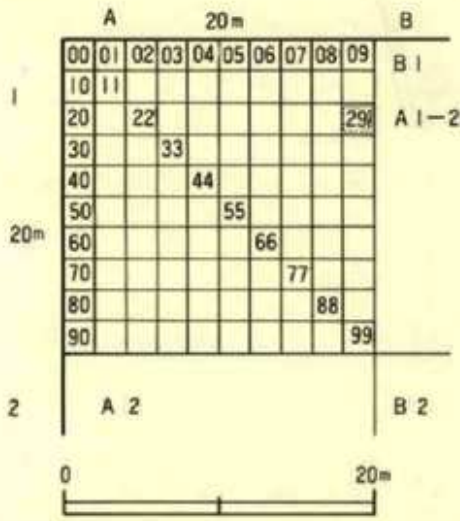
第５図　小池麻生遺跡調査区周辺地形図(1／5,000)

第２節　調査の方法と経過

（１）調査の方法

小池麻生遺跡の本調査は昭和53年５月15日に開始され、９月20日をもって終了した。調査対象地域は、長さ250ｍ、幅平均14ｍの道路敷地内に限られたため、道路中心杭を基準にグリッド法を用い、全面発掘を実施した。グリッドは第６図の如く、20×20ｍの方形を大発掘区とし、その中に２×２ｍの小発掘区を設定した。大発掘区は、調査区北西側から東へＡ…Ｃ、北西側から南側へ１…13とした。小発掘区内の北側左上隅から横に00～09とし、左上隅から下へ00～90として、原則として99までのグリッド番号を使用している。その小発掘区標示をＡ１－29グリッドと標示した。（第６図）

発掘調査にあたっては、調査区に平行する２ｍ幅のトレンチを20ｍ間隔で掘り下げた。実測は平板測量を基本とし、一部分遣り方を採用している。また、遺構の密集が予想されるので、遺構検出面より上の遺物はグリッド名を使用し、最後に遺構出土のものと整理した。遺物によっては、遺構出土の遺物でも相当数がグリッド標記となっている。また、このグリッドのラインは道路建設予定中心杭No.292とＡ１－05と対応している。



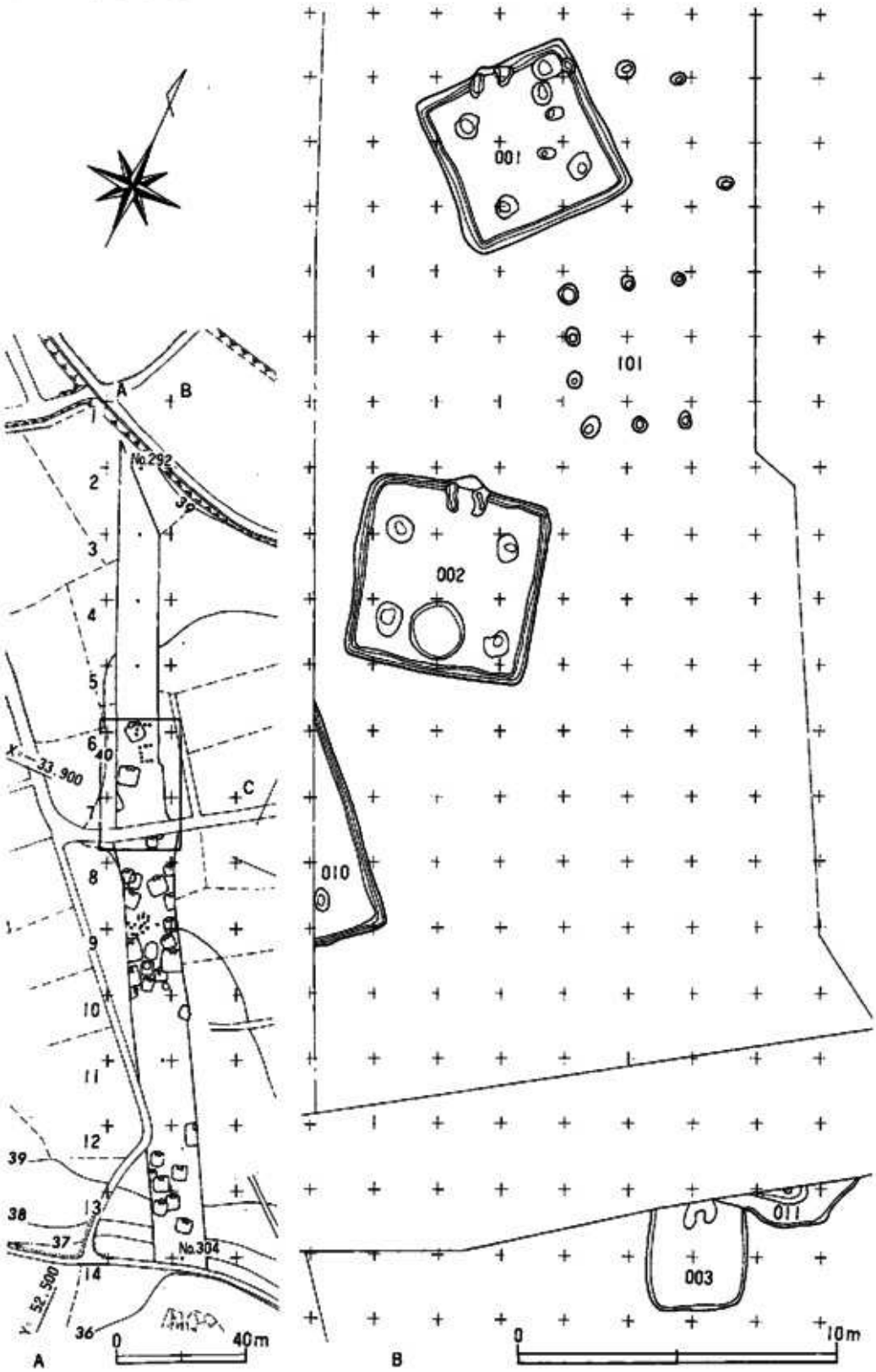
第６図　グリッド分割図

（２）調査の経過

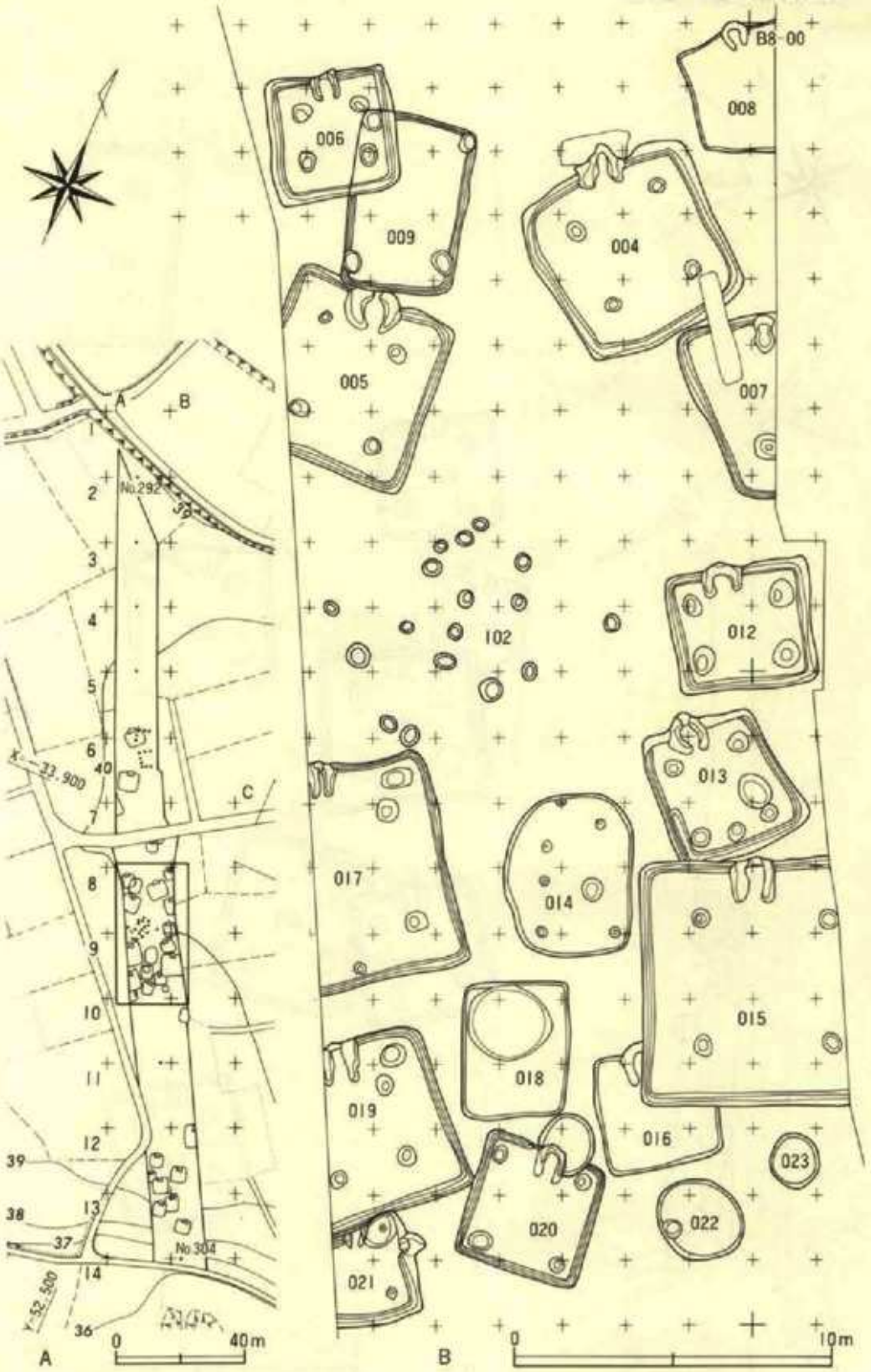
発掘調査は５月15日から９月20日まで実施した。南北緩斜面をもった台地上に住居跡の密集が予想され、北側緩斜面より調査は実施された。

５月15日～18日　現地器材を搬入する。地鎮祭終了後、グリッド設定作業を行なう。周辺現地踏査により、土製品・先土器時代の石器片を表採にて採取する。

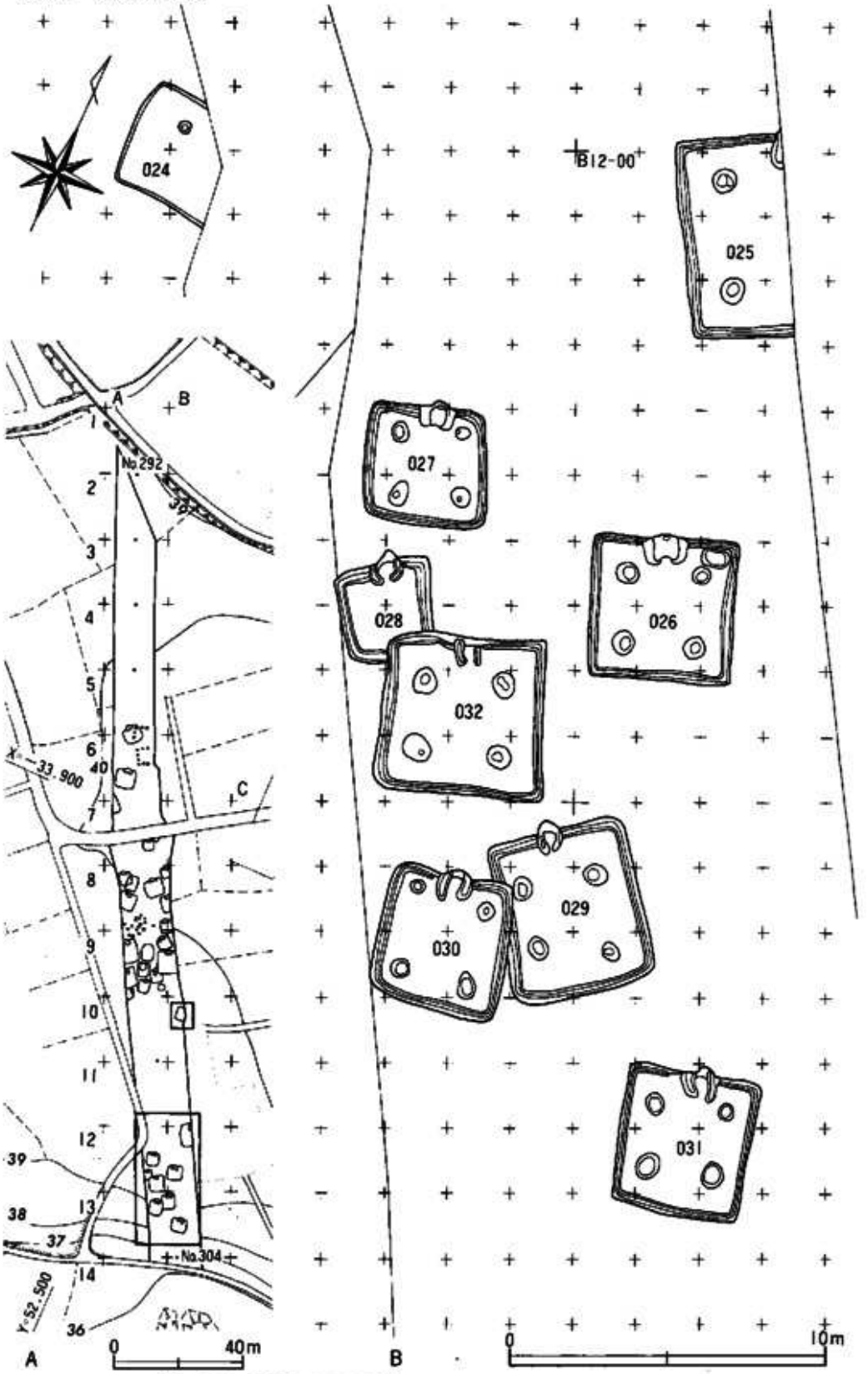
５月19日～６月13日　トレンチ発掘を行ない、遺構の所在が確認される。ローム層上面まで



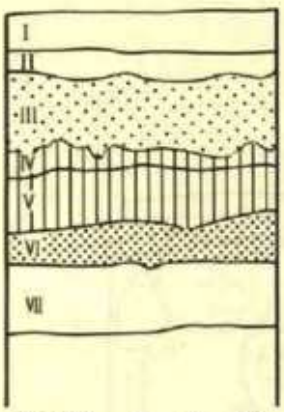
第７図　遺構配置図(1)(A：1／2,000・B：1／200)



第8図　遺構配置図(2)（A：1／2,000・B：1／200）



第９図　遺構配置図(3)(A：1／2,000・B：1／200)



第10図　土　層　図

40～50cmを測る。

６月14日～７月25日　住居跡の密集が確認され、全面表土剥ぎを行なう。A７・８区にかけて農機具による攪乱が入りこんでおり、遺構を削平している。出土遺物は縄文時代中期の阿玉台式土器や古墳時代後期にかけての土器片が出土している。縦断土層図を作成する。

７月26日～８月13日　A５～A８区まで確認された遺構の精査。001号～024号跡まで実施。古墳時代後期から歴史時代にかけての住居跡が検出された。

８月16日～９月３日　A９～A13区まで確認された遺構の精査。025～032号跡まで実施。夏の炎天下のため、遺構壁面が乾燥しきり、調査に支障をきたす事もあった。

９月４日～18日　各住居内カマドの実測及び写真撮影を行なう。先土器時代検出作業を実施したが、遺物の出土はみられなかった。

９月19日　発掘完了全景写真撮影を行なう。

９月20日－現場器材を撤収し、次の地点への移動準備にかかる。現地作業終了する。

（３）土　　層（第10図）

本遺跡は北総台地中央やや東側に位置し、木戸川の開析する樹枝状台地の基部に所在している。標準層序は、遺跡内の台地中央部やや南側のA10—54グリッドの西壁断面において観察している。

Ⅰ層…黒褐色土　いわゆる耕作土である。約24cmの堆積がみられる。遺物包含層。

Ⅱ層…暗褐色土　全体的に薄く、12cm前後の堆積を示す。新期テフラ層を検出する層序であるが、判別できない。

Ⅲ層…黄褐色土　いわゆるソフトローム層と言われる。約30～40cm程度の厚さを示す立川ローム層である。このローム面で遺構の検出を行なう。

Ⅳ層…黄褐色硬質土　いわゆるハードローム上層で、クラックが発達する。厚さ15cm。

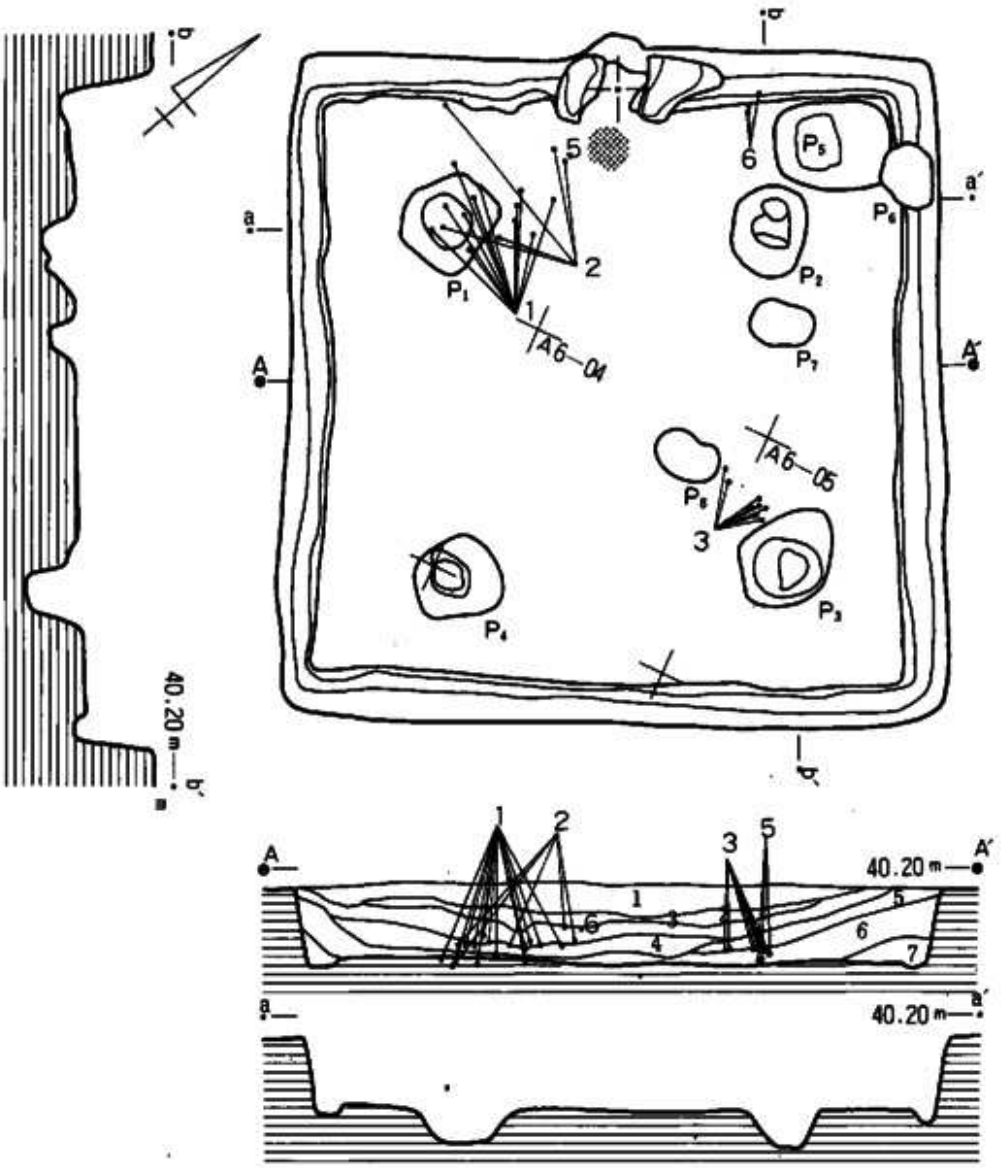
Ⅴ層…褐色ローム土　ハードロームの硬質土を含む。パミスを含む。厚さ25～30cm。

Ⅵ層…暗褐色ローム土　やや粘性を呈し、黒色に近い色調を呈する。いわゆる立川ローム第二黒色帯に比定できる。厚さ約25cm。

Ⅶ層…黄褐色ローム土　立川ローム最下層である。粒子は粗めで、細かいスコリアを含む。

第3節　遺　　構

本遺跡における遺構は、住居跡27軒、土壙1基、柱穴群2か所である(第7、8、9図)



1　暗褐色土　微細なローム粒を若干含む。
2　暗褐色土　焼土粒子を含む、下層方には焼土ブロック混入する。
3　黒褐色土　上層より色調は暗く、湿黒色。ローム粒(5－10㎜程度)を若干含む。
4　暗褐色土
5　暗褐色土　黄色粘土及び灰黒色土を含む。
6　茶褐色土　大粒のローム粒子を多く含む。
7　褐色土　ローム粒少量含み、軟質である。
8　褐色土　混入するローム少量。やや軟質である。

第11図　001号住居跡実測図(1/60)　0　2m

1項　住居跡

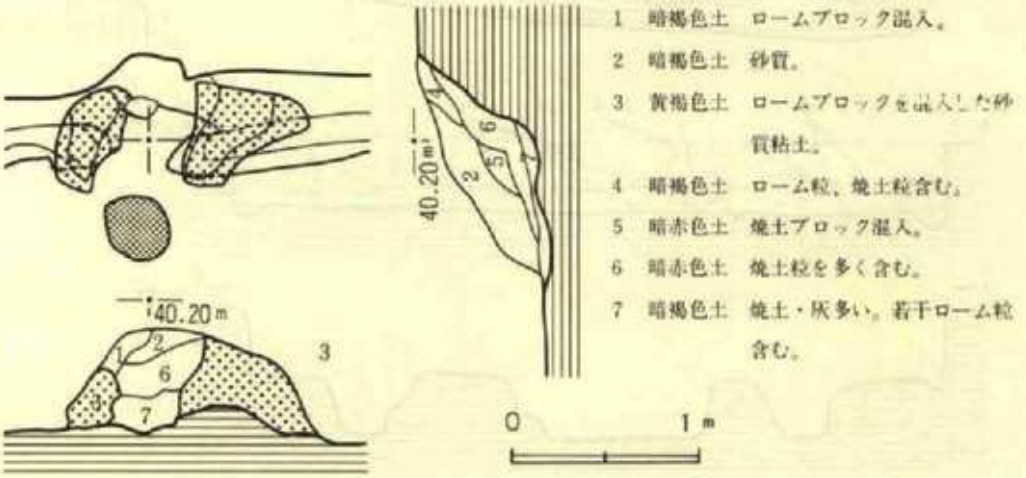
001号住居跡（第11、12図・図版4）

調査区域最北端A6－04グリッドに位置し、主軸方向N－48°－Wを指す。住居内覆土は、四隅壁にロームブロックをシモフリ状に堆積し、レンズ状に暗褐色土を堆積する。

平面形は、5.10×5.04mの隅丸方形を呈し、床面積20.3㎡を示す。壁は50cmの深さを示し、垂直に掘り込まれている。壁溝はカマド下を除き、全周する。幅12～25cm。深さ8cm程。U字状断面を示す。床面は平坦で堅緻である。

主柱穴はP_1～P_4。2.7m等間隔で検出され、径70cm内外の楕円形を示す。深さ26～41cm。P_4は深さ34cmを示し、縁辺に有段。P_5は貯蔵穴で長辺92cm・短辺70cm・深さ52cmの方形を示す。底面より鉄器出土。P_6～P_8は周辺柱穴群の一部である。

カマドは北壁中央に砂質粘土で構築されている。遺存良。壁面45cm・奥行き12cmの山形状の掘り込みで、有段。袖部は内傾し、高さ25cmを測る。内面は赤く焼けており、火床と焚口部には炭・灰を掻き出した際の凹みを確認する。カマド内土層は7層に区分でき、焼土が厚く堆積する。遺物の出土量は多い。特にカマド右側前方より壺・甕が出土する。

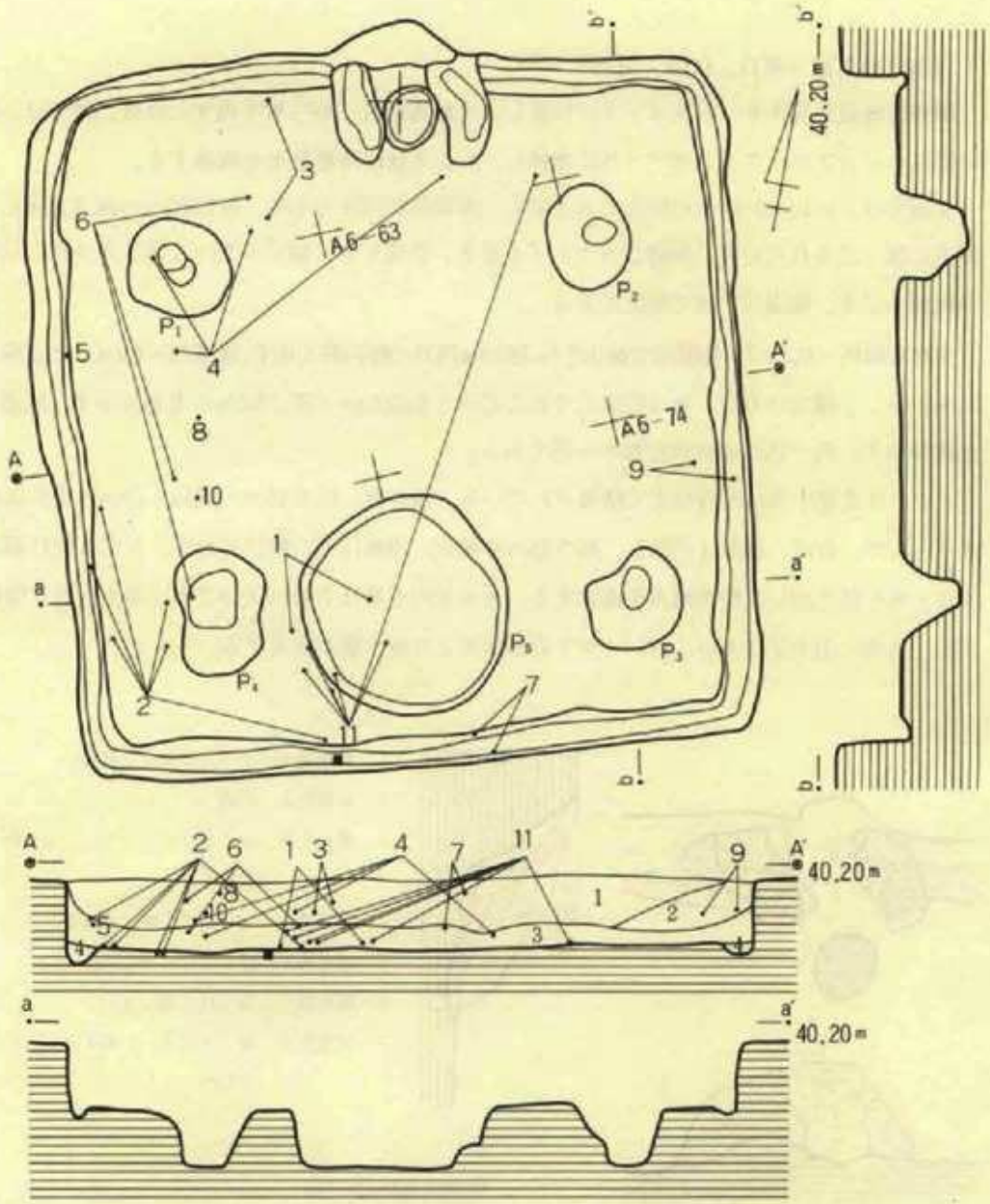


第12図　001号住居跡カマド実測図（1/40）

002号住居跡（第13、14図・図版5）

001号住居跡南西側A6－63グリッドに位置し、主軸方向はN－14°－Wを指す。住居内覆土はローム粒を多く含む暗褐色土で、レンズ状堆積を示す。

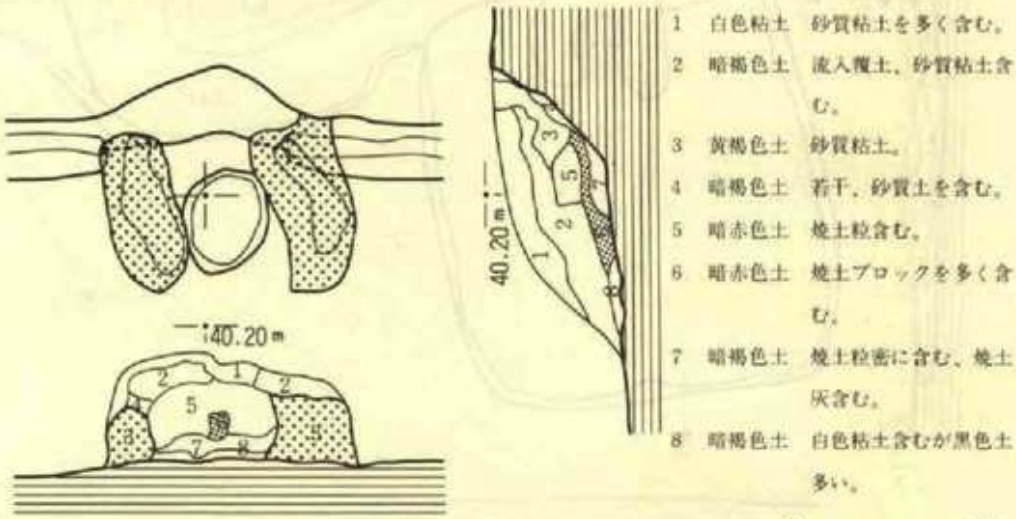
平面形は5.72×5.60mの隅丸方形を呈し、床面積23.8㎡を示す。壁は58cmの深さで、垂直に



1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　微細なローム粒を含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを少量含み、軟質。
4　褐色土　ローム粒を含む。

0　2m

第13図　002号住居跡実測図（1/60）



第14図　002号住居跡カマド実測図（1/40）

掘り込まれる。壁溝はカマド下を除き、全周する。幅は14～26cmを示す。深さ8cmのU字状断面を示す。床面状態は平坦で且つ堅緻である。

主柱穴4か所P_1～P_4を検出する。長径82cm内外の楕円形で、深さ45cm前後。掘り込み段を示す。P_1－P_2間3.5m、P_2－P_3間2.7mで東西方向へ横開きする。P_3は円形、直径2mで貯蔵穴と推定する。カマドは北壁中央に位置し、壁面を82cm・奥行き30cm掘り込む。袖部は住居内に72cm延び、高さ44～52cmを測る。天井部はアーチ状に砂質粘土が残存する。焚口部は拡がる。遺物出土量は多い。第1・2層中より、甕や坏の完形品や須恵器坏蓋が出土している。

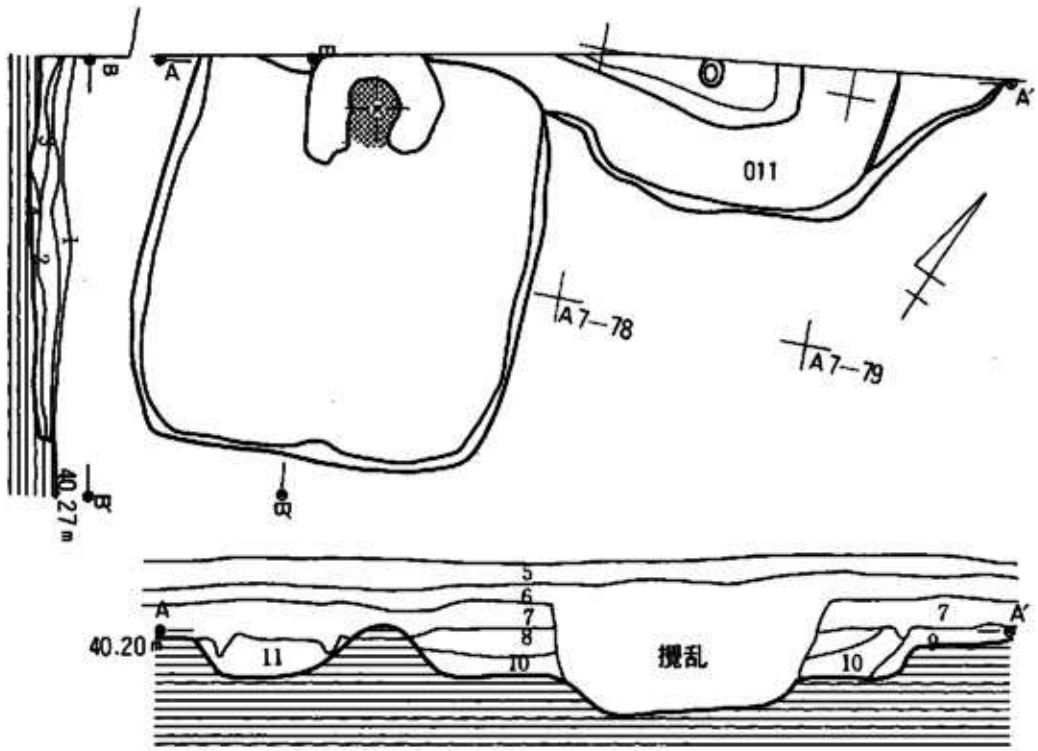
003号住居跡・011号跡（第15、16図・図版6）

調査区域を横断する通学道路下A7－78グリッドに位置し、主軸方向は、N－20°－Wを指す。住居内覆土は地表下約20cmで床面に達する。一面の拡張により011号跡が、検出されたが、出土遺物は皆無。軟質な覆土を示す。

平面形は3.32×3.10mの方形を呈し、床面積8.2m²を示す。壁はローム層中に設けられ、覆土は浅い。農機具による攪乱が東西方向に入り込む。壁溝及び柱穴は検出されなかった。

カマドは北壁中央に位置するが、削平され残存状況は悪い。構築材は砂質粘土で、右袖44cmの高さを測る。カマド内土層は6層からなり、上層から流れ込んだ砂質粘土混じりの暗褐色土が厚い。焼土粒も多い。

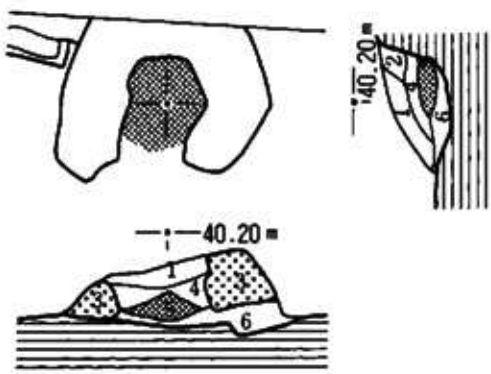
遺物出土量は僅かである。盤形土器が出土する。



第15図　003号住居跡・001号跡実測図(1/60)

0　2m

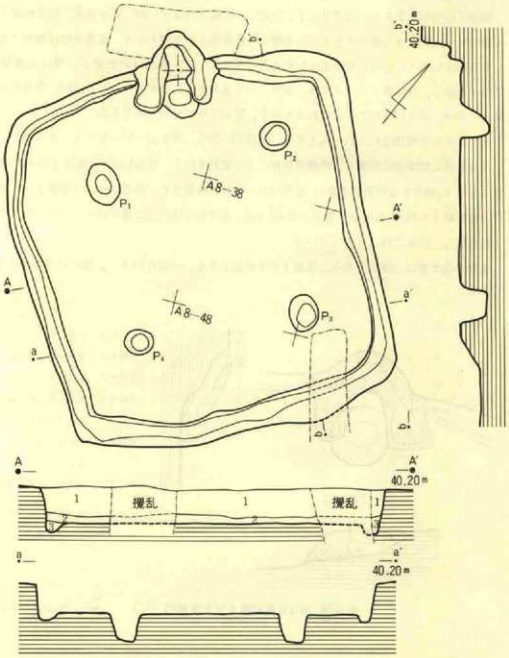
1　暗褐色土　微細ローム粒若干みられる。
2　褐色土　しまりがあり、若干炭化材含む。
3　褐色土　カマド付近であり、砂質粘土とローム粒多く含む。
4　褐色土　ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
6　暗褐色土　ローム粒子および山砂混。
7　暗褐色土　やや黒色。粘性がある。
8　暗褐色土　黒色味強く、ローム粒を少量含む。
9　明褐色土　ローム粒を多く含む。
10　暗褐色土　ローム粒軟質。
11　明褐色土　黄色粘土、ローム粒多く含む。



1　暗褐色土　汚れた砂質粘土を含む。
2　茶褐色土　焼土粒を若干含む。
3　黄褐色土　砂質粘土。
4　暗褐色土　灰、焼土粒含む。
5　暗褐色土　焼土粒多く含む。
6　茶褐色土　ロームブロック含む。

第16図　003号住居跡カマド実測図 (1/40)

0　1m



1　暗褐色土　ロームブロックを含む。やや軟質。
2　褐　色　土　ローム粒を多く含み、パサパサである。
3　褐　色　土　ローム粒を含み、若干軟質で褐色である。

第17図　004号住居跡実測図（1/60）

004号住居跡（第17、18図・図版6）

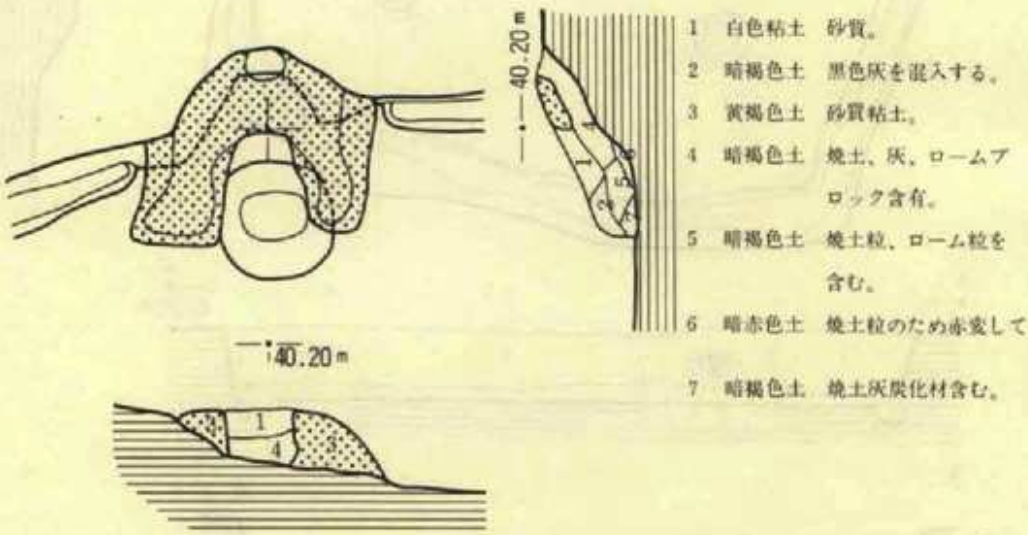
調査区域やや北東A 8－38グリッドに位置し、主軸方向はN－49°－Wを指す。住居内覆土は床面にローム粒を含む褐色土を主に、上層には暗褐色土の堆積を示す。遺存状態は極めて悪い。

平面形は5.25×5.20mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積24.4㎡を測る。壁は北東壁下で61cmと深く、ほぼ垂直に立上がる。壁溝はやや変形を示しながらカマド下を除き、全周する。幅8～26cm、深さ12cm程のU字状断面を示す。壁面はやや外傾気味である。

柱穴は4か所検出され、P_1～P_4とする。長径57cm内外、深さ31～57cmを示す。底は円形。

カマドは北壁中央に位置し、農機具耕作により変形を呈す。壁面145cm、奥行き66cmの掘り込みを示す。緩やかな煙道部を築く。袖部はローム壁に構築され、高さ18～20cmを測る。天井部には砂質粘土が残り、器掛部の存在が認められる。火床面は楕円状に掘り込む。カマド内土層は7層堆積し、燃焼部内は赤変している。

遺物の出土量は、僅かである。床面より坏が出土する。小破片が多く、図示できたのは僅かである。

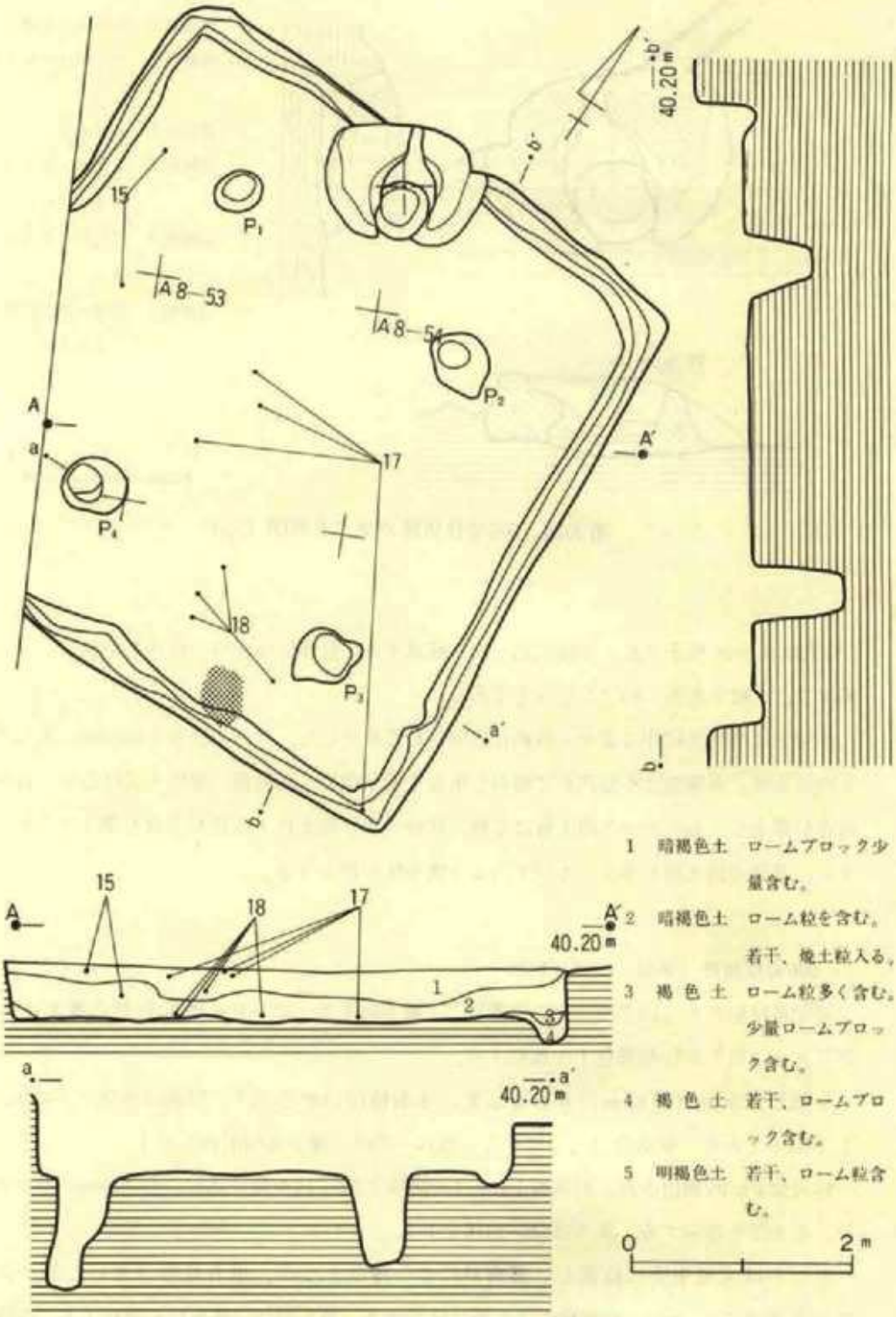


第18図　004号住居跡カマド実測図（1/40）

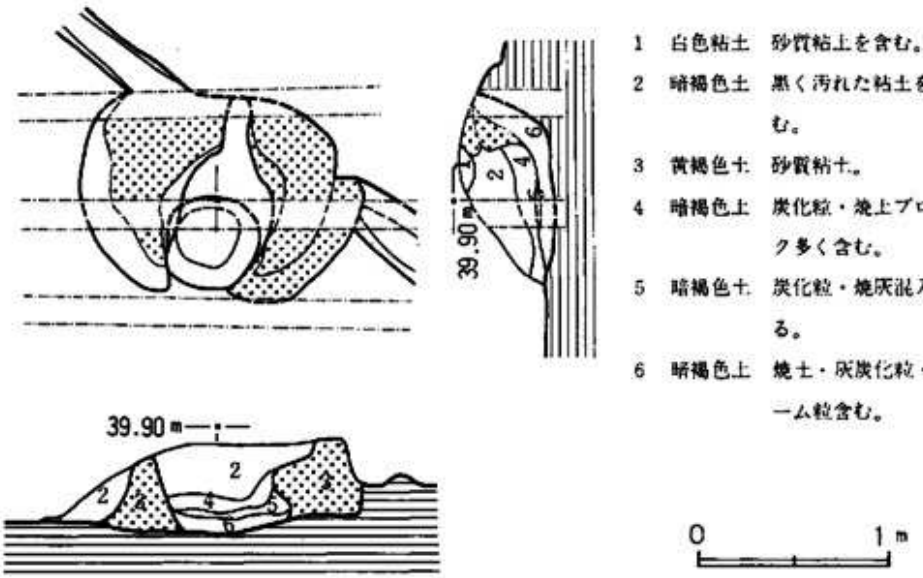
005号住居跡（第19、20図・図版7）

A 8－53グリッド内を発掘中、砂質粘土が確認され、一辺5mの住居跡を検出する。住居内覆土はローム粒を含んだ暗褐色土が主。ほぼ平坦に堆積する。主軸方向はN－5°－Wを指す。

平面形は5.45×5.26mの隅丸方形を呈し、床面積は23㎡を示す。壁高は42cmを測る。壁溝はほぼ全周する。農機具の耕作により、遺構壁面は崩れ、攪乱がめだつ。



第19図　005号住居跡実測図（1/60）



第20図　005号住居跡カマド実測図（1/40）

柱穴は4か所検出され、主柱穴P_1～P_4を構成する。長径58cm内外の楕円形を呈し、深さ58～90cmで、主軸を北西に向けたピットである。

カマドは農機具耕作により、斜めに掘削されて検出した。ローム壁面を幅68cm、奥行き18cmと内傾気味。火床部は不整円形で傾斜し床面を掘り窪む。両袖部は攪乱を受けるが、器掛部の残存が推定できる。カマド内土層は6層に区分でき、焼土粒・炭化粒を含む第4・5層を主とする。遺物の出土量も多く、カマド内より甕や坏が出土する。

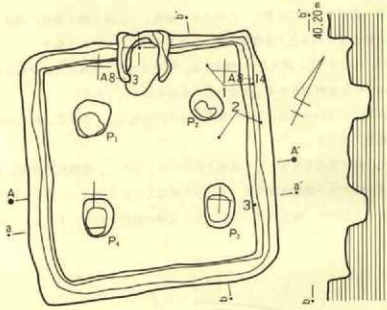
006号住居跡（第21、22図・図版7）

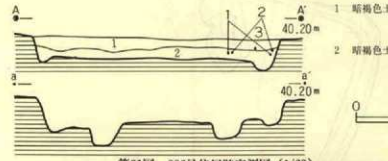
通学道路脇A8－13グリッドに位置し、主軸方向をN－32°－Wを指す。住居内覆土は、ほぼ平坦にローム粒を含む暗褐色土が堆積する。

平面形は3.95×3.88mの方形を示す。床面積10.3㎡を示す。壁高は西壁下で46cm、東壁下で32cmである。壁溝はほぼ全周する。幅14～20cm、深さ8cm前後を示す。

柱穴は4か所検出され、対角線上に2.4m間隔でP_1～P_4を掘り込む。長径58cm内外の楕円形で、中央部を指向する。深さは28cm前後を示す。

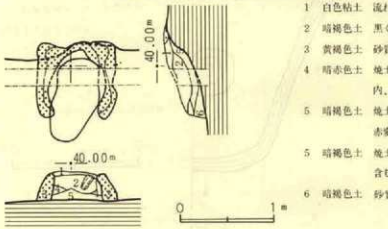
カマドは北壁中央に位置し、農機具による攪乱を受け、遺存状態は悪い。僅かに煙道部が残存する。カマド内堆積土は6層に区分でき、第5層には焼土粒が堆積する。遺物の出土量は僅かである。甕や坏が覆土中より出土する。





1　暗褐色土　微細なローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　ロームブロック（10～20mm程度）を多く含む。

第21図　006号住居跡実測図（1/60）



1　白色粘土　流れた砂質粘土。
2　暗褐色土　黒く汚れた粘土を含む。
3　黄褐色土　砂質粘土。
4　暗赤色土　焼土ブロックが多い。カマド内。赤変する。
5　暗褐色土　焼土混じり。ローム粒も多く赤変する。
5　暗褐色土　焼土混じり。ローム粒も多く含む。
6　暗褐色土　砂質粘土。焼土粒を含む。

第22図　006号住居跡カマド実測図（1/40）

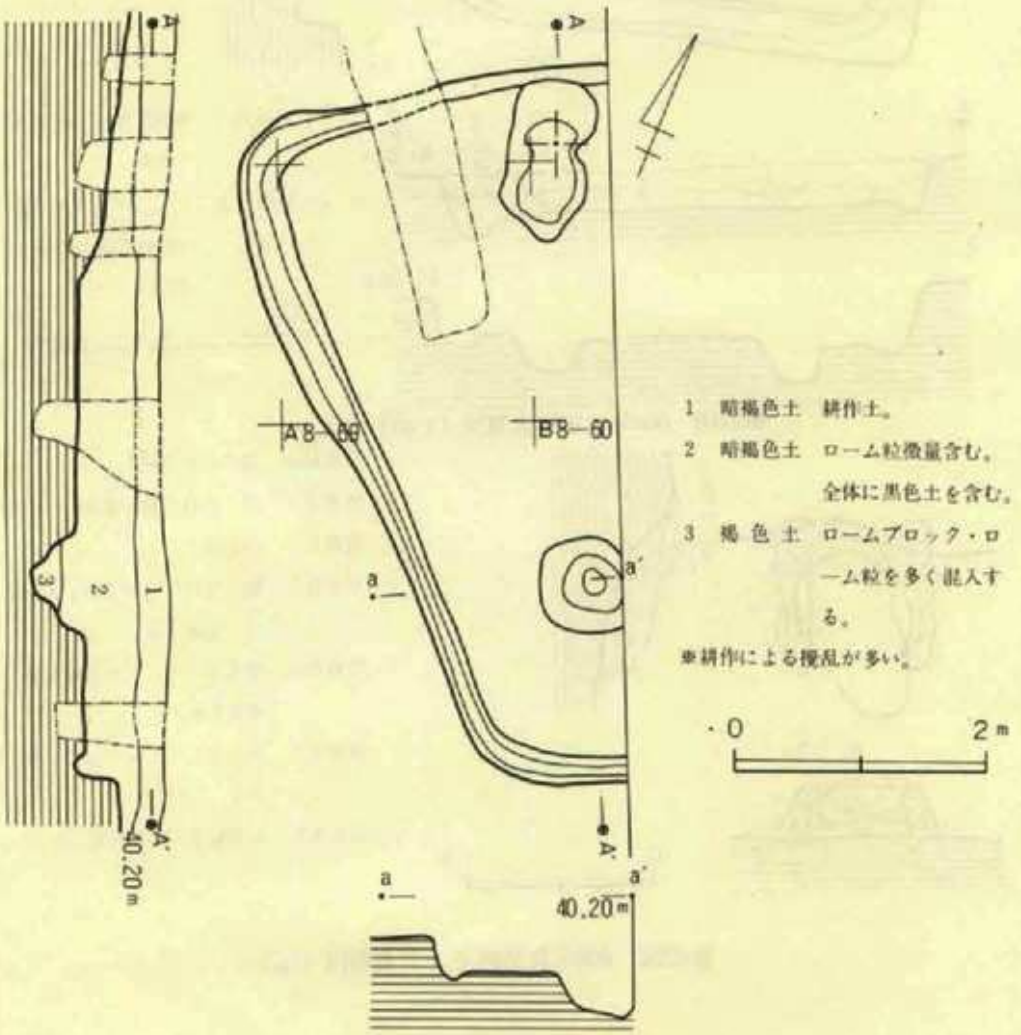
007号住居跡（第23、24図・図版８）

調査区北東側Ｂ８－60グリッドに位置し、住居の壁を検出した。攪乱壁が南北に残存する。住居内覆土はローム粒を含む暗褐色土を堆積する。主軸方向はＮ－40°－Ｗを指す。

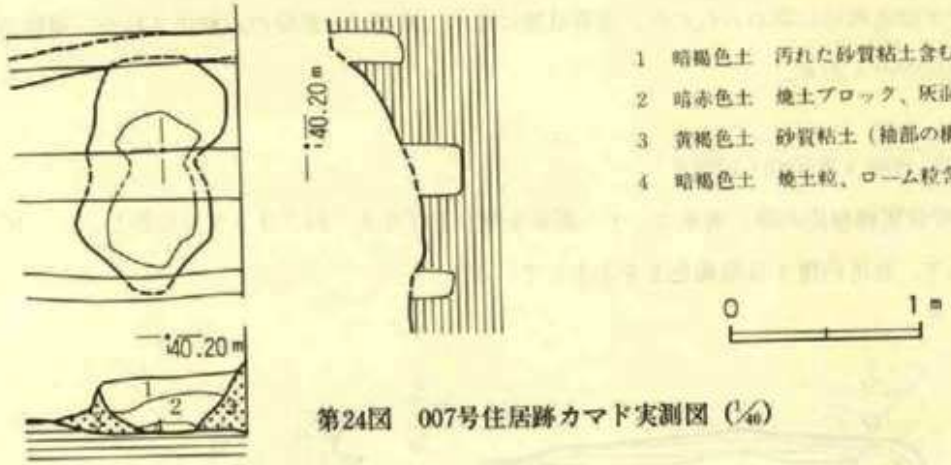
平面形は5.61×(3.08)mを呈し、隅丸方形と推定する。壁高は34cm、壁溝はほぼ全周する。幅12～18cm、深さ６cmのＵ字状断面を示す。床面状態は全体的に不良である。

柱穴は１か所のみで、長径73cm・短径70cm・深さ37cmの円形状ピットを示す。柱穴内覆土はローム粒混入の暗褐色土を示す。

カマドは北壁中央に砂質粘土を主体として構築されている。しかし、農機具の掘削により、遺存状態は悪い。僅かにカマド構築状態や掘り方状況を確認したにすぎない。カマド内土層は全体的につぶれたカマドなので、焼土ブロック混じりの灰層が検出されたにすぎない。遺物の出土量は僅かである。



第23図　007号住居跡実測図（1/60）

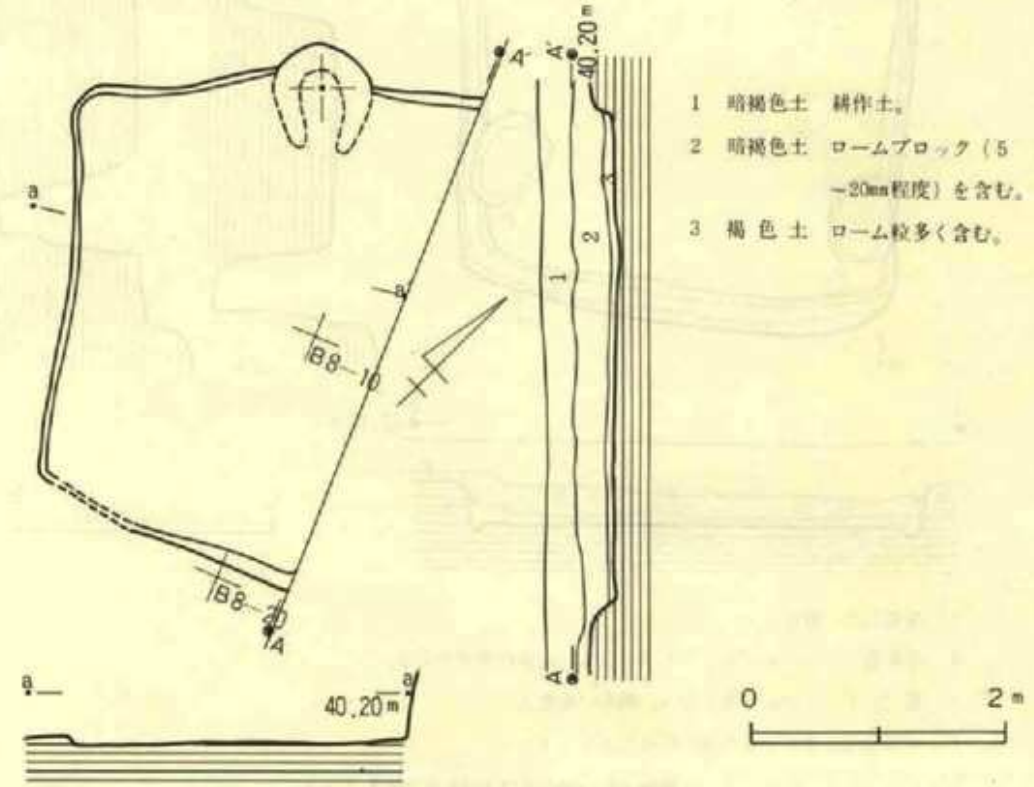


第24図　007号住居跡カマド実測図（1/40）

008号住居跡（第25図・図版8）

調査区域B8－10グリッドに位置し、N－38°－Wを指す。住居内覆土は床面に茶褐色土が薄く貼床状になり、上層に暗褐色土堆積する。

平面形は3.96×(3.15)mを呈し、歪みのある方形を示す。壁は、北西壁下6cm、南東壁下8cmの深さを示す。壁溝・柱穴は検出できなかった。床面は農機具による攪乱により凹凸を示す。残存ローム面は堅緻である。

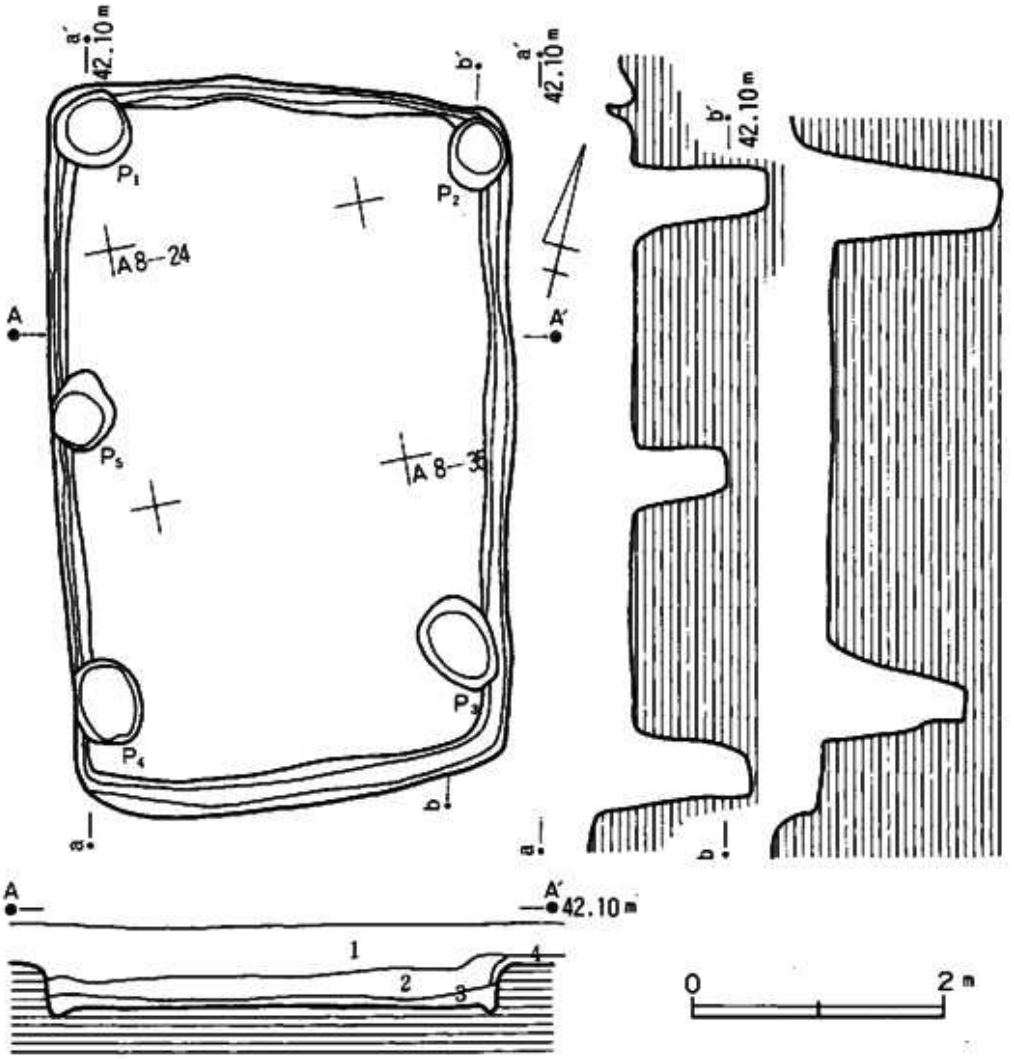


第25図　008号住居跡実測図（1/60）

カマドは北西壁に認められたが、遺存状態は悪く、袖部は一部分のみ検出された。遺物出土量は数点のみである。

009号住居跡（第26図・図版8）

006号住居跡検出の際、南東コーナー部分を掘り下げA 8－24グリッドに位置し、N－16°－Wを示す。住居内覆土は暗褐色土を主としている。



1　暗褐色土　耕作土

2　暗褐色土　ロームブロックを多く含み、全体に黒色である。

3　褐 色 土　ローム粒多く含み、明るい褐色土。

4　暗褐色土　1・2より薄い暗褐色土を示す。

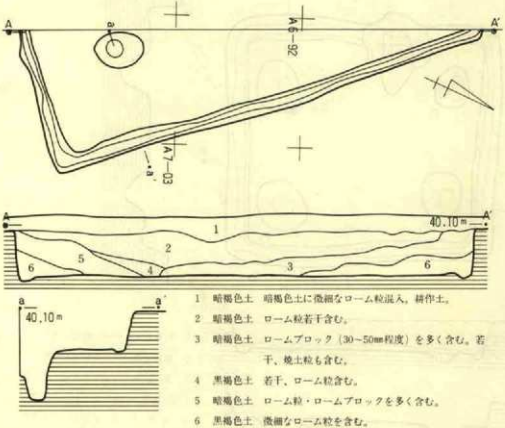
第26図　009号住居跡実測図（1/60）

平面形は5.64×3.80mの長方形を呈す住居跡であり、床面積16.3㎡を示す。壁は35cmの深さである。壁高はピットに付帯しながらも全周する。壁溝幅は、西壁下10cm、南壁下で18cm、深さ13cm前後を示す。床面まで農機具耕作が入り込み、攪乱を受ける。

柱穴は壁溝沿いに5か所P_1～P_5を検出する。長径51～74cm、深さ105cm前後と極めて深く、楕円形のピットを示す。P_2は浅く、78cmの深さを測る。P_2とP_3の間に柱穴の確認を急いだが未検出。柱穴P_5縁辺部より、キャリパー形縄文土器が壁下60cmより出土した。縄文土器は口縁無文帯直下に沈線と交互刺突による連続コの字状文様を施した中期後葉の土器である。出土遺物、遺構構造より、縄文時代中期の住居跡と判明する。その他阿玉台式土器も出土する。

010号住居跡（第27図）

調査区北西側A 6－93グリッドに位置し、一辺7m前後の住居跡を3ヵ検出する。住居内覆土は、床直上に軟質な黒色土、焼土粒を含む暗褐色土が厚くレンズ状に堆積する。



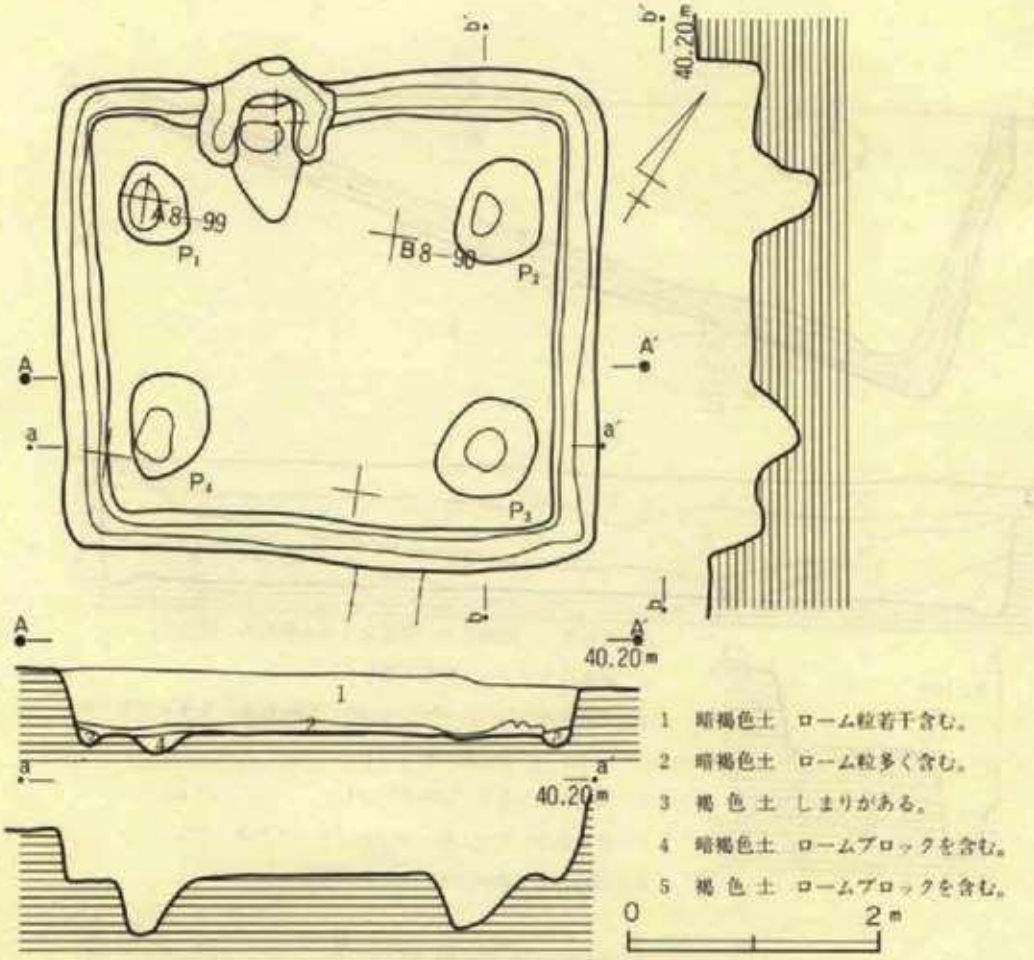
第27図　010号住居跡実測図（1/60）

平面形は 7.12×(2.30)mの方形を呈す。壁は北東壁床面で65cmの深さを示し、垂直に掘り込まれている。壁溝はほぼ全周する。壁溝幅8～20cm、深さ6cmを測る。

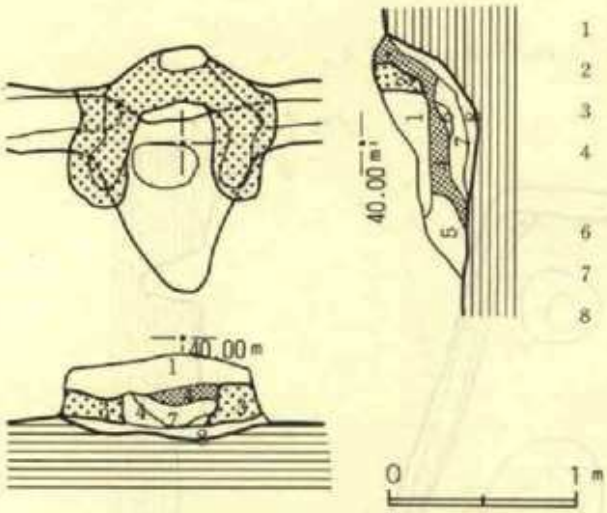
柱穴は、長径76cm、短径56cmの円形ピットを示す。床面の状態は堅緻である。遺物の出土量は僅かである。

012号住居跡（第28、29図・図版9）

調査区北東A8—99グリッドに位置し、主軸方向はN—33°—Wを指す。北側5m程で007号住居跡・南東部に013号住居跡が隣接する。住居内覆土はローム粒を含む暗褐色土が水平に堆積している。平面形は4.42×3.86mの方形を呈し、床面積11.9m²を示す。壁高は33～48cm、床面状態は凹凸状を示す。壁溝はやや外傾を示し、ほぼ全周する。壁溝幅は13～21cm、深さ8cm前後を示し、床面は農機具により、攪乱を受けるが、堅緻である。



第28図　012号住居跡実測図(1/60)



1　暗褐色土　砂質粘土、焼土粒を含む。
2　褐 色 土　砂質粘土、天井部の粘土を含む。
3　黄褐色土　砂質粘土。
4　暗赤色土　汚れた砂質粘土、焼土粒多く含む。
6　灰白色土　焼土・灰多く含む。
7　暗赤色土　焼土・褐色土の混合層。
8　茶褐色土　ローム粒多く、軟質。

第29図 012号住居跡カマド実測図(1/40)

カマドは北壁やや西側に位置し、一部壁面を幅58cm、奥行16cmの山形状の掘り込んで構築されている。煙道部はローム層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。火床部は緩い傾斜を示す。袖部は内傾するように構築され、壁面より袖先端部まで48cmを測る。袖部高さは11～14cmを測る。カマド内土層は8層に区分される。第1層によりカマドの覆土を構成する。第4層には、カマド内燃焼による焼土粒を含む。遺物の出土量は僅かで、甕や坏が出土している。図示できたのは5点。

013号住居跡（第30、31図・図版9）

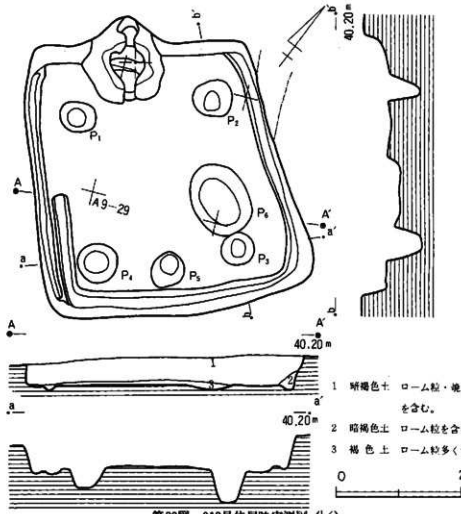
調査区域A 9－29グリッドに位置し、主軸方向はN－44°－Wを指す。住居内覆土は、床面上に薄く黒色土が堆積する。

平面形は4.30×4.21mの隅丸方形を呈し、床面積12.2㎡を示す。壁は一部外傾しながら21～34cmの深さを示す。壁溝は北西壁で途切れるが、ほぼ全周する。深さ8cm程のU字状断面を示す。貼床が認められ、重複した壁溝を検出する。床面状態は農機具により攪乱を受けるが、全体的に凹凸があるが、堅緻である。

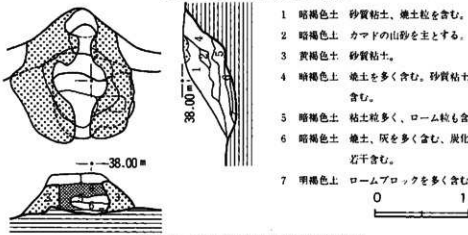
柱穴は6か所検出し、中央寄りにP_1～P_4が、2.30m等間隔で検出される。長径58cm内外の円形状で、深さ48cmを示す。P_5は長径58×51cmの楕円形、深さ21cmを測る。P_6は性格不明。

カマドは北壁中央部に位置し、ローム壁を幅78cm、奥行き23cm、2段状の掘り込みを示す。煙道部は段状で火床部分へ続く。袖部は内傾し、高さ23cmを測る。火床と燃焼部には焼土粒・灰層・炭化物が混入し、暗褐色土を堆積する。煙出口、器掛部も残存する。カマド内土層は7層を示す。第4層は煙出口及び器掛部からの流入を示す。カマド燃焼部で焼土、灰が堆積する。

遺物の出土量は少なく、覆土中より甕の口縁部や坏が出土する。



第30図　013号住居跡実測図（1/60）



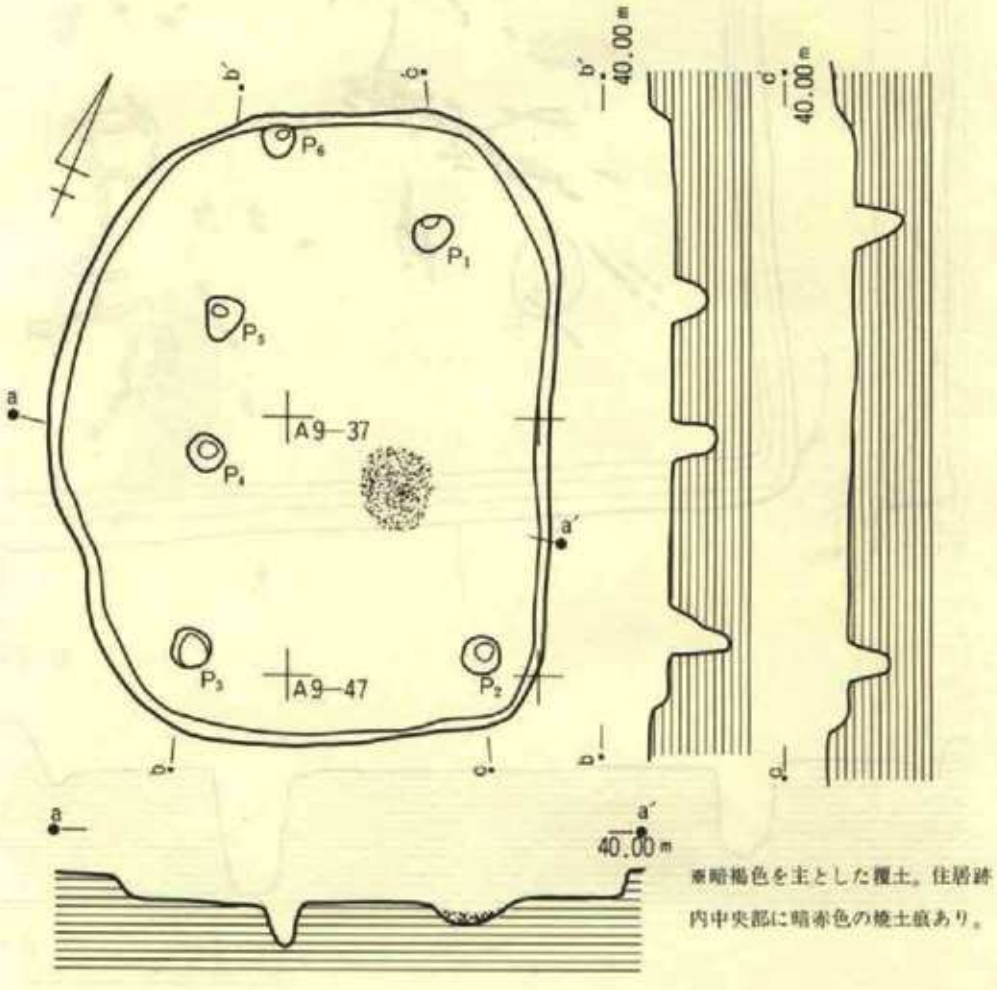
第31図　013号住居跡カマド実測図（1/40）

014号住居（第32図・図版10）

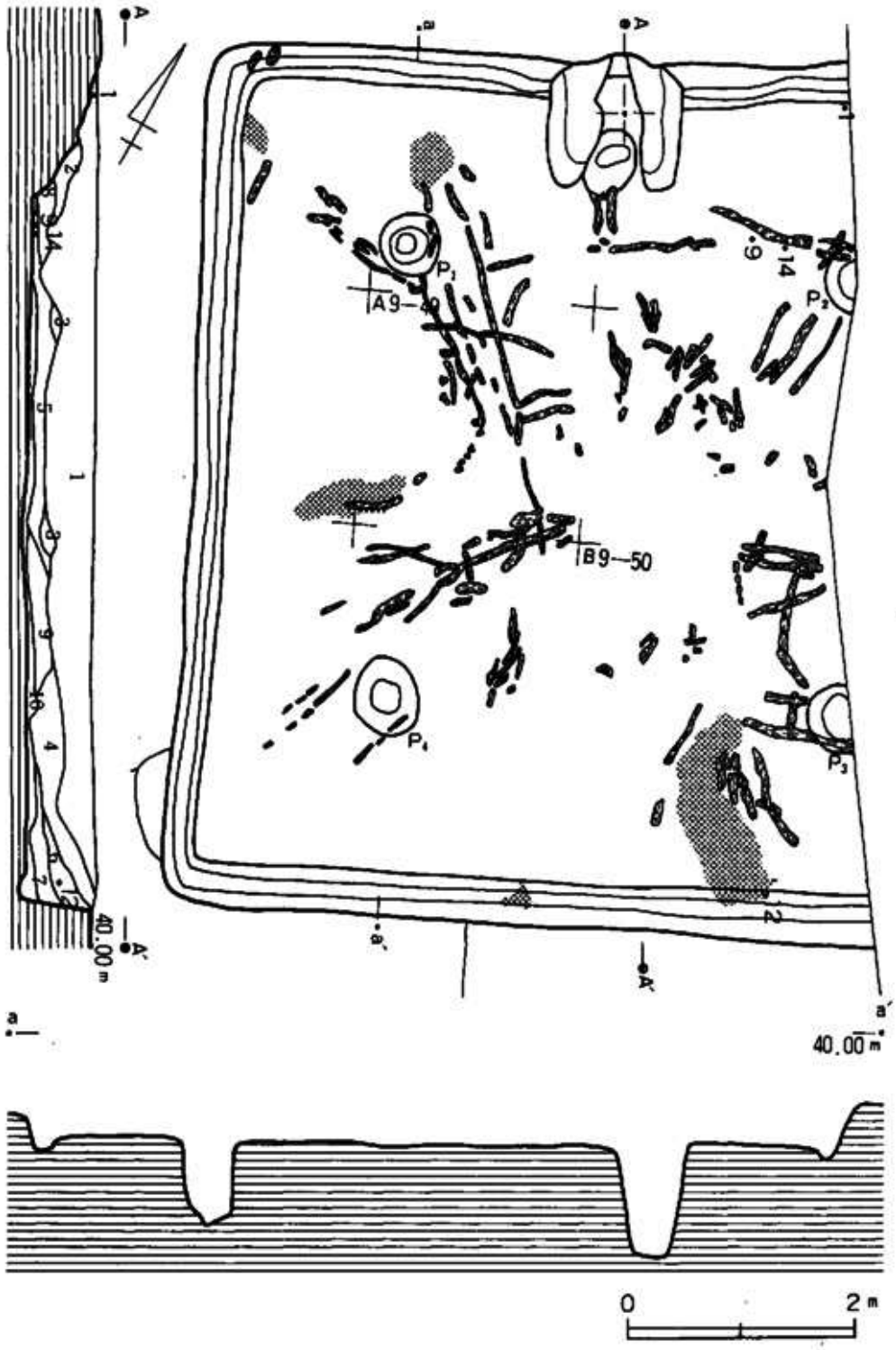
015号住居跡の西側A9—37グリッドに位置し、主軸方向をN—23°—Wに指す。住居内覆土は暗褐色土を主とし、掘り込みは浅い。

平面形は長径4.88m、短径4.00mを測り、一部直線状であるが、楕円形の住居跡である。

柱穴は6か所検出され、炉跡を囲むようにP_1～P_6を検出する。直径29～36cm、深さ26～30cmを測る。ピット内覆土は暗褐色土を主としている。炉の範囲は長径63cm、短径56cmの円形で、床面上より擂鉢状を示す。出土遺物は縄文時代中期のキャリパー形を示す深鉢で、胴部を破損している。土器内面には、焼土と硬いロームブロックを多量に充満させており、炉跡として使用された形跡を示す。その他にも浅鉢や縄文土器の破片が出土している。縄文中期に位置付けられよう。



第32図　014号住居跡実測図（1/60）



第33図　015号住居跡実測図（1/60）

015住居跡土層説明

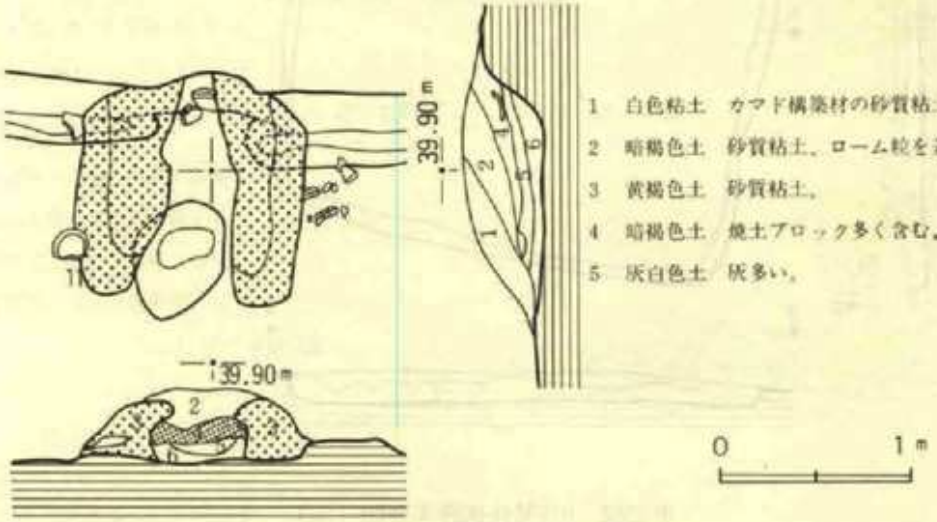
1　暗褐色土　微細なローム粒・焼土粒を多く含み、若干粘性を示す。
2　暗褐色土　やや白っぽい砂質粘土を含む。
3　炭化材　黒く焼けた炭化材を示す。
4　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を多く含む。壁面付近よりシモフリ状にロームブロックを含む。
5　暗褐色土　全体的には黒色。炭化材・焼土粒を多量に含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを若干含む。やや粘性を示す。
7　暗褐色土　ロームブロック・炭化材を多く含む。
8　暗褐色土　砂質粘土の流出土。若干焼土粒も混じる。
9　暗褐色土　炭化物を多量に含む。焼土粒も多い。
10　暗褐色土　炭化粒・焼土粒も含み、黒色土。

015号住居跡（第34図・図版11）

014号住居跡の東側A9－49グリッドに位置し、主軸方向はN－26°－Wを指す。住居内覆土はレンズ状に堆積する。壁際には壁面の一部が埋土し、床面に炭化粒が堆積している。

平面形は7.38×(3.95)mを呈し、ほぼ隅丸方形を示す。壁は48～63cmと深く、垂直に掘り込まれている。壁溝はカマド下を除き、全周する。幅は14～18cm、深さ8cmのU字状断面を示す。遺存状態は良好である。

柱穴は床面に2か所、調査区境界に2か所かかり、主柱穴P_1～P_4を構成する。各柱穴とも対角線上5.50mに構築されており、直径55～60cmの円形を呈す。深さは74cmを測り、底は小円形。床面には、カマド前部から中央部にかけて多量の焼土と炭化材を検出する。住居は火災によって廃棄されたと考えられる。炭化材の中には丸太状や板状を呈する上屋構造の一部が各主柱穴から中央に向かって倒れ込んだように検出された。炭化材を除くと床面は平坦である。



第34図　015号住居跡カマド実測図（1/40）

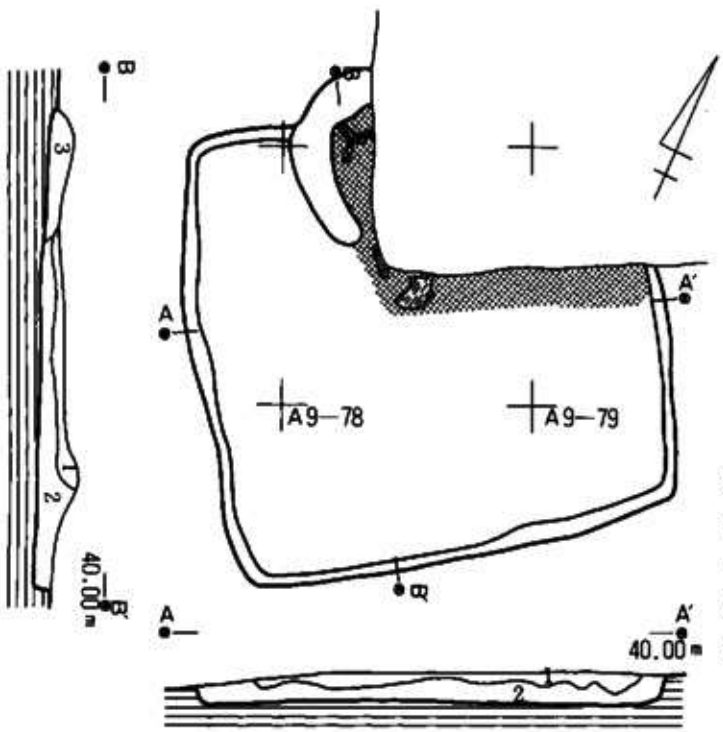
カマドは北壁中央に位置し、砂質粘土を主として構築される。ローム壁を幅42cm、奥行き13cmの山形状の掘り込みを示す。火床と焚口部には緩やかな窪みがみられる。袖部は住居内へ73cm延び、高さ25cm前後を測る。カマド内土層は6層に区分でき、ローム粒を含む第2層や焼土ブロックを含み、カマド内は赤変している。遺物の出土量は多く、高坏や坏が出土している。

016号住居跡（第35図）

015号住居跡の南東壁の上面、A9—78グリッドに位置し、主軸方向はN—31°—Wを指す。住居掘り込みは住居は比較的は比較的浅く、焼土粒、炭化粒を確認する。覆土上面には土師器の甕がつぶれた状態で出土する。拡張により、住居を確認する。

平面形は3.80×3.55mを呈し、方形である。床面積7.1m²を示す。壁高は14cm前後で床面は平坦。壁溝及び柱穴は検出できなかった。

カマドは北壁中央に位置している。カマドの規模は小規模でカマド周辺には焼土粒、炭化粒が多く堆積しており、つぶれた感じを示す。袖部は砂質粘土が少量検出できたにすぎない。遺物出土量は小量である。



1　暗褐色土　焼土・炭化材を多く含む。

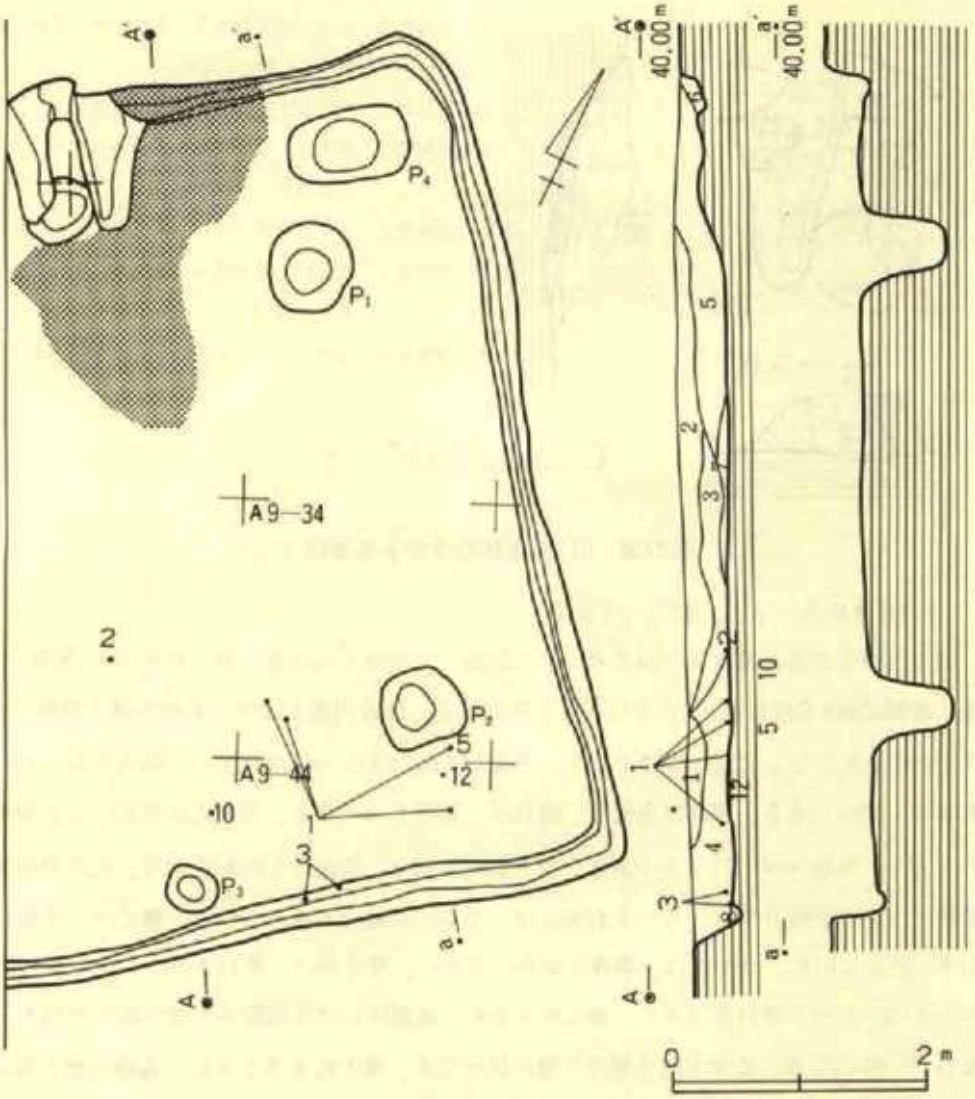
2　暗褐色土　微細なローム粒若干焼土粒も含む。

3　暗褐色土　焼土粒・砂質粘土を多く含む。

※焼失家屋の跡か、炭化材が1層より多量に出土している。焼土がカマドを中心に、中央部に拡がって検出された。

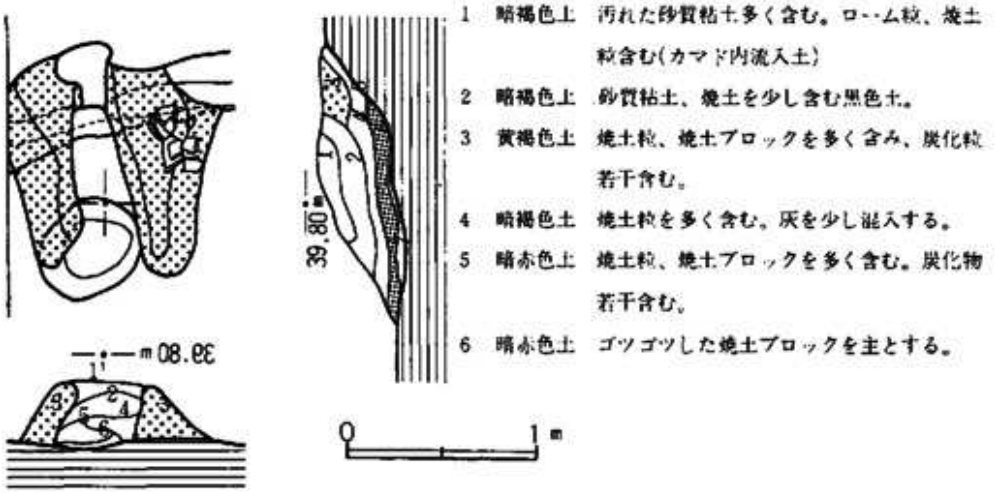
第35図　016号住居跡実測図（1/60）

0　2m



1　暗褐色土　ローム粒を若干含む。全体的に軟質。
2　暗褐色土　ローム粒を若干含む。パサパサである。
3　暗褐色土　ロームブロック(30～40㎜程度)を含む。粘土性を帯び、しまっている。
4　暗褐色土　砂質粘土を含む。下層には焼土粒も含む。
5　褐　色　土　カマド上層より流れた。黄色粘土・焼土粒を含み、明るい褐色土である。
6　褐　色　土　粘性ある堆積土で、ローム粒を多く含む。やや明るい褐色土を示す。
7　褐　色　土　ローム粒を主とした軟質な褐色土。
8　褐　色　土　ローム粒を多く含む。

第36図　017号住居跡実測図 (1/60)



第37図　017号住居跡カマド実測図 (1/40)

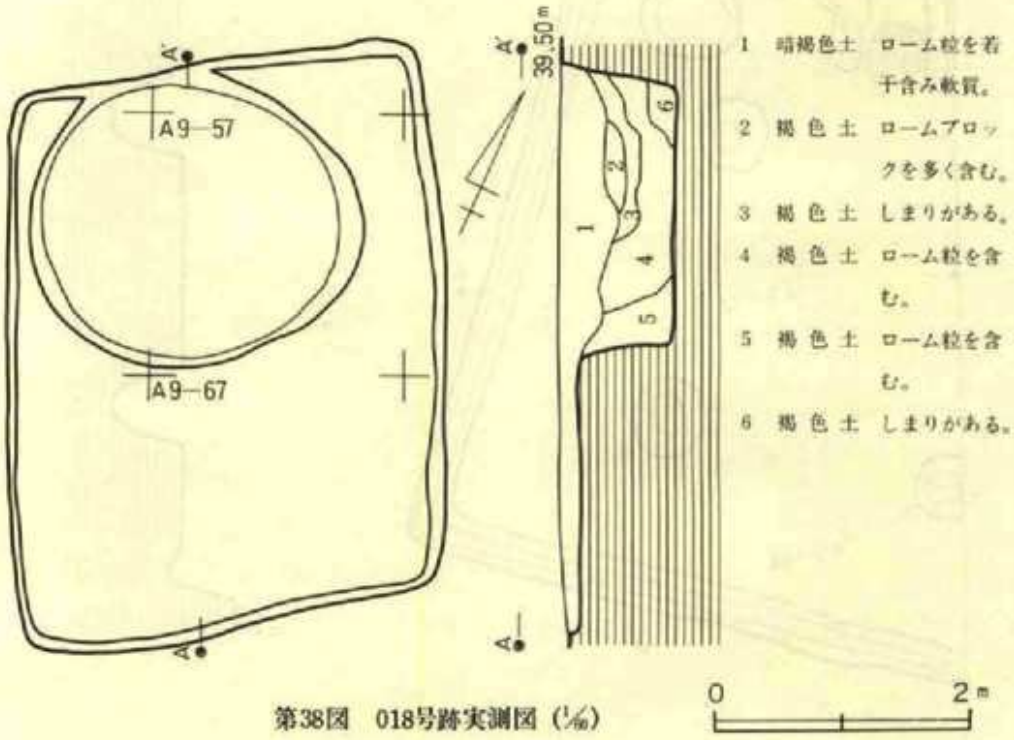
017号住居跡（第36、37図・図版12）

調査区域中央部西端Ａ９－34グリッドに位置し、主軸方向はＮ－39°－Ｗを指す。東側に014号跡、南側に018号住居跡、019号住居跡と隣接する。住居内覆土はローム粒が薄く堆積し、暗褐色土を主とし、レンズ状の堆積を示す。平面形は6.74×(5.04)ｍを呈し、隅丸方形である。壁高は30～37cmである。壁溝は全周し、幅16cm、深さ８cmを測る。主柱穴は床面に２か所検出されており、長径78cmのピットである。深さ45cmを測り、底面は小円形を示す。住居跡南側には補助ピットP_3が残存する。カマド右側には、方形の貯蔵穴も検出される。覆土は、暗褐色土を示す。底面は円形。カマドは、調査区域内に位置し、壁を48cm、奥行き16cmの山形状の掘り込みをもつ。カマド焚口部は狭く、焼土粒を含む。袖部内には土師器坏や甕の破片が混入し、構築材の一部になる。カマド内土層は７層に区分でき、焼土粒を多く含む。遺物の出土量は多く、カマド右袖より甕や坏等を出土し、床面直上には遺物が多い。

018号跡（第38図）

調査区域Ａ９－67グリッドに位置し、方形状の覆土を確認した。覆土は15cm程でローム床面に達し、単一の暗褐色土層を示す。その後、北壁周辺拡張により円形状の落ち込みが確認され、覆土中より縄文時代中期の遺物が出土した。

平面形は方形状遺構と円形状遺構に区分できる。方形状遺構は4.30×3.28ｍ、深さ10cmを測る。遺物の出土量は皆無。また、円形状遺構は長径2.55ｍ、短径2.30ｍを呈す。壁は垂直に掘り込まれ深さ90cmを呈す。床面は平坦である。縄文時代中期の出土遺物及び遺構検出状態により縄文時代中期の小竪穴状遺構と推定した。



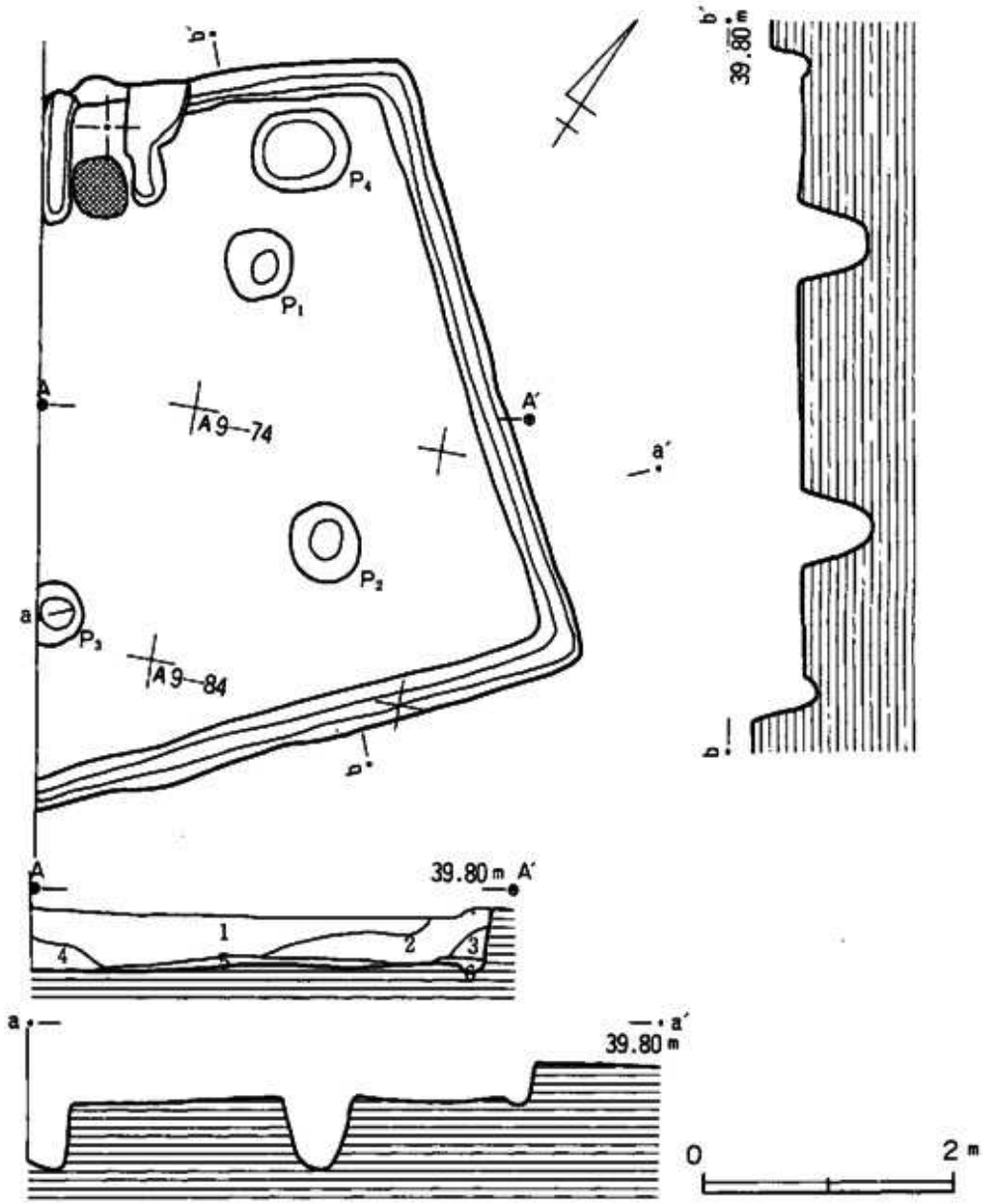
第38図　018号跡実測図（1/60）

019号住居跡（第39、40図・図版12）

調査区域西側A 9－74グリッドに位置し、主軸方向はN－45°－Wを指す。住居内覆土は、ローム粒を貼床にし、暗褐色土を中央に厚く堆積する。北東側に018号住居跡、南東側020号住居跡、南側に021号住居跡が隣接する。平面形は5.24×(4.58)mを呈し、住居跡の3/4を検出した。隅丸方形を示す。壁高は30cmを測り、垂直な立ち上がりを示す。壁溝幅は18cm内外、深さ6cmを示し、全周する。

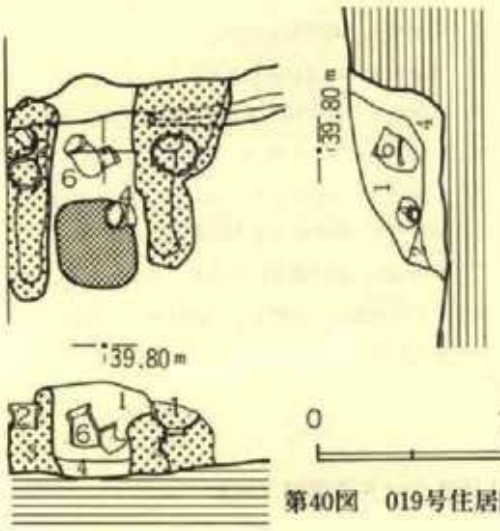
柱穴は主柱穴を3か所検出し、P_1～P_3とする。径52cm内外、深さ51cmの円形状ピットを示す。P_4はカマド脇に位置する貯蔵穴で、長径78cm、短径60cmの楕円状を示す。床面からの出土遺物は皆無である。

カマドは北壁中央部に幅25cm、奥行き8cm、2段状に外反して構築されている。袖部は中央に70cm程延びており、土師器片や甕が出土している。袖部高さは33cm程である。カマド内土層は4層に区分でき、焼土粒を含む第4層は煙道部からの流れ込みも含まれる。遺物の出土量はカマド内に多い。甕や壺が完形で出土する。



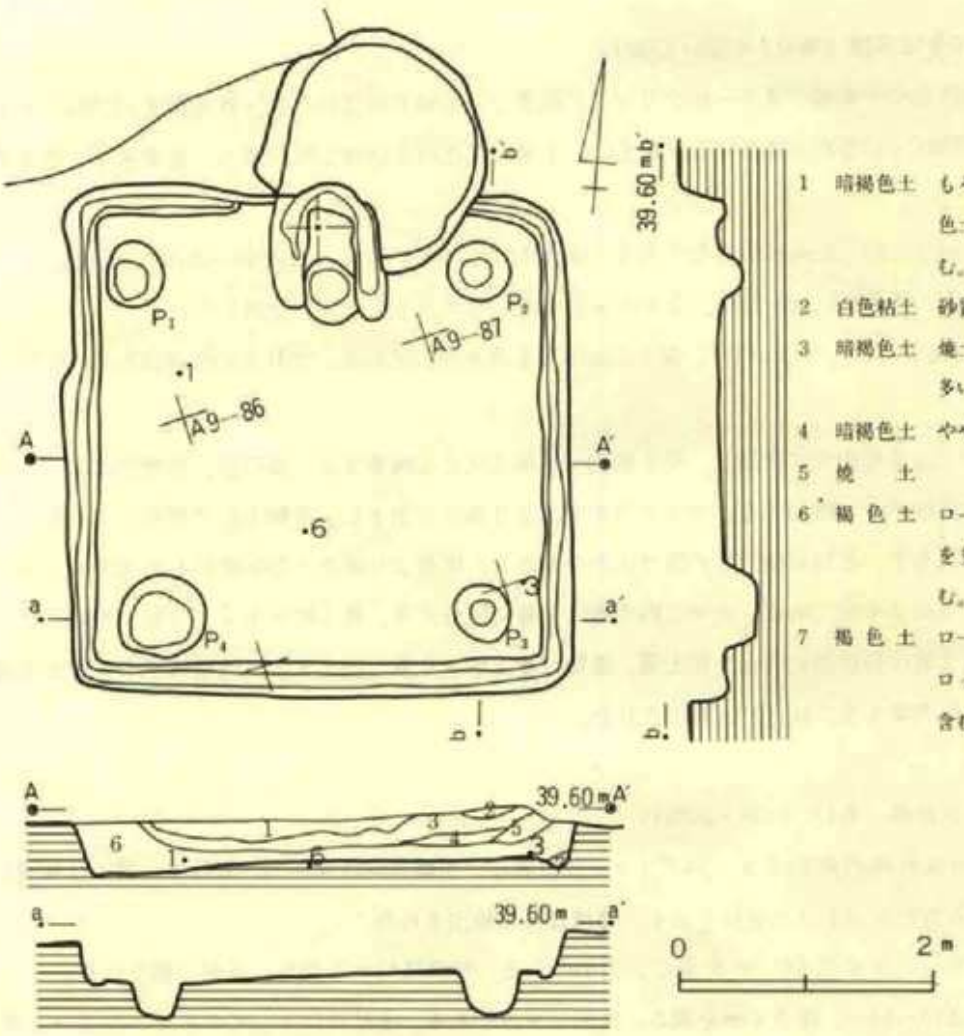
1　暗褐色土　ローム粒若干含む。しまりのある黒色土。
2　暗褐色土　一部ロームブロック(20～30mm程度)を含む。
3　暗褐色土　ローム粒をわずかに含むが緊緻な黒色を示す。
4　褐 色 土　微細なローム粒を含み、やや軟質である。
5　褐 色 土　ローム粒を含み、軟質である。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含み、褐色に近い。

第39図　019号住居跡実測図 (1/60)



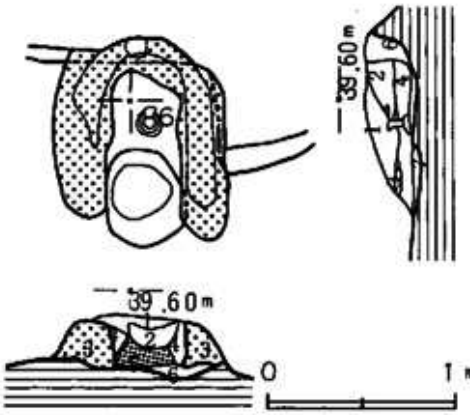
1　暗褐色土　汚れた粘土を含む。
2　暗褐色土　焼土ブロックを多く含むが、全体的に黒色。
3　茶褐色土　汚れた粘土、ローム粒を多く含む。（袖部の構築材）
4　暗赤色土　焼土粒多い。若干灰も含む。

第40図　019号住居跡カマド実測図（1/40）



1　暗褐色土　もろい黒色土を含む。
2　白色粘土　砂質粘土。
3　暗褐色土　焼土・灰多い。
4　暗褐色土　やや黒色。
5　焼　土
6　褐色土　ローム粒を多く含む。
7　褐色土　ロームブロックを含む。

第41図　020号住居跡実測図（1/60）



1　暗褐色土　褐色土を含む。
2　白色粘土　砂質粘土を含む。
3　茶褐色土　砂質粘土を含む。若干ローム土混入する。
4　暗褐色土　カマド壁内に焼土多く含む。
5　暗赤色土　焼土・灰多く含む。
6　暗褐色土　砂質粘土を多く含む。
7　暗褐色土　若干焼土粒を含む。ローム土多い。

※カマド中央部より支脚として利用された土器（高坏⑥）が出土している。

第42図　020号住居跡カマド実測図（1/40）

020号住居跡（第41、42図・図版13）

調査区域やや南側のA 9－86グリッドに位置し、主軸方向はN－40°－Wを指す。北側に018号跡、北西側に019号跡が隣接する。覆土は、上層に炭化材及び焼土粒が多く、焼失家屋と推定する。

平面形は3.90×3.86mの方形である。床面積は13.1m²を示す。壁は26～30cmで垂直に掘り込まれる。壁溝幅は12～23cm、深さ6cmを示す。カマド下を除き、全周している。

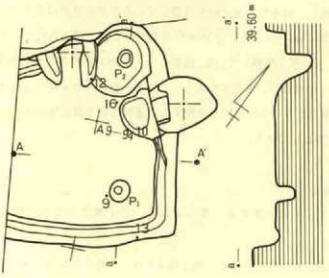
柱穴はP_1～P_4で、42cm内外、深さ23cmの円形底を示している。主柱穴の位置は2.6m間隔を測る。

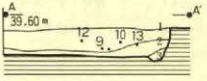
カマドは北壁中央に位置し、壁を幅60cm程掘り込んで構築する。焚口部、燃焼部は広く、カマド内に緩やかに傾斜する。カマド内中央部より高坏が出土し、支脚として使用していた。カマドを調査中、北側に楕円状の掘り込みを検出し、床面より縄文土器の破片を出土する。深さ55cm、底面は平坦である。カマド内土層は7層に区分でき、焼土粒が第4、5層に堆積していた。第2層は器掛部の崩れた粘土層。遺物は覆土中より多く出土する。遺構検出中に覆土上部より多量の焼土及び炭化材が検出された。

021号住居跡（第43、44図・図版14）

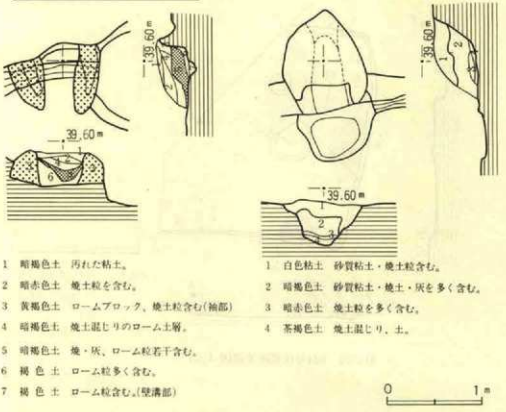
019号住居跡の南側A 9－94グリッドに位置し、主軸方向はN－34°－W指す。覆土は東壁に焼土粒を含むが平面状の堆積を示す。遺構は½程検出された。

平面形は3.26×(2.66) mを呈し、方形である。壁高は41cmを測り、垂直に掘り込む。壁溝幅は18～24cm、深さ6cmを測る。床面は平坦である。主柱穴は1か所のみで、径30cm、深さ28cmを測る。カマド右側には長径120cm、短径90cmの楕円形状の貯蔵穴を有する。





第43図　021号住居跡実測図（1/60）



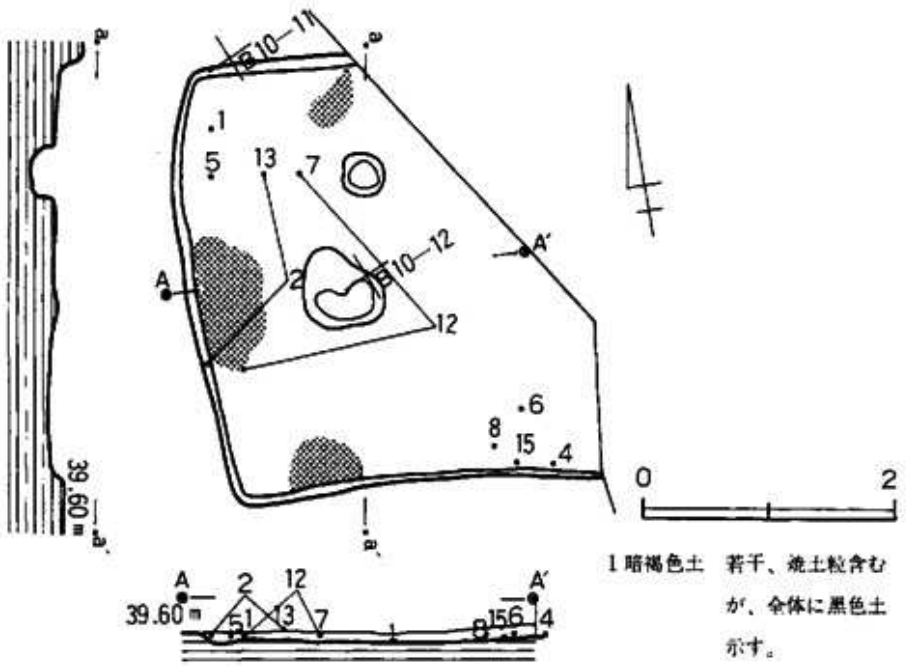
第44図　021号住居跡カマド実測図（1/30）

カマドは旧カマドを東側に構築し、暗赤色の焼土粒を残存しているが遺存状態は悪く、つぶれた感じである。新カマドは壁に幅50cm、奥行き10cm程に掘り込まれて構築されている。焚口部から燃焼部にかけて焼土、灰が厚く堆積している。袖部の高さは28cmを測る。カマド内土層は7層に区分できる。第7層は旧壁溝で、褐色土を主としている。第3、第4層には焼土粒を含む。その下層には暗褐色土層混じりのローム粒を堆積する。遺物の出土量は僅かであった。甕や壺の口縁部片が覆土中から出土している。

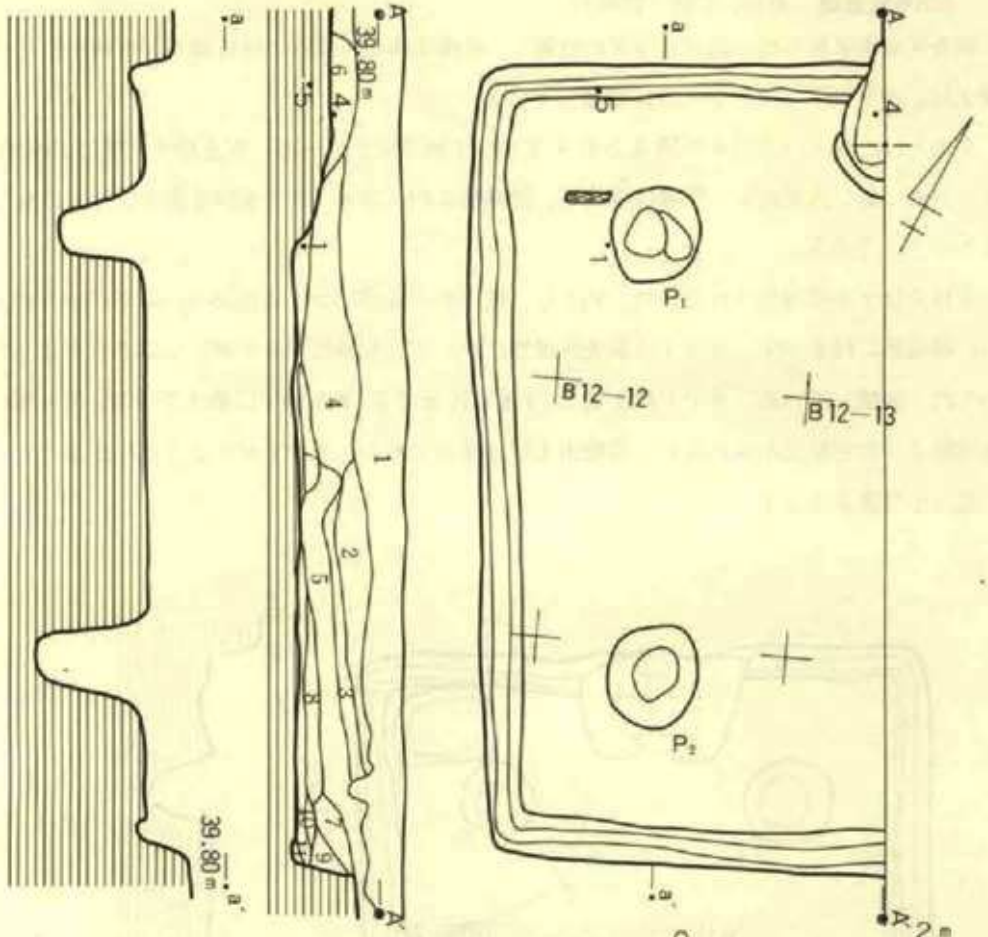
024号住居跡（第45図・図版15）

調査区やや南東B10—12グリッドに位置する。覆土は浅く、若干焼土混じりの暗褐色土を堆積する。

平面形は¾検出し、3.42×(2.92)mの方形を呈す。壁は12cmと浅く、緩やかな立ち上がりを示す。床面の精査により甑や坏等がほぼ同一レベルより出土している。西壁下及び南壁下には、暗赤色の焼土の堆積が薄く検出された。カマドは確認できなかった。柱穴も検出できなかった。

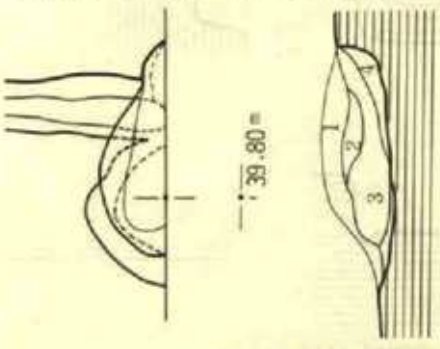


第45図　024号住居跡実測図（1/60）



第46図　025号住居跡実測図(1/60)

1　耕作土
2　暗褐色土　ローム粒少量含む。黒色気味。
3　褐色土　ロームブロック斑状に含む。
4　暗褐色土　ローム粒を多く含む。若干炭化粒含む。
5　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を多く含む。
6　白色粘土　山砂粘土を含み、白色気味である。
7　褐色土　ローム粒多く含む。
8　暗褐色土　微細なローム粒多く含み堅緻。
9　焼　土　暗赤色の焼土が斑状に混入している。
10　褐色土　ロームブロック混じり、茶褐色を示す。
11　褐色土　ローム粒、密に入る。やや軟質である。



1　暗褐色土　ローム粒混入。
2　暗赤色土　焼土層（流れ込んでいる）
3　暗褐色土
4　褐色土　白色粘土、ロームブロック混じり

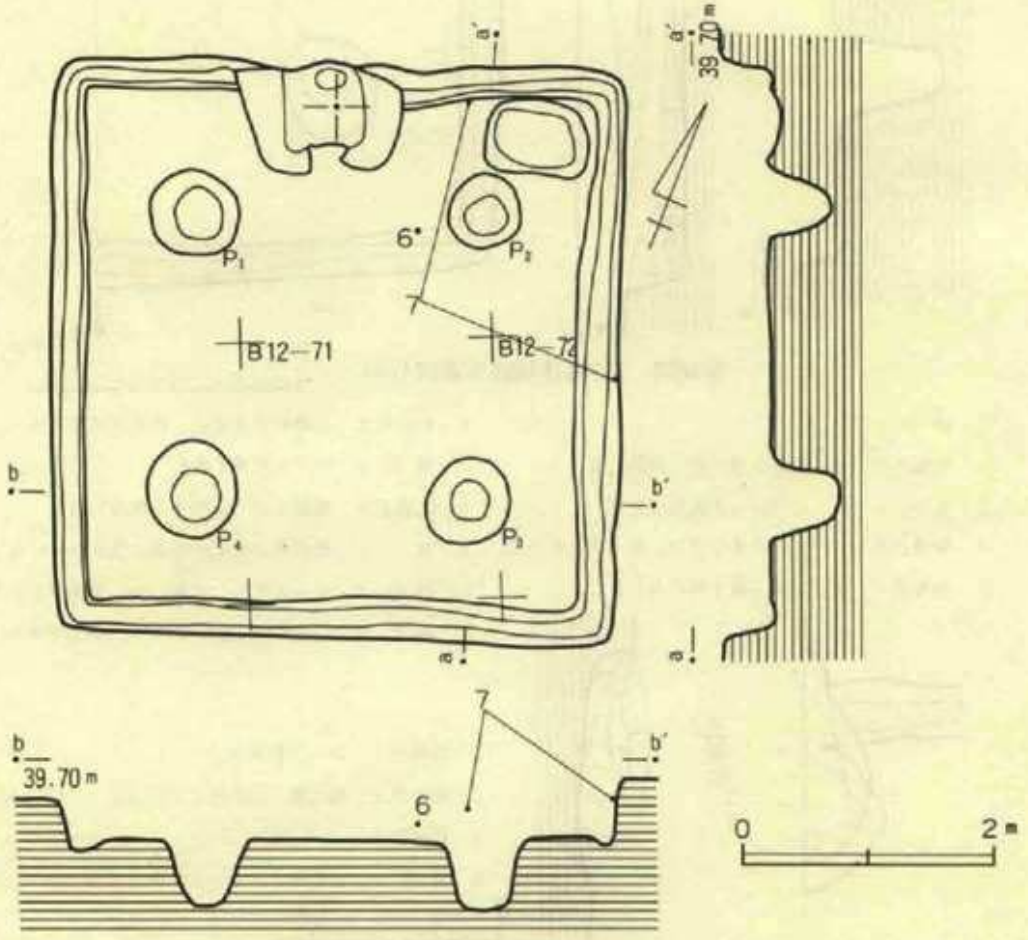
第47図　025号住居跡カマド実測図(1/40)

025号住居跡（第46、47図・図版16）

調査区域南東側B12—12グリッドに位置し、遺構は調査区域内に住居跡の½を検出している。覆土は、南壁直下ではレンズ状に堆積している。

平面形は6.14×(3.20)mの隅丸方形を呈し、主軸方向をN—29°—Wを指す。壁は35cmの深さで垂直に掘り込まれる。壁溝は全周し、壁溝幅は20～24cm、深さ6cmを測る。床面はなだらかな平坦状である。

主柱穴は2か所検出された。P_1、P_2とし、楕円形。長径78cm、短径68cm、深さ65cmを測る。P_1は縁辺部に段を示す。カマドは調査区域外にかかり、左袖部のみが押しつぶされたように検出され、崩壊している。カマド内土層は、4層に区分でき、第2層中に焼土を含む。第4層には煙道部より白色粘土が流れ込む。遺物出土量は僅かである。カマド付近より高坏が出土し、その他は小型甕も出土する。



第48図　026号住居跡実測図（1/60）

第49図　026号住居跡カマド実測図（1/40）

026号住居跡（第48、49図・図版17、18）

調査区域南側B12−71グリッドに位置し、主軸方向はN−22°−Wを指す。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主としている。平面形は4.50×4.45mの方形を呈し、床面積15.2m²を示す。壁は45cm前後で垂直に掘り込まれる。壁溝は、カマド下を除き全周する。幅はほぼ一様で22cm内外、深さ6cmを測る。

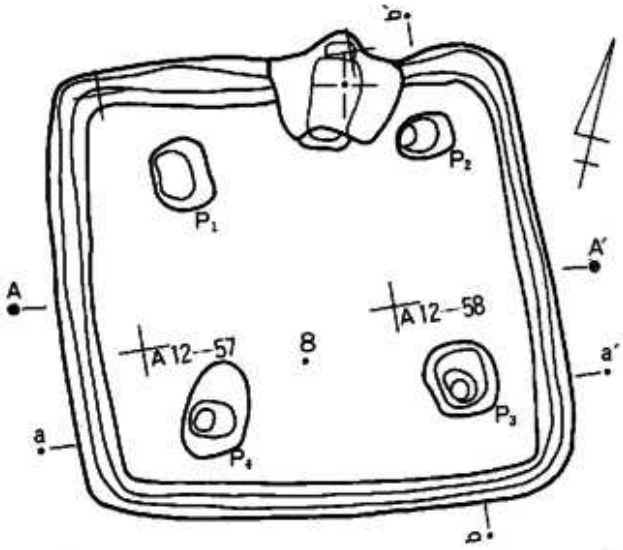
柱穴は4か所検出され、P_1〜P_4を示す。各ピットの掘り込みは65cm内外で、深さ50〜70cm前後を示す。底面は小円形である。

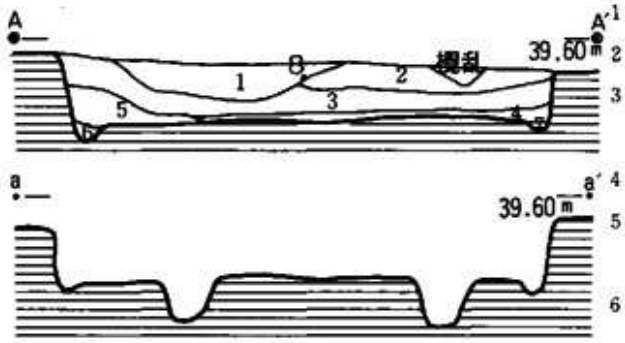
カマドは北壁中央に位置し、遺存状態は良好。壁面を40cm、奥行き22cm程に掘り込まれて構築される。天井部砂質粘土中には、カマドに付随するものと思われる土師器片も出土している。カマド内土層は4層に区分でき、床面には焼土が円盤状に堆積している。遺物出土量は僅かである。覆土中より甕が出土する。

遺物出土量は僅かである。覆土中より甕が出土する。

027号住居跡（第50、51図・図版17）

調査区域南側A12−57グリッドに位置し主軸方向N−19°−Wを指す。覆土はローム粒を含んだ暗褐色土を主とし、上面にはローム粒混じりの堆積もみられ、レンズ状を示す。平面形は3.82×3.56mを呈し、南壁が若干開きぎみの方形を示す。床面積は9.4m²。壁高は西壁下50cm、東壁下35cmを測り若干凹凸状を示す。壁溝は住居内を全周する。壁溝は18cm内外、深さ10cmを測る。柱穴は4か所検出され、P_1〜P_4を示す。柱穴の掘り込みはまちまちで、P_1長径53cm、短径30cm、深さ30cm、P_2長径42cm、短径30cm、深さ38cm、P_3長径76cm、短径47cm、深さ34cmの規模を測る。各柱穴は西側寄りに、190cmの等間隔で掘り込まれている。カマドは北壁中央に位置し、砂質粘土が上面に流れ込んでいる。煙道部から火床部にかけて緩く傾斜している。袖部の高さは24cm、構築は良好。両袖部内は、焼土粒が多く堆積している。カマド上部には煙出部が

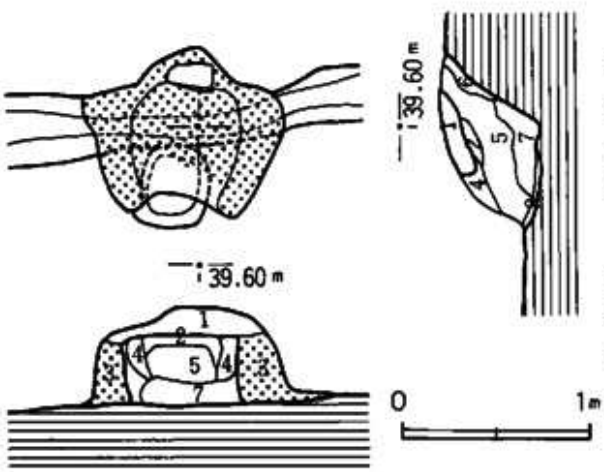




1　暗褐色土　焼土粒・ローム粒を含む。
2　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
3　暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを含む。
4　褐色土　ローム粒を含む。
5　褐色土　ローム粒、ロームブロックを含む。
6　黄褐色土　ロームブロックを若干含む。

0　2m

第50図　027号住居跡実測図（1/60）



1　白色粘土　砂質粘土含む。
2　暗褐色土　若干、ローム、焼土粒含む。
3　黄褐色土　砂質粘土。
4　暗赤色土　焼土を多く含む。（カマド内赤変）
5　暗褐色土　焼土粒・ローム粒を含む。
6　褐色土　軟質ローム土を含む。
7　暗褐色土　焼土・灰・炭化粒を多く含む。
8　暗褐色土　焼土粒・ローム粒若干含む。

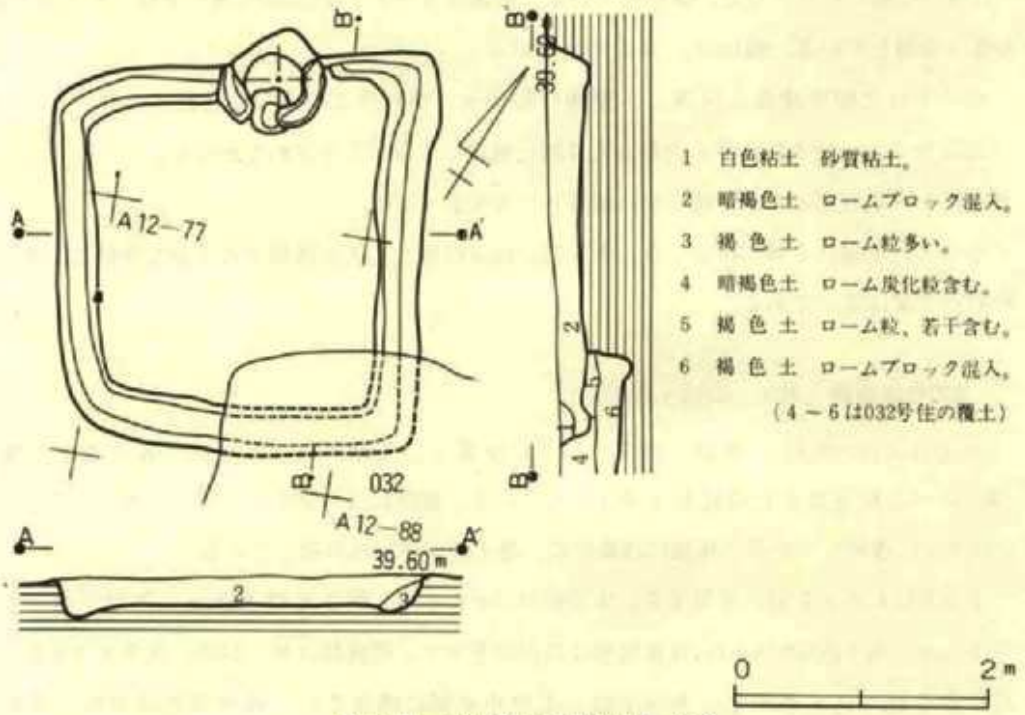
0　1m

第51図　027号住居跡カマド実測図（1/40）

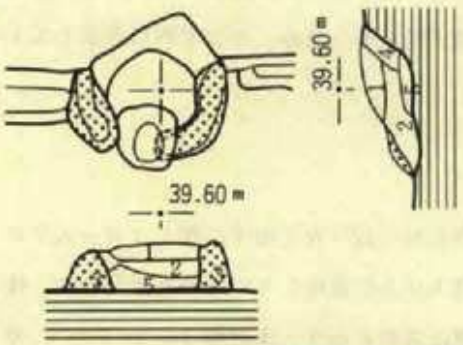
残存し、18×32cmの楕円形を示す。カマド内土層は7層に区分できる。焼土、灰、炭化粒を基礎とし、第5層は暗褐色土を主とする。第4層には焼土粒を多く含み、カマド内は赤変している。遺物の出土量は僅かである。

028号住居跡（第52、53図・図版18）

調査区域南端A12－77グリッドに位置し、主軸方向をN－32°－Wを指す。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主である。南東壁に暗褐色の落ち込みが重複しているのを確認した。後に029号跡とする。平面形は3.06×2.98mを測り、北壁に変形を示す。床面積は5.5㎡を示す。壁高は20cm前後を示し、緩やかな立上がりを示す。壁溝は30cm内外の幅を持ち、深さも6cm位であるが、全周している。床面の精査を実施したが、柱穴の確認はできなかった。カマドは北西壁中央部に位置し、壁を45cm、ほぼ垂直に掘り込んでいる。袖部には、わずかに砂質粘土が残存している。カマド内土層は5層に区分でき、焼土、灰、ロームブロックを主とした暗褐色土を堆積している。4層には煙道部から暗褐色土が流入する。ほぼ平坦に堆積している。



第52図　028号住居跡実測図（1/60）



1　茶褐色土　山砂含む。
2　暗褐色土　砂質粘土含有。焼土粒多く含む。
3　黄褐色土　山砂、砂質粘土含む。
4　暗褐色土　焼土粒、ローム粒を若干含む。
5　暗褐色土　焼土灰、ロームブロックを含む。

0　1m

第53図　028号住居跡カマド実測図（1/40）

029号住居跡（第54、55図・図版18）

調査区域B13—10グリッドに位置し、主軸方向は、N—41°—Wを指す。覆土は、ローム粒を多く含んだ暗褐色土を主としており、西側壁上面には、030号住居跡が重複して検出された。

平面形は、5.08×4.80mの隅丸方形で、床面積は19.2m²を示す。壁は、26cm前後で、ハードローム層中に認められ、垂直に掘られている。壁溝はカマド下及び030号跡に重複されている部分の他は全周している。幅18cm、深さ10cmを測る。

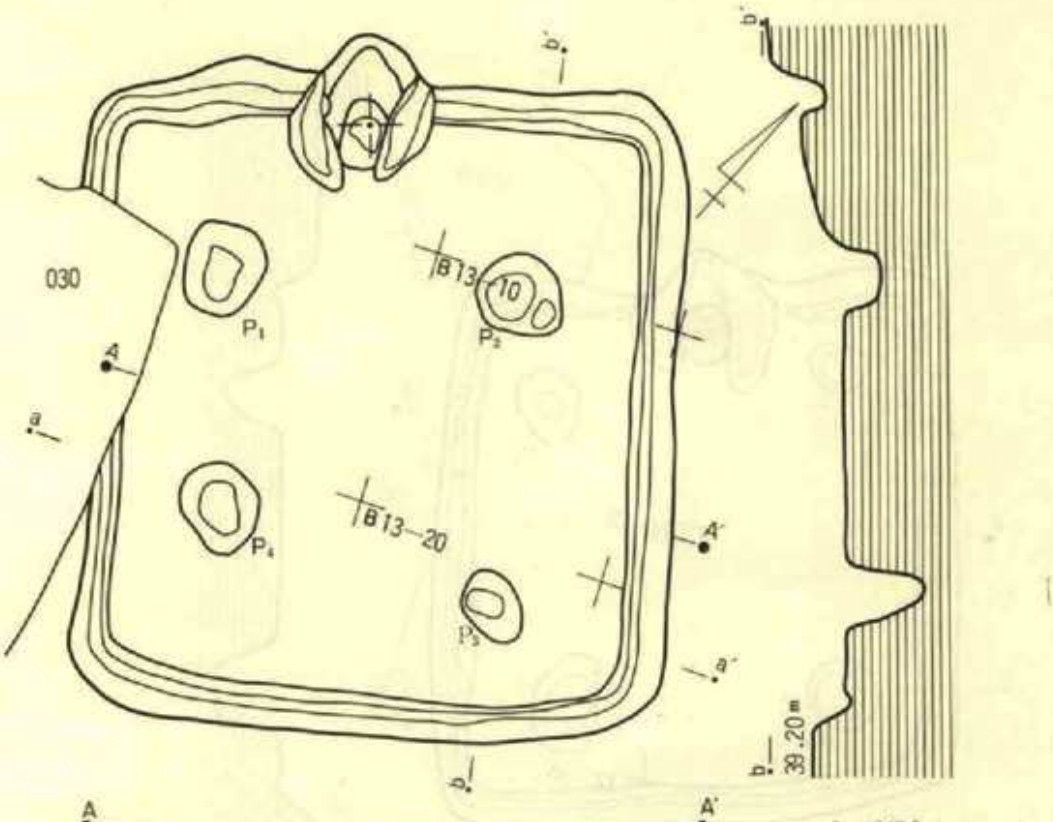
カマドは北壁中央部に位置し、壁面に幅65cm、奥行き25cm掘り込まれている。カマド焚口部はせまく、焼土粒を多く含む。天井部は崩壊して原形をとどめなかった。
煙道部から燃焼部にかけて緩やかに傾斜して火床部へ至る。

カマド内土層は4層に区分でき、火床部に16cm程焼土、灰が堆積する平坦な堆積を示す。遺物の出土量は僅かである。

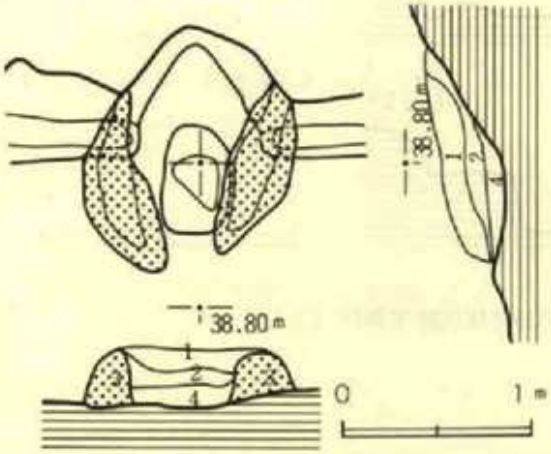
030号住居跡（第56、57図・図版19）

029号住居跡の左側、A13－28グリッドに位置し、主軸方向はN－15°－Wを指す。覆土は、ローム粒を含んだ暗褐色土を主としている。壁際には、壁面から崩れたロームブロックが緩やかに堆積している。床面には炭化粒、焼土粒が15cm程堆積している。

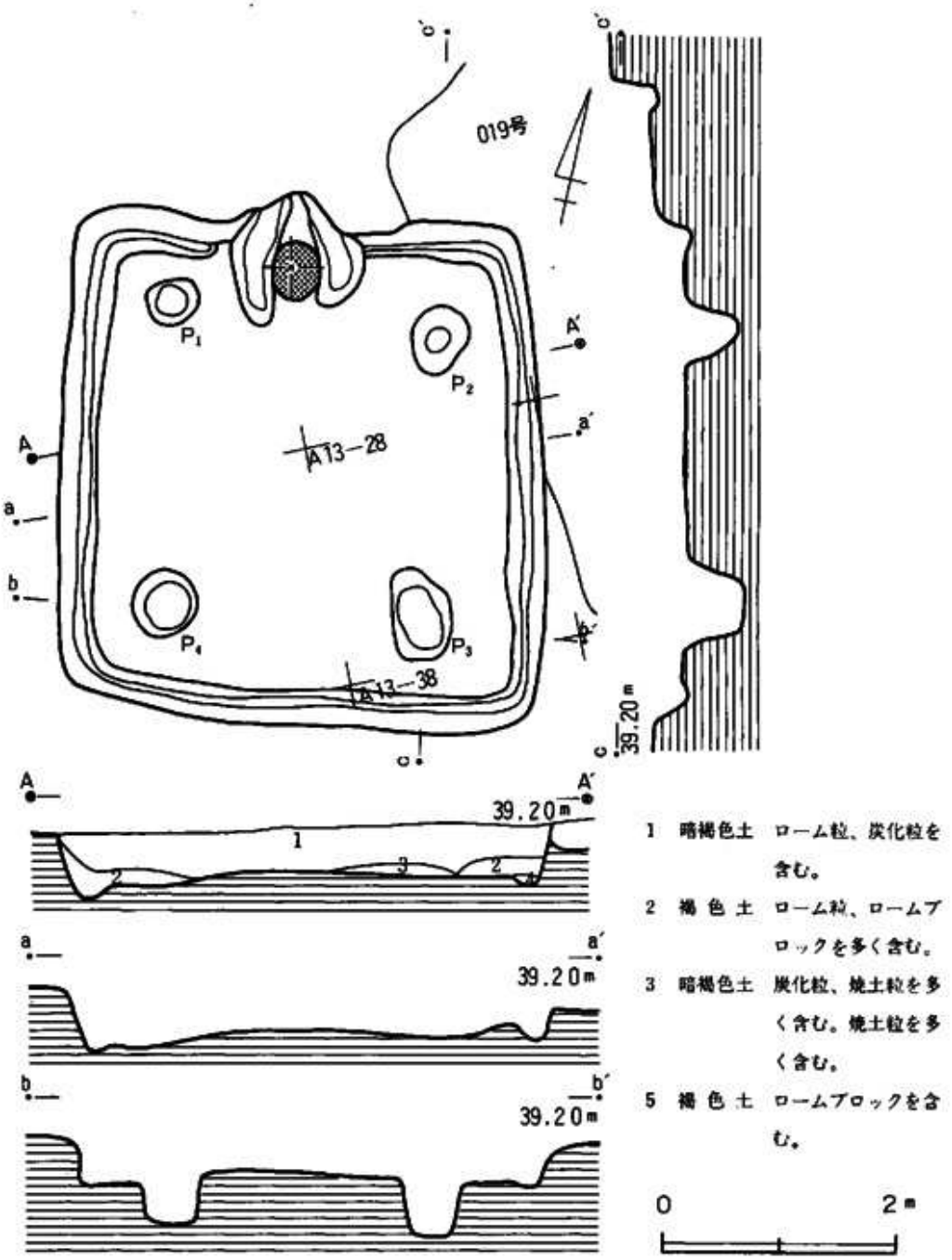
平面形は4.20×3.91mを呈する。床面積11.5m²を示す。壁は北壁下26cm、西壁下44cm、東壁下32cmの掘り込みがみられ、床面状態は凹凸状を示す。壁溝幅は16～24cm、深さ8cmを測る。緩やかな掘り込みを示す。カマドは、北壁中央部に構築され、残存状態は良好。壁面を70cm、奥行き35cm掘り込む。壁面に、緩やかな掘り込みを示す。煙道部内には焼土粒、焼土ブロックを多く含み、カマド内を赤変している。燃焼部は広く、器掛部の位置には、焼土の堆積がみられる。袖部は、住居内に94cm程延びる。構築状況は良く、煙出口、器掛部が推定できる。カマド内土層は8層に区分でき、第8層は焼土層で6cm程の厚さを示す。



第54図　029号住居跡実測図（1/60）



第55図　029号住居跡カマド実測図（1/40）



第56図　030号住居跡実測図 (1/60)

第57図030号住居跡カマド実測図（1/40）

第5層には焼土粒及び焼土ブロックが12cm程堆積しており、器掛部からの流入土である。遺物の出土は細片が多く、図示し得るものはなかった。

031号住居跡（第58、59図・図版19）

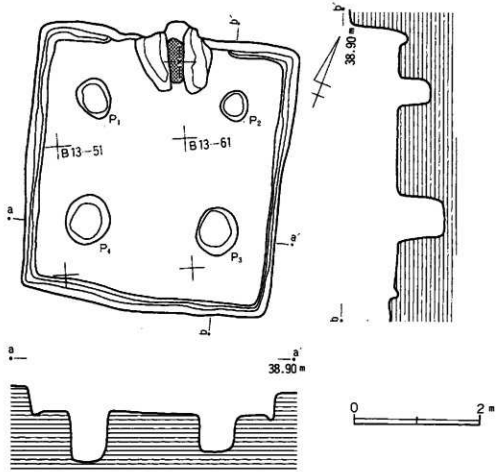
調査区最南端部の傾斜地に位置する。B13－51グリッドに位置し、主軸方向はN－16°－Wを指す。覆土は、単一層による暗褐色土が堆積していた。平面形は、4.28×4.15mの隅丸方形を示し、床面積は14.9㎡を示す。壁は北壁72cm、南壁6cm、西壁38cm、東壁34cmの傾斜状を示す。壁溝は幅6～16cm、深さ10cmを測る。ほぼ全周する。

柱穴は対角線上に位置し、楕円形の掘り込みを示す。P_1～P_4とする。P_1長径65cm、深さ38cm、P_2は48cm、深さ47cm、P_3は76cm、深さ70cm、P_4は78cm、深さ78cm掘り込む。柱穴内の覆土は暗褐色土が堆積している。カマドは北壁中央部に位置し、壁面に48cm、奥行き25cm掘り込んでいる。煙道部内から火床部にかけて緩やかに傾斜している。カマド内には燃焼部が拡がり、焼土が堆積する。カマド内土層は、5層に区分できる。僅かに焼土が堆積するのみで崩れ気味である。底部に焼土粒が堆積していた。遺物の出土量は僅かである。

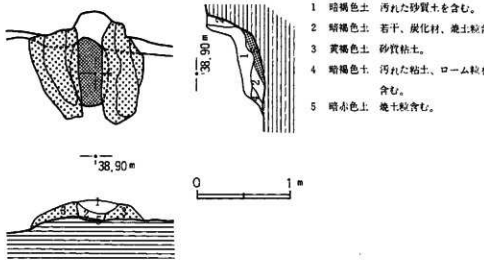
032号住居跡（第60、61図・図版18）

調査区域南側028号住居跡を検出中、A12－88グリッドから本住居跡を確認した。主軸方向はN－20°－Wを指す。覆土は一部撹乱が入るが、中央部でレンズ状の堆積がみられた。

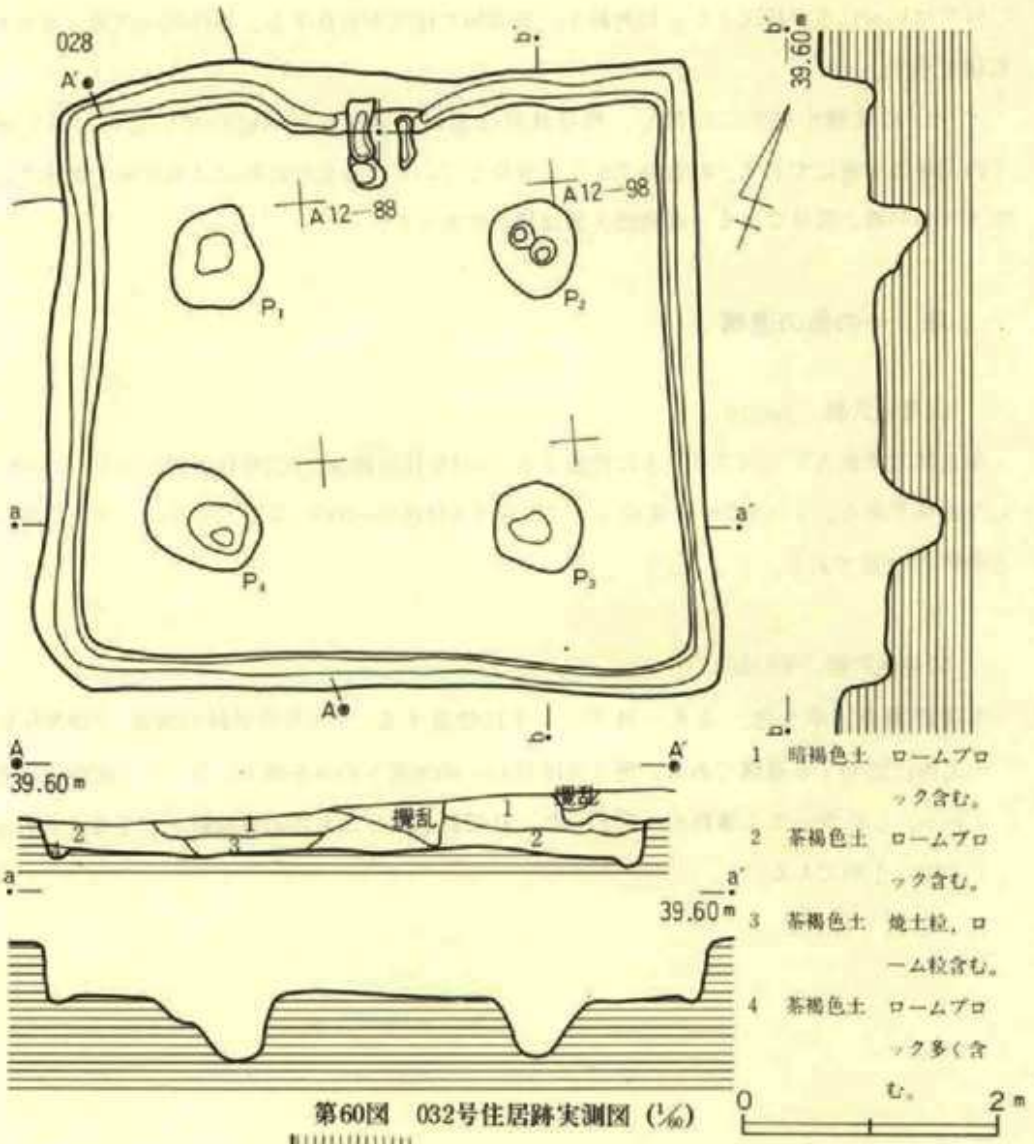
平面形は5.38×4.70mの隅丸方形を呈し、床面積は19.1㎡を測る。壁高は北壁下52cm、西壁下44cm。南壁下2.cmを測る。壁溝の幅はやや変形を見せるが10～22cmを測り、深さ6cm。ほぼ全周している。



第58図　031号住居跡実測図（1/60）



第59図　031号住居跡カマド実測図（1/40）



第60図　032号住居跡実測図（1/60）

第61図　032号住居跡カマド実測図（1/40）

柱穴はP_1～P_4を主柱穴とし、対角線上に等間隔で柱穴が存在する。長径85cm内外・深さ43cm前後を示す。

カマドは北壁中央部に位置し、残存状況は悪い。袖部が70cm延びているのに対しカマド内土層は4層にすぎず、砂質粘土が主に堆積している。袖部の前部には火床部も検出され、25×16cmの焼土部分である。遺物出土量は僅かであった。

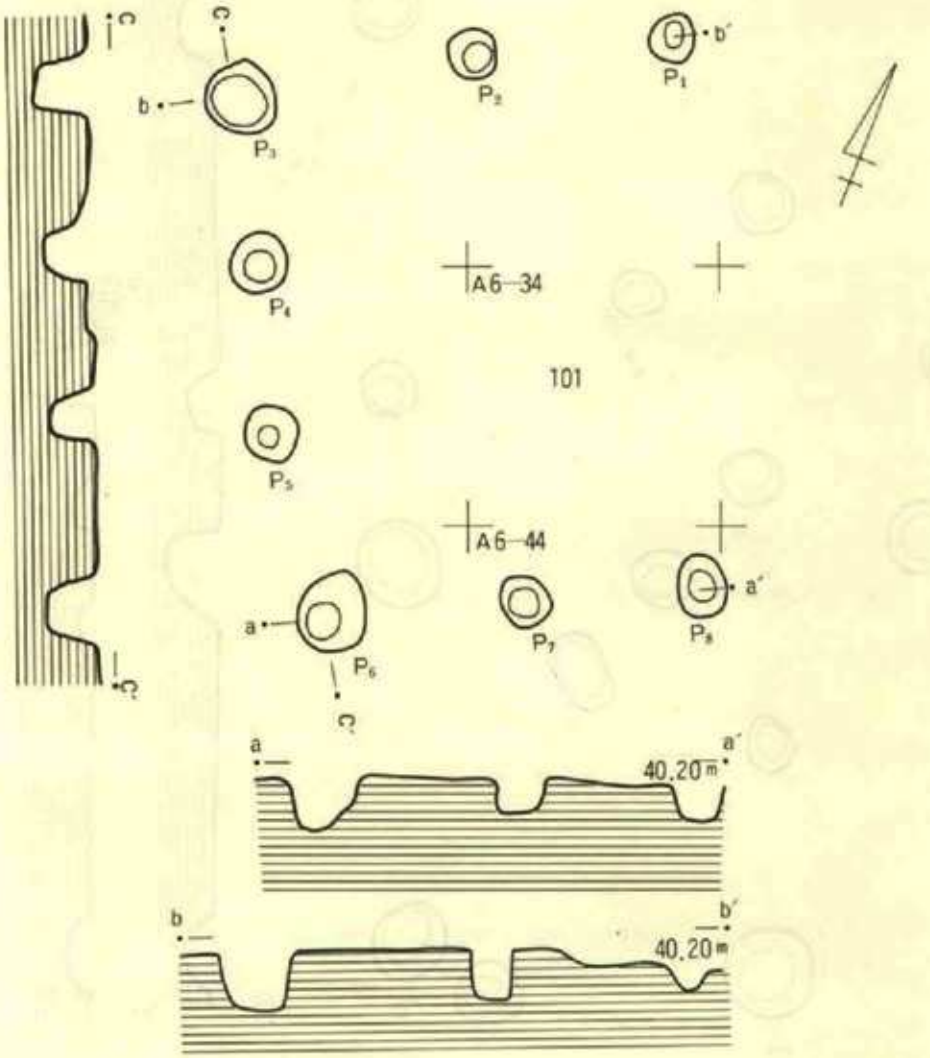
2項　その他の遺構

101号柱穴群（第62図）

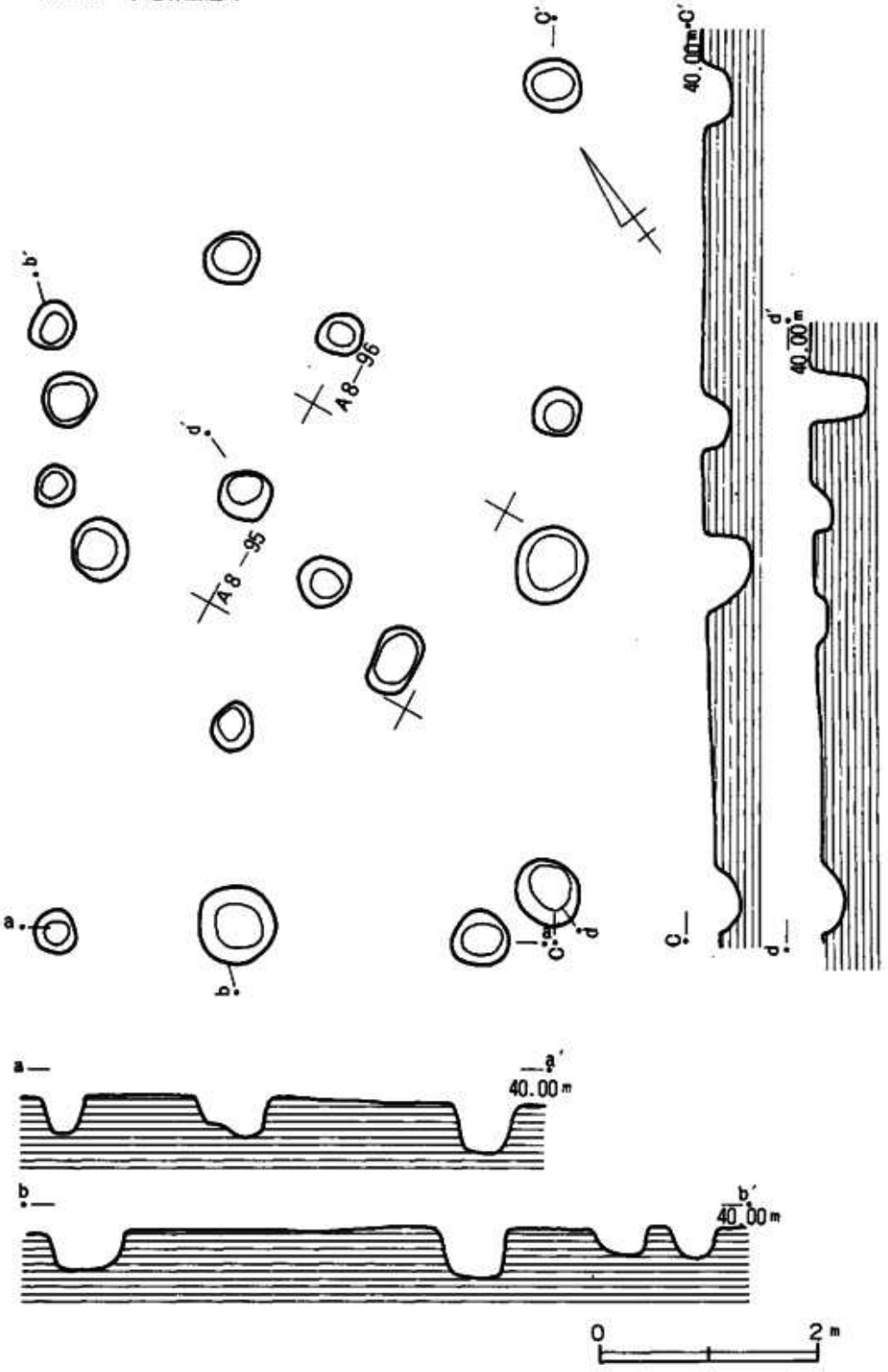
本遺跡北東側A6－34グリッドに位置する。001号住居跡及び002号住居跡に近接して検出された遺構である。4×3.5mの規模をもち、掘り方は径30～70cm、深さ35～60cmを測る。掘立柱建物跡の一部である。

102号柱穴群（第63図）

本遺跡調査区中央部、A8－94グリッドに位置する。006号住居跡の南側、019号住居跡の北側に隣接する遺構である。掘り方は径40～60cm深さ40cmを測り、ピットの配列は不揃いである。したがって土壙群の一部とした。柱穴群とはしたものの建物跡として考えられるかどうかは不明である。



第62図　101号柱穴群実測図(1／60)



第63図　102号柱穴群実測図(1/60)

第4節　遺　　物

1項　遺構出土土器

縄文土器

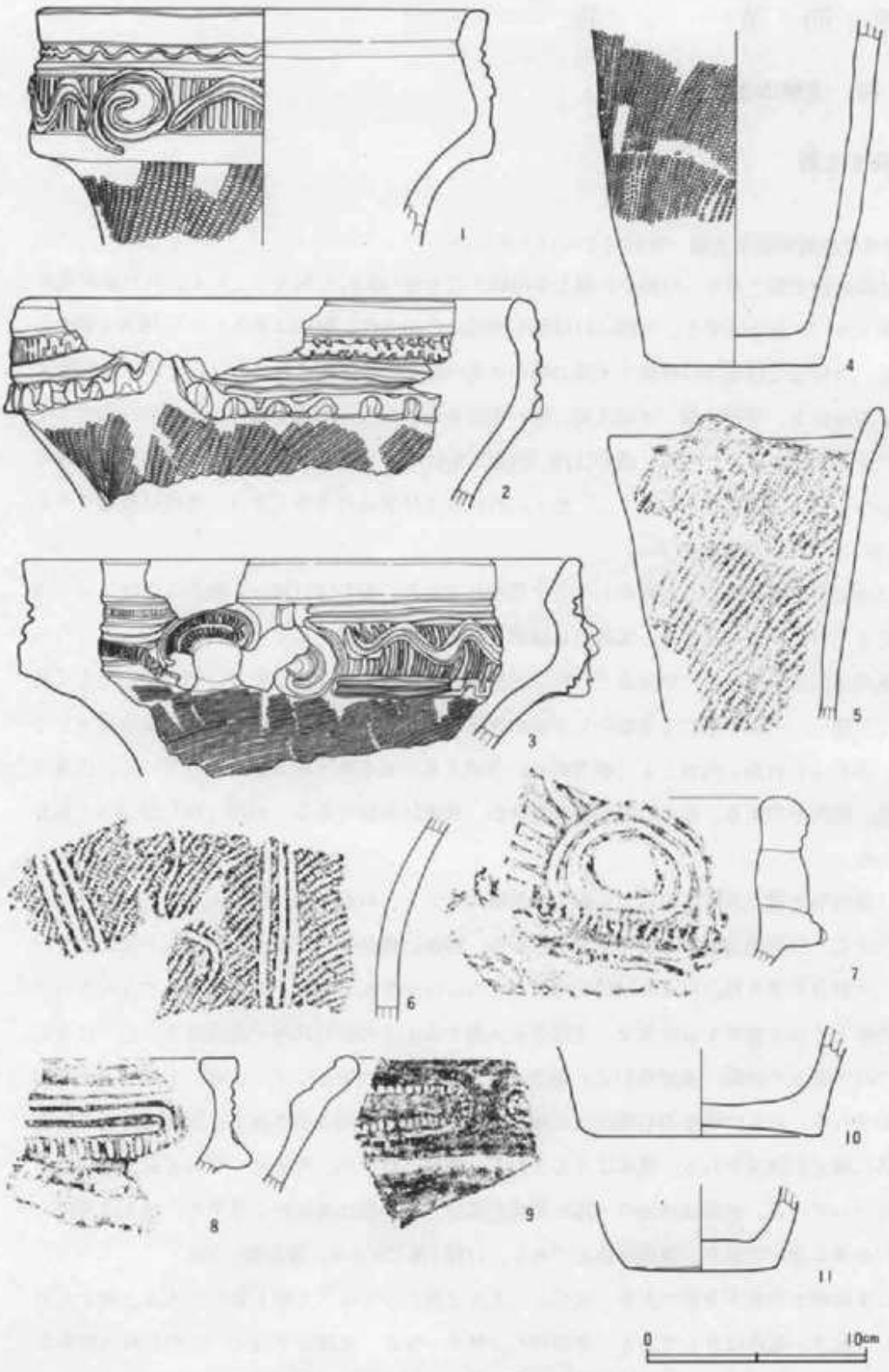
009号住居跡出土土器（第64図1～11・図版20）

1は深鉢形土器である。口縁から胴上半部破片で全体の約¼を欠失している。口唇部が肥厚したキャリパー状を呈する。文様は口縁部と胴部に分けられ、胴部は原体ＬＲの縄文を施文している。口縁部文様帯は口唇部と下端の幅のせまい無文帯で区画されており、上部は棒状施文具による波状文、平行沈線、下部は縦に細い沈線を施した後、隆帯を貼付し波状文、渦巻文を沈線によって描き出している。調整は内、外面ともに丁寧である。色調は口縁部がやや黒味を帯びるが、全体に薄茶褐色を呈する。胎土に砂粒および雲母片を多く含み、焼成は普通である。口径(推)10.4cm、現存高10.6cm。

2は深鉢形土器である。口縁から胴上半部破片である。器形は口縁から胴部にかけて弱く内弯するキャリパー状を呈する。文様は口縁部下端の隆帯に押捺を加えた波縄文によって、口縁部と胴部を区画している。口縁直下に断面が角張った棒状工具を上下交互に刺突することで鋸歯状文を施し、その下端に1本ないし2本の沈線がめぐる。胴部は原体ＬＲの縄文を施文している。調整は口唇部、内面ともに横方向のヘラ状工具によるナデを入念に行っている。色調は暗褐色、褐色を呈する。胎土は若干砂粒を含む。焼成は良好である。口径（推）23.2cm、現存高9.2cm。

3は深鉢形土器である。口縁から胴上半部破片である。口縁下端で強く屈曲するキャリパー状を呈する。口唇部は幅のせまい無文帯となる。側面に橋状把手をもつが、約¾を欠失している。この橋状把手を境にして口縁部文様帯が左右に区分されている。把手の右側では縦方向の細い沈線とそれを横断する波状文、文様帯を区画する上下の平行沈線と鋸歯状文が施される。左側では沈線とその間に連続爪形文が施される。また把手の側面は平行沈線、上面は連続爪形文が施される。さらに把手の右端には沈線によって渦巻文が描き出されている様である。胴部は全体に縄文が施文される。原体はＲＬである。調整は口唇部、内面をヘラ状工具によって丁寧に行なっている。色調は外面の一部が黒味を帯び、その他は茶褐色を呈する。胎土は砂粒、雲母片を多く含んでおり、焼成は良好である。口径(推)25.4cm、現存高9.6cm。

4は深鉢形土器胴下半部である。底部から上方に向かってゆるく開く器形である。縄文を地文としており、原体はＲＬである。底部付近は無文となる。底部は平底で、底面に網代痕のような文様が残っているが、磨滅のため判然としない。調整はヘラ状工具により丁寧に行なって



第64図　009号住居跡出土土器実測・拓影図(1／3)

いる。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は普通。底径8.2cm、現存高15.05cm。

5は鉢形土器の口縁から胴部破片である。口縁部は弱く外反し、山形の小突起を有する。文様は器面全体に縄文が施されており、原体はRLである。内面はヘラ状工具により丁寧に調整を受けている。色調は外面が茶褐色、内面が黒褐色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含む。焼成は普通である。口径(推)12.6cm、現存高13.7cm。

6は深鉢形土器胴部破片である。縄文を地文として3本一単位の沈線間に蛇行した沈線を垂下させている。原体はRLである。

7は口縁部把手の破片。外周にヘラ状工具による大きな刻みを施し、孔の周囲に沿って竹管による渦巻状の沈線、その下端の隆帯上に細かな刻みを施している。

8はキャリパー状を呈する口縁部破片。下端に隆帯を有し、隆帯の上側に沿って7と同様の大きな刻みと沈線を施す。

9は浅鉢形土器の口縁部破片。内面に隆帯とその内側に沿って角押文を施す。隆帯はX字状に交差している。

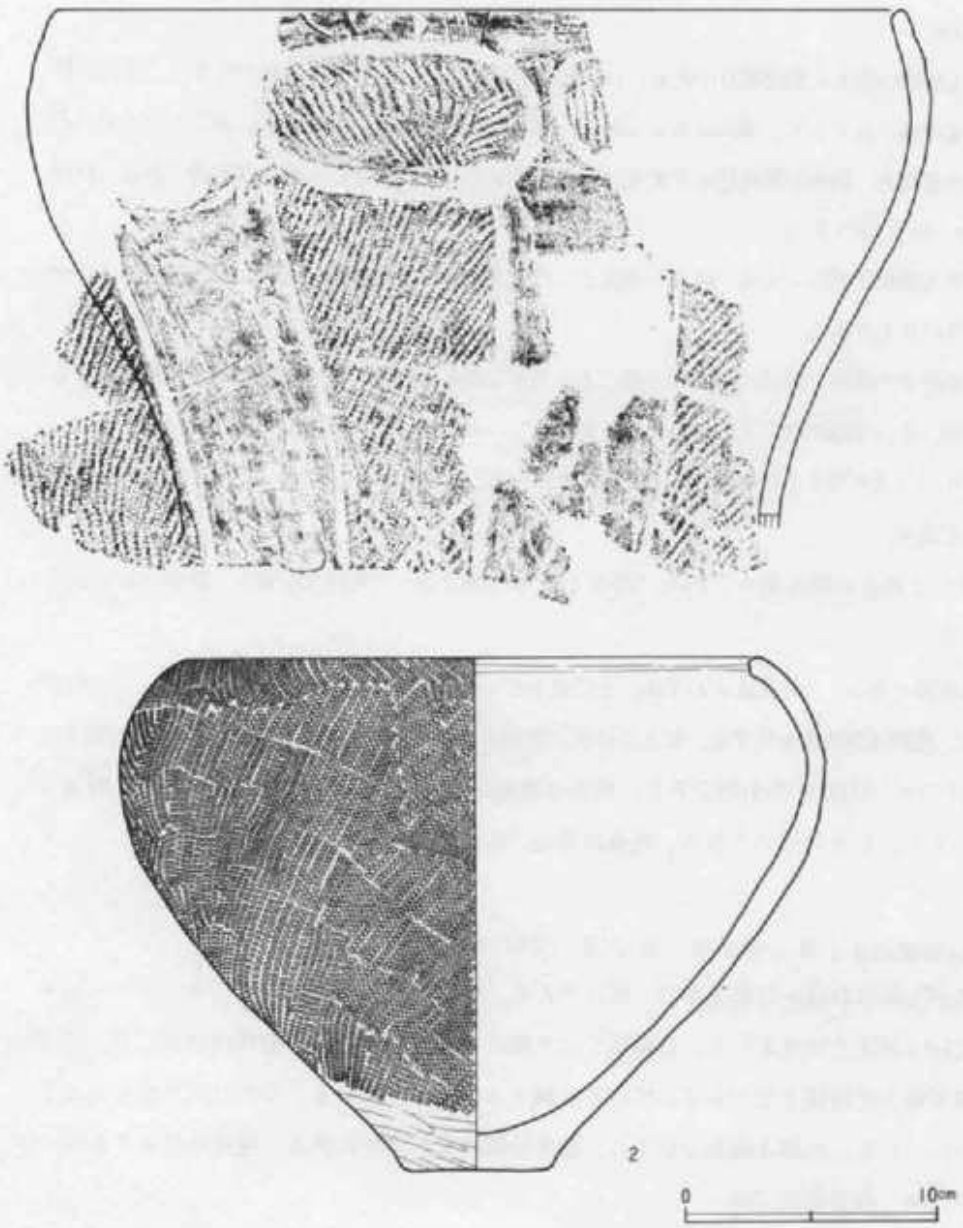
10、11は底部である。10は底面がわずかに上げ底となっている。丁寧にヘラ状工具によって調整を受けている。色調は茶褐色を呈する。胎土に砂粒、雲母片を多く含む。焼成は良好である。底径10.9cm、現存高4.9cm。11はやや小形である。内面は磨滅が著しい。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は普通。底径6.7cm、現存高3.8cm。

014号住居跡出土土器（第65図、第66図・図版21）

1は深鉢形土器の口縁から胴上半部の破片である。口縁がわずかに内弯し、キャリパー状を呈する。文様は縄文を地文として、口縁部では沈線による楕円状区画、胴部は沈線によって区画された縄文帯と磨消縄文帯が垂下している。縄文は原体RLである。器面は内外面ともに丁寧に調整されている。色調は褐色を呈する。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。口径(推)33.2cm、現存高20.7cm。

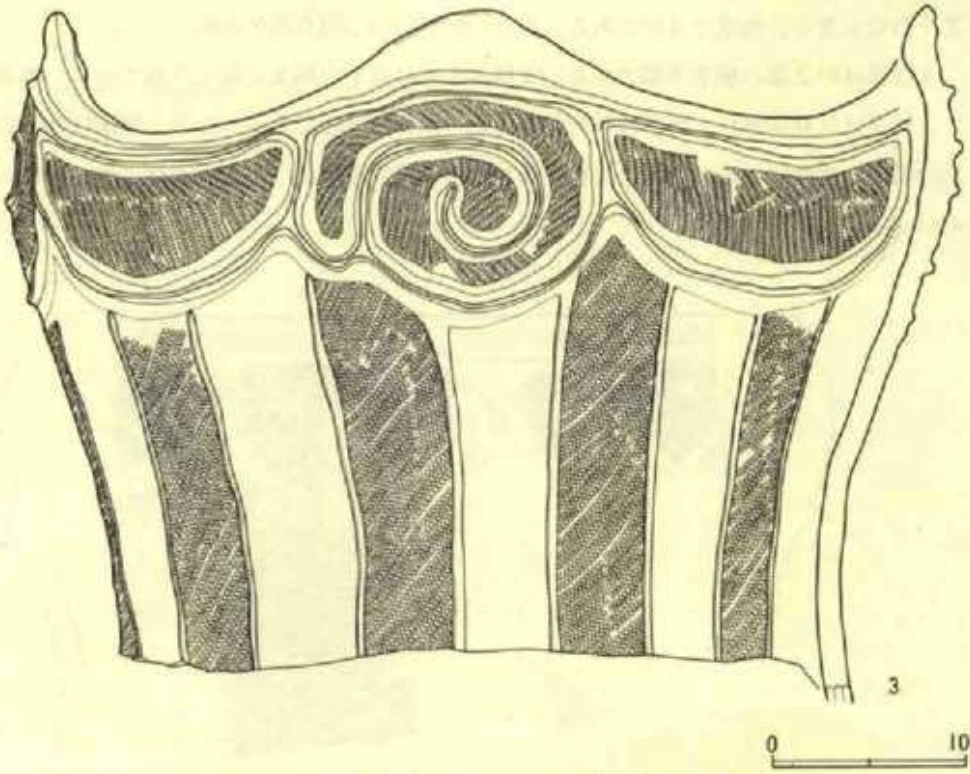
2は浅鉢形土器である。全体の約½を欠失する。口縁部は大きく内弯し、胴部上端に最大径をもつ。文様は全体に縄文を施すが、口縁部と胴部で施文方向が逆となっている。原体はLRである。底部は平底である。器面調整は、外面底部周辺及び内面をヘラ状工具により横方向に丁寧に磨いている。色調は一部黒味を帯びるが、全体に淡赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。口径22.7cm、最大径27.9cm、底径5.5cm、器高19.6cm。

3は炉体土器として利用された深鉢形土器である。胴下半部を欠失している。口縁は波状口縁で、わずかに内弯しながら胴部へと至るキャリパー状を呈する。文様は縄文を地文として低



第65図　014号住居跡出土土器実測図(1／3)

い隆帯と沈線によって口縁部と胴部に区別される。口縁部は隆帯によって4単位から成る渦巻文と窓枠状文で構成される。胴部は浅い沈線によって区画された縄文帯と磨消縄文帯が垂下する。縄文は原体ＬＲである。口唇部及び内面は丁寧にヘラ状工具による調整が施されている。色調は茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。口径45.6cm、最大径49.1cm、現存高35.9cm。



第66図　014号住居跡出土土器実測図(1／4)

018号跡（土壙）出土土器（第67図・図版21）

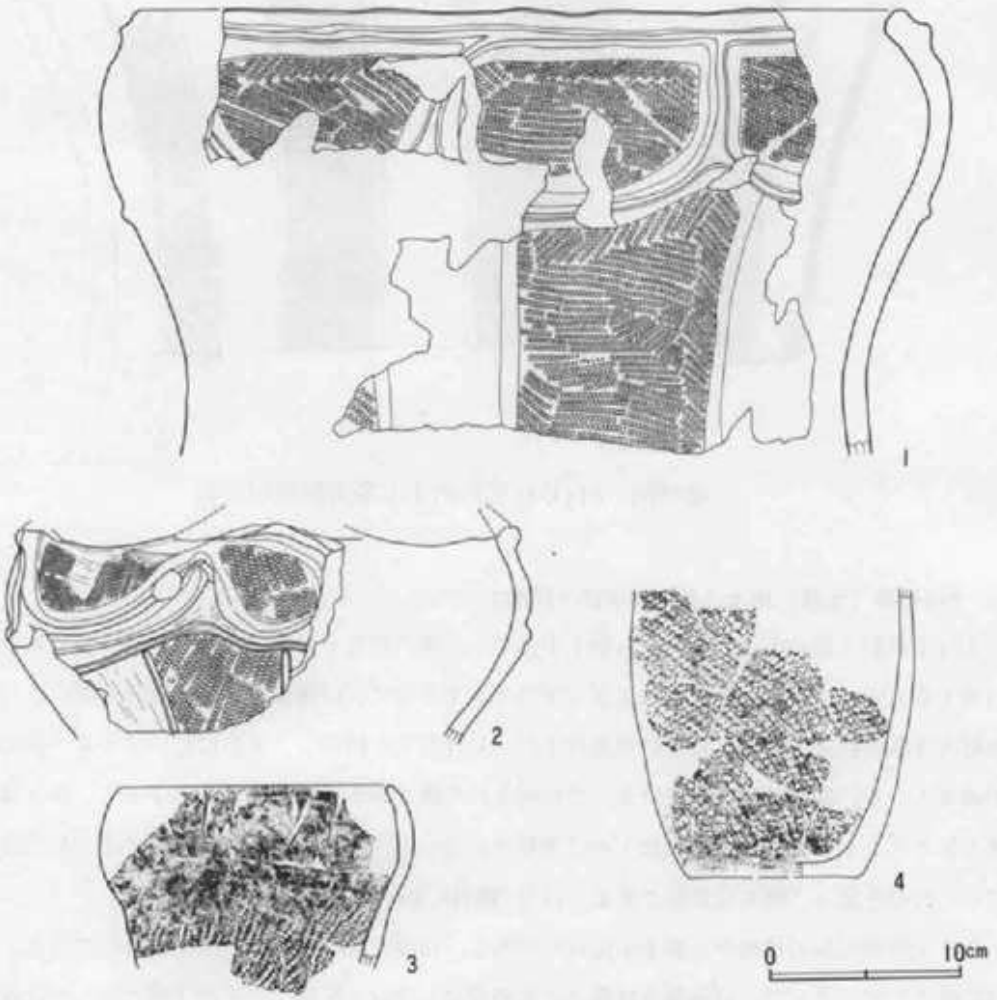
1は深鉢形土器である。口縁から胴上半部で、全体の約¾を欠失する。口縁部がゆるやかに内弯するキャリパー状を呈する。文様は縄文を地文として、口縁部をめぐる微隆起帯により、胴部と区画される。微隆起帯は口唇部直下から窓枠状文を構成し、それに沿って一定の幅で磨消縄文となる。胴部は浅い沈線によって区画された縄文帯と磨消縄文帯が垂下する。縄文は原体ＬＲである。口唇部及び内面は丁寧に調整されている。色調は淡黄褐色を呈する。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。口径(推)40.5cm、現存高22.7cm。

2は深鉢形土器の口縁から胴上半部破片である。口縁は波状口縁で、強く内弯している。文様は縄文を地文として、口縁部を隆帯による枠状文と沈線で区画し、その下端に沿って沈線が1条ないし2条周る。胴部は沈線によって区画された縄文帯と磨消縄文帯が垂下する。縄文は原体ＲＬである。調整は内、外面ともに丁寧に施される。色調は暗褐色、茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。現存高11.4cm。

3は鉢形土器の口縁部から胴上半部破片である。口縁は内弯し、胴部との境に最大径をもつ。口縁部は幅の広い無文帯となり、その下端より縄文を施す。原体はＲＬである。口縁無文帯及び内面は丁寧にヘラ状工具による調整を施されている。色調は褐色、茶褐色を呈する。胎土に

若干砂粒を含み、焼成は良好である。口径(推)13.9cm、現存高9.1cm。

4は深鉢形土器の胴下半部である。文様は全体にRLの縄文が施文されている。底部は平底で、器厚は比較的薄い。色調は外面が茶褐色、内面は黒色である。なお、内面は外面に比べ丹念に調整を受けている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。底径（推）8.8cm、現存高14.6cm。



第67図　018号跡出土土器実測・拓影図(1／4)

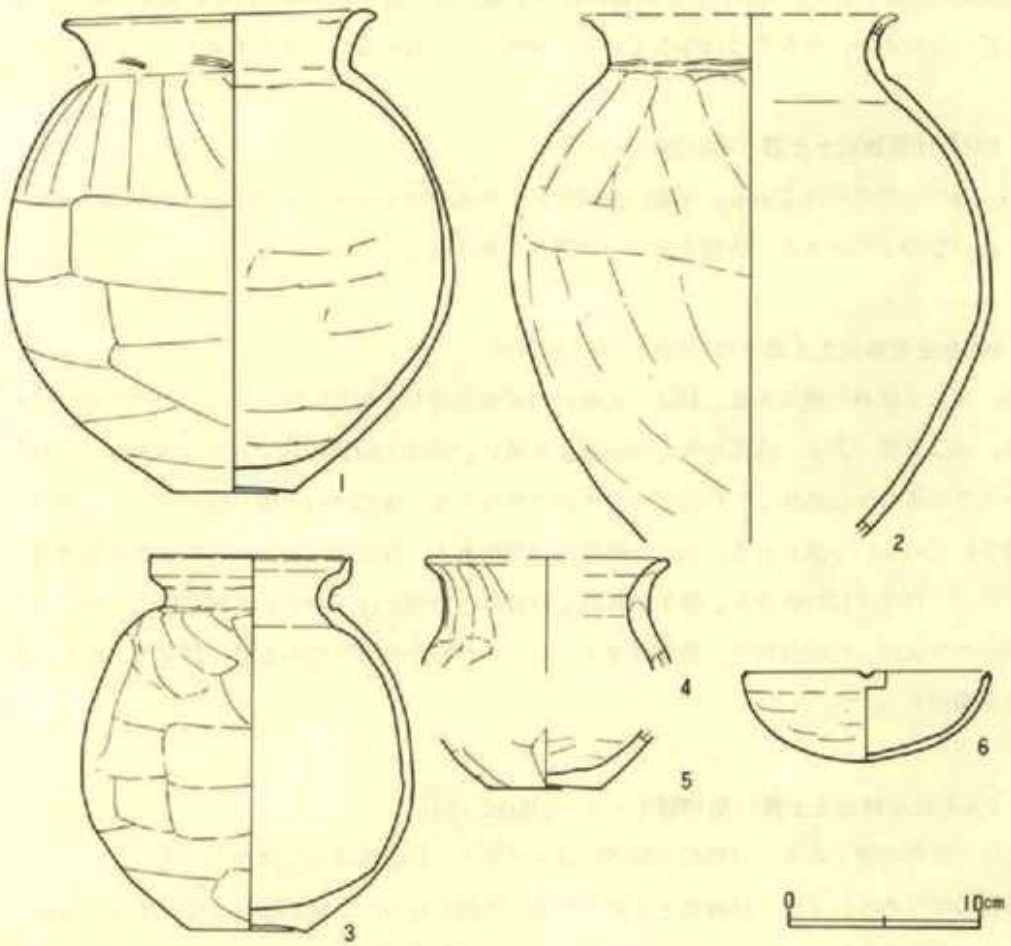
土師器、須恵器、その他

001号住居跡出土土器（第68図・図版22）

1～5は土師器の甕である。1は、ふっくらと丸味のある、やや下脹れの胴部から、口縁部が外反する。胴部最大径は中位やや下にある。口唇部は強く外反し、ほぼ水平になる。

2は、玉子形の胴部から口縁部が外反し、境に明瞭な稜をもつ。3は、丸味のある下脹れの胴部から、口縁部が直立する。口縁部と胴部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は上位で外反し、口唇部が直立して受け口状になる。口唇部は上端で外反し、やや尖り気味である。4は、胴部から口縁部が外反して立ち上がり、口唇部に至る。口唇部は丸い。口縁部にも縦方向のヘラ削りが施され、内面に明瞭な輪積痕がみられる。5は、1か2のような形の甕の底部である。

6は土師器の坏である。丸底で、底部と体部との区別はなく、ゆるやかに内弯して口縁部に至る。口唇部は丸く、棒状用具で押えたような半円形のくぼみが4か所にみられる。



第68図　001号住居跡出土土器実測図(1／4)

002号住居跡出土土器（第69図１～11・図版22）

１～６は土師器の甕である。１、２は、口縁部が受け口状になり、内面に段がある。最大径は胴部上位にあり、外面に成形用具の跡がある。２には、口縁部から胴部にかけて煮こぼれの跡がある。３は、１、２と同様に口唇部がつまみ出されているが、受け口状にならず、外反している。４は、１～３とは形が異なる。口唇部が丸く、やや厚手である。胴部はあまり張らず、長胴になると思われ、ヘラ削り痕がかなりはっきり残っている。５、６は底部である。６は外面にヘラナデが施されている。７～９は土師器の盤形の坏である。丸底に近い底部から、体部がゆるやかに立ち上がり、口縁部は直立するか、わずかに内弯する。全体にていねいなつくりである。10、11は土師器の坏である。体部がゆるやかに立ち上がり、そのまま口縁部に至る。盤と同様にていねいなつくりである。

003号住居跡出土土器（第69図12・図版22）

12は赤彩の盤である。丸底に近い底部は直立する。内外面とも赤彩されているが、器面が摩耗しているためか、かなりはげ落ちている。全体にていねいなつくりである。

004号住居跡出土土器（第69図13、14）

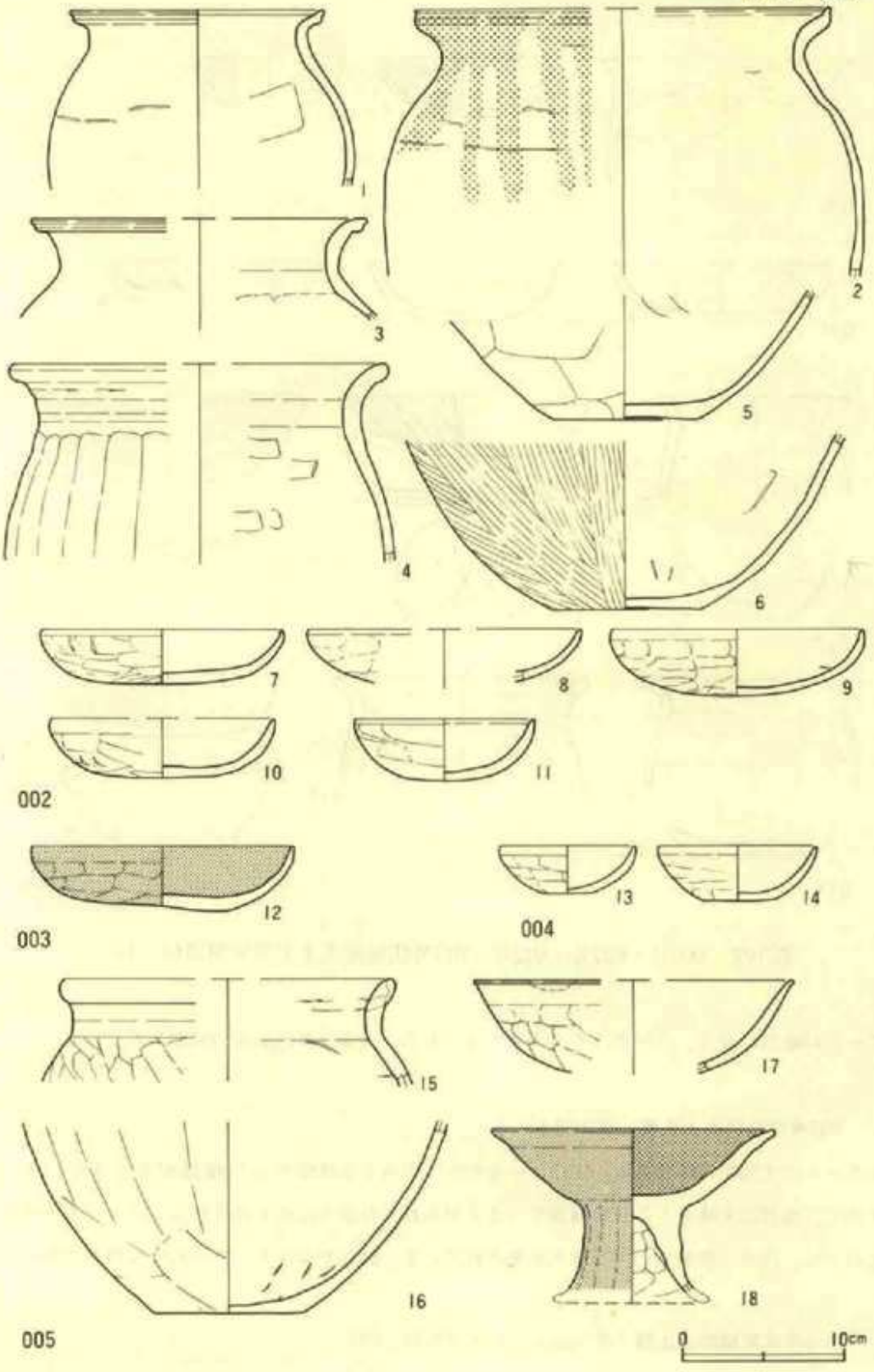
13、14は土師器の坏である。平底の底部から、体部がゆるやかに立ち上がり口縁部に至る。ていねいなつくりである。体部全面にヘラ削りが施される。

005号住居跡出土土器（第69図15～18・図版22）

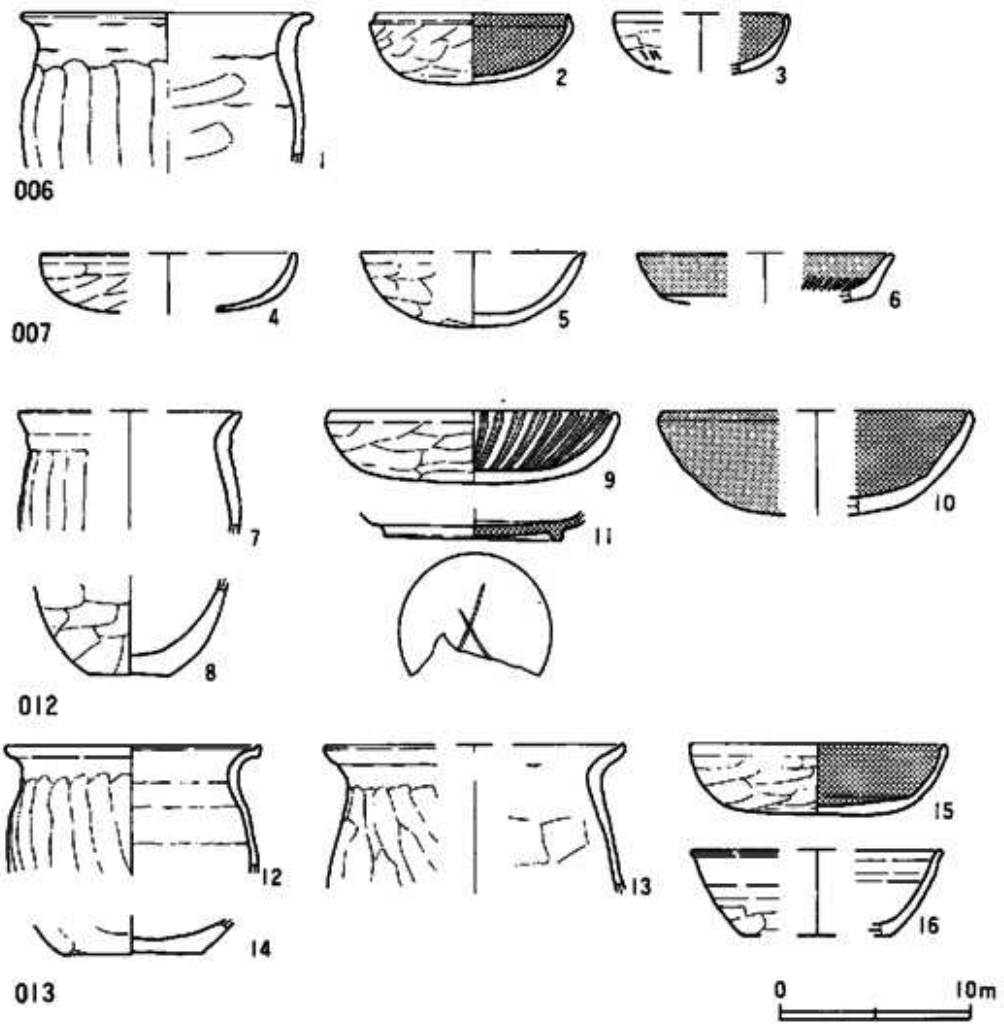
15、16は土師器の甕である。15は、丸縁の口縁部を持ち、胴部にはっきりしたヘラ削り痕がある。16は底部である。底部中央が周辺部より薄い。17は土師器の坏である。体部から口縁部にかけてゆるやかに外傾し、口唇部がわずかに外反する。体部にヘラ削り痕があり、ロクロは使用されていないと思われる。18は土師器の高坏である。外面に赤彩、坏部内面に黒色処理が施される。坏部は17に似るが、厚手で体部と口縁部との境にはっきりした稜を持つ。脚部は、裾部がやや広がった円筒形で、器壁は厚く、しっかりしたつくりである。下端を欠くため広がりは不明である。

006号住居跡出土土器（第70図１～３・図版22、23）

１は土師器の甕である。口縁部は胴部に比べて厚く、口唇部は短く外反して丸い。２、３は土師器の坏である。２は、口縁部と体部との境に受部をもつ。口縁部は短く直立する。体部はゆるやかな丸味をもち、底部との区別はない。内面に黒色処理の跡がある。３は、丸味のある体



第69図　002号・003号・004・005号住居跡出土土器実測図(1／4)



第70図　006号・007号・012号・013号住居跡出土土器実測図(1／4)

部から口縁部に至り、口唇部はやや尖り気味である。内面に黒色処理の跡がある。

007号住居跡出土土器（第70図4～6）

4～6は土師器の坏である。4は、ゆるやかに内弯する体部から口縁部が直立する。5は、丸底で、体部は丸味をもち、口縁部がつまみ出されてたように短く外反する。3は、内外面に赤彩され、内面に放射状のヘラ磨きが施されている。砂粒が少なく、ていねいな作りである。

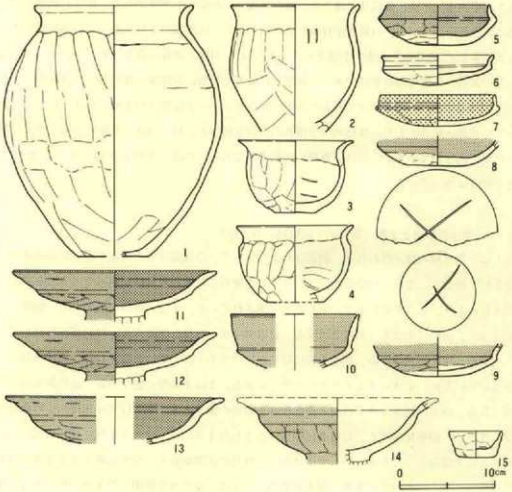
012号住居跡出土土器（第70図7～11・図版23、29）

7、8は土師器の甕である。7は、胴部があまり張らず、口縁部は短く外反する。2は、や

や厚手の底部である。9、10は土師器の坏である。9は、盤に近い形である。体部が底部からゆるやかに内弯して立ち上がる。口縁部はほぼ直立し、断面は三角形に近い。内面のヘラ磨きは中央から、放射状に施されている。やや厚手であるが、ていねいな作りである。10は、丸底で、体部は丸味をもつ。口縁部は直立し、断面は三角形に近い。内外面とも黒色処理が施される。11は、須恵器高台付坏の底部である。ヘラ記号「×」が施されている。

013号住居跡出土土器（第70図12～16・図版23）

12～14は土師器の甕である。12は、胴部はあまり張らず、口縁部がやや強く外反する。口唇部は短く立ち上がり、受け口状になる。13は、丸味のない胴部から口縁部が外反し、口唇部がわずかに受け口状になる。口縁部は厚い。15、16は土師器の坏である。15は、やや丸味のある底部から体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部は直立し、口唇部は丸い。内面に黒色処理が施される。16は、ロクロ成形の坏である。体部はわずかに内弯し、口縁部が小さく外反する。



第71図　015号住居跡出土土器実測図(1／4)

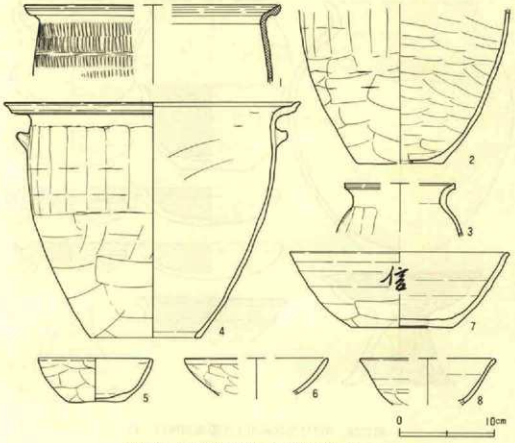
015号住居跡出土土器（第71図・図版23、29）

1、2は土師器の甕である。1は、やや丸味のある胴部から、口縁部がゆるやかに外反する。口唇部は丸い。2は、底部である。丸味があり、玉子形になると思われる。3、4は土師器の鉢で、ほぼ同形である。丸味のある胴部から口縁部が強く外反し、口唇部はやや尖り気味である。3は、外反が強く、口縁部も薄い。口縁部と胴部との境に稜があり、胴部のヘラ削り痕が明瞭に残っている。5～10は土師器の坏である。5は、赤彩の坏である。やや丸底の底部から体部が丸味をもって立ち上がる。体部と口縁部との境に稜をもち、内面にしめがみられる。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部は直立する。全体に厚手である。6は、底部と体部の区別はほとんどなく、体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立し、口唇部が外反する。底部は厚手である。7は、体部と口縁部との境が受部状になっている。底部は丸底で、体部と底部との区別はない。口縁部は直立し、わずかに内弯する。内外面とも黒色処理が施される。8、9は、赤彩の坏で、8は外面に、9は内面にヘラ記号「×」がある。8は、焼成前で、しっかりときざみ込まれている。9は、焼成後に施され、刻みが浅く、かなり不明瞭である。10は、体部と口縁部の境が受部状になり、口縁部が外傾して立ち上がる。口縁部の立ちは高く、口唇部がわずかに外反する。内外面とも赤彩が施されている。11～14は土師器の高坏である。11～13はほぼ同形である。坏部は浅い皿状であり、体部と口縁部との境に受部状の稜があり、口縁部は大きく広がっている。坏部が皿状であるためか、かなりシャープな感じがする。14は、11～13と比べてやや深い坏部をもち、体部のヘラ削りの方向も異なる。11～13は、外面に赤彩、内面に黒色処理が施されているが、14は、外面の赤彩のみである。15は、手捏ね土器である。成形の跡が明瞭に残っている。

016号住居跡出土土器（第72図・図版23、24、29）

1は、須恵器の甕と思われる。胴部はあまり張らず、口縁部は短く外反する。口縁部は折り返され、縁帯状になる。口縁部内面に、ロクロを使用した強いナデ痕が残っている。胴部にタタキ目があり、ヨコナデにより、平行にナデ消されている。4は土師器の甑である。胴部の丸味はなく、自然にすぼまって底部に至る。口縁部は強く外反し肥厚する。口唇部は外反して立ち上がり、受け口状になる。胴部上位に貼り付けの把手が2か所にある。口径、底径と比べて器高が低いため、全体にずんぐりとした感じがある。2は土師器の甕である。成形調整は2の甑に似る。内面に明瞭なナデ痕がある。3は土師器の甕である。胴部は丸味を持ち、口縁部は短く外反し、やや肥厚する。口唇部はつまみ出されたように短く立ち上がり、受け口状になる。5～8は土師器の坏である。5、6は体部と口縁部の区別がなく、やや丸味のある体部が自然に口縁部に至る。6の方が体部の開きが大きい。7は、ロクロを使用した大型の坏である。体

部外面に墨書で「信」の字が書かれている。8もロクロを使用した坏である。全体に薄手で、口縁部がやや肥厚する。

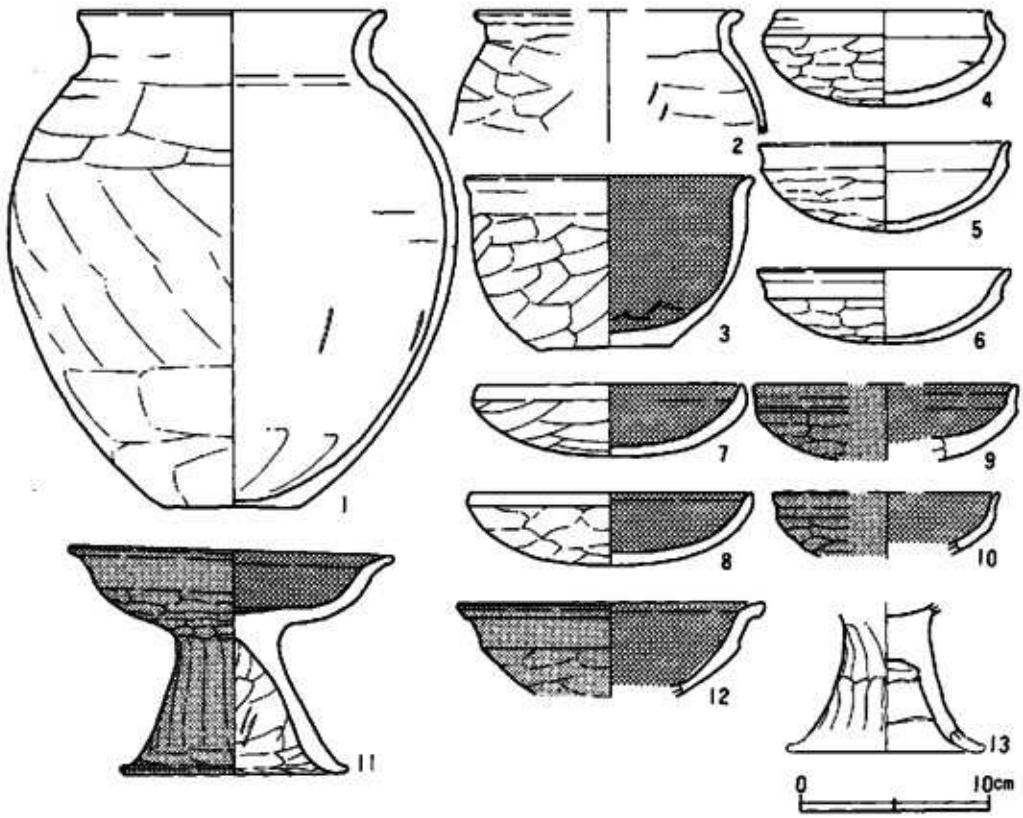


第72図　016号住居跡出土土器実測図(1／4)

017号住居跡出土土器（第73図・図版24）

1、2は土師器の甕である。1は、丸味のある玉子形の胴部から口縁部が外反して短く立ち上がり、口唇部は丸い。胴部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。2は、丸味のある胴部から口縁部が直立し、口唇部が短く外反して玉縁状になっている。3は、土師器の鉢である。丸味のある胴部から口縁部が直立し、口唇部が短く外反する。口縁部は厚くなる。ヘラ磨きはないが、黒色処理が施されたと思われる。

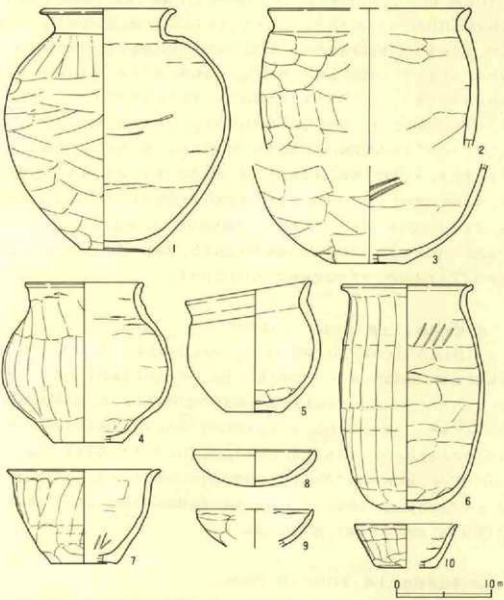
4～10は土師器の坏である。4は、丸底で底部と体部との区別はなく、体部と口縁部との境に受部状の稜を持つ。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部はほぼ直立する。全体に厚手である。5、6はほぼ同形である。丸底で中央がやや薄く、底部と体部との区別はない。体部と口縁部



第73図　017号住居跡出土土器実測図(1／4)

との境に稜をもつ。口縁部は外反する。7、8はほぼ同形である。底部と体部との区別はなく、ゆるやかな丸味を持つ。口縁部はほぼ直立し、断面は三角形に近い。7は、内面に黒色処理が施されている。9、10もほぼ同形と思われるが、9は厚手である。体部と口縁部との境に受部状の稜をもつ。口縁部はほぼ直立し、口唇部が小さく外反する。内外面とも黒色処理が施されている。

11～13は土師器の高坏である。11は、ほぼ完形である。坏部は皿状で、体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は大きく外反し、内面にはっきりした稜がある。脚部はラッパ状に開き、裾部が外反する。全体にていねいなつくりで、外面全体に赤彩、坏部内面に黒色処理が施されている。12は、坏部と思われる。やや深めの坏部で口唇部に面取り状にヨコナデが施されているのが特徴である。内外面に黒色処理が施されている。13は脚部である。坏部との接合からラッパ状に開いている。11と比べて接合部が厚い。



第74図　019号住居跡出土土器実測図(1／4)

019号住居跡出土土器（第74図・図版24、25）

1～6は土師器の甕である。1は、ふっくらとした玉子形の胴部から、口縁部が外反して立ち上がり、口唇部はほぼ水平になる。口唇部はやや尖り気味である。胴部と口縁部との境に稜をもつ。2は、やや長胴の甕と思われる。胴部はわずかに丸味をもち、胴部と口縁部との境にはっきりした稜をもつ。口縁部は、短く外反して立ち上がる。全体に厚手のつくりである。3は底部である。かなり丸味をもった甕である。4は、下脹れの甕である。胴部下位はややしま

っているが、中位から上位にかけてふっくらと丸味をもち、口縁部に至る。口縁部はしまりながら外反し、口唇部がつまみ出されたように丸くなっている。5は、鉢に近い形であるが、口縁部のしまりが大きい。胴部は丸味があり、胴部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。6は長胴の甕である。全体に砲弾形を示す。口縁部はややしまり、小さく外反する。口唇部はごくわずかであるが立ち上がり、やや受け口状になる。外面にていねいなヘラ削りが施されている。7は鉢である。底部から胴部が外傾して立ち上がり、やや内弯気味に口縁部に至る。口縁部は短く、強く外反し、口唇部はやや尖り気味である。8～10は土師器の坏である。8は、丸底の坏である。底部と体部との区別はなく、ゆるやかに内弯しながら口縁部に至る。外面全体にナデが施され、ていねいなつくりである。9も8とほぼ同形であるが、やや深めで、ヘラ削り痕が目立つ。10は、体部が直線的に開き、口縁部が小さく外反する。器形はロクロ成形の坏に似るが、体部にヘラ削りが施され、器面に接合痕が見られるため、ロクロは使われていないと思われる。

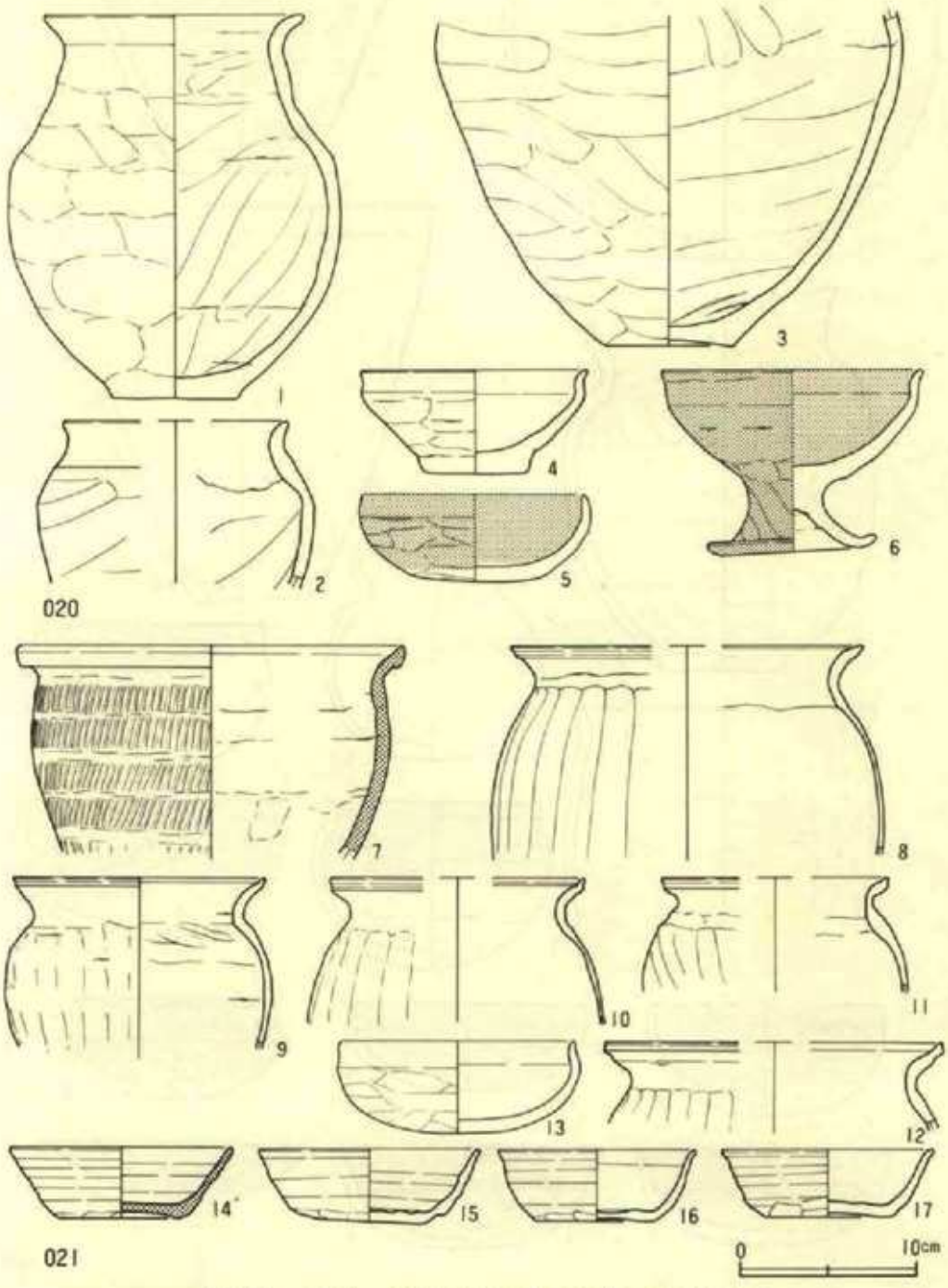
020号住居跡出土土器（第75図1～6・図版25、26）

1～3は土師器の甕である。1は、胴部下位にふっくらとした丸味をもち、上位はすぼまりながら口縁部に至る。口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。2は、やや丸味のある胴部から口縁部が短く外反して立ち上がる。口縁部のしまりはあまりなく、胴部との境に稜がある。3は、最大胴径が胴部中位にある。全面にヘラ削りが施される。4、5は土師器の坏である。4は、平底で厚手の底部から、やや丸味のある体部が広がって立ち上がる。口縁部は直立し、口唇部が小さく外反する。5は、丸味のある底部から、体部が内弯して立ち上がり、口縁部はわずかに内弯する。6は、土師器の高坏である。やや深めの坏部に小さな脚部がつく。坏部は、丸味のある体部から口縁部が直立し、口唇部が小さく外反する。脚部は大きく開き、裾部が反り返る。

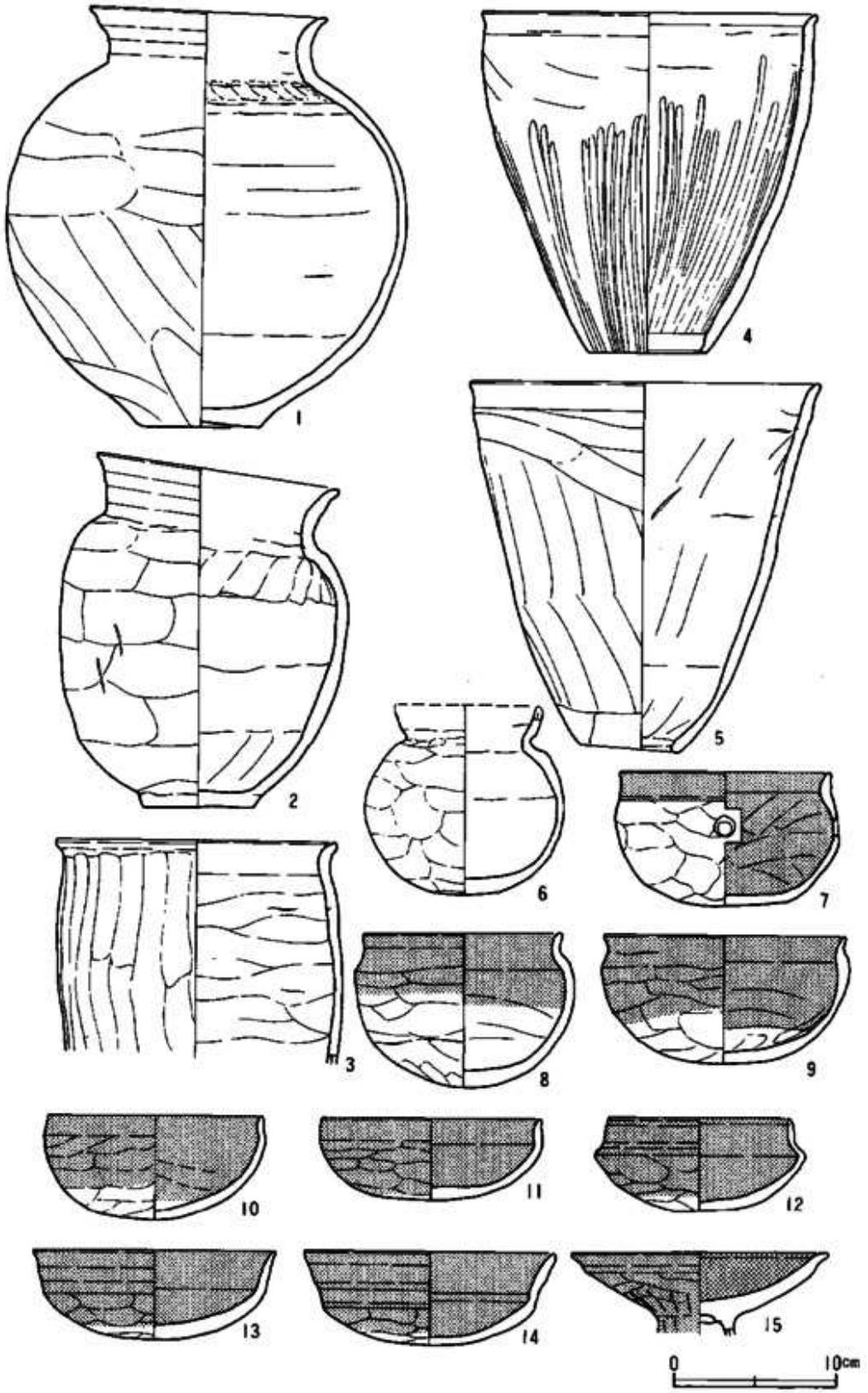
021号住居跡出土土器（第75図7～17・図版26）

7は、須恵器の甕である。やや丸味のある胴部から口縁部が短く外反する。口唇部は折り返され、縁帯状で、やや受け口になる。口縁部のしまりはない。胴部にタタキ目があり、平行にヨコナデが施される。8～12は土師器の甕である。胴部の成形、調整はほとんど同じで、口縁部がやや肥厚する。8は、外反した口縁部から、口唇部がつまみ出されたように強く外反し、受け口状になる。9も、口唇部がつまみ出されたように外反する。10、11は口唇部が直立して受け口状になる。11は、口縁部のしまりが強く、境の部分が肥厚している。12は、口唇部にしめがあり、断面が三角形状になる。13は、土師器の坏である。丸底で、ゆるやかに丸味のある体部から、口縁部がやや内弯して立ち上がり、口唇部は直立する。14は、須恵器の坏である。底

部から体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。強いロクロ痕がある。15～17は土師器の坏で、ほぼ同形である。15は、体部がやや直線的で、胴部と体部との境にしめがある。15、17には、強いロクロ痕がある。13は、他の遺構からの混入と思われる。



第75図　020号・021号住居跡出土土器実測図(1／4)



第76図　024号住居跡出土土器実測図(1／4)

024号住居跡出土土器（第76図・図版26～28）

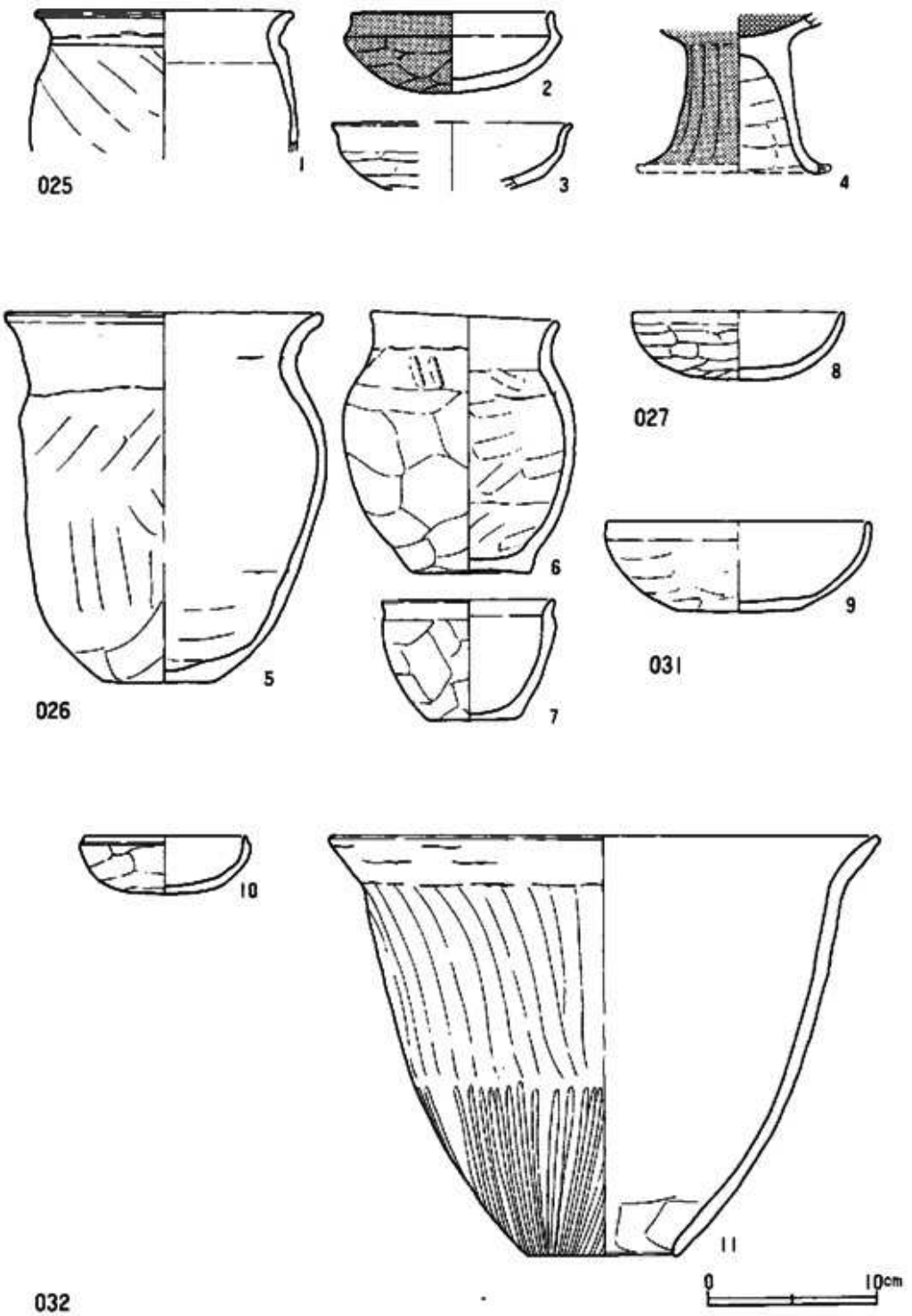
1～3は土師器の甕である。1は、球形に近い胴部から口縁部が強く外反して立ち上がり、口唇部はやや尖り気味である。2は、肩の張った、やや長胴の甕である。口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部が外反する。胴部と底部との境に明瞭な段がある。3は、長胴の甕と思われる。丸味のない胴部から口縁部が短く外反する。口唇部がわずかに立ち上がり、受け口状になる。4、5は土師器の甑である。深鉢形で、直線的な胴部から口縁部が短く外反する。4は、胴部上位が内弯し、やや受け口状である。6は、土師器の壺である。球形で丸底の胴部から、口縁部が外傾して立ち上がり、やや受け口状になると思われる。7～9は、土師器の坏である。やや深めで鉢に近い。赤彩が施され、丸底で、半球形の体部からの口縁部が短く外反する。胴部と口縁部との境に稜がある。8は、やや底が深い。7は、口縁部が肥厚し、焼成前に体部が穿孔されている。9は、体部上位が肥厚している。10～14は土師器の坏で、すべて赤彩が施されている。10は、やや深めの丸底で、底部と体部の区別はない。内弯した丸味のある体部から口縁部がほぼ直立し、口唇部がわずかに外反する。11も10と同様であるが、やや浅く、平底に近い丸底である。12は、体部と口縁部との境に受部状の稜をもつ。口縁部が内傾し、口唇部は内弯する。13、14は、体部と口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。13の口唇部はやや尖り気味である。14は、口縁部下位の内面にしめがあり、口唇部は丸い。15は、土師器の高坏の坏部である。浅い皿状で、体部と口縁部との境に段があり、口縁部が強く、短く外反する。外面に赤彩、内面に黒色処理が施されている。

025号住居跡出土土器（第77図1～4・図版28）

1は土師器の甕である。やや長胴と思われる。胴部と口縁部との境に稜があり、口縁部が短く外反する。口縁部はやや肥厚している。2、3は土師器の坏である。丸底で口縁部と体部との境に稜をもつ。2は、受部状の稜から、口縁部が内傾して立ち上がり、口唇部はほぼ直立して、丸味がある。3は、口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部は小さく外反する。2は、外面に赤彩が施されている。4は、土師器の高坏の脚部である。円筒形に近く、裾部でやや大きく広がる。外面に赤彩、内面に黒色処理が施されている。

026号住居跡出土土器（第77図5～7・図版28、29）

5、6は土師器の甕である。5は、肩が張り、やや長胴である。口縁部は大きく外反し、口唇部は丸い。6もやや厚手で、丸味のある胴部から口縁部が直立する。口唇部は小さく外反し、丸味をもつ。7は、土師器の鉢である。底部から胴部が外傾して立ち上がる。胴部は開きながら口縁部に至り、口縁部との境に段をもつ。口縁部は外傾して短く立ち上がり、口唇部は丸い。



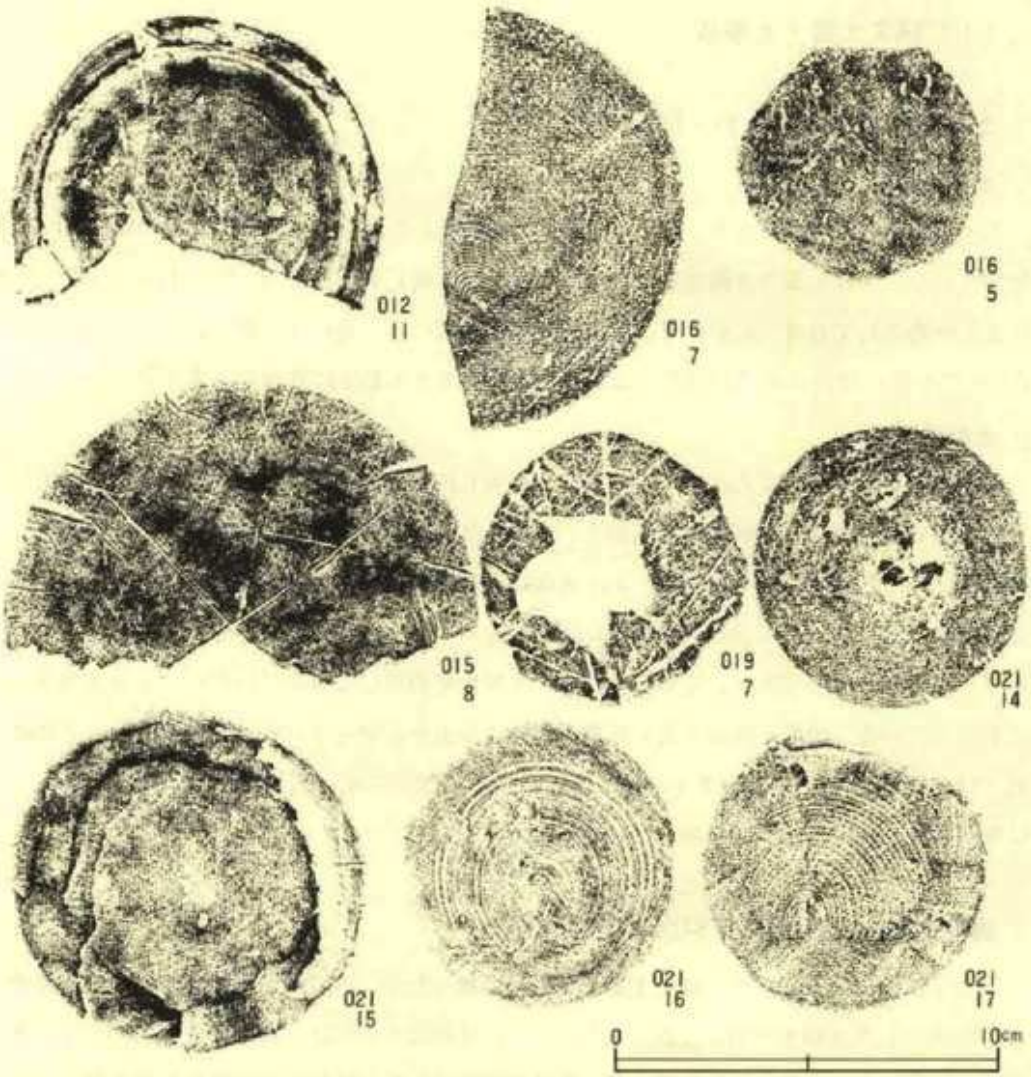
第77図　025号・026号・027号・031号・032号住居跡出土土器実測図(1／4)

027号住居跡出土土器（第77図8・図版29）

8は土師器の坏である。丸底で底部と体部との区別はない。体部はゆるやかに内弯して口縁部に至り、口縁部はほぼ直立する。

031号住居跡出土土器（第77図・図版29）

9は土師器の坏である。やや丸底の底部から、体部がゆるやかに内弯して立ち上がる。体部は丸味があり、口縁部はほぼ直立する。全体に薄く、ていねいなつくりである。



第78図　出土土器拓影図(1／2)

032号住居跡出土土器（第77図10、11・図版29）

10は、土師器の坏である。丸底で底部と体部との区別はなく、丸味のある体部から口縁部が短く直立する。体部と口縁部との境が受部状になる。やや小さな坏であるが、ていねいに作られている。11は、土師器の甑である。深鉢形で口径が大きく、ややずんぐりした形である。ゆるやかな丸味のある胴部から口縁部が、大きく開いて立ち上がり、口唇部は丸いが、やや薄くなっている。

2項　その他の出土遺物

（1）縄文土器・土製品

土製品（第79図1～10・図版35）

土器片錘

出土した点数は2点である。両方とも009号住居跡より出土している。土器の胴部破片を利用しており、2は土器片を横位置に使っている。1は縦4.2cm、2.8cm、厚さ1cmである。周囲はよく研磨されており、完形。2は、約½を欠失している。現存は、縦5.5cm、横6.1cm、厚さ1.1cmである。研磨の程度は良好とはいえない。双方とも胎土に雲母片を多く含んでいる。

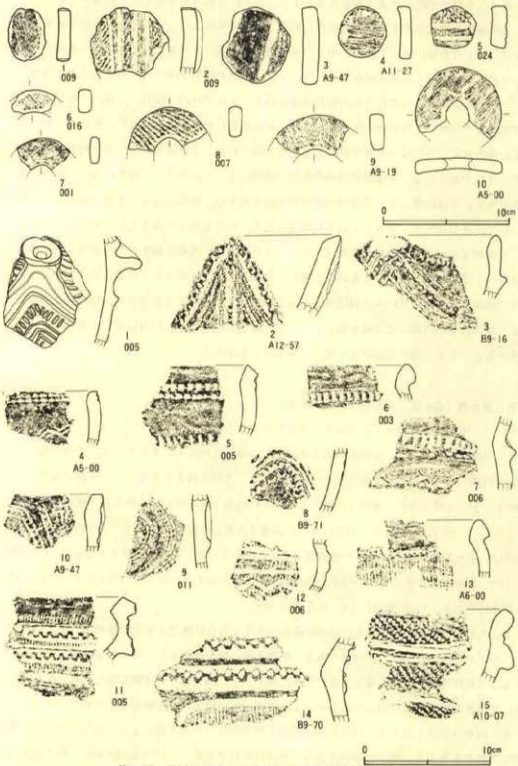
土製円板

出土した点数は8点である。このうち5点が有孔円板である。3～5は土器破片を利用して作っている。周囲はよく研磨されており、4、5は裏面まで研磨している。3は一部を欠く。径6.1×5.3cm、厚さ1.2cmである。4は表面に条線文が認められる。径4.0×3.9cm、厚さ0.9cmである。5は径3.5×3.3cm、厚さ1.1cmである。

6～10は有孔円板である。完形品はない。土器片を利用して作っているが、9は文様をうまく利用している。周囲と裏面を良く研磨し、孔は両面から穿っている。孔の周囲もよく研磨されている。6は幅1.7cm、厚さ1cm。7は幅2.1cm、厚さ0.7cm。8は幅2.4cm、厚さ1.1cm。9は幅2.6cm、厚さ1.1cm。10は幅2.7cm、厚さ1cmである。

縄文土器（第79図～第84図・図版30～35）

ここでは、グリッド出土の縄文土器を主として扱ったが、古墳時代、歴史時代の住居跡覆土中より出土した土器も一括して扱うことにした。分類については、器形の詳細が不明な土器が多い為、主となる文様によって第I群～第V群に区分した。時期は縄文時代中期中葉阿玉台式から晩期初頭安行III式に至る各時期にわたっている。なお各群については、さらに細分される要素を含んでいるが、資料の制約から、大雑把な区分に抑えた。



第79図　土製品・グリッド出土土器拓影図(1)(1／3)

第I群土器（第79図1～15・図版30）

本群は、中期中葉阿玉台式土器を主体とする。胎土に雲母片を含むものを特徴とする。

1は吸盤状の突起を有する口縁部破片。断面三角形の隆帯に沿って角押文と沈線を施す。2は波状口縁。口唇部に沿った隆帯と中央の紐状突起の上端にヘラ状工具による刻みを施し、さらにその内側に沿って結節沈線が施される。3は口縁部と隆帯上端にヘラ状工具による刻みを施し、隆帯の両側にそれぞれ2列の結節沈線を施す。4は平縁の口縁部。口縁に平行して2条の結節沈線と波状の平行沈線が施される。5、6は肥厚した平縁の口縁部で、幅広の2列の角押文が施される。5にはヘラ状工具による刻みが施される。7は隆帯に沿って2列の角押文と波状の沈線が施される。8は波状口縁の基部。隆帯によって区画され、隆帯に沿って2列の角押文を施す。9は隆帯によって楕円の窓枠状区画を有する。隆帯に沿って3条の結節沈線を施す。10は波状口縁破片。沈線と2列の角押文を施す。11は条線文を地文とし、肥厚した口縁直下に三角押文を施す。12は縄文を地文として、平行、波状に沈線を施す。13は肥厚した口縁部と隆帯の上端にヘラ状工具による刻みを施し、隆帯によって区画された内側に棒状工具による2段の鋸歯状文を施している。14は隆帯を境として棒状工具により鋸歯状文、楕円状文が施される。楕円状文の内側には条線が施される。15は縄文を地文とし、口縁に平行する隆帯に沿って棒状工具による沈線と結節沈線を施す。縄文はＲＬである。

第II群土器（第80図～第83図・図版31～33）

本群は、中期後半加曽利Ｅ式土器を一括したものである。

1は深鉢形土器である。口縁から胴上半部で、口縁部は約3/5を欠失している。口縁が弱く内弯し、胴部へと緩やかに至るキャリパー状を呈する。文様は縄文を地文として、微隆起帯と磨消縄文によって構成され、胴部まで及んでいる。口縁部下端の幅の広い無文帯で胴部とを区画しており、口縁部は窓枠状文、胴部は中央に渦巻文を配した枠状文を全体に4単位施している。枠内はいずれも微隆起帯に沿って磨消縄文手法を用いている。縄文は原体ＲＬである。器面調整は内、外面とも丁寧に施している。色調は淡赤褐色を呈する。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。口径(推)51.2cm、現存高25.9cm。

2は大型の深鉢形土器である。口縁は隆起の大きな波状口縁で4単位で構成される。口唇部は内傾ぎみに僅かに外反し、肉厚である。胴部上端に最大径を有し、緩やかな曲線で下位へと至る。文様は沈線を口縁下端より逆Ｕ字状に垂下させ、縄文帯と磨消縄文帯を交互に配している。文様帯の幅は、ほぼ同じであるが、1か所幅の広い縄文帯に沈線を垂下させている部分がある。調整は胴部を縦方向、口唇部及び内面を横方向にヘラ状工具によって行なっている。色調は茶褐色を呈する。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。口径(推)57.6cm、最大径59.4cm、現存高71.2cm。

3～9は縄文を地文として隆帯及び沈線によって渦巻文、窓枠状文を区画構成する土器である。3～5は隆帯が大きく突出し、隆帯に沿って太い沈線が施される。7は細い隆帯を器面に貼付し、沈線によって渦巻文を施している。縄文の原体は、4～6はRL、7～9はLRである。

10～15は太い沈線によって文様を区画構成する土器で、沈線が深いため文様全体が隆起してみえる。10、11は渦巻文と窓枠状文を施す。枠内にRLの縄文を施す。12は胴部に沈線を垂下させ、沈線間は幅広の磨消縄文帯となる。縄文の原体はRLである。14は肥厚した波状口縁。口唇部上端に一条の沈線と渦巻文、その直下より3本一単位の沈線を胴部に垂下させる。縄文はRLである。15は底部。14と同様の沈線が認められる。縄文はLRである。

16～18は縄文を地文として微隆起帯及び沈線が施される土器である。16は口縁部を窓枠状に区画し、区画内にRLの縄文を施す。頸部は無文帯となる。17、18は胴部に沈線で区画された磨消縄文帯が垂下する。縄文はLRである。微隆起帯は断面がかまぼこ状と三角形状を呈するものを併用している。

19、20は縄文を地文として、沈線によって口縁部を楕円状の枠状文で区画し、胴部に幅のせまい磨消縄文帯を垂下させる。20は単純化した渦巻文を施文している。縄文は19はLR、20はRLである。

21、22は縄文を地文として微隆起帯によって文様が構成される土器である。波状口縁を呈し、口唇部は無文帯となる。微隆起帯の断面は三角形状を呈するが、22はやや鋭角となっている。縄文は21はLR、22はRLである。

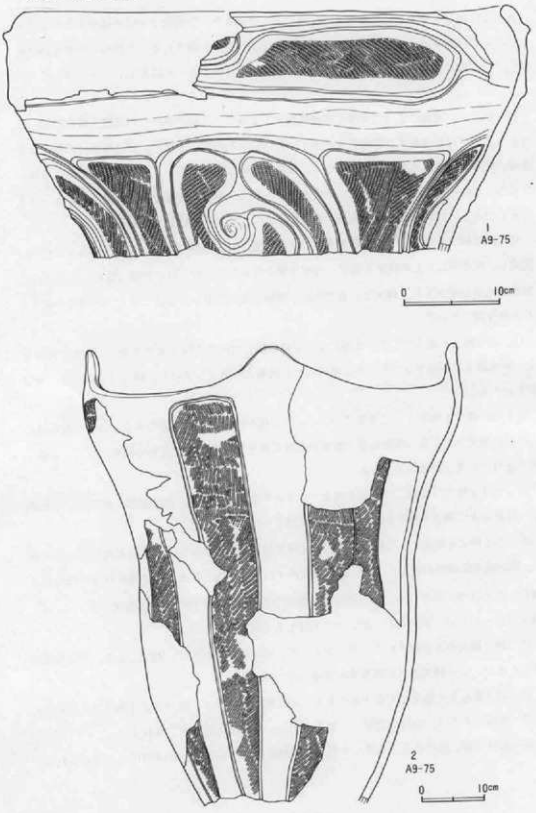
23～25は平縁の口縁部。口縁部が無文で、平行する沈線、隆帯、微隆起帯で胴部以下と区画し、胴部全体に縄文を施す土器である。縄文はすべてLRである。

26～36は縄文を地文として縦、横方向に沈線を施した土器である。いずれも沈線間の幅は狭く、磨消縄文は認められない。30、31は弧状の平行沈線が施される。34は波状口縁で口唇部上端に一条の沈線が施される。35、36は同一個体であろう。最下段の沈線は波状となっている。縄文は26～29、34、36がRL、30、32、33はLRを施す。

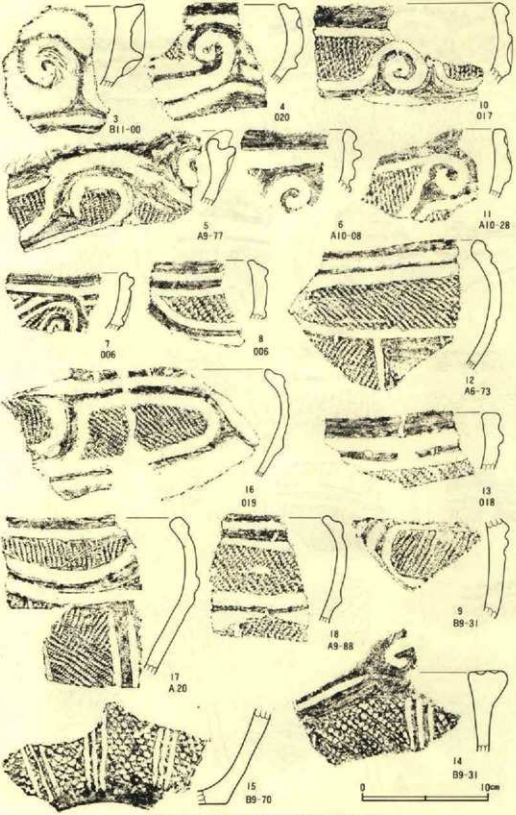
37～39は縄文のみが施される土器である。37、38は口縁部破片で、縄文はLR。39は胴部破片であるが、LR縄文とRの撚糸文が併用されている。

40～43は条線文を地文とする土器である。40は細かい条線が口縁直下より施される。42、43は同一個体であろう。口縁は肥厚し、無文である。胴部に沈線が垂下される。

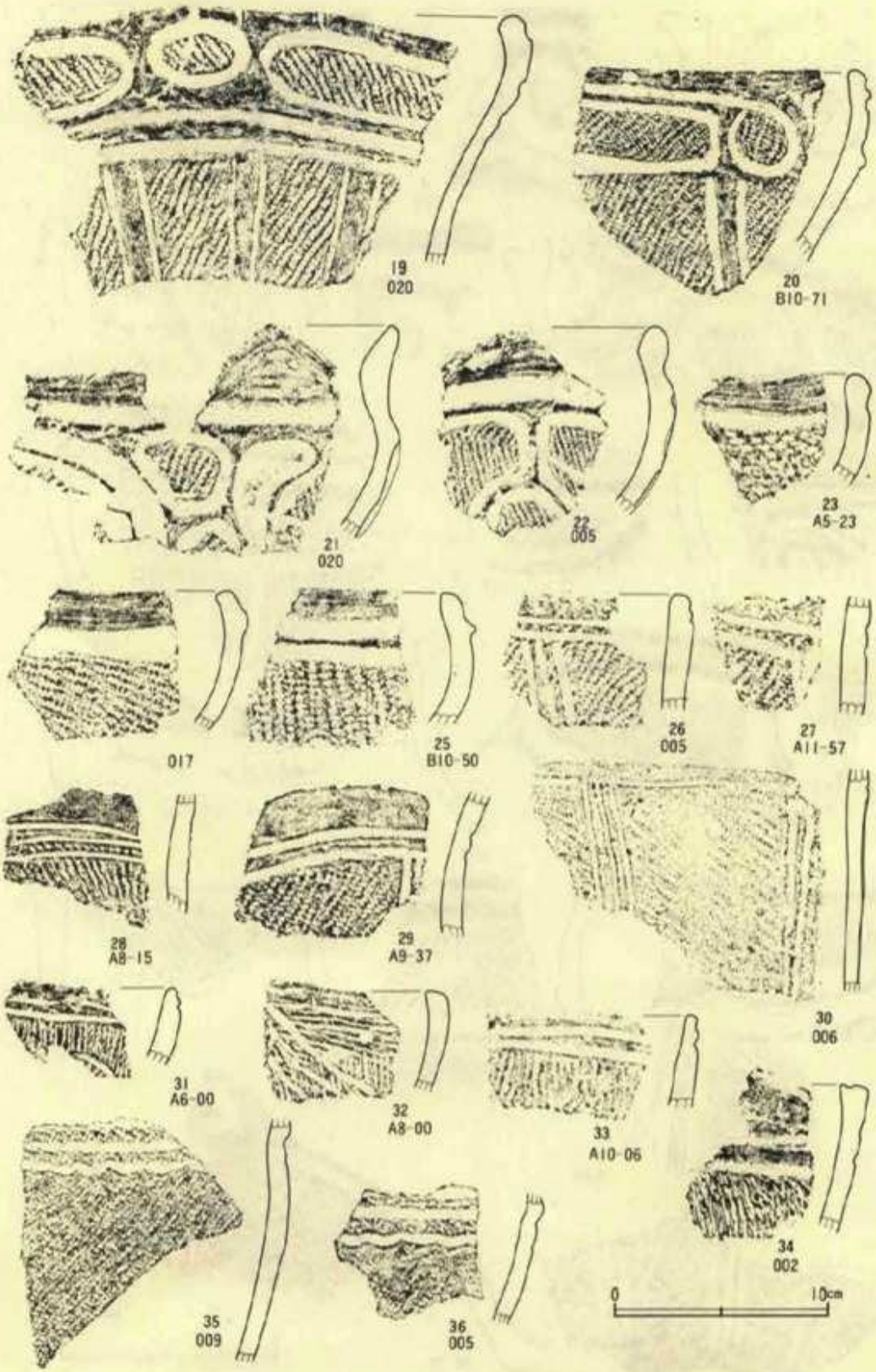
44～47は土器底部である。44はハケ目状の調整痕が認められる。45は網代痕が認められる。



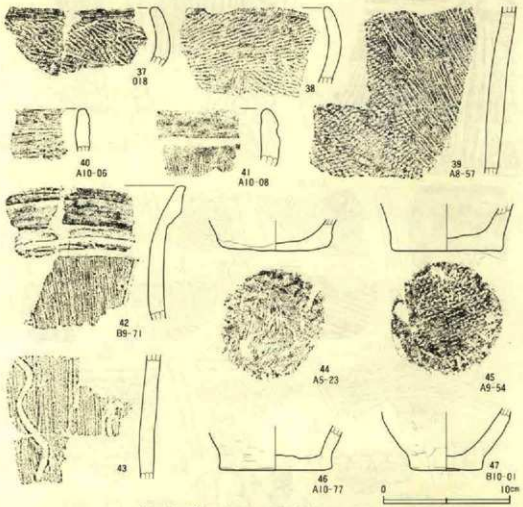
第80図　グリッド出土土器実測図(2)(1／4・1／6)



第81図　グリッド出土土器拓影図(3)(1／3)



第82図　グリッド出土土器拓影図(4)(1／3)



第83図　グリッド出土土器実測・拓影図(5)(1/3)

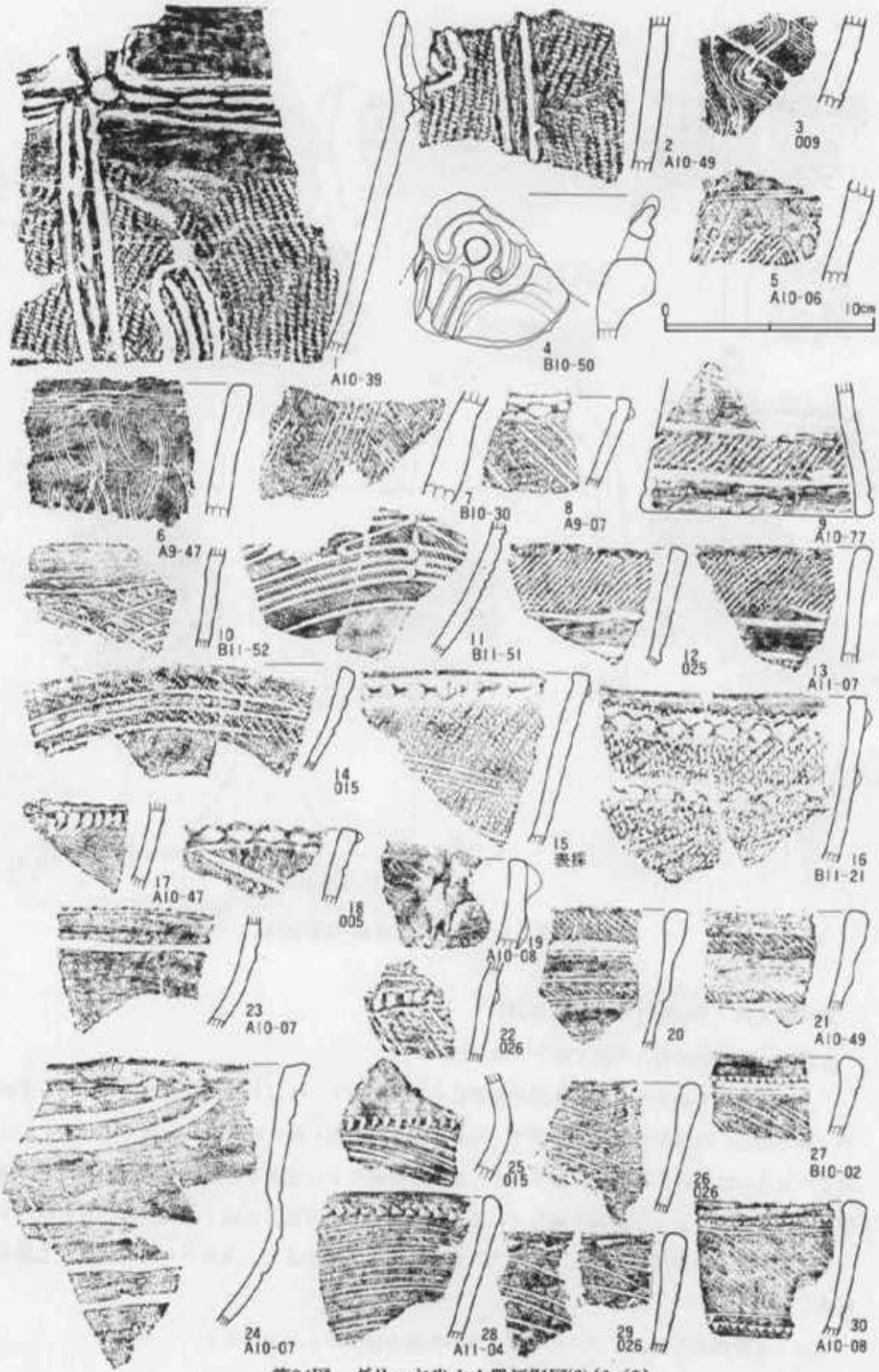
第Ⅲ群土器（第84図1～7・図版34）

本群は、後期初頭堰之内式土器を一括した。

1、2は縄文を地文として、沈線が施される土器である。1は口縁部が僅かに外反する深鉢形土器である。口縁から頸部は無文で、2条1単位の粗線が縦に貼付され、横方向にめぐる沈線との交点に竹管による刺突が施される。胴部は沈線によって逆J字状の文様が施され、沈線間にさらに破線のような沈線を施している。縄文はLRである。2は1と同一体であろう。

4は波状口縁の上部にあたる小突起である。隆線と沈線によって渦巻をモチーフした文様を構成している。

5～7は櫛歯状工具によりコンパス文等の条線を施文する土器である。



第84図　グリッド出土土器拓影図(6)(1／3)

第Ⅳ群土器（第84図8～16、18、22、25・図版34）

本群は、後期中葉加曽利B式土器を一括した。

9、11～14は沈線と磨消縄文を主文様とする土器である。9は台付形土器の脚部である。11は沈線によって入組状文が施されている。縄文は9、11～13がLR、14がRLである。

10は沈線による格子目文が施される土器である。縄文を地文として、口縁あるいは胴部に押捺文のある紐線が1本ないし2本貼付される。地文の上に斜方向の条線文が施される土器と施されない土器がある。8、15、16は口縁部内側に浅い沈線が一条めぐっている。縄文はすべてLRである。

25は強く屈曲する胴部破片。屈曲部に刻みを施し、下部に斜方向の条線文を施す。

第Ⅴ群土器（第84図17、19～21、23、24、26～30・図版34・35）

本群は、後期後半から晩期初頭の土器を一括した。安行Ⅰ～Ⅲ式に比定されるものである。

19～21は帯縄文を主文とする土器である。19は縄文帯を横切って小突起が貼付されている。

17、26～30はいわゆる粗製土器である。17は紐線文に押捺を施し、以下斜方向の条線文が施文される。28は口縁直下に連続する刻みと沈線の内側に条線文が施される。26、29は条線文のみが施文される。

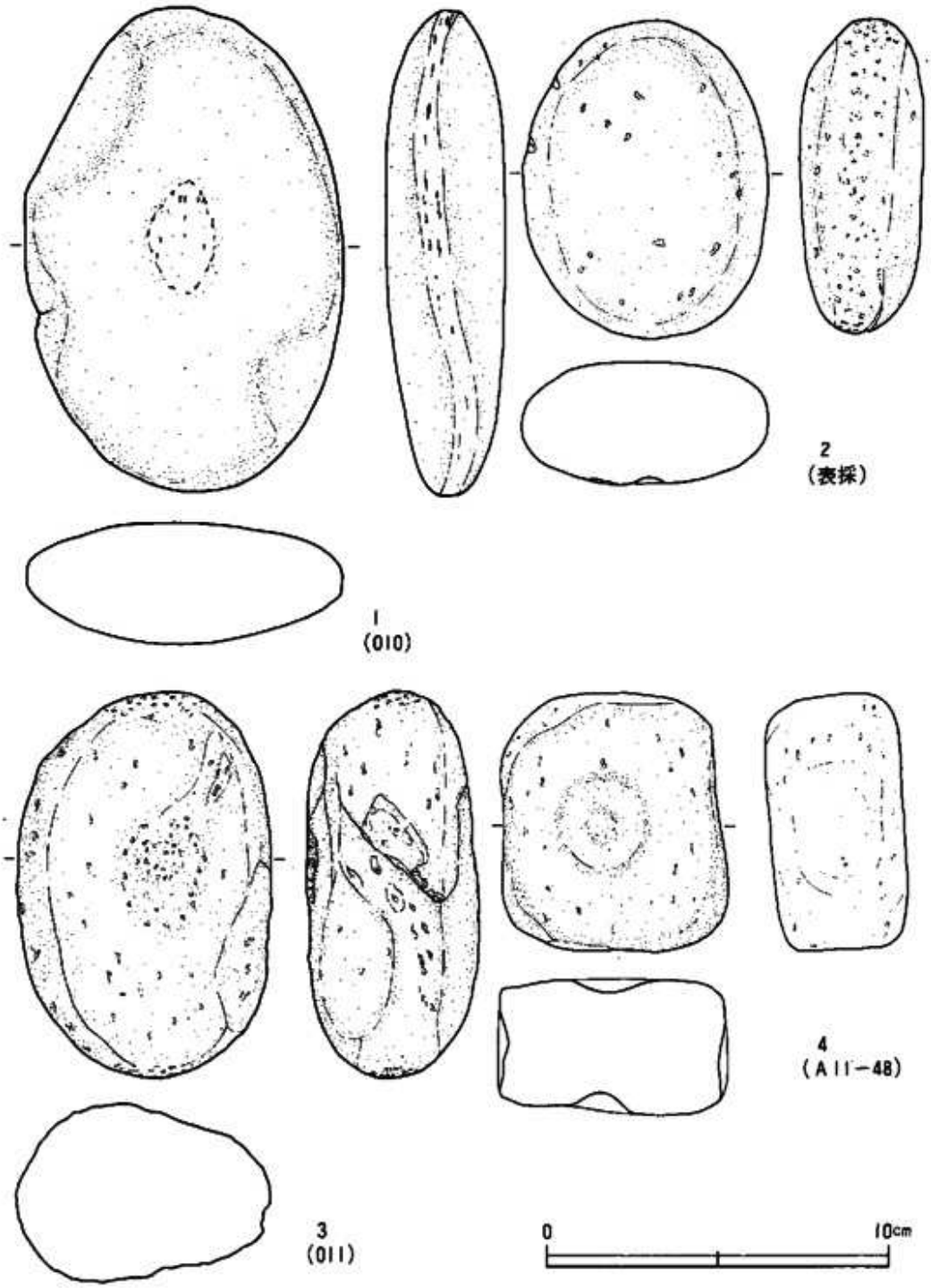
23、24は同一個体であろう。口縁部は平縁で外反し、胴部が膨みをもつ。直線状、弧状の平行沈線を施している。

（2）石器類（第85図～第87図・図版36、37）

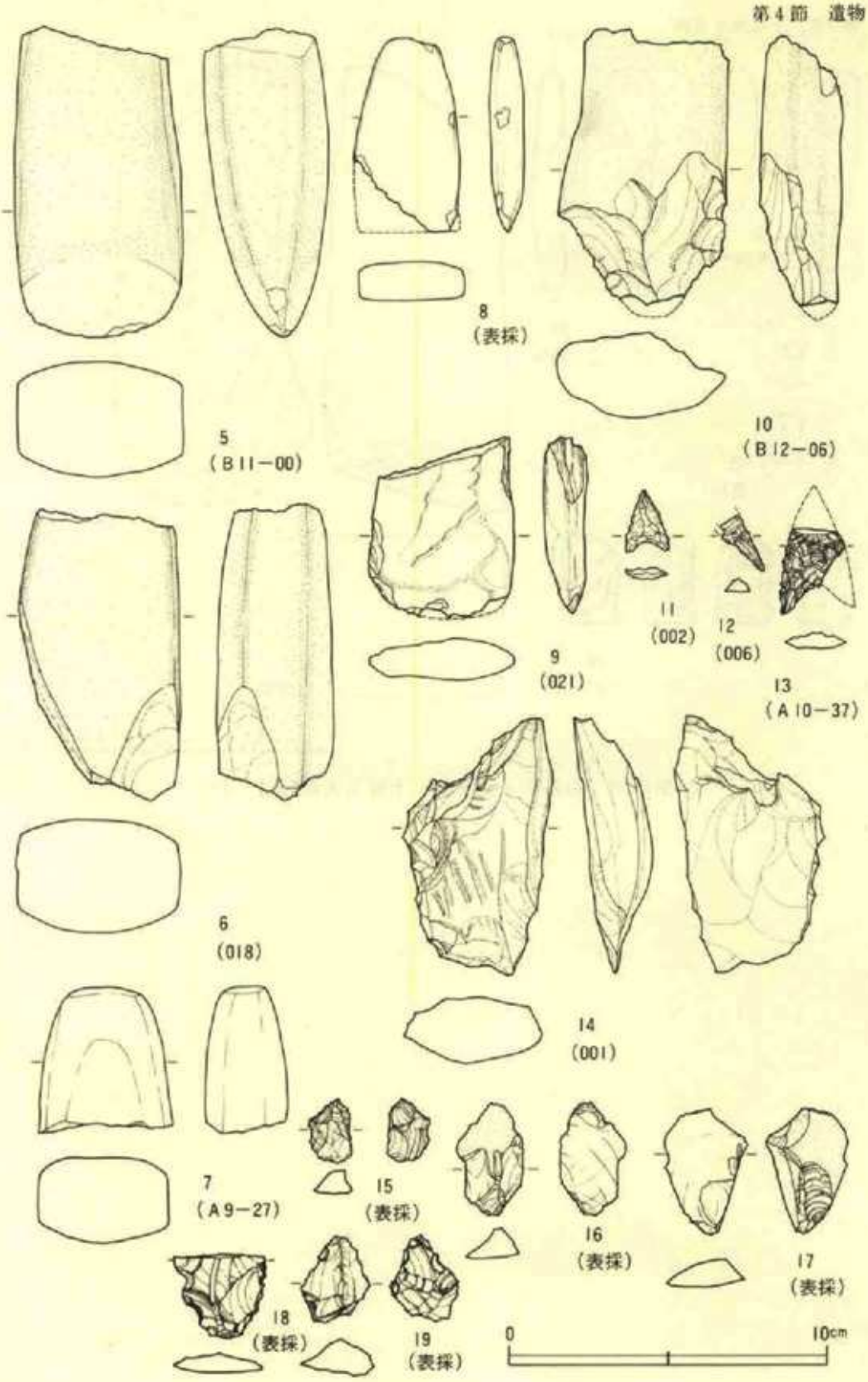
第85図は磨石、敲石、凹石である。1つの石器が複数の用途に使用されたと思われる。第86図は、石斧（5～10）、石鏃（11～13）、尖頭器（18）、剥片（14～17、19）である。磨製石斧が多く、打製は1点だけである（10）。石鏃は、破片を含めて3点である。脚部が短く、頭部は幅広の三角形になると思われる。尖頭器は基部のみが遺存している。断面の形状や剥離から尖頭器とした。剥片は数が少なく、石材も異っている。

表採、グリッド出土品が多く、明確に遺構に伴うものがない。しかし、調査区内の遺構、遺物により、ほとんどが縄文時代中期のものと思われる。

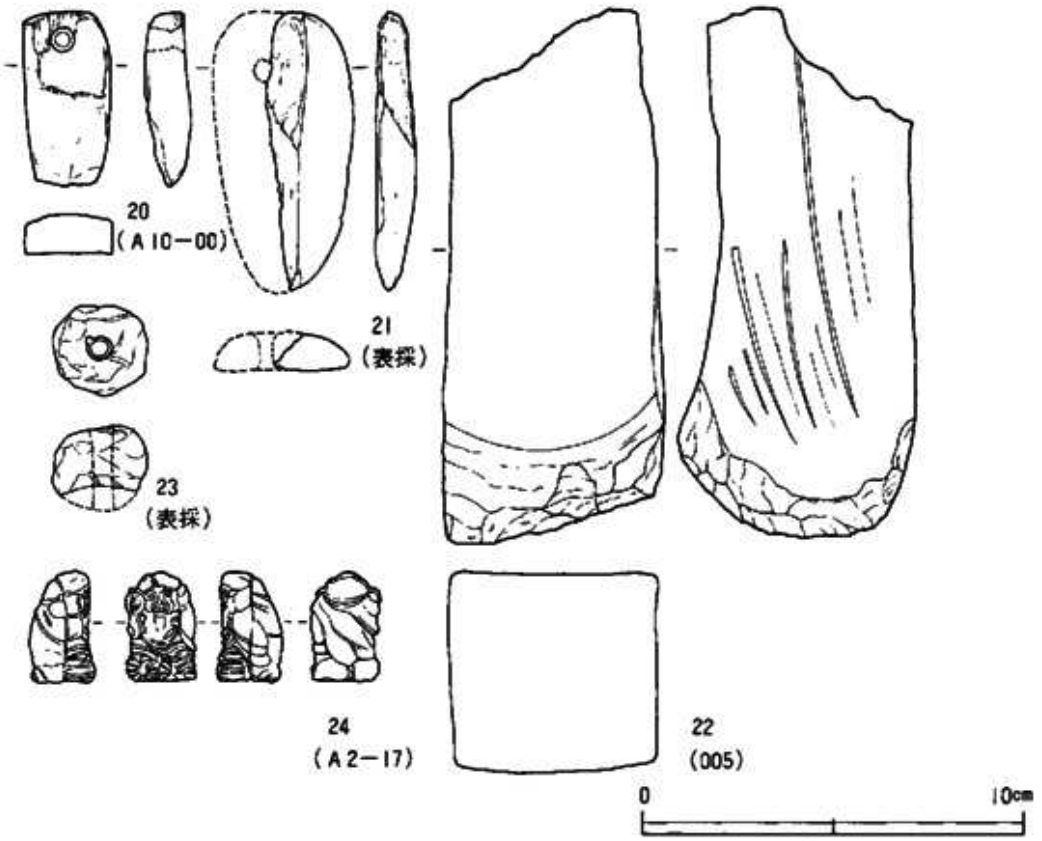
第87図は、砥石、石製模造品、土玉、泥面子である。砥石は、大型（22）、と小型（20）があり、20には、小孔があけられている。23は、土玉の残欠で、ほぼ球形になる。24は、大黒天の泥面子である。俵の上に乗り、右手に小槌を持ち、左手には、肩からかけた袋を持っている。型押しにより作られ、側面にその跡が見られる。



第85図　石器実測図(1)(1／2)



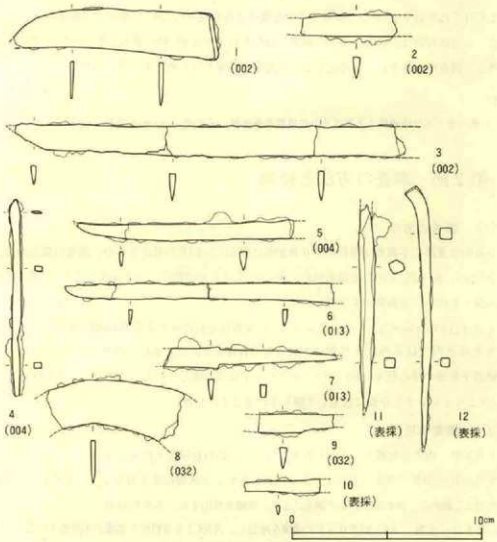
第86図　石器実測図(2)(1／2)



第87図　石器(3)・石製品・土製品実測図(1／2)

（3）鉄器（第88図・図版37）

鉄器は、鏃2点（1、8）、刀子7点（2、3、5～7、9、10）、鉄鏃1点（4）、釘2点（11、12）である。鏃、刀子の農具、工具が多いと思われる。3は、大型の刀子である。刃渡り20cm以上もある。鏃、刀子とも、砥ぎにより刃が内弯している。鉄器を出土した住居跡は真間期のものが多く（002、004、013）、鬼高期の住居跡は、032である。釘は、2点とも表採品で、断面はほぼ正方形である。



第88図　鉄器実測図(1／2)

第Ⅲ章　小池向台遺跡

第１節　遺跡の位置（第89図・図版38）

小池向台遺跡は山武郡芝山町小池字向台135番地に位置する。北総台地の中央やや東寄りに位置する。遺跡付近は樹枝状台地が形成されており、九十九里の沿岸へと流れる木戸川によって洪積台地の奥深くまで発達した支谷が入りこんだ、極めて複雑な地形を呈している。

本遺跡は、舌状台地の基部にあたる標高39m前後の緩斜地である。現在、台地は畑地・山林として利用されており、かつては数多くの古墳の分布が見られたが、現在では数基のみとなっている。本遺跡周辺は、過去、多くの調査が行なわれているが、特に著名なものとしては昭和31年３月より調査が実施され、国指定となった殿塚・姫塚[(1)]をはじめとする芝山古墳群がある。

註

（１）滝口宏・玉口時雄他「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』19・20合併号　1955

第２節　調査の方法と経過

(1)　調査の方法

小池向台遺跡の本調査は昭和53年９月20日に開始し、10月23日終了した。調査対象地域は、長さ120m、幅平均14ｍの道路敷地内に限られているため道路中心杭を基準にグリッド法（前掲第10図）を用い、全面発掘を実施した。

本調査は20×20mの方形を大発掘区とし、小発掘区を1辺2ｍの正方形100個に分割して行った。

大発掘区内では北西隅より順に00から99の名称を与えた。またこのグリッドのラインは道路建設予定地の中心杭No. 360とA1－05グリッドにて対応している。このグリッドを採用してA1区よりトレンチを全面に設定して掘り下げることにした。

(2)　調査の経過

９月20日　現地器材搬入。草刈り作業を行なう。器材倉庫等を設営する。

９月24日～30日　グリッドによりＡ１区よりトレンチ試掘作業を行なう。Ａ３区より土師器片が出土し始める。A4 区トレンチ調査により、遺構を検出する。基準杭移設。

10月１日～５日　A3－33グリッドの遺構を確認し、A3区より３軒程の遺構の本調査を行なう。

10月６日～11日　Ａ５区までトレンチ調査を行なう。トレンチ調査により、Ａ３区～Ａ

第89図　小池向台遺跡調査区周辺地形図(1／5,000)

5区まで全面表土剝ぎ調査を行なう。ソフトローム層上面まで剝ぎ、遺物を伴なった遺構をA4区より確認する。

10月12日～16日　調査区北側より遺構番号をつけ、掘り下げる。001号住居跡から掘り下げる。床面より土師器片が出土する。002・003号住居跡の覆土を掘り下げる。覆土が比較的薄く、15cm内外である。ローム層中に構築される。003号住居跡は東側にカマドを構築している。004号住居跡と006号住居跡は遺構の重複を認める。

10月17日～20日　新らたに住居跡7軒を検出する。004号住居跡を調査終了した段階で、006号住居跡を掘り下げる。真間期の土師器片・須恵器の坏が出土する。

カマド精査を実施してみると、002・003号住居跡は押しつぶされた感じである。004号住居跡の床面精査により貼床を確認してゆく。004号住居跡の南側に遺構を確認し、一辺70cm程の住居跡の一部を調査した。

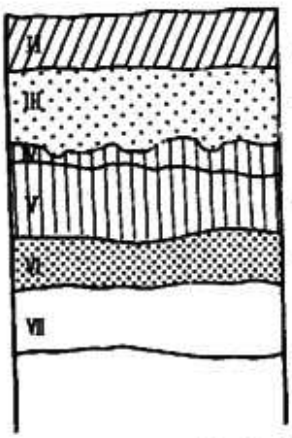
10月21日・22日　004号住居跡の遺物、カマドを出土する。008号住居跡のカマド右側覆土中より木の葉文様を付した器台形土器が出土している。

012号住居跡は調査区域外に一部残存しており、方形状であった。遺構の全景写真を撮影する。

10月23日　現場器材撤収し、現場を終了する。

(3)　土層（第91図）

本遺跡における台地平坦部の標準土層序は第91図の通りである。標準層序は遺跡内、A2－33グリッド西壁断面において観察している。



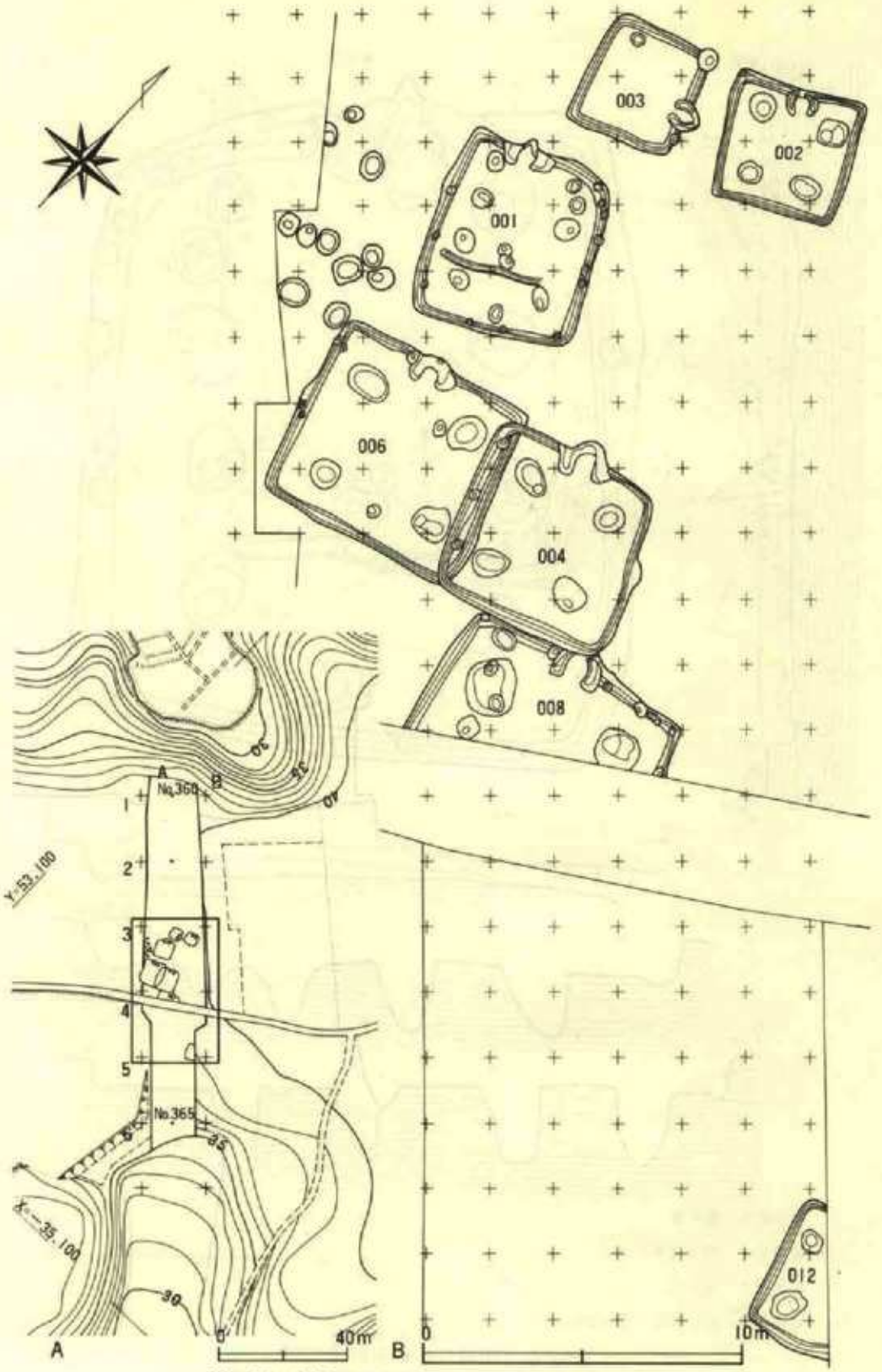
第90図　土　層　図

Ⅰ層は褐色土（表土及び耕作土）。Ⅱ層は暗褐色土。Ⅲ層以下は立川ローム層。Ⅲ層はソフトローム層でソフト化が進む。第Ⅳ層ではハードローム層で層の厚さは10～15cmである。Ⅴ層では姶良丹沢パミスが検出されている。上層と区別が難しい。Ⅵ層は通常区別がむずかしいが、姶良丹沢パミス及び第Ⅱ黒色帯との間層として、とらえられる暗褐色土層である。Ⅶ層は立川ローム層第Ⅱ黒色帯で厚さ40cm前後と厚い。Ⅷ層は立川ローム最下層である。

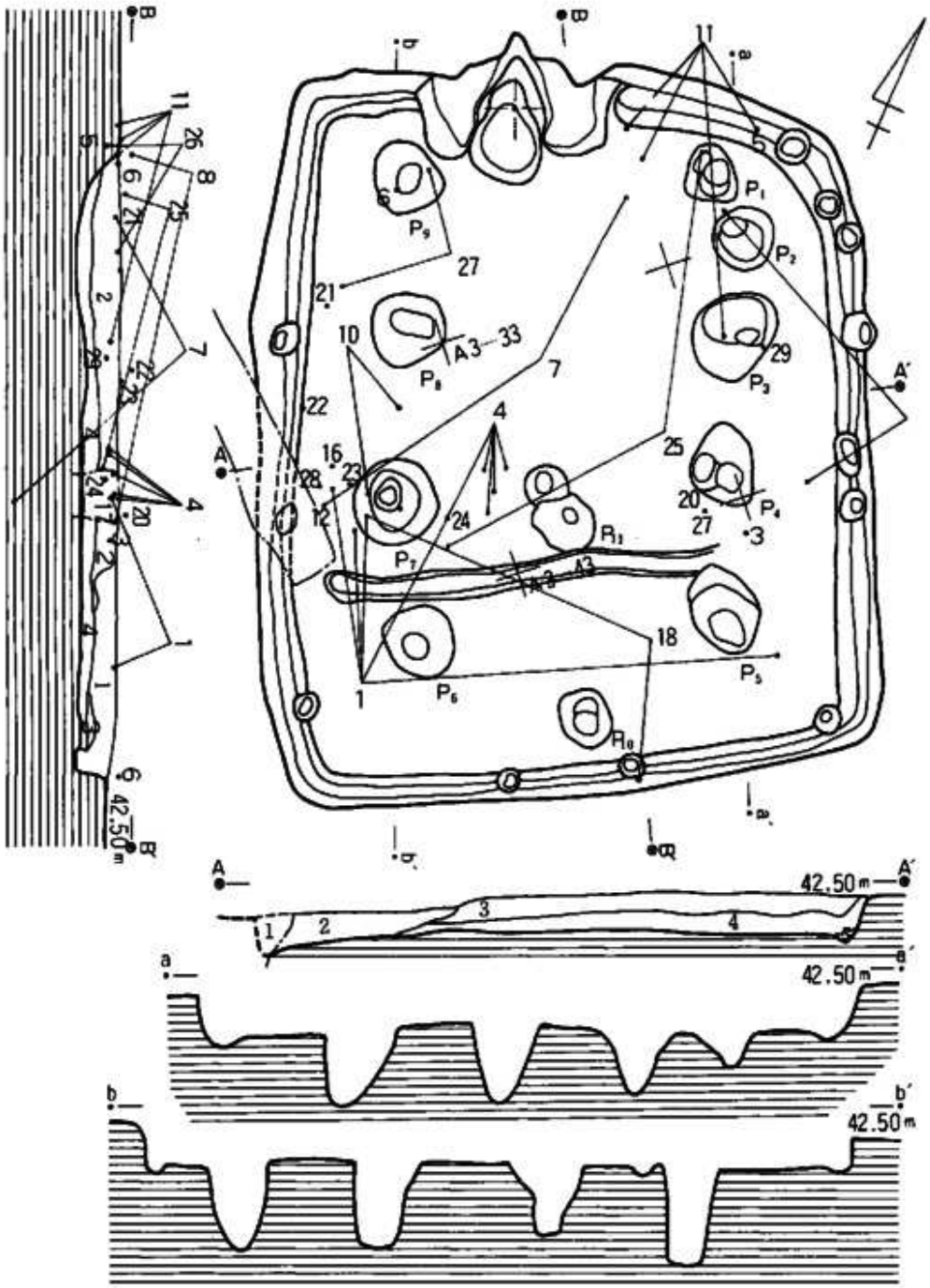
第3節　遺　構

1項　住居跡

本遺跡における遺構は、住居跡6軒が検出されている。（第90図、図版38）



第91図　遺構配置図(A：1／2,000・B1／200)



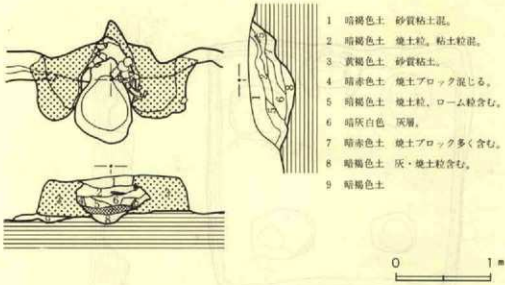
1　暗褐色土　撹乱層

2　暗褐色土　黒色土多く含む。

3　暗褐色土　焼土粒、ロームブロックを多く混入する。

4　暗褐色土　砂質粘土を若干含む。

第92図　001号住居跡実測図（1/60）



第93図　001号住居跡カマド実測図（1/20）

001号住居跡（第92、93図・図版39）

調査区中央A3－33グリッドに位置し、主軸方向はN－15°－Wを指す。覆土はローム粒混じりの暗褐色土を主に堆積する。

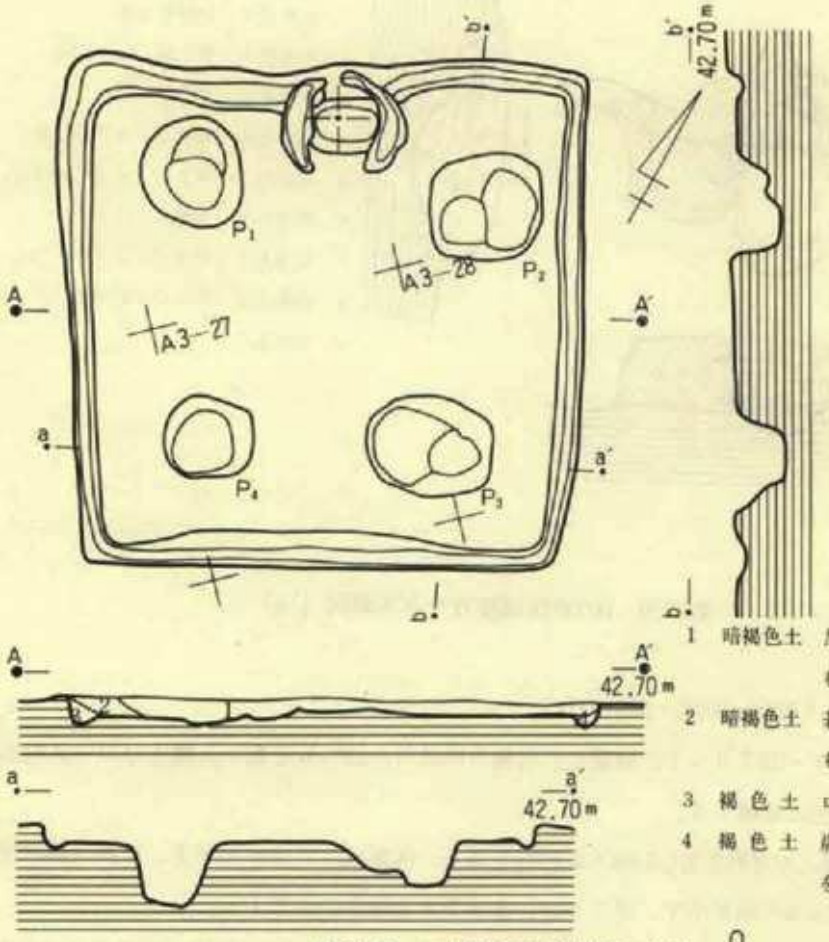
平面形はやや歪んだ方形を呈し5.98×4.60mを測る。床面積は21.6m²を示す。壁高は30cm前後で、壁溝は18～25cmの幅を示す。深さ6cm。カマド下を除き、全周する。

柱穴は9か所検出した。P_1・P_2・P_3・P_4を主柱穴とし、長径62～80cm内外、短径45～60cm内外、深さ43～65cmを示し、中央に向かって掘り込まれ、底面掘り込みも小円形で段をもつので、一度増築したと思われる。平面形も方形から隅丸方形へと変化している。

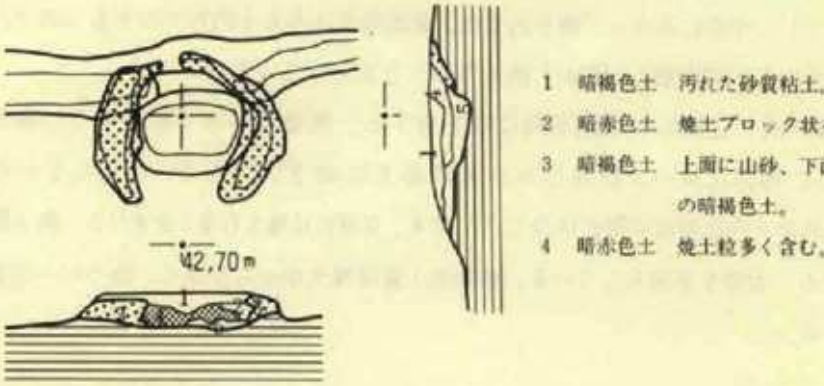
カマドは北壁中央に位置し、煙道部内に段を有する。燃焼部をとり囲むように袖部が構築されている。袖部はローム粒混じりの基底部上に高さ28cm程で、内傾しながら構築されている。カマド内土層は8層に区分でき、第4、5層には焼土も多く含まれる。第2層中には焼土粒を含み、土器片を混入している。遺物出土量は覆土中からが多く、甕や坏・墨書土器も出土している。

002号住居跡（第94、95・図版40）

調査区域西側A3－28グリッドに位置し、主軸方向はN－29°－Wを指す。覆土はローム粒を含む黒色土である。



第94図　002号住居跡実測図（1/60）



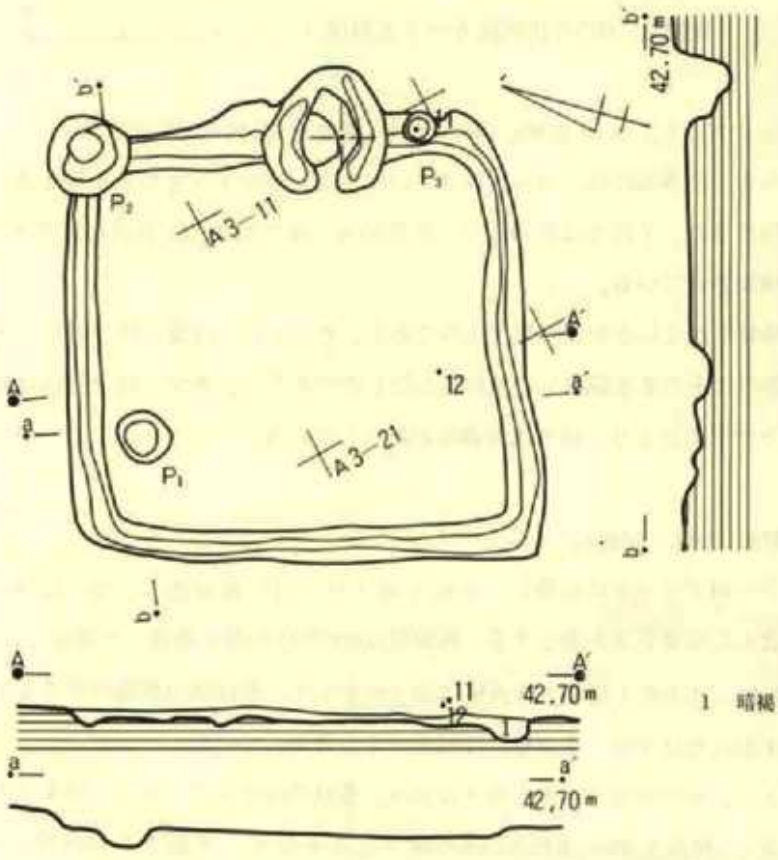
第95図　002号住居跡カマド実測図（1/40）

平面形は4.16×3.98mの方形を呈する。床面積は12.2㎡を示す。壁高は浅く、10～15cmの深さを示す。壁溝幅は10～15cm内外で、深さ6cmを測る。

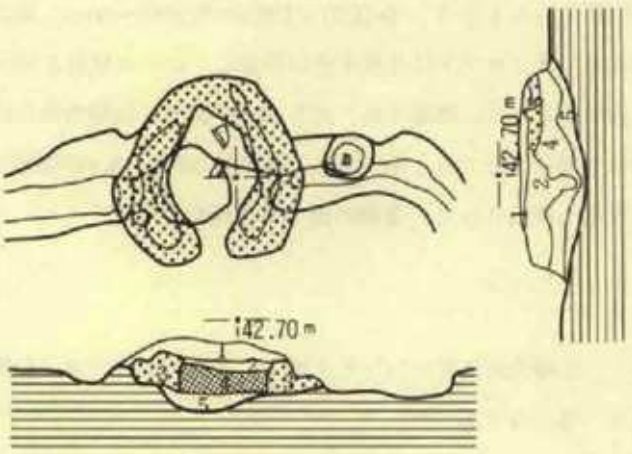
柱穴はP₁～P₄とする。楕円形の掘り込みを示す。長径70～102cm・短径65～80cm、深さは32～45cmを測る。床面状態は凹凸状を示す。カマドは北壁中央に位置し、ローム壁面を50cm、奥行き15cmを掘り込む。袖部は、内傾するように構築され、高さ18cmを測る。袖部内面には焼土が堆積している。カマド内土層は5層に区分でき、第4層には焼土粒が厚く18cm程堆積している。焼土、灰を少量堆積する第5層も検出された。遺物の出土量は僅かである。

003号住居跡（第96、97・図版40）

調査区域A3－11グリッドに位置し、主軸方向はN－74°－Eを指す。東側方向にカマドが構築された。覆土は浅く、暗褐色土の単一層のみであった。



第96図　003号住居跡実測図（1/60）



第97図　003号住居跡カマド実測図（1/40）　0　1m

平面形は3.47×3.35mの方形を呈し、床面積8.06㎡を測る。壁高は6cm内外で極めて浅く、床面状態は凹凸状で硬質である。壁溝幅は16～24cm、深さ8cmを測る。カマド下を除き全周する。

柱穴はP_1～P_3まで検出され、主柱穴はP_1のみで、長径40cm、深さ23cmの円形状の掘り込みを示す。P_3は壁溝内に構築されている。

カマドは東壁面に構築されているが浅い掘り込みである。カマド内には甕や坏の破片が出土する。おそらく器掛部内にそのまま破損して流れ込んだものであろう。カマド内土層は5層に区分できる。遺物はカマド周辺より、坏や土師器片が出土している。

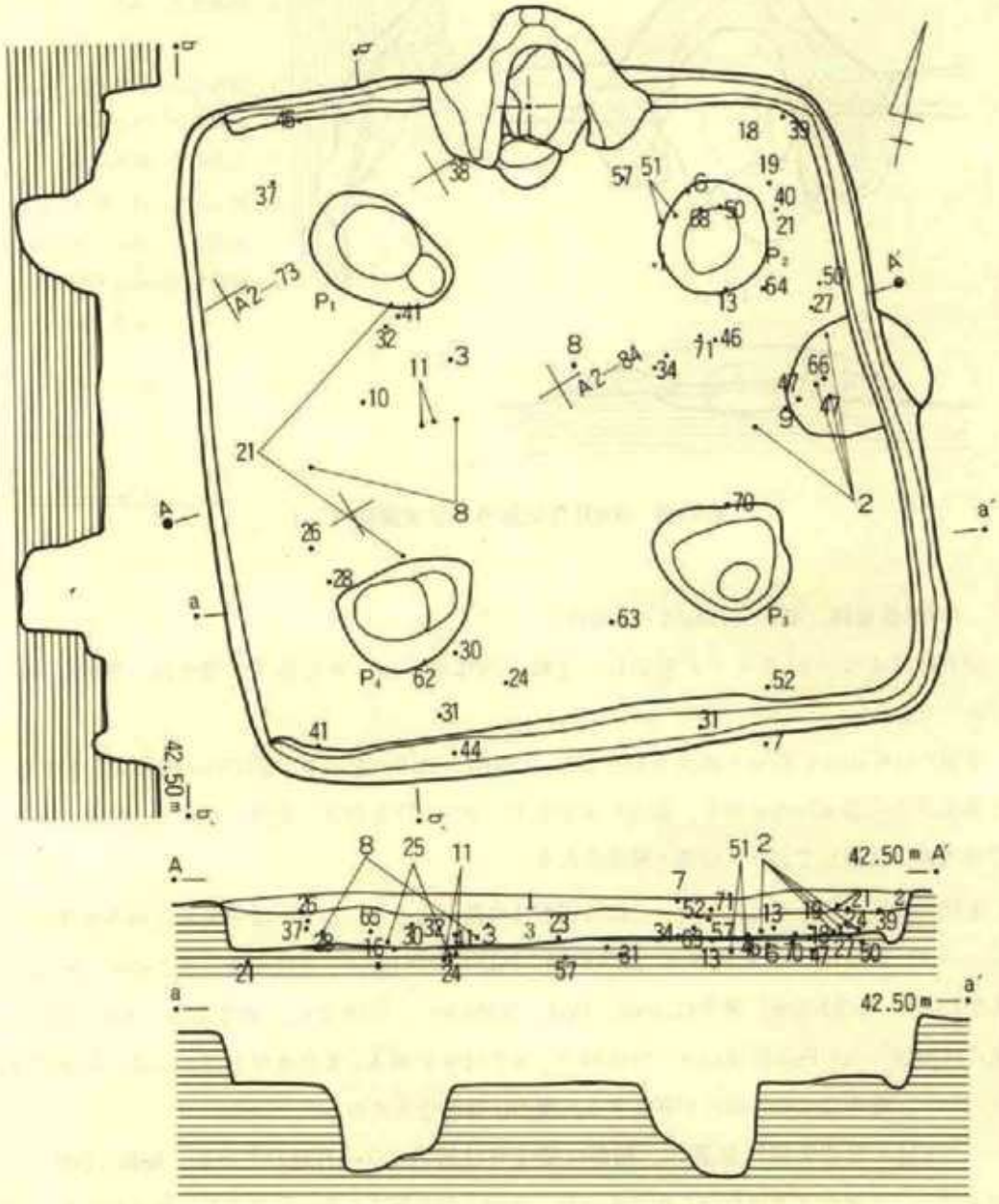
004号住居跡（第98、99図・図版41）

調査区域中央部A2－84グリッドに位置し、主軸方向はN－21°－Wを指す。覆土はロームブロック及び焼土を含んだ暗褐色土を主とする。西側壁は006号住居跡と重複して確認された。

平面形は、5.78×5.51mの方形を呈す。床面積は23.0㎡を示す。壁は28cm前後の深さを呈し、ほぼ全周している。床面状態は平坦。東側壁には旧カマドが残存していた。

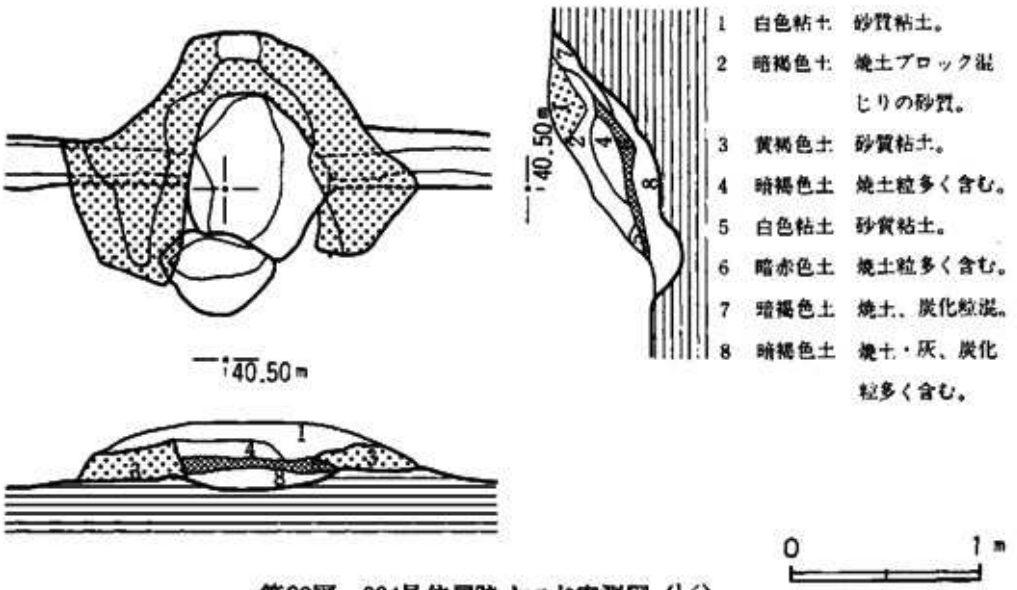
柱穴はP_1～P_4までとし、楕円形状を示す。深さは23cm。各柱穴は中央に向かって構築された。

カマドは中央に位置し、壁面を96cm、奥行き30cmの掘り込みを示す。床面より16cm程を測る。カマド内土層は8層に区分できる。第6層は焼土粒を含み、暗褐色土を赤変させている。遺物は極めて多く、「井」の墨書土器も出土する。特に床面からの出土遺物は多かった。



1　暗褐色土　ローム・ブロック含む。
2　暗褐色土　ローム粒混じる。
3　暗褐色土　ローム・ブロック及び焼土ブロック含む。

第98図　004号住居跡実測図（1/40）　0　2m



第99図　004号住居跡カマド実測図（1/40）

006号住居跡（第100、101図・図版43）

調査区域A 2 －61グリッドを呈し、主軸方向はN－29°－Wを指す。覆土は、平坦な堆積であった。

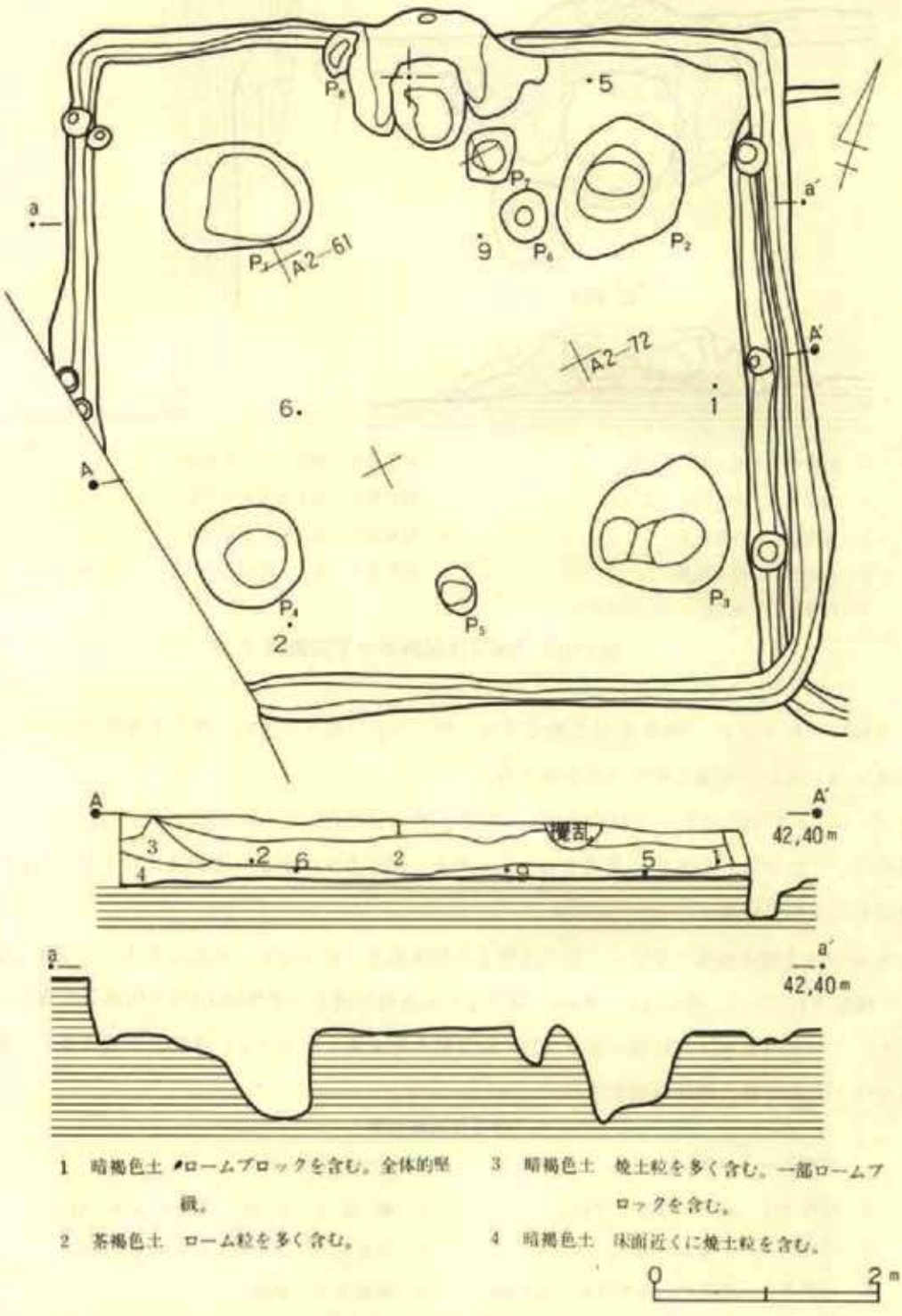
平面形は6.40×5.92mの隅丸方形を呈し、床面積は31.9m²を示す。壁は50cm程の深さを測る。壁溝幅は10～23cm内外を測り、深さ6cmを示す。カマド下を除き、全周している。東壁は004号住居跡と重複しており、壁溝も検出される。

主柱穴はP_1～P_4と考えられる。ほぼ楕円形状の掘り込みで、ピットは中央部に向き気味である。P_1は、長径135cm、短径87cm、深さ87cm、P_2は、長径130cm、短径87cm、深さ82cm、P_3は、長径130cm、短径105cm、深さ42.56cm、P_4は、長径83cm、短径62cm、深さ43cmを測る。その他には補助ピットP_5は長径42cm、短径34cm、深さ21cmを測る。またカマド前面には、長辺71cm、短辺66cm、深さ32cmの貯蔵穴が存在する。覆土は暗褐色土である。

カマドは北壁中央部に位置し、袖部は壁より住居内に70cm程延びている。袖部は内傾し、煙道部からの掘り込みはなだらかであった。カマド内土層は9層に区分でき、焼土粒が若干含まれる。右袖部基部から大型甕が出土した。

008号住居跡（第102、103図・図版44）

農道際A 4 －03グリッドに位置し、主軸方向はN－15°－Wを指す。覆土は、暗褐色土を主としてレンズ状に堆積している。



1　暗褐色土　ロームブロックを含む。全体的堅緻。

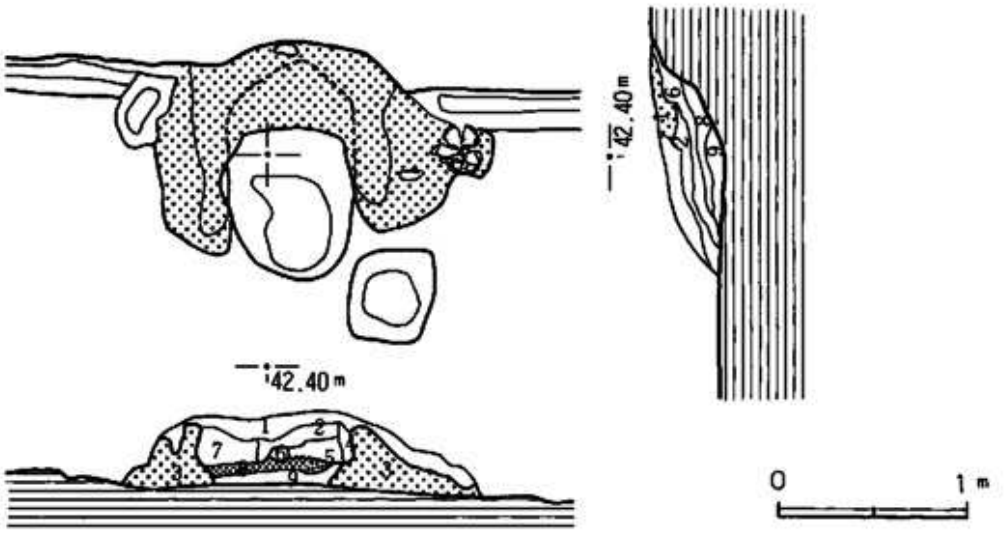
2　茶褐色土　ローム粒を多く含む。

3　暗褐色土　焼土粒を多く含む。一部ロームブロックを含む。

4　暗褐色土　床面近くに焼土粒を含む。

0　2m

第100図　006号住居跡実測図（1/60）



1　暗褐色土　焼土粒、砂質粘土、含む。
2　暗褐色土　砂質粘土少量含む。
3　黄褐色土　砂質粘土。
4　暗赤色土　焼土粒多い。
5　暗褐色土　焼土粒、炭化粒を含む。
6　暗赤色土　焼土ブロックを含む。
7　暗褐色土　焼土灰を多く含む。
8　暗褐色土　焼土粒を多く含む。
9　暗褐色土　焼土、灰を含む。若干、炭化粒含

第101図　006号住居跡カマド実測図（1/40）

遺構は½検出され、隅丸方形と推定する。壁は垂直に掘り込まれ、深さも東壁で52cm、西壁は60cmと深い。壁溝も検出され全周する。

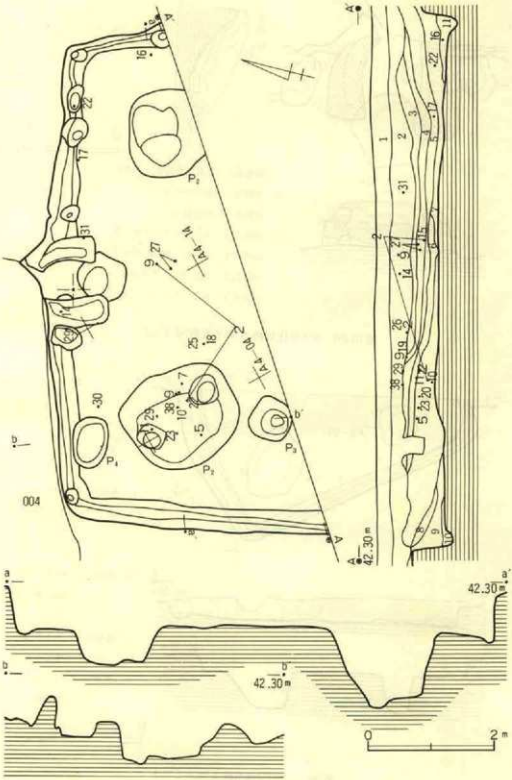
柱穴は4か所検出され、主柱穴P_2、P_3となる。P_2は長径170cm、深さ48cmを示す。

遺物は坏や甕が多く出土し、墨書土器も出土する。またカマド前より木の葉文様を付した高台付盤も出土している。

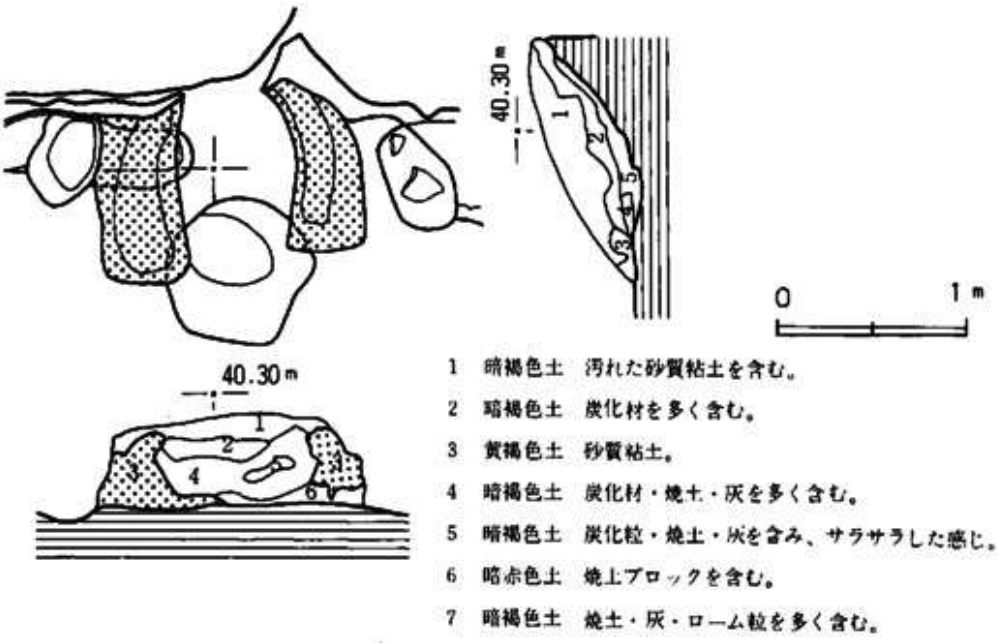
カマドは北壁中央部に位置し、袖部は壁より袖端部まで97cm測る。袖部は火床をとり囲むように構築されている。壁幅は15～20cm、深さは8cm前後を測る。北壁は004号住居跡と重複している。カマド内土層は、6層に区分され、砂質粘土を主体としている。遺物出土量は多く、高坏や坏・高台付盤の脚部等出土する。

008号住居跡土層

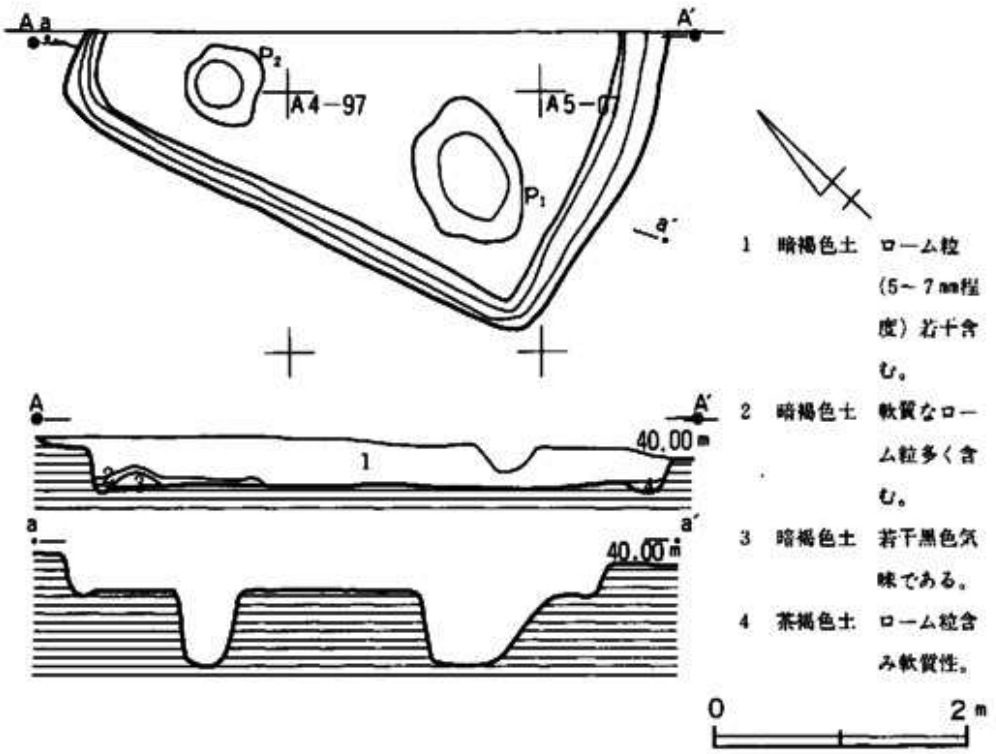
1　暗褐色土　耕作土。
2　暗褐色土　ローム粒若干含む。
3　暗褐色土　2層より淡い。
4　暗褐色土　黒色のしみを含み、柔らかい。
5　褐色土　焼土を含む。
6　黄色粘土　砂質。
7　褐色土　炭化粒・焼土粒を多く含む。
8　暗褐色土　炭化粒・焼土粒若干含む。
9　暗褐色土　堅緻。
10　褐色土　ローム粒を多く含み軟質。
11　褐色土　ローム粒・炭化粒を含み、軟質。



第102図　008号住居跡実測図（1/60）



第103図　008号住居跡カマド実測図（1/40）



第104　012号住居跡実測図(1/60)

012号住居跡（第104図・図版45）

A4—97グリッドに位置し、1/4のみ検出した。平面形は、確認面で方形状を示す。4.12×(2.60)m・深さ25cmを測る。壁溝は検出面で全周している。

柱穴は2か所検出されている。P_1は長径102cm、短径80cm、深さ25cmを測る。各柱穴は楕円である。カマドは調査区域外に残存し、検出は不可能であった。遺物の出土量は極めて少ない。

第4節　遺　物

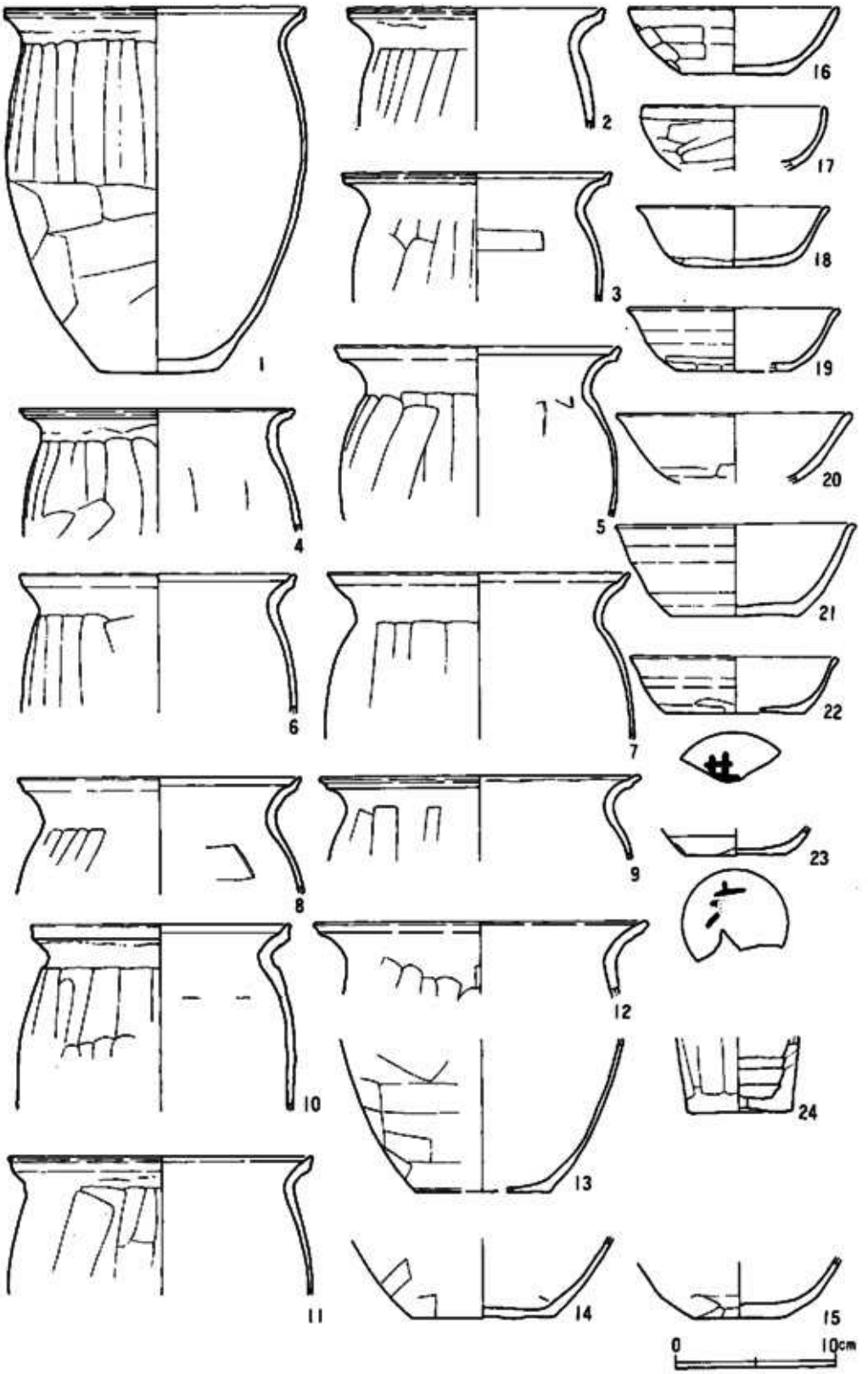
I項　住居跡出土土器

001号住居跡出土土器（第105、106図・図版46）

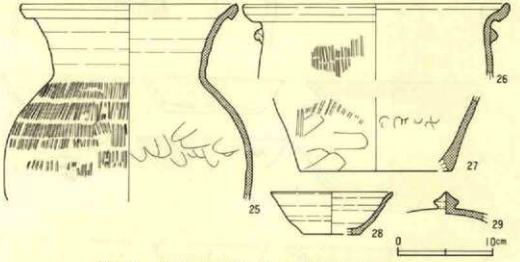
第105図は土師器である。1～15は甕でありほぼ同じ形になると思われる。1は、玉子形の胴部から口縁部が外反する。口唇部はやや外傾して短く立ち上がり、受け口状になる。口縁部はやや肥厚する。胴部最大径はほぼ中位にある。口唇部の立ち上がりの差はあるが、2～6は、ほぼ同形と思われる。7～9は、口唇部の開きが大きい。10、11は、胴部の丸味があまりなく、10には、胴部と口縁部との境に明瞭な稜がある。12は、口縁部が大きく開き、口唇部との境に、かすかな段が認められる。13～15は、底部である。13、14は、底径の差はあるが、1とほぼ同形になると思われる。15は、底部から胴部が屈曲して立ち上がり、開きも大きい。

16～23は土師器の坏である。16、17はロクロを使用せず、体部全面にヘラ削りが施される。16は、平底の底部から体部がゆるやかに内弯して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。17は、体部が大きく内弯し、口縁部はほぼ直立する。18～23は、ロクロ成形の坏である。ほぼ同形であるが、20は体部の開きが大きく、21はやや底が深い。体部下位にヘラ削りが施される。18、19は、底部と体部との境にやや丸味があり、21～23は、明確に区別される。22、23には墨書が施される。22は「井」と思われる。24は異形の土器である。胴部は直線的な筒状で、内面に輪積痕が認められる。底部に焼成前の穿孔が施されているので、甑の可能性が強い。

第106図は須恵器である。25～27は甕である。25は、丸味のある胴部から口縁部がゆるやかに外反して立ち上がり、ラッパ状に開く。口唇部は折り返され、縁帯状になる。26は、直線的な胴部から口縁部が短く外反する。口唇部が折り返されて縁帯状になり、やや受け口気味である。口縁部直下に把手を持つが、数は不明である。器形から甑の可能性がある。22は坏である。底部から体部がゆるやかに内弯して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。29は坏蓋である。しっかりした宝珠形の鉦を持つ。



第105図　001号住居跡出土土器実測図(1)(1／4)



第106図　001号住居跡出土土器実測図(2)(1／4)

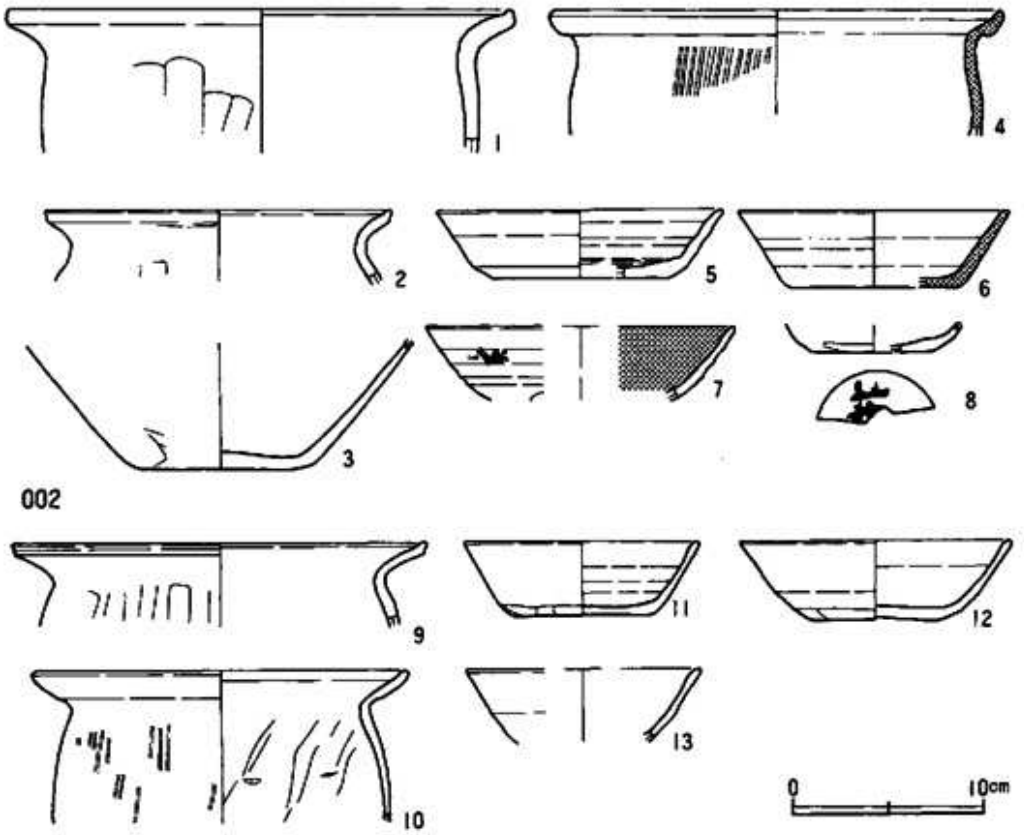
002号住居跡出土土器（第107図１～８）

１～３は土師器の甕である。１は、直線的な胴部から口縁部が短く外反する。口唇部は短く直立し、受け口状になる。口縁部はやや肥厚する。２は、外反した口縁部から口唇部が外傾して短く立ち上がり、受け口状になる。３は、底部から胴部が外傾して、直線的に立ち上がる。４は、須恵器の甕である。やや丸味のある胴部から口縁部が短く外反する。口唇部は折り返されて縁帯状になり、受け口状になる。

５、７、８はロクロ成形の土師器の坏である。５は、底部から体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。かなり強いロクロ痕が内面に見られる。７は、わずかに内弯した体部から、そのまま口縁部に至る。体部外面に墨書が施されるが、字体は不明である。内面には、黒色処理が施されている。８は、底部に墨書が施されるが、字体は不明である。６は、須恵器の坏である。底部から体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。

003号住居跡出土土器（第107図９～13・図版46）

９、10は土師器の甕である。やや長胴と思われる胴部から口縁部が強く外反している。９は、口唇部が外傾して短く立ち上がり、やや受け口状になる。10は、口縁部下位がわずかにくびれ、口唇部は丸く、わずかに受け口状である。11～13は、ロクロ成形の坏である。底部から体部が外傾して立ち上がり、わずかに内弯しながら口縁部に至る。口縁部はやや外反し、わずかに肥厚する。口唇部は丸い。

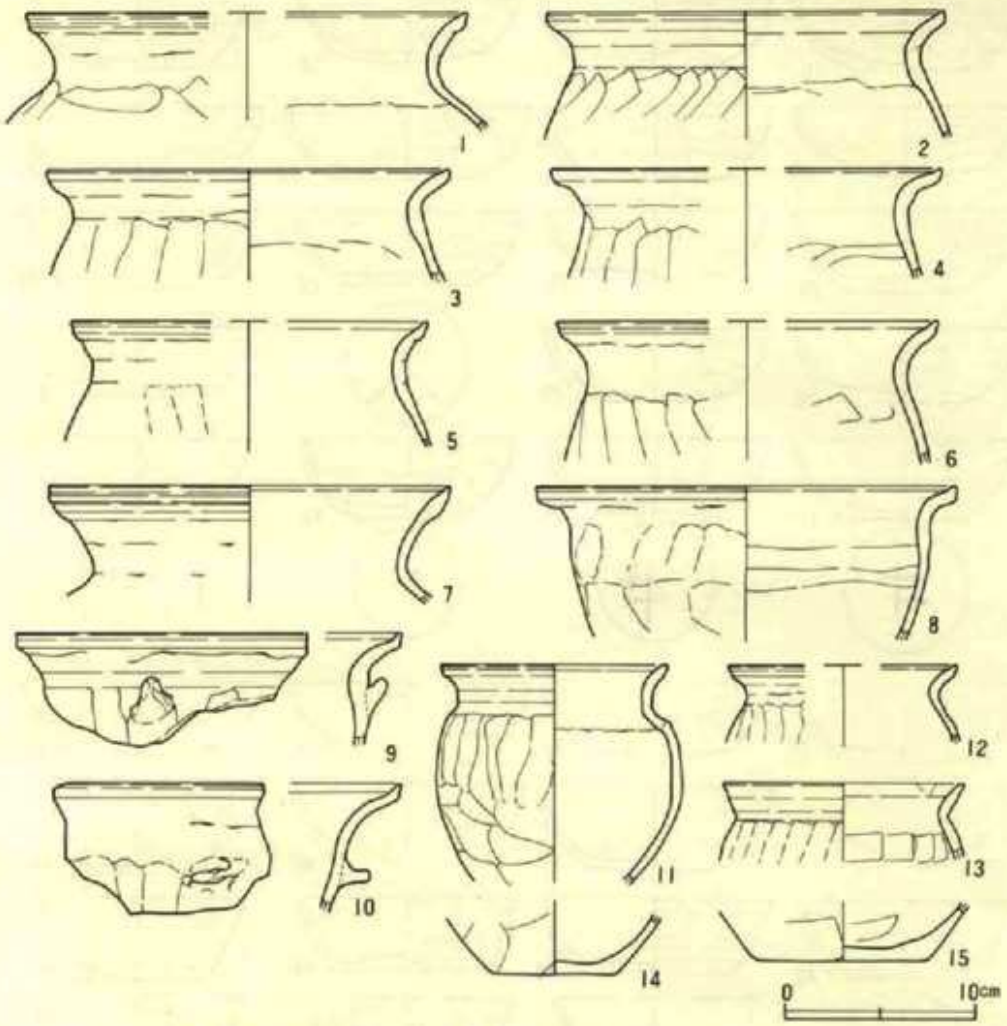


第107図　002号・003号住居跡出土土器実測図(1／4)

004号住居跡出土土器（第108図～第110図・図版46～48）

土器の出土量が多く、特に多量の坏片が検出されている。

第108図は土師器の甕である。1～6はほぼ同形と思われる。やや丸味のある胴部から、口縁部が外反し、口唇部がわずかに立ち上がり、受け口状になる。1、2、5、6は、口唇部がつまみ出されたようになっている。3、4は、口唇部の立ち上がりが弱く、断面が三角形である。7は、口縁部が大きくラッパ状に開き、上位が肥厚する。口唇部は尖り気味で、つまみ出されたようになる。須恵器の器形を模倣したと思われる。8は、深鉢形で、胴部と口縁部との境のしまりはほとんどなく、口縁部が短く外反する。口唇部が短く直立し、受け口状で、断面は三角形になる。9、10は甑と思われる。器形は8と同じと思われるが、口唇部がつまみ出されたようになり、口縁部直下に把手を持つ。把手の数は不明である。9は棒状、10は板状の把手である。11～13はやや小型の甕である。11は、玉子形で丸味のある胴部から口縁部が直立し、上位で外反して口唇部に至る。口唇部はわずかに受け口状になる。胴部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。12は、1、2、5、6に似る。13は、胴部から口縁部が外傾して直線的に

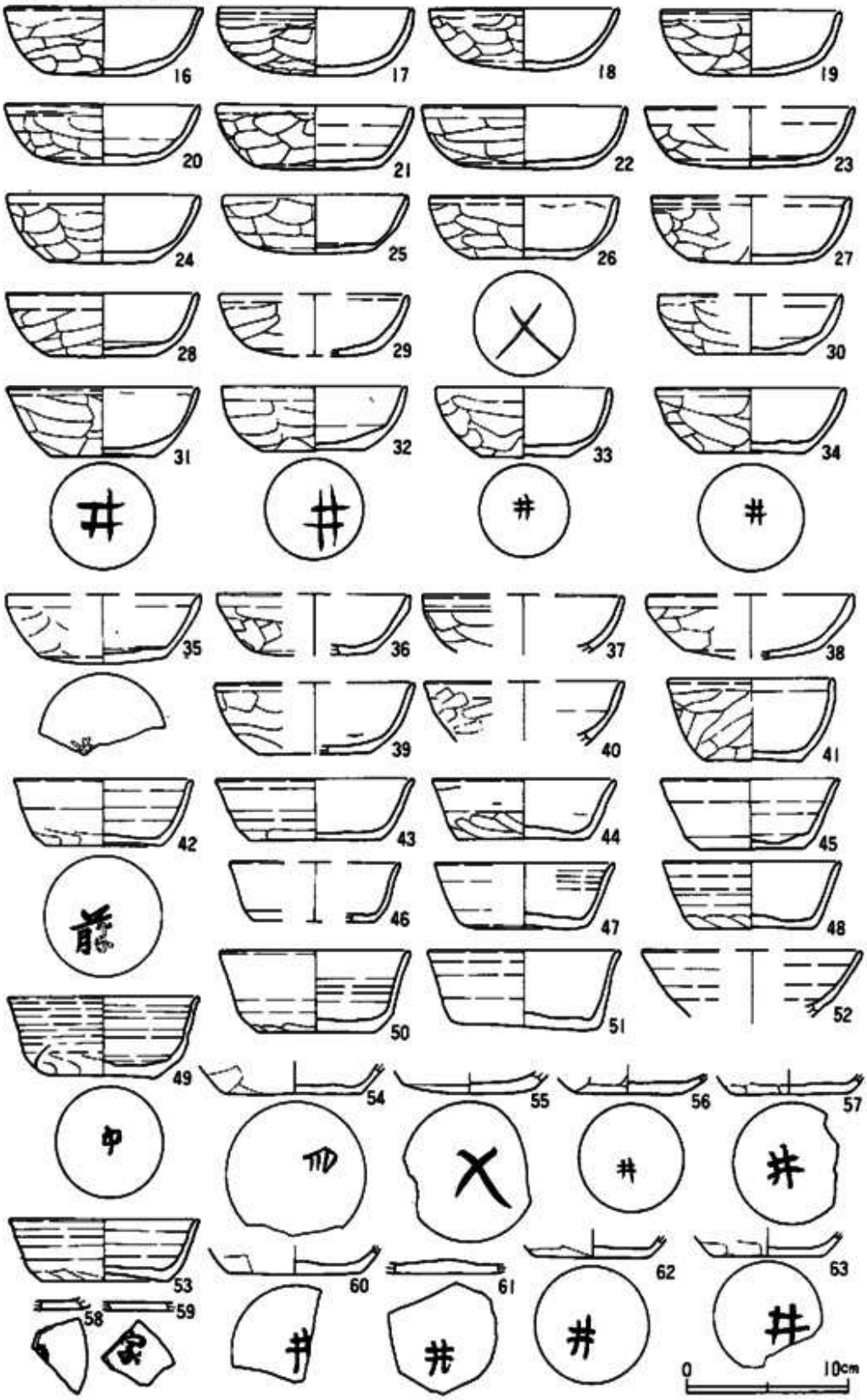


第108図　004号住居跡出土土器実測図(1)(1／4)

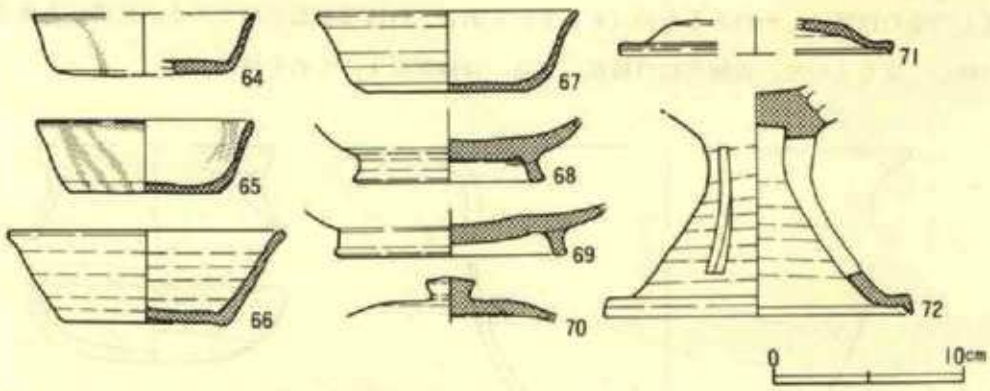
立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。胴部と口縁部との境にしめがみられる。14、15は底部である。14はやや小型と思われる。

第109図は土師器の坏である。16～40は体部全面にヘラ削りが施されている。ほぼ同形であるが、口唇部がほぼ真上を向くもの(17、18、21、22、25、26、30、33、36、37、38)と、やや開き気味のもの（16、19、20、23、24、27、28、29、31、32、34、35、39、40）がある。底部もやや丸底のもの（16～18、20、23、25、27、29、35、36、38）と、平底のもの（19、21、22、24、26、28、30～34、39）がある。また、底部と体部との境にしめのあるもの（24～26、31、33）もある。41は、体部がやや深く、鉢に近い形をしている。

42～53はロクロ成形の坏である。体部下位にヘラ削りを施されたものが多い。体部の開きがやや小さく、やや深めのものが多い。52は、体部の開きが大きい。また、底部と体部との境



第109図　004号住居跡出土土器(2)(1／4)



第110図　004号住居跡出土土器実測図(3)(1／4)

が大きく屈曲するもの（45、47、48）もある。

墨書が多いのも、この住居跡の特徴である。「井」が多く、他に「前」、「中」、「皿」、「×」、「家」があり、字体の不明なものもある。土師器の坏の底部に多く、とくに、ヘラ削りの坏に多い。「井」については、本遺跡に東接して、「井戸作」の字名があり、台地の崖下に地下水の湧水がみられる。

第110図は須恵器である。64～67は坏である。64、65は体部の開きがやや小さく、口縁部がわずかに外反する。65は、口縁部がわずかに肥厚する。66は、底部から体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。体部の開きは大きい。67は、底部から体部が内弯しながら立ち上がり、中位から外反して口縁部に至る。68、69は、高台付盤（皿）の底部である。断面方形の高台が付く。70、71は坏蓋である。70は、宝珠形の鈕がつく天井部、71は周縁部で、端部が小さく折り曲げられている。

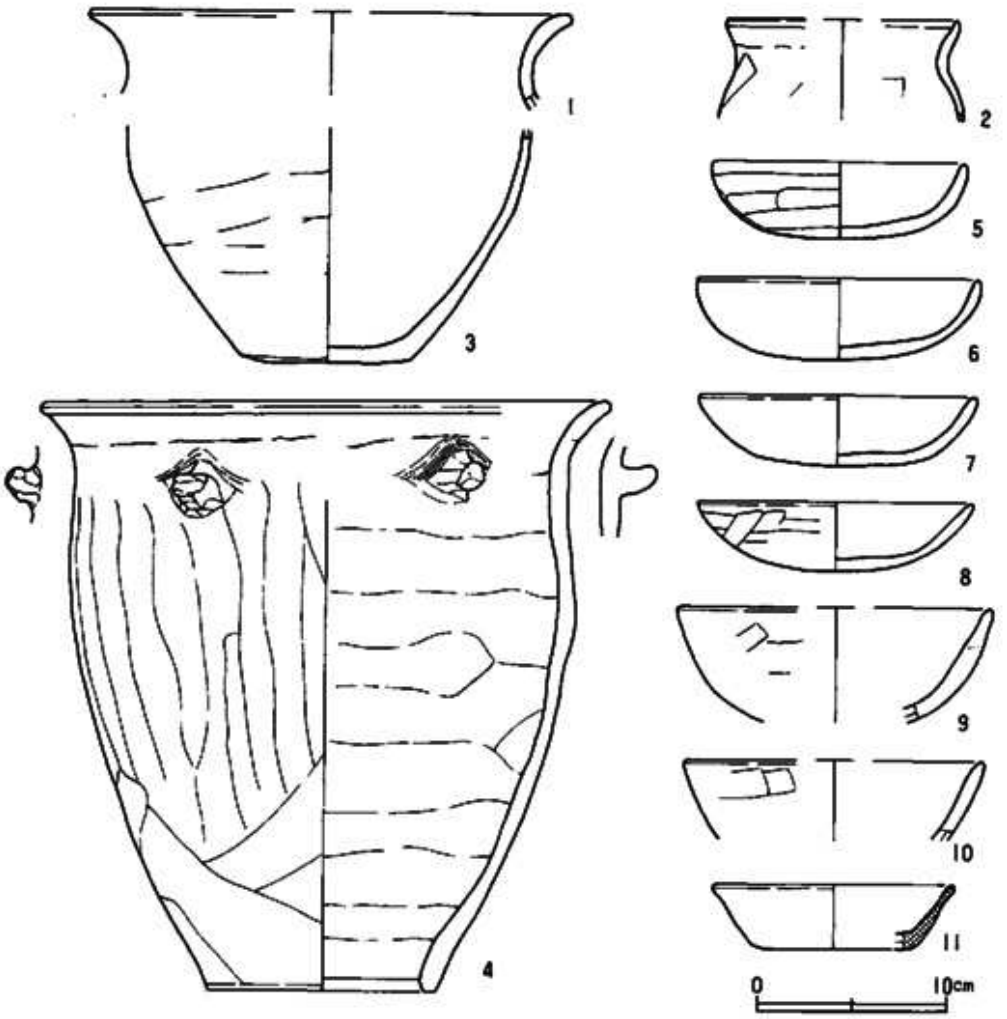
72は高坏の脚部である。一段透かしであるが、高さがあり、大きくラッパ状に開いているところから6世紀後半代のものと思われる。

006号住居跡出土土器（第111図・図版49）

1～3は土師器の甕である。1は、口縁部が強く外反し、口唇部は丸く、やや肥厚している。2は、やや丸味のある胴部から、口縁部が外反して立ち上がり、口縁部はつまみ出されたように短く直立する。3は、甕の底部である。底部から胴部がわずかに内弯しながら立ち上がり、ほぼ中位からゆるやかに内弯する。4は、土師器の甑である。胴部に丸味のない甕形であるが、口縁部直下の4か所に把手が付けられている。口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。

5～10は土師器の坏である。やや丸底で、体部全体にヘラ削りが施されている。体部はゆるやかに内弯し、口縁部が直立するもの（5、6）と開き気味のもの（7～10）がある。底部と

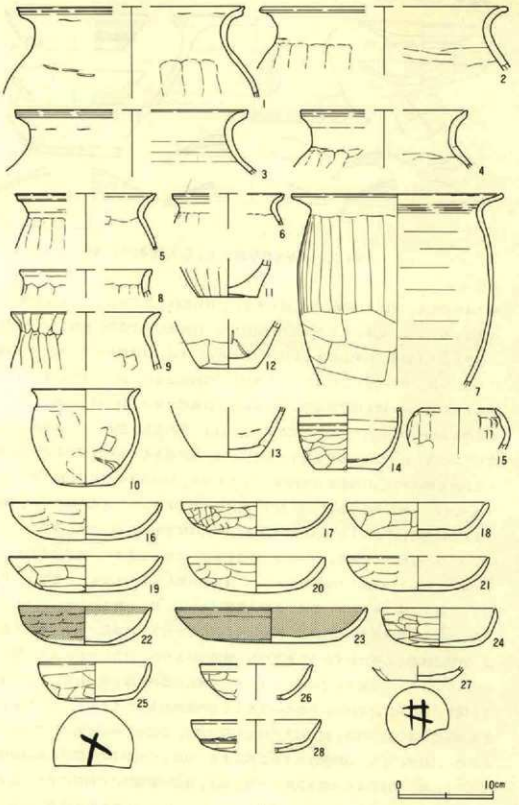
体部との境の内面にしめのあるもの（6、8）もある。11は須恵器の坏である。底部から体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部直下にしめを持つ。



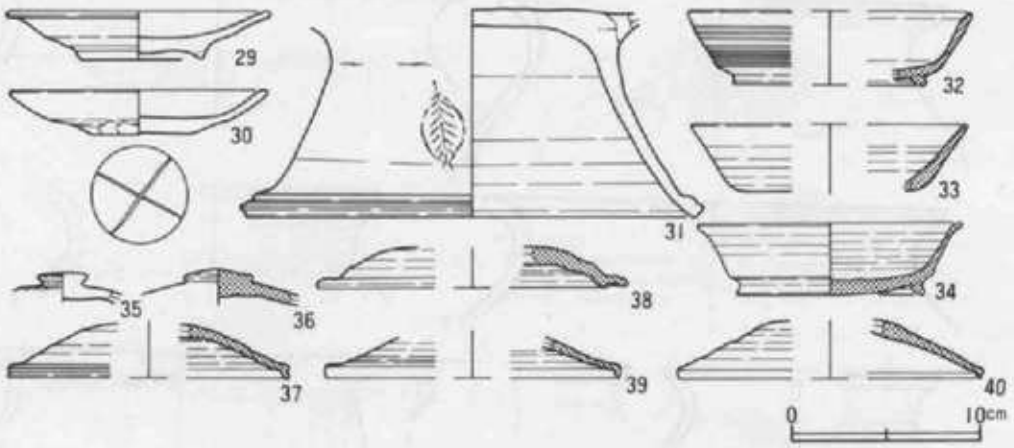
第111図　006号住居跡出土土器実測図(1／4)

008号住居跡出土土器（112、113図・図版49、50）

1～13は土師器の甕である。1は、丸味のある胴部から口縁部が直立し、上位で強く外反する。口唇部はつまみ出されたように短く外反し、受け口状になる。2は、口縁部が強く外反し、口唇部は丸く、ラッパ状に開く。3は、口縁部が強く、短く外反し、口唇部が小さく、つまみ出されたように開いて立ち上がり、わずかに受け口状になる。口縁部がわずかに肥厚する。4は、口縁部がほぼ直立し、上位で外反して口唇部に至る。口唇部は短く開いて立ち上がり、受け口状になる。5は、口縁部が外傾して立ち上がり、上位で小さく外反する。口唇部は短く外反し、



第112図　008号住居跡出土土器実測図(1)(1／4)



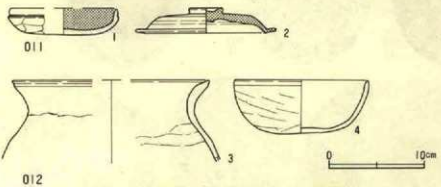
第113図　008号住居跡出土土器実測図(2)(1／4)

受け口状である。6は、口縁部が短く、強く外反し、口唇部は小さく外反して立ち上がり、受け口状になる。7は、丸味のあるやや長めの胴部から、口縁部がほぼ直角に外反し、口唇部がごく小さく立ち上がり、わずかであるが受け口状である。8は、口縁部が小さく外反し、口唇部は丸い。9は、やや肥厚した口縁部が短く外反し、口唇部は丸い。10は、小型の甕である。丸味のある胴部から、稜を境に口縁部が短く外反し、口唇部は丸い。11～13は底部である。胴部が底部からゆるやかに内弯しながら立ち上がる。14は、甕の底部と思われる。内外面にロクロ成形の跡がみられ、全体に器壁が薄手である。15は、無頸壺ともいうべき形である。ほぼ球形と思われる胴部から、口縁部が短く内傾して立ち上がり、口唇部はやや尖り気味である。

16～28は、土師器の坏である。16～22は、盤に近い形である。やや丸底の底部から、体部がゆるやかに内弯して立ち上がり、口縁部に至る。18は、ほぼ平底である。23は、大型で、ていねいなつくりの盤形の坏である。24～27は、体部全面にヘラ削りが施され、底部はやや丸底である。28は、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が外傾して立ち上がる。口唇部はわずかに内弯し、尖り気味である。25、27は、底部に墨書「×」、「井」が施される。

29、30は土師器の皿である。29は、断面三角形の高台が付き、口縁部が小さく外反する。30は、底部と体部との境にわずかなしめを持ち、体部はゆるやかに内弯しながら大きく開く。底部にヘラ記号「×」が施されている。31は、大形の高台付盤の台部と思われる。ラッパ状に大きく開き、裾部端に段を持つ。外面にヘラ描きで木の葉状の文様が施されている。32～34は須恵器の坏である。32、34は、高台付きの坏である。32は、底部から体部が外傾して立ち上がり直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。34は、やや厚手の底部から体部が外反して立ち上がり、口縁部はやや開き気味である。33は、体部が直線的に口縁部に至る。35は、土師器の坏蓋の天井部である。扁平な宝珠形の鈕がつく。36～40は須恵器の坏蓋である。36は、

扁平な宝珠形の鈕がつく。38は、内面に小さなかえりを持つ。37、39、40は、直線的な周縁部から縁端部が小さく折り曲げられ、37は、小さく外反している。



第114図　011号跡・012号住居跡出土土器実測図(1／4)

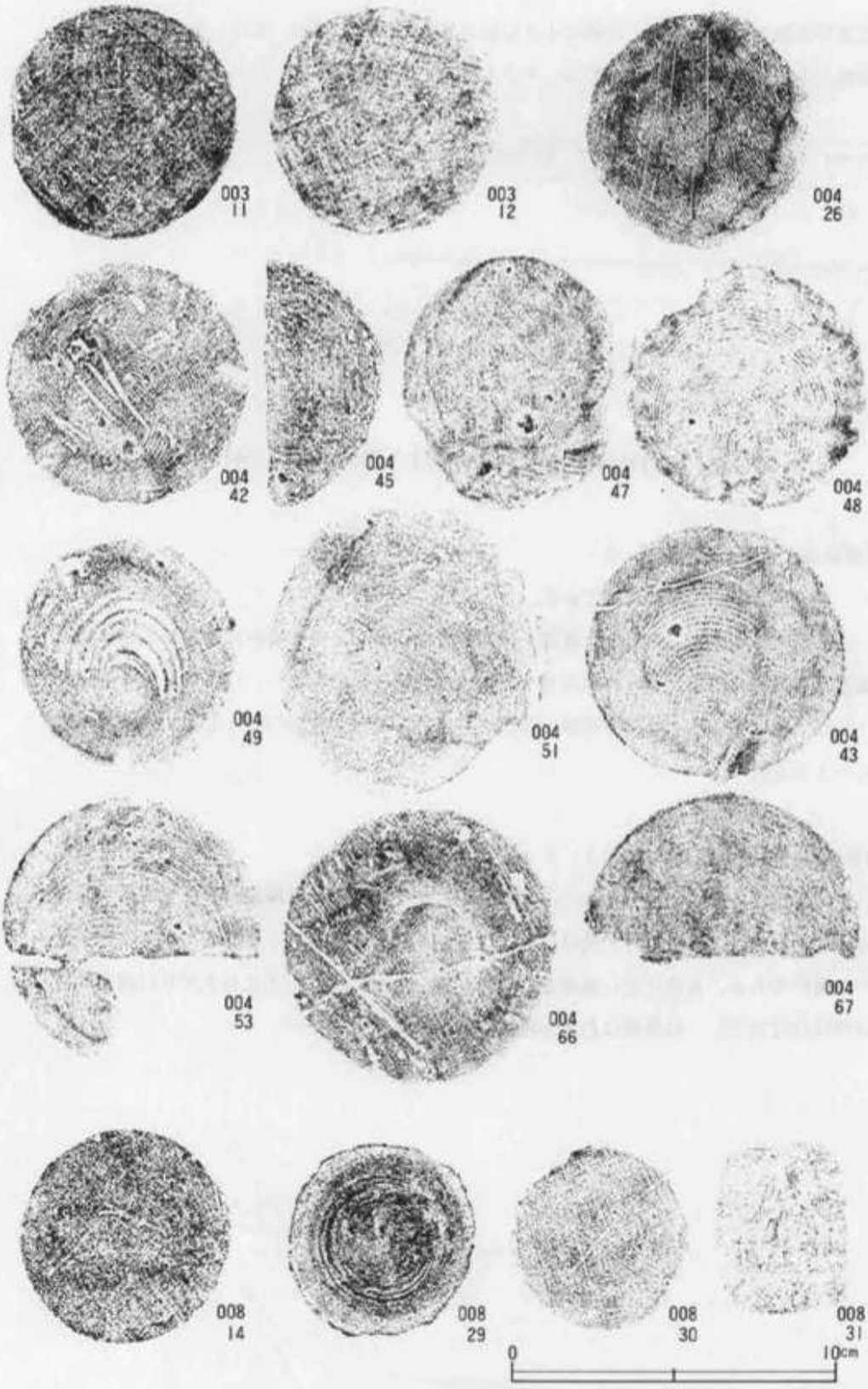
011号跡出土土器（114図1、2）

遺構は、調査区北部の土壙状遺構である。

1は、土師器の坏である。丸底で、底部と体部の区別はなく、ゆるやかに内弯して口縁部に至る。体部と口縁部との境が受け口状になり、口縁部下端にしめをもつ。口縁部は短く直立し、口唇部は尖り気味である。2は、須恵器の坏蓋である。扁平な宝珠形の鈕をもち、周縁部内面に小さなかえりを持つ。

012号住居跡出土土器（第114図3、4・図版50）

3は、土師器の甕である。やや丸味のある胴部からやや肥厚した口縁部が外反する。口唇部はつまみ出されたように外反して、受け口状になる。4は、土師器の坏である。全体に薄手で、やや深めの椀形である。丸底に近い底部から体部がゆるやかに内弯して立ち上がり口縁部に至る。口縁部はほぼ直立し、口唇部はわずかに尖り気味である。

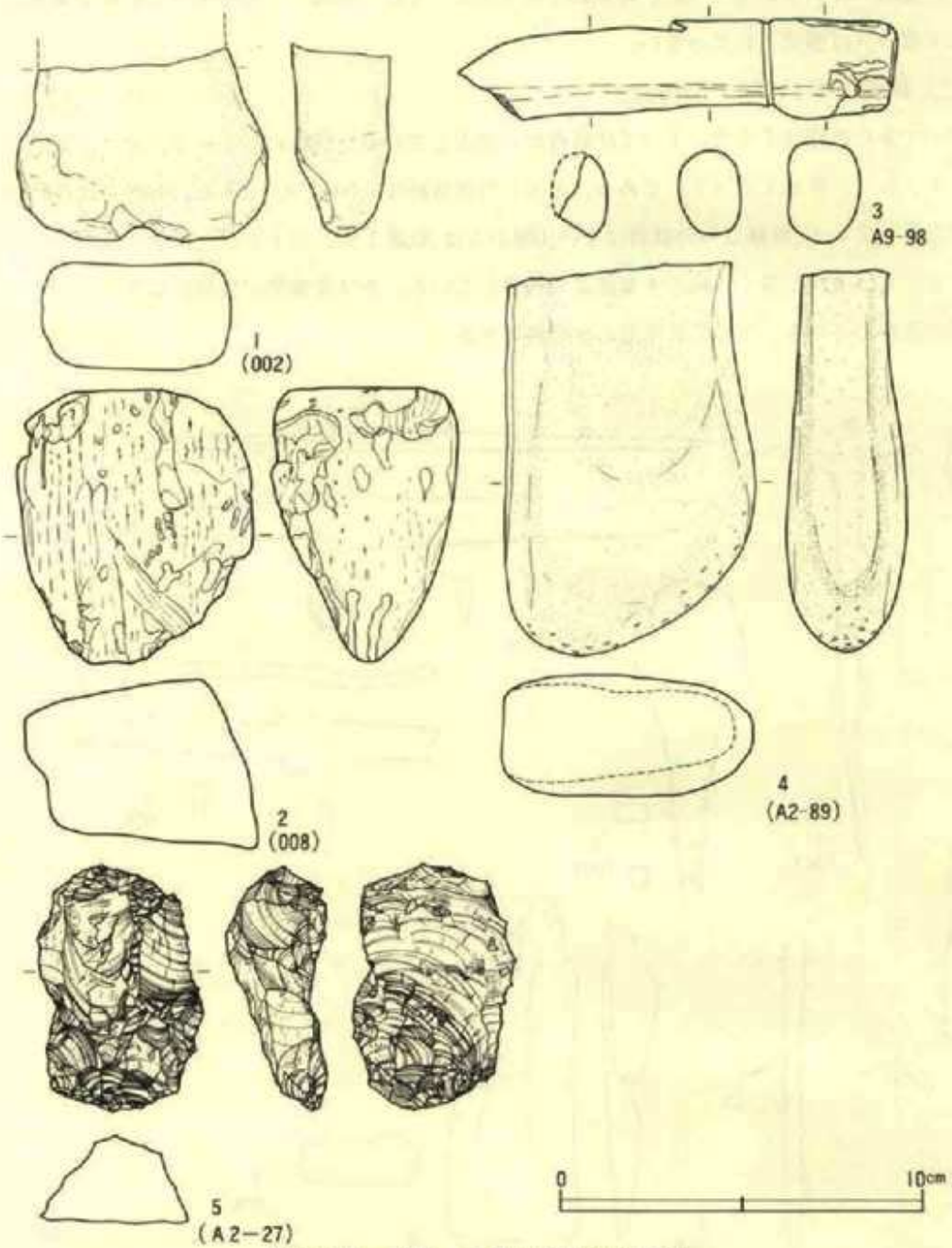


第115図　出土土器拓影図(1／2)

2項　その他の出土遺物

(1) 石器類（第116図・図版52）

石器の出土量は少ない。図示できたのは、砥石3点（1、2、4）、石刀1点（3）、剥片

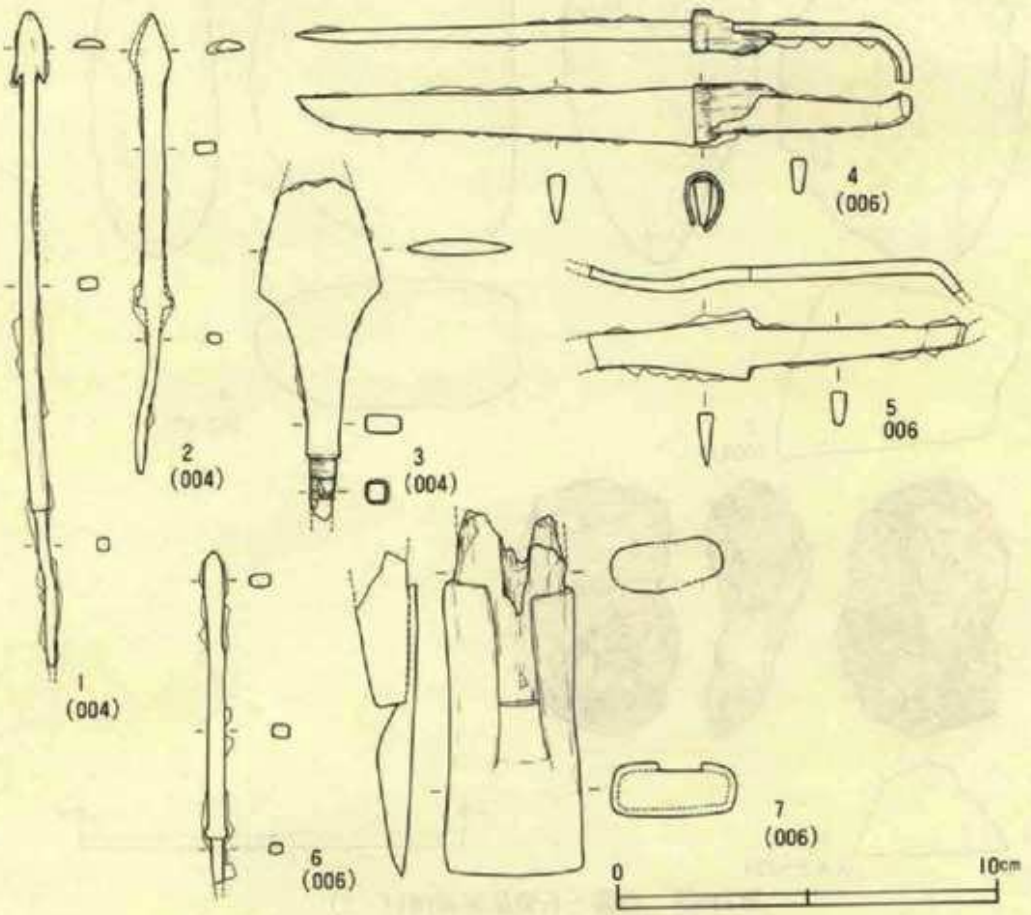


第116図　石器・石製品実測図(1／2)

1点（5）、である。1、2は、住居跡に伴うものと思われる。両者とも砥石である。2は、軽石質である。全面が磨滅し、断面半円形の溝状擦り跡があり、細い棒状のものを磨いた可能性がある。3は、石刀である。基部と刃部の一部が遺存している。基部は丸く作り出され、刃部には刃状の稜がつくられている。縄文時代の遺物であるが時期は不明である。4は、砥石である。遺構に伴わなかったため、時期は不明である。5は、黒曜石のやや大きな剝片である。他に黒曜石片は検出されていない。

(2) 鉄器（第117図・図版52）

図示できた鉄器は7点で、すべて住居跡から出土している。鉄鏃4点(1～3、6)、刀子2点（4、5）、斧頭1点（7）である。出土した住居跡は、004、006である。004からは鉄鏃が3点出土している。鉄鏃以外の鉄器はない。006からは、鉄鏃1点、刀子2点、斧頭1点が出土している。4は遺存が良く、柄の木質部まで残存している。7は装着部が袋状になり、その中に木質が遺存している。すべて真間期の住居跡である。



第117図　鉄器実測図(1／2)

第Ⅳ章　小結

第1節　小池麻生遺跡

今回の調査では、縄文時代中期から奈良時代以後にかけての遺構群が発見され、周辺一帯に広がる一大集落の存在を知ることができた。

発見された遺構を時代ごとにまとめてみよう。

縄文時代中期　住居跡　2軒　土壙　1基

古墳時代後期　住居跡　11軒

歴史時代　　住居跡　14軒

時期不明　　建物跡　2棟

遺構数はあわせて30を数えることが出来る。道路幅と言うきわめて限られた調査区内から検出されたものとしては、かなり密度の高いものであることがいえよう。

本遺跡は、以前、縄文時代中期として報告されてきたが、当該期の遺構が比較的少なかったことは、遺跡営為の面で注目されるものである。

009号住居跡の平面形は長方形状を示し、主柱穴も長軸左右壁面沿いに並ぶ。掘り込みも105cm前後と深い。床直上より出土した縄文土器片は、口縁直下に鋸歯状文を施しており、土器片から判断するならば縄文時代中期後葉に区分できる。また、014号住居跡は楕円状を呈し、主柱穴も炉をとり囲んで検出されている。炉は竪穴の中央やや南東側にあり、縄文中期の深鉢形土器が利用されている。胴下半部が欠失しており、埋甕炉として使用されたものであった。

古墳時代の住居跡は11軒、歴史時代の住居跡は14軒確認されている（008、028、029、030号住居跡は、遺物少量のため時期不確定）。これらの中には、良好な土器のセットを出土した住居跡もあり、それをもとに、土器の分類を試みようと思う。

土器の形式は、鬼高式と真間式である。

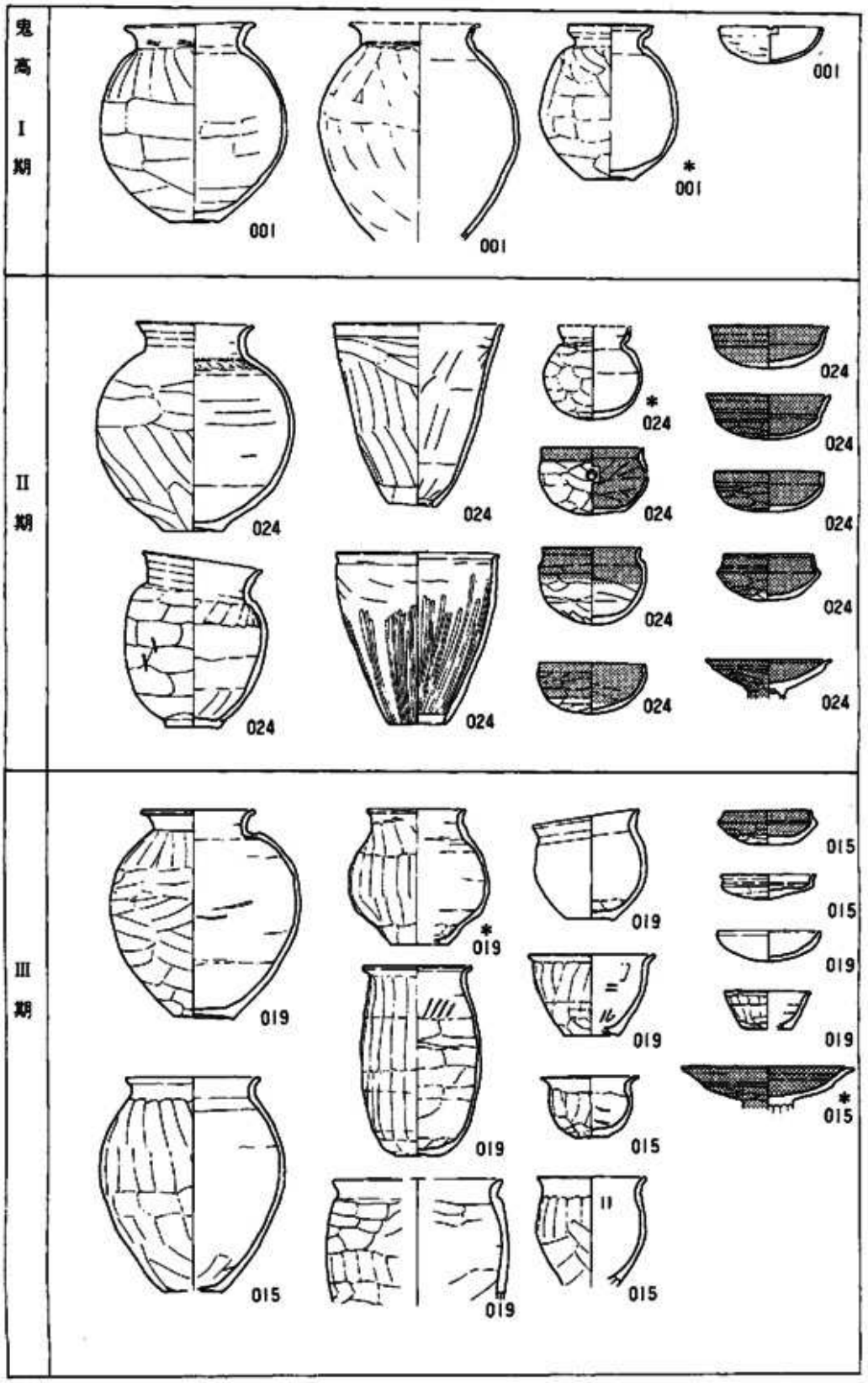
鬼高式土器については、日本考古学研究所集報Ⅳの「房総における鬼高期の研究（研究編）」[2]、真間式土器については『山田水呑遺跡』[3]を主に参考にして行った。

調査における鬼高期の住居跡は、001、005、006、015、017、019、020、024、025、026、032、である。各住居跡出土土器を集報の分類に照し合わせてみると下記のようになる。

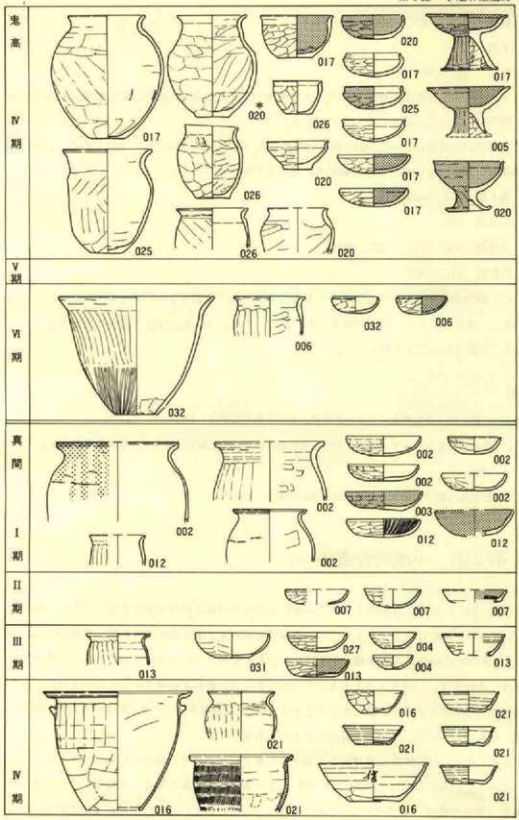
Ⅰ期　001

Ⅱ期　024

Ⅲ期　019、015



第118 図　出土土器集成図(1)



第119図　出土土器集成図(2)

第Ⅳ章　小結

Ⅳ期　017、025、026、020、005

Ⅴ期　なし

Ⅵ期　032、006

それぞれの土器を上の順にならべると次の図のようになる。＊印の土器は、集報に掲載された土器の中に該当した器形のないものである。

真間期の住居跡は、002、003、004、007、012、013、016、021、027、031である。全体の遺物数は少ない。山田水呑遺跡の編年表に従うと下記のようになる。

第Ⅰ期　002、003、012

第Ⅱ期　007

第Ⅲ期　004、013、027、031

第Ⅳ期　016、021

ただし遺物の数が少ないので大まかな目安である。出土土器をならべると次の図のようになる。

今回、極めて限られた部分の調査であったが、これらの成果が周辺の調査の進展のなかで、大きく評価されることを願いたい。

註

（1）戸田哲也・平岡和夫『小池麻生遺跡』芝山町教育委員会　1976

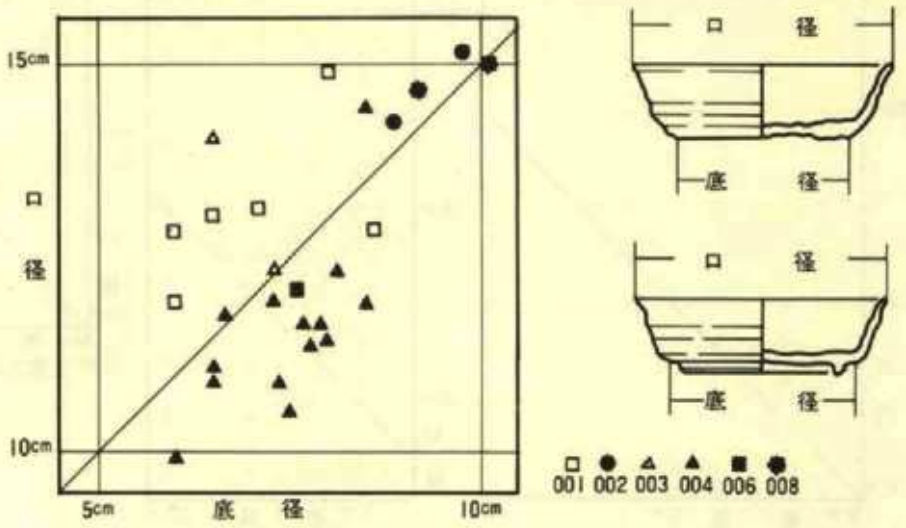
（2）鬼高期研究グループ「房総における鬼高期の研究（研究編）」『日本考古学研究所集報Ⅳ』1982

（3）松村恵司他『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会　1977

第2節　小池向台遺跡

第120図は小池向台遺跡山土、ロクロ成形形の坏の口径と底径の関係を図で示したものである。[1] 出土住居別に印をかえてあるので、各住居跡別のまとまりがわかると思われる。とくに、002と004の坏が中央の直線を境に、上下にわかれて分布しているといえるであろう。中央の直線は、底径をX、口径をYとすると、Y＝X＋5の式が表わす直線である。[2] このように、坏の口径と底径の比があるまとまりをもつことは、以前から指摘されている。[3] 竪跡出土の須恵器を計測したものが多いが、土師器を計測したものもある。[4]

第121図は、千葉県内の集落跡から出土した歴史時代のロクロ成形を対象にグラフ化したものである。[5] 斜めの直線は、第120図と同じ、Y＝X＋5の直線である。土師器については、山田水呑遺跡の他は、ほぼ同じような点の分布を示しているといえる。[6] 須恵器は、山田水呑と江



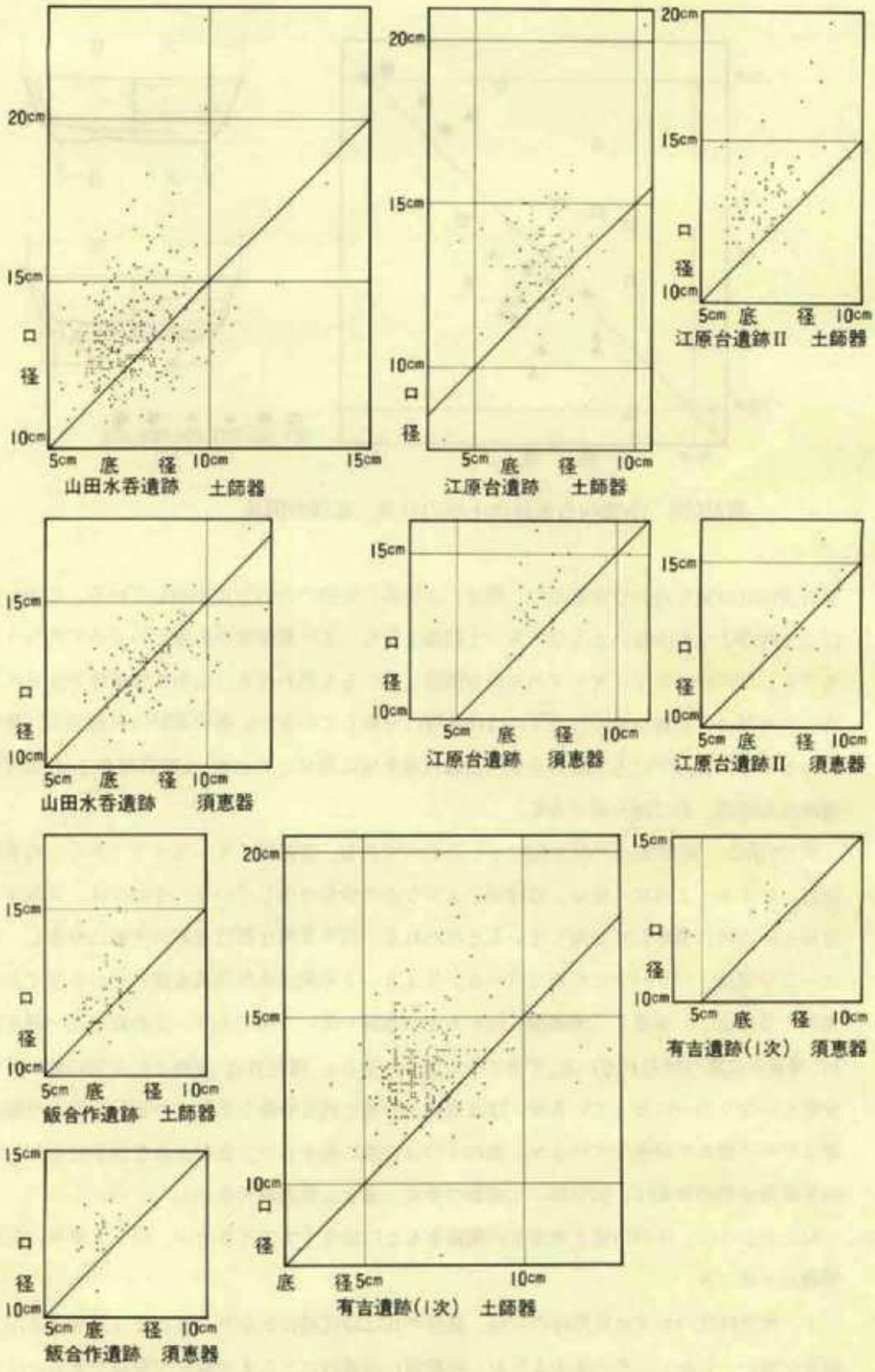
第120図　小池向台遺跡出土坏の口径、底径の関係

原台遺跡Ⅱが同じ点の分布を示し、他は、土師器と同様の点の分布を示している。しかし分散は、土師器よりも少ないようである。土師器よりも、より規格性があるといえるであろう。ここでも、点の分布とＹ＝Ｘ＋５の直線が関係していると思われる。山田水呑遺跡と江原台遺跡Ⅱの須恵器は、直線を中心に上下にほぼ均等に分布しているが、他の遺跡は直線の上に集中して分布する。直線下にも点はあるが、直線付近を境に急減している。土師器編年上は、山田水呑遺跡は真間期、他は国分期である。

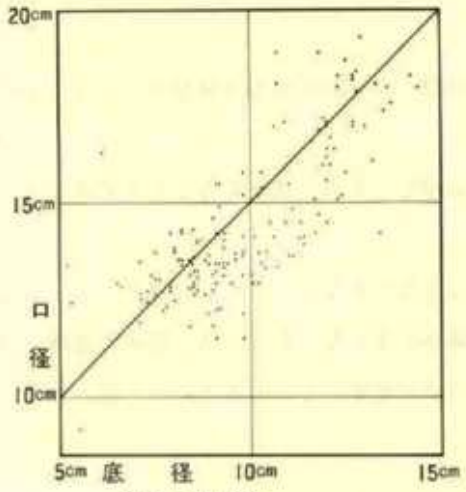
第122図は、窯跡出土の坏を図に示したものである。直線は、Ｙ＝Ｘ＋５である。南多摩窯址群[7]とＮＪＡ－２号窯の他は、ほぼ同じような点の分布を示している。それらは、直線下で、直線と同方向に集中して分布していると思われる。南多摩窯址群は直線の上側に分布し、ＮＪＡ－２号窯は、バラバラに分布している。ＮＪＡ－２号窯は灰釉陶器も焼いている窯である。老洞１号窯は、「美濃」「美濃国」印のある須恵器を焼いた窯であり、８世紀の第一四半世紀に、操業が位置づけられている。グラフをこまかく見ると、陶邑Ⅱは、資料とした窯の数が多く、分散もかなり均一になっているが、ほぼ老洞１号窯と同じ分布を示している。老洞１号窯は直線よりやや離れて分布しているが、他の３つは直線に接するか、含むような形で分布している[8]。南多摩窯址郡の分布は、国分期の土師器の分布と重なる度合が大きい。

以上のように、坏の口径と底径との関係をもとに話をすすめてきたが、以下、簡単に結論と問題点を述べる。

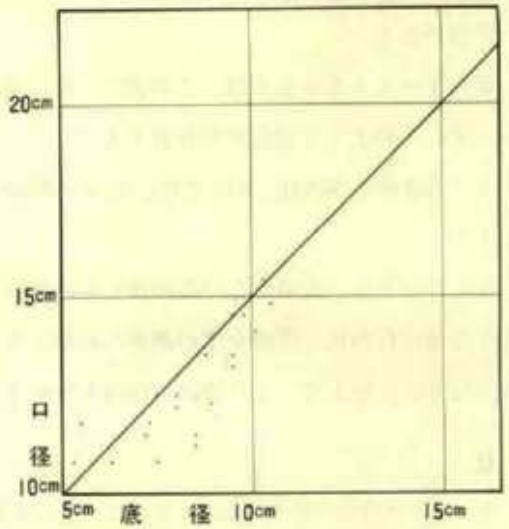
１、歴史時代のロクロ成形坏の口径、底径の比は時代的にかなりのまとまった分布を示す可能性が強い。しかし、そのまとまりが、時期別、遺構別にどこまで細かく分類できるかは今後



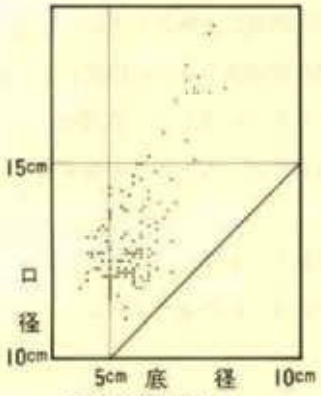
第121図　住居跡出土坏の口径、底径関係図



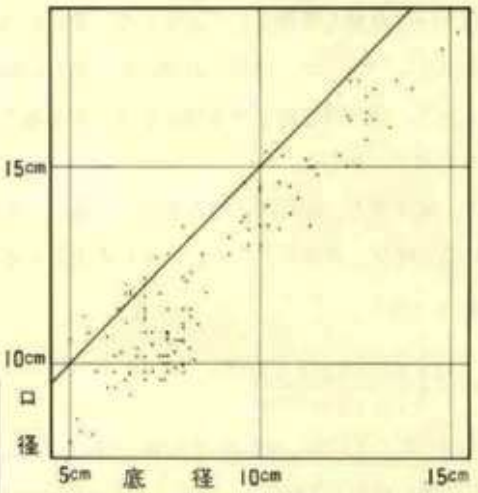
永田・不入窯



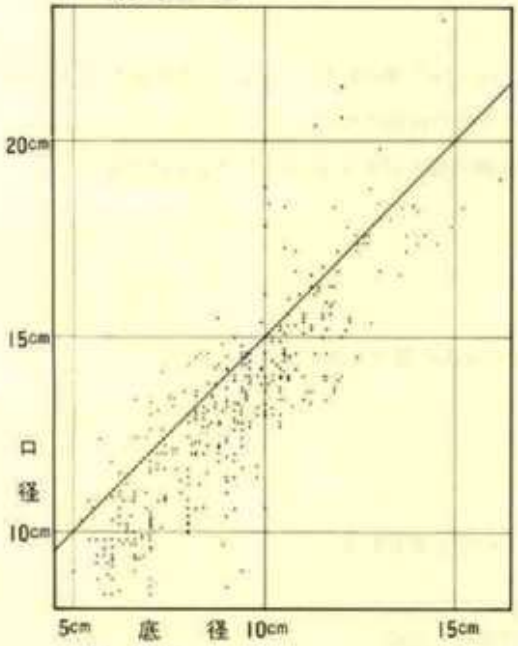
木業下遺跡



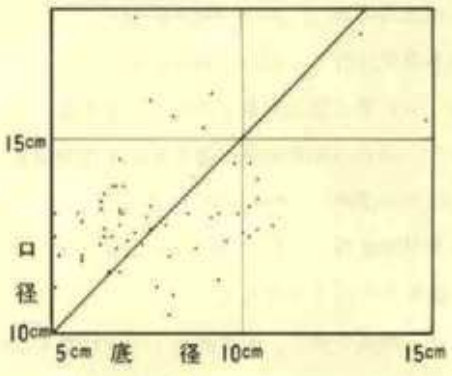
南多摩窯址群



老洞古窯址群　1号窯



陶邑II



NJA－2号窯

第122図　古窯跡出土須恵器坏の口径、底径関係図

の問題である。

2、Y＝X＋5もしくは、この式に近い直線は口径、底径比の分布を区分するラインかどうか。又、このような線自体が存在するのかどうか。

3、各遺跡を図表化、又は式化して、その特徴を表現し、互いに比較することが可能であるかどうか。

3については、資料がないため詳しくは述べることはできない。しかし、現在のように大規模な発掘が行われ、遺跡全体が調査の対象となる場合が多くなったことは、従来の遺構、遺物の分析方法に加えて、より遺跡の特徴を分析する方法が必要になってきていると思われる。

註

(1)　ロクロ成形の坏を対象としたのは、ある程度の規格性があると推定したからである。また、正円に近い口縁部、底部をもつと考えたからでもある。底部と体部との境に丸味のある坏は、接地した場合の円の直径を底径として測定した。第121、122図は、報告書の計測値をもとに作成した。計測値のない坏については、挿図を計測した。高台付坏は、高台を除いた形で計測した。底部は、ヘラ削りによって、切り離し時よりも径が小さくなる場合が多いと考えられるが、もとの形を復原せず、削られた底部を計測した。

(2)　統計学上、相関関係にある点の分布に、その点の配列を代表するような直線を求めることを直線回帰と呼び、直線の式 $y=ax+b$ を決定する a、b を求める式は下記の通りである。

$$b=\bar{y}-a\bar{x}$$

$$a=\frac{\Sigma xiyi-(\Sigma xi)(\Sigma yi)/n}{\Sigma xi^2-(\Sigma xi)^2/n}$$

$\bar{x}$はxの値の平均値。$\bar{y}$もyの平均値。nは点の数。Σxiはxの値の総和。Σyiはyの値の総和。Σxi^2はxの値の2乗の総和。$\Sigma xiyi$は、ある1点のxとyをかけた値の総和である。

試みに山田水呑遺跡の須恵器の値と、南多摩窯址群の値を計算すると以下のようになる。

山田水呑遺跡　　$y=0.94x+5.31$

南多摩窯址群　　$y=1.71x+3.57$

なお、小数第3位以下を4捨5入してある。

また、両者の相関関係の強さを示す相関係数（r）は次の通りである。

山田水呑遺跡　　r＝0.75

南多摩窯址群　　r＝0.80

（小数第3位以下4捨5入）

これらの式や値は、両遺跡の1つの特徴を示していると思われる。

参考文献

大村　平『統計解析のはなし』日科技連出版社　1980

(3) 福田健司「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻第3号　1978

服部敬史、福田健司「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号 1977

国平健三「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」『神奈川考古』第12号　1981

(4) 国平健三「相模国の奈良・平安時代集落構造（中）」『神奈川考古』第13号　1982

(5) 使用した報告書は下記の通りである。

『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会　1977

『江原台』江原台第1遺跡調査団　1979

『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』　千葉県教育委員会　1980

『佐倉市飯合作遺跡』（財）千葉県文化財センター　1978

『千葉東南部ニュータウン3－有吉遺跡（第1次）－』（財）千葉県都市公社　1975

(6) 点の分布は、計測資料の多少にも関係すると思われる。点の数が多くなれば、これらの中にも、山田水呑遺跡のような分布になる遺跡があるかもしれない。しかし、現在の傾向がより強くグラフに表われる可能性が大きい。

(7) 使用した報告書は下記の通りである。

『千葉県市原市永田・不入須恵器窯跡調査報告書』千葉県教育委員会　1976

『南多摩窯址群』八王子バイパス延水遺跡調査会　1981

『木葉下遺跡』（財）茨城県教育財団　1982

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会　1981

『陶邑II』（財）大阪文化財センター　1978

『徳重西部地区埋蔵文化財発掘調査報告』名古屋市教育委員会　1976 ＮＪＡ－2号窯の調査成果を収録。

(8) 今回は、古窯址一基ごとの分析は行わなかった。また、陶邑ＩもIIと同様にグラフを作成したが、IIとほとんど同じ結果を得たので、紙面の都合上、点の分散の小さいIIのグラフを掲載した。

表2　小池麻生遺跡遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 m	床面積㎡	主軸方位	壁高cm	主柱穴	周溝	カマド	時期	備考
001号住	隅丸方形	5.10×5.04	20.3	N－48°－W	50～54	8 主柱4	全周	北壁中央	鬼高	貯蔵穴有
002号住	隅丸方形	5.72×5.60	23.8	N－14°－W	45～52	5 主柱4	全周	北壁中央	真間	P₁掘込有
003号住	方形	3.32×3.10	8.2	N－20°－W	25	無	無	北壁中央	真間	カマド残存不良
004号住	隅丸方形	5.25×5.20	24.4	N－49°－W	8～65	4	全周	北壁中央	真間	
005号住	隅丸方形	5.45×5.26	23.0	N－5°－W	42～50	4	ほぼ全周	北壁中央	鬼高	カマド内攪乱有
006号住	方形	3.95×3.88	10.3	N－32°－W	30～46	4	全周	北壁中央	鬼高	
007号住	隅丸方形 (推定)	5.61×(3.08)	(?)	N－40°－W	23～35	1	ほぼ全周	北壁中央	真間	009号住重複
008号住	方形 (推定)	3.96×(3.15)	(?)	N－38°－W	6～12	無	無	北壁中央	歴史	カマド残存不良
009号住	長方形	5.64×3.80	16.3	N－16°－W	23～35	5	全周	不明	縄文中期	
010号住	隅丸方形 (推定)	(7.12)×(2.30)	(?)	不明	18～65	1	全周	不明	不明	¼遺構検出
012号住	方形	4.42×3.86	11.9	N－33°－W	33～48	4	全周	北壁中央	真間	カマドの残存良
013号住	隅丸方形	4.30×4.21	12.2	N－44°－W	21～34	6 主柱4	ほぼ全周	北壁中央	真間	012号住と重複
014号住	楕円形	4.88×4.00	16.8	N－23°－W	18～21	6 主柱5	無	無	縄文中期	
015号住	隅丸方形 (推定)	7.38×(5.54)	(?)	N－26°－W	48～63	4	全周	北壁中央	鬼高	焼失家屋
016号住	方形	3.80×3.55	7.1	N－31°－W	14～22	無	無	北壁中央	真間	015号住と重複
017号住	隅丸方形 (推定)	6.74×(5.04)	(?)	N－39°－W	30～37	3 主柱2	全周	北壁中央	鬼高	貯蔵穴有
018号住	方形	4.30×3.28	(?)	不明	10	無	無	無	縄文中期	土壙
019号住	隅丸方形 (推定)	5.24×(4.58)	(?)	N－45°－W	25～35	3	全周	北壁中央	鬼高	貯蔵穴有
020号住	方形 (推定)	3.90×3.86	13.1	N－4°－W	26～30	4	ほぼ全周	北壁中央	鬼高	
021号住	方形	3.26×(2.66)	(?)	N－34°－W	21～41	1	一部無	北壁中央	真間	東壁に旧カマド有
024号住	方形 (推定)	3.42×(2.92)	(?)	不明	10～12	無	無	無	鬼高	完形土器多い
025号住	隅丸方形 (推定)	6.14×(3.02)	(?)	N－29°－W	24～35	2	全周	北壁中央	鬼高	住居跡¼検出
026号住	方形	4.50×4.45	15.2	N－22°－W	36～48	4	全周	北壁中央	鬼高	貯蔵穴有
027号住	方形	3.82×3.56	9.4	N－19°－W	35～50	4	全周	北壁中央	真間	
028号住	方形	3.06×2.98	5.5	N－32°－W	20～28	無	全周	北壁中央	歴史	032号住と重複 032号住より新
029号住	隅丸方形	5.08×4.80	19.2	N－41°－W	26～35	4	ほぼ全周	北壁中央	歴史	030号跡と重複
030号住	方形	4.20×3.91	11.5	N－15°－W	26～44	4	全周	北壁中央	歴史	029号住と重複 029号住より新
031号住	隅丸方形	4.28×4.15	14.9	N－16°－W	6～72	4	一部無	北壁中央	真間	
032号住	隅丸方形	5.38×4.70	19.1	N－20°－W	20～52	4	全周	北壁中央	鬼高	028号住と重複

表3 001号住居跡出土土器表（第68図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	ほぼ完形	口径16.3 底径 6.2 器高24.6	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、下方向ヘラ削り。中位～下位、右方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、暗褐色。 密。砂粒多。 良。	図版22
2	土師器 甕	胴部	—— —— ——	胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。中位、一部右方向ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、茶褐色。 密。砂粒多。赤色スコリア混。 良。	
3	土師器 甕	完形	10.5 5.8 19.1	口縁部、ヨコナデ。胴部上位、下方向ヘラ削り。中位～下位、右方向ヘラ削り。底部、ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部ナデ。	外面、赤褐色。胴部、一部黒褐色。内面、黒褐色。 密。砂粒多。 良。	図版22
4	土師器 甕	口縁部¼	(12.8) —— ——	口縁部、上方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、暗褐色。 密。砂粒少。 良。	
5	土師器 甕	底部	—— 5.8 ——	底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、赤褐色。 密。砂粒やや多。 良。	
6	土師器 坏	¾	14.8 —— 4.5	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。内面、ナデ。	外面、灰褐色。黒斑。内面、赤褐色。黒斑。 密。砂粒多。小石混。	図版22

表4 002号住居跡出土土器表（第69図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部～胴部	15.6 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ヘラによる調整痕。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、明褐色。内面、暗褐色。 密。砂粒多。 良。	
2	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(25.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。口縁から胴部にかけて煮こぼれた跡がある。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、灰褐色。 内面、灰褐色。煮こぼれ跡は暗灰色。 密。砂粒多。 良。	図版22
3	土師器 甕	口縁部¼	(20.6) —— ——	口縁部、ナデ。内面、ヨコナデ。	内外面、褐色。 やや密。細砂粒多。 良。	
4	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(23.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、上方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、明褐色。黒斑。内面、灰褐色。 密。砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
5	土師器 甕	胴部～底部	—— 9.0 ——	胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、黒褐色。内面、暗褐色。 やや密。砂粒多。 良。	
6	土師器 甕	胴部～底部¼	—— 9.0 ——	胴部、ヘラナデ。底部、木葉痕。内面、ナデ。	内外面、灰褐色。 やや密。粗い砂粒多。 良。	
7	土師器 坏	¾	14.8 —— 3.3	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、右方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、黒褐色。口縁部、赤褐色。 内面、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版22
8	土師器 盤	口縁部～体部¼	(16.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。内面、ヘラ磨き。	外面、黒褐色。内面、暗褐色。 密。細砂粒少。 良。	
9	土師器 盤	¾	15.6 —— 4.0	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢がある。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、灰褐色。 密。砂粒少。 良。	図版22
10	土師器 坏	¼	(13.8) (5.4) 3.5	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。底部、黒斑。 内面、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
11	土師器 坏	½	11.0 —— 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。器面がかなり荒れている。内面、ナデ。	外面、灰褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版22

表5 003号住居跡出土土器表（第69図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
12	土師器 坏	¾	16.2 8.0 3.9	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き	内外面、淡明褐色。内外面、赤彩の痕跡。 密。細砂粒やや多。かなり精製されている。 良。	図版22

表6 004号住居跡出土土器表（第69図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
13	土師器 坏	¼	(8.4) (3.2) 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、灰褐色。断面、暗灰色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
14	土師器 坏	½	(9.8) (4.2) 3.3	口縁部、ヨコナデ。体部ヘラ削りの後ナデ。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、灰褐色。 密。細砂粒少。 良。	

表7 005号住居跡出土土器表（第69図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
15	土師器 甕	口縁部 ¼	(20.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	内外面、褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	
16	土師器 甕	胴部～底部	—— 9.0 ——	胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、赤褐色。内面、灰褐色。 密。細砂粒多。 良。	
17	土師器 坏	口縁部～体部 ¼	(19.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、灰褐色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	
18	土師器 高坏	¾ 脚部欠	17.4 —— ——	坏部、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。内面ヘラ磨き。黒色処理。脚部ヘラ削り後ナデ。削り痕不明瞭。内面、左方向ヘラ削り。	外面、赤彩。内面、黒色。素地は、明褐色。 密。砂粒少。 良。	図版22

表8 006号住居跡出土土器表（第70図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部～胴部	15.2 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版22
2	土師器 坏	½	10.0 —— 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。黒色処理が施されたと思われる。	外面、明褐色。内面、明褐色。口縁部分にスス付着。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	図版23
3	土師器 坏	口縁部～体部¼	(9.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヘラ磨き。黒色処理が施されたと思われる。	外面、明褐色。内面、灰褐色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	

表9 007号住居跡出土土器表（第70図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
4	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(13.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。黒斑。内面、明褐色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	
5	土師器 坏	1/6	(11.8) —— 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、左方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、灰褐色。 密。砂粒やや多。 良。	
6	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(13.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	内外面、赤彩。素地は赤褐色。 密。細砂粒少。 良。	

表10 012号住居跡出土土器表（第70図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
7	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(11.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面ヨコナデ。	外面、淡赤褐色。内面、黒色。断面、赤褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
8	土師器 甕	胴部～底部	—— 4.2 ——	胴部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、黒色。内面、灰褐色。 密。砂粒多。 良。	
9	土師器 坏	1/4	15.2 —— 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、左方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。口縁部、赤褐色。 内面、赤褐色。 密。細砂粒をごく少量。 良。	図版23
10	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(16.2) —— ——	口縁部～体部、ヘラナデ。ナデに光沢。内面、ヘラ磨き。内外面、黒色処理。	内外面、黒褐色。断面、赤褐色。 密。細砂粒少。 良。	
11	須恵器 高台付坏	底部	—— (9.5) ——	底部、回転ヘラ削り。	内外面、灰色。 緻密。砂粒ほとんどなし。 良好。 底部、焼成後、ヘラ記号「×」。	第78図 図版29

表11 013号住居跡出土土器表（第70図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
12	土師器 甕	口縁部～胴部	12.4 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。胴部、下位、黒褐色。 内面、黒褐色。やや密。やや砂質。 良。	図版23

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
13	土師器 甕	口縁部～胴部弓	16.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、明褐色。 密。砂粒ややや多。 良。	
14	土師器 甕	底部	—— 7.2 ——	底部、ヘラ削り。 内面、ナデ。	外面、黒褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
15	土師器 坏	弓	13.5 9.1 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。黒色処理を施したと思われる。	外面、灰褐色。全体に黒斑。 内面、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版23
16	土師器 坏	弓 底部中央欠	(13.2) (8.0) 4.3	体部、下位、左方向ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、灰褐色。 密。細砂粒少。 良。	

表12 015号住居跡出土土器表（第71図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	弓 底部中央欠	16.6 7.4 25.7	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、茶褐色。 密。砂粒多。小石混。 良。	図版23
2	土師器 甕	口縁部～胴部弓	(13.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削り。器面が荒れているため削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、赤褐色。内面、黒色。 一部灰褐色。 密。砂粒多。 良。	
3	土師器 小鉢	弓	12.2 4.1 7.4	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向、粗いヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、黒色。黒斑。 密。細砂粒ややや多。 良。	
4	土師器 小鉢	弓 底部中央欠	12.4 6.0 7.8	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、赤褐色。黒斑。 密。細砂粒ややや多。 良。	図版23
5	土師器 坏	弓	10.6 —— 4.2	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り直不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、褐色。赤彩。底部、黒斑。 内面、褐色。赤彩。 密。細砂粒多。赤色スコリア混。 良。	図版23
6	土師器 坏	弓	11.9 —— 3.1	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。	外面、明褐色。黒斑。内面、灰褐色。 密。砂粒ややや多。粗い砂混。 良。	図版23

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
7	土師器 坏	½	(12.0) —— 3.2	口縁部、ヘラ磨き。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。内外面とも黒色処理。	内外面、黒色。 密。細砂粒少。 良。	
8	土師器 坏	½ 口縁部欠	—— —— ——	体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、赤彩。素地は赤褐色。底部、黒色。 内面、褐色。赤彩。 密。細砂粒少。 良。 内面、ヘラ記号「×」。焼成前。	図版29 第78図
9	土師器 坏	¼ 口縁部欠	—— —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、左方向ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、明褐色。赤彩。内面、灰褐色。赤彩。 密。砂粒少。 良。 内面、ヘラ記号「×」。焼成後。	図版29
10	土師器 坏	口縁部～体部½	(13.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、赤彩。素地は明褐色。 内面、赤彩。素地は明褐色。 密。砂粒少。 良。	
11	土師器 高坏	坏部	21.4 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、粗いヘラ磨き。黒色処理。	外面、赤彩。素地は灰褐色。 内面、黒色。 密。砂粒少。小石混。 良。	
12	土師器 高坏	坏部	20.8 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。黒色処理。	外面、黒褐色。一部、赤褐色。赤彩。 内面、黒色。 密。砂粒少。小石混。 良。	図版23
13	土師器 高坏	坏部	23.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。内面、粗いヘラ磨き。	外面、赤彩。口縁部、黒斑。素地は、明褐色。 内面、褐色。黒斑。 密。細砂粒やや多。 良。	
14	土師器 高坏	坏部 口縁欠	—— —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、粗いヘラ磨き。	外面、赤彩。素地は明褐色。 内面、褐色。黒斑。 密。細砂粒少。 良。	
15	土師器 手捏ね土器	⅔	5.6 4.0 2.7	指頭による調整。	外面、灰褐色。内面、暗褐色。 密。砂粒やや多。 良。	

表13 016号住居跡出土土器表（第72図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	須恵器 甕	口縁部～胴部1/4	(27.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、縦位タタキ目、平行にヨコナデ。内面、ヨコナデ。輪積みによる成形であるが、調整にロクロを使用したと思われる。	外面、茶褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	
2	土師器 甕	胴部～底部3/4	—— 9.0 ——	胴部、中位、下方向ヘラ削り。内面、ナデ。凹凸が多い。底部、ヘラ削り。	外面、赤褐色。一部、黒褐色。 内面、赤褐色。一部、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版24
3	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(10.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、暗褐色。 密。砂粒少。 良。	図版24
4	土師器 甑	3/4	31.2 11.5 24.2	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、下方向ヘラ削り。下位、右方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、茶褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版23
5	土師器 坏	3/4	12.0 5.8 4.4	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、褐色。 密。砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版23 第78図
6	土師器 坏	口縁部～体部1/4	15.2 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	
7	土師器 坏	3/4	23.5 10.5 7.8	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。黒斑。内面、明褐色。 黒斑。 密。砂粒ほとんどなし。 良。 体部、墨書「信」。	図版24 図版29 第78図
8	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(14.1) —— ——	体部、下位、右方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。右回転ロクロ成形。	内外面、淡明褐色。 密。細砂粒ごく少。 良。	

表14 017号住居跡出土土器表（第73図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	3/4	16.2 7.0 25.0	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、口縁部、褐色。胴部、赤褐色。 内面、灰褐色。 密。砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
2	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(14.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、暗褐色。内面、暗褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
3	土師器 鉢	ほぼ完形	15.4 7.0 3.9	口縁部、ヨコナデ。胴部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。黒色処理が施されたと思われる。	外面、黒褐色。内面、黒色。 密。細砂粒少。 良。	図版24
4	土師器 坏	ほぼ完形	11.2 —— 5.0	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面ヘラ磨き。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版24
5	土師器 坏	ほぼ完形	13.3 —— 4.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、ヘラ磨き。	外面、褐色。底部、黒斑。内面、褐色。 外面、褐色。底部、黒斑。内面、褐色。 密。細砂粒ごく少。 良。	図版24
6	土師器 坏	¾	13.4 —— 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、ヘラ磨き。	外面、褐色。内面、褐色。 密。砂粒やや多。 良。	図版24
7	土師器 坏	¾	14.0 —— 3.8	口縁部、ヘラ磨き、黒色処理。体部～底部、左方向ヘラ削りの後ナデ。ナデに光沢。内面、ヘラ磨き。黒色処理。	外面、褐色。内面、灰褐色。 密。砂粒ほとんどなし。 良。	図版24
8	土師器 坏	¾	15.2 —— 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。黒色処理。	外面、灰褐色。口縁部、黒褐色。 内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版24
9	土師器 坏	¼ 底部欠	(14.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。黒色処理。内面、ヘラ磨き。黒色処理。	外面、黒色。内面、黒色。断面、赤褐色。 密。細砂粒少。 良。二次焼成のためもろい。	
10	土師器 坏	¼ 底部欠	(12.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、ナデ。内外面、黒色処理。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	
11	土師器 高坏	ほぼ完形	17.2 12.0 11.8	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、坏部、ヘラ磨き。黒色処理。脚部、左方向、ヘラ削り。	外面、赤彩。素地は赤褐色。内面、黒色。脚部内、褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版24

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
12	土師器 高坏	坏部	16.4 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、ヘラ磨き。内外面、黒色処理。	外面、黒褐色。内面、黒色。 密。細砂粒少。 良。	図版24
13	土師器 高坏	脚部	—— —— ——	脚部、ヘラ削りの後ナデ。ナデに光沢。内面、ナデ。輪積み痕。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	

表15 019号住居跡出土土器表（第74図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	ほぼ完形	14.3 7.4 25.2	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、下方向ヘラ削りの後ナデ。中下位、左方向ヘラ削りの後ナデ。ナデに光沢。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、灰褐色。胴部、下位、黒斑。内面、褐色。 密。砂粒やや多。小石混。 良。	図版24
2	土師器 甕	口縁部～胴部½	(21.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、左方向ヘラ削り。中位、一部上方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、黒褐色。 密。細砂粒多。 良。	
3	土師器 甕	胴部～底部½ 中央部欠	—— 7.6 ——	胴部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削りの後ナデ。	外面、赤褐色。内面、明褐色。 密。砂粒少。 良。	
4	土師器 甕	½	12.4 7.0 16.3	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。上中位は縦方向、下位は横方向。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。胴部、褐色。黒斑。内面、赤褐色。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版25
5	土師器 甕	½	13.5 5.8 13.4	口縁部、ヨコナデ。胴部、二次焼成で器面が荒れているため調整不明。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、褐色。口縁部、黒褐色。 やや密。砂粒多。かなり砂質。 良。	図版25
6	土師器 甕	完形	13.8 5.4 22.8	口縁部、ヨコナデ。胴部、上方向ヘラ削りの後ナデ。下位、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、暗褐色。黒斑。内面、赤褐色。 密。砂粒やや多。 良。	図版25
7	土師器 鉢	½	12.0 7.0 9.7	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。木葉痕。内面、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、褐色。黒斑。 密。砂粒やや多。 良。	図版25 第78図

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
8	土師器 坏	¼	12.6 —— 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部、器面が荒れているため調整不明。内面、ヘラ磨き。	外面、灰褐色。内面、灰褐色。口縁部、黒色。 密。細砂粒少。 良。	
9	土師器 坏	⅓ 底部欠	(12.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、暗褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
10	土師器 坏	½ 底部中央欠	10.8 5.8 4.5	口縁部、ヨコナデ。体部、上位、上方向ヘラ削り。下部、右方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版25

表16 020号住居跡出土土器表（第75図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	½	14.6 7.5 21.2	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。ヘラ削りは右方向と思われる。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、上方向ナデ。	内外面、赤褐色。外面、胴部、黒斑。 密。砂粒少。 良。	図版25
2	土師器 甕	口縁部～胴部½	12.6 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、左方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。一部、黒色。 内面、褐色。一部、黒色。 密。細砂粒少。 良。	
3	土師器 甕	胴部～底部	—— 7.4 ——	胴部、左方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、褐色。 密。砂粒やや多。 良。	図版26
4	土師器 坏	⅔	12.8 6.0 5.7	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	内外面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版26
5	土師器 坏	完形	12.6 —— 4.8	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、赤彩。素地は赤褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版26
6	土師器 高坏	完形	14.7 9.5 10.2	坏部、口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。脚部、ヘラ削りの後内面、ナデ。	外面、赤彩を施されたと思われる。坏部、内面、赤彩。素地は赤褐色。 密。細砂粒少。	図版26

表17 021号住居跡出土土器表（第75図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
7	須恵器 甕	口縁部～胴部1/4	(22.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、板位タタキ目。平行にヨコナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。断面、灰褐色 密。砂粒少。 良。	
8	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(20.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコ 胴部、ナデ。	内外面、褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
9	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	14.2 —— ——	口縁部ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒少。 良。	
10	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(12.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	
11	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(12.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向 ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒多。 良。	
12	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	(19.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒少。 良。	
13	土師器 坏	1/4	13.6 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後のナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、黒褐色。内面、褐色。一部黒褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版26
14	須恵器 坏	3/4	12.6 6.8 3.9	体部、下位、右方向 ヘラ削り。底 部、ヘラ削り。右回転ロクロ成 形。	外面、灰色。内面、灰色。 密。砂粒多。 良好。	図版26 第78図
15	土師器 坏	完形	12.6 6.2 4.0	体部、下位、右方向ヘラ削り。底 部、ヘラ削り。右回転ロクロ成 形。	外面、黒色。内面、黒色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版26 第78図
16	土師器 坏	1/4	11.2 6.6 3.9	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版26 第78図
17	土師器 坏	3/4	12.0 7.0 3.7	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版26 第78図

第18 024号住居跡出土土器表（第76図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	ほぼ完形	14.6 7.2 25.1	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。下位ほど粗い調整。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。口縁部と胴部との接合部に指頭による成形痕。胴部、上位、ヨコナデ。下位、ナデ。	外面、口縁部、明褐色。胴部、黒褐色。 内面、明褐色。 密。砂粒多。 良。	図版26
2	土師器 甕	½	15.0 6.4 21.2	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。器面が荒れている。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。口縁部と胴部との接合部に指頭による成形痕。胴部、ナデ。	外面、口縁部、明褐色。胴部、灰褐色。 内面、口縁部、赤褐色。胴部、黒褐色。 やや密。砂粒多。 良。二次焼成のためもろくなっている。	図版27
3	土師器 甕	口縁部～胴部	17.2 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、上方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、粗いヘラナデ。	外面、褐色。胴部、黒斑。内面、暗褐色。 密。砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版27
4	土師器 甕	完形	20.6 7.0 20.7	口縁部、ヨコナデ。上位、ヘラ削りの後ナデ。下位、縦位、ヘラナデ。光沢がある。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、縦位、ヘラナデ。光沢がある。	外面、灰褐色。黒斑。内面、口縁部、灰褐色。胴部、茶褐色。黒斑。 密。砂粒少。 良。	図版27
5	土師器 甕	ほぼ完形	21.7 5.8 22.3	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。内面、茶褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版27
6	土師器 壺	口縁欠	—— —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。ナデに光沢。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。胴部、黒斑。内面、黒色。底面、黒褐色。 密。砂粒少。 良。	図版27
7	土師器 坏	完形	12.8 —— 8.0	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。体部、焼成前に穿孔。	外面、暗褐色。赤彩の跡がある。内面、暗褐色。赤彩の跡がある。 密。細砂粒多。 良。	図版27
8	土師器 坏	ほぼ完形	12.4 —— 9.2	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、右方向ヘラ削りの後ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、明褐色。赤彩。体部、黒斑。内面、褐色。赤彩。底面、黒斑。 密。砂粒少。 良。	図版28

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
9	土師器 坏	完形	14.8 —— 7.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、褐色。赤彩。底部、黒斑。内面、褐色。赤彩。体部、環状に黒斑。 密。細砂粒少。 良。	図版28
10	土師器 坏	完形	13.2 —— 6.2	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、赤褐色。赤彩。底部、黒斑。内面、赤褐色。赤彩。底面、黒斑。 密。細砂粒少。 良。	図版28
11	土師器 坏	完形	13.5 —— 4.8	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、明褐色。赤彩。内面、褐色。赤彩。炭化物付着。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版28
12	土師器 坏	ほぼ完形	11.2 —— 5.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。	外面、褐色。赤彩。内面、褐色。赤彩。内外面に環状の黒斑。 密。細砂粒少。 良。	図版28
13	土師器 坏	½	14.8 —— 5.3	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、左方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、褐色。赤彩。内面、赤彩のため素地の色不明。 密。細砂粒やや多。 良。	
14	土師器 坏	ほぼ完形	15.6 —— 5.4	口縁部、ヨコナデ。黒色処理状に光沢がある。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、明褐色。口縁部、黒色。赤彩。内面、褐色。赤彩。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版28
15	土師器 高坏	坏部¾	15.4 —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。黒色処理されているが、ヘラ磨きせず。	外面、褐色。赤彩。内面、黒色。 密。細砂粒やや多。 良。	

表19 025号住居跡出土土器表（第77図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(15.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。ヘラ跡。胴部、上方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。内面、黒褐色。 密。砂粒多。 良。	
2	土師器 坏	½	11.8 —— 4.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。	外面、褐色。赤彩。内面、黒褐色。 密。砂粒多。 良。	図版28

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
3	土師器 坏	口縁部～体部¼	(14.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
4	土師器 高坏	脚部	—— —— ——	坏部、内面、ヘラ磨き。黒色処理。脚部、ヘラ削りの後ナデ。 内面、左方向ヘラ削り。	外面、褐色。赤彩。内面、黒色。 密。細砂粒少。 良。	

表20 026号住居跡出土土器表（第77図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
5	土師器 甕	½	18.6 6.5 21.1	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、明褐色。黒斑。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版28
6	土師器 甕	ほぼ完形	11.3 7.2 14.9	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、茶褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版28
7	土師器 鉢	¾	10.3 5.7 6.8	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、暗褐色。黒斑。 密。細砂粒やや多。 良。	図版29

表21 027号住居跡出土土器表（第77図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
8	土師器 坏	½	12.6 —— 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。細砂粒少。素地はきめが細かい。 良。	図版29

表22 031号住居跡出土土器表（第77図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
9	土師器 坏	½	15.6 7.4 5.2	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、淡灰褐色。内面、暗灰色。 密。細砂粒少。 良。	図版29

表23 032号住居跡出土土器表（第77図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
10	土師器 坏	3/4	9.4 —— 3.2	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、灰褐色。黒斑。内面、灰褐色。黒斑。 密。細砂粒少。 良。	図版29
11	土師器 甕	3/4	(32.8) 9.0 24.0	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。下位、下方向ヘラナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版29

表24 石器、土製品表（第85図～第87図）

挿図番号	出土遺構又はグリッド	器種	遺存度	法量	特徴	色調	石質	図版
1	010	磨石兼敲石	完形	長さ13.9 幅 9.2 厚さ 3.5	楕円の円板状で、全体に磨きが施される。側面全体に摩耗と敲打の跡がみられる。円板の中央も敲打のためわずかに凹んでいる。	青灰色	安山岩質	図版36
2	表採	磨石兼敲石	完形	9.2 7.2 3.6	楕円のやや厚い円板状である。側面全体に摩耗と敲打の跡がみられる。	青灰色	安山岩質	図版36
3	011	敲石	完形	11.0 7.4 5.0	厚手の楕円形円板状で、側面全体に敲打の跡があり、中央部が敲打のためわずかに凹んでいる。	青灰色	安山岩質	図版36
4	A11－48	敲石兼凹石	完形	7.4 6.7 3.8	丸味のある方形のブロック状である。6面全部の中央に凹みがあり丸味のある角には敲打の跡がみられる。全体に黒色鉱物粒が点在している。	灰白色	安山岩質	図版36
5	B11－00	磨製石斧	3/4	(9.7) 5.2 3.9	やや丸味のある方柱状の石斧で、刃部の幅がわずかに広くなる。敲打による成形の後、磨きが施されたと思われるが、一部に敲打痕がみられる。	灰黒色	安山岩質	図版36
6	018	磨製石斧	残欠	(9.0) 5.0 3.5	やや丸味のある方柱状の石斧の一部分である。全体にていねいな磨きが施されている。	灰白色	砂岩質	図版36
7	A 9－27	磨製石斧	基部残欠	(4.3) 4.2 2.6	厚手の古形の石斧と思われる。成形はていねいであるが、つやがない。黒色鉱物粒が多く混在する。	灰白色	安山岩質	図版36

挿図番号	出土遺構又はグリッド	器種	遺存度	法量	特徴	色調	石質	図版
8	表採	磨製石斧	¾	5.7 3.4 1.1	扁平な、やや丸味のある台形の石斧である。全体にていねいな磨きが施されている。	濃緑色	石英片岩質	図版36
9	021	磨製石斧	刃部残欠	(5.5) 4.6 1.2	扁平な方形の石斧と思われる。全体にていねいな磨きが施されるが、原石をそのまま使用したと思われる。	青黒色	粘板岩質	図版36
10	B12−06	打製石斧	刃部残欠	(8.7) 5.4 2.6	棒状の原石の端を打ち欠いて刃部がつくられている。刃部のほかは自然面が残っている。	青灰色	安山岩質	図版36
11	002	石鏃	完形	1.9 1.3 0.3	三角形状を示す。剝離が細かくていねいである。	灰黒色	安山岩質	図版36
12	006	石鏃	残欠	——	脚部で、断面が三角形を示す。	灰色	チャート質	図版36
13	A10−37	石鏃	残欠	(2.5) (2.0) 0.5	やや大形の石鏃で、両面ともていねいな剝離が施されている。	黒色	黒曜石	図版36
14	001	剝片	——	8.0 4.4 2.0	ゆがんだ方形を示し、調整は見られない。	暗灰色	安山岩質	図版36
15	表採	剝片	——	——		黒色	黒曜石	図版36
16	表採	剝片	——	——		灰白色	チャート質	図版36
17	表採	剝片	——	——		灰白色	チャート質	図版36
18	表採	尖頭器	基部残欠	(2.6) 2.8 0.6	長楕円形の尖頭器の基部と思われる。片面にのみ、やや粗い剝離がみられる。	淡灰褐色	チャート質	図版36
19	表採	剝片	——	——		黒褐色	頁岩質	図版36
20	A10−00	砥石	ほぼ完形	4.5 2.3 1.0	扁平な方形のブロック状で、長辺の一端に孔をもち、反対の端部は使用のため薄くなっている。	灰白色	泥板岩質	図版37
21	表採	剝形石製模造品	½	7.3 —— 0.8	一孔をもち、ややずんぐりとした剝形になると思われる。	青灰黒色	蛇文岩	図版37
22	005	砥石	½	(13.8) 5.9 5.0	方柱状の砥石である。使用のため中央部が擦り減り、側面には鋭い利器によると思われる溝状の刻みが数条みられる。	灰白色	泥板岩質	図版37

土製品

挿図番号	出土遺構又はグリッド	器種	遺存度	法量	特徴	色調、胎土、焼成他	図版
23	表採	土玉	1/2	縦 2.6 横 2.3 高さ(1.7)	手捏ね成形である。 ほぼ球形を示すと思われる。	褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版37
24	A 2－17	泥面子	完形	1.7 1.7 2.8	俵の上に立った大黒天を表わしている。 型押しづくりである。	褐色。 密。砂粒ほとんどなし 良。	図版37

表25　鉄器表（第88図）

挿図番号	出土遺構又はグリッド	製品名	遺存度	計測値（cm）			形状	図版
				長さ	幅	厚さ		
1	002	鎌	ほぼ完形	10.6	2.2	0.2	ほぼ直線的な刃部が先端部でゆるやかに内弯する。基端部に折り返しもつ。	図版37
2	002	刀子	刃部残欠	(5.0)	1.6	0.4	直刃で、先端がやや細くなると思われる。	図版37
3	002	刀子	基端部を欠く。	(20.0)	1.5	0.3	直刃で、先端部がわずかに細くなる。先端部が砥ぎのためか、わずかに内弯している。	図版37
4	004	鉄鏃	茎(なかご)を欠く	(10.1)	根 0.6 箆被0.4	0.1 0.3	尖根(ほそね)式。根は菱形で扁平である。箆被(のかつぎ)は基部が細くなる。	図版37
5	004	刀子	基端部を欠く	(11.4)	0.8	0.2～0.4	ほぼ直刃であるが先端が外反する。先端ほど刃が薄くなる。	図版37
6	013	刀子	基端部を欠く	(14.2)	1.4	0.3	直刃であるが、砥ぎのためわずかに内弯している。	図版37
7	013	刀子	基部残欠	(9.3)	身 1.0 茎 0.6	0.3 0.3	直刃と思われる。明瞭な関(まち)をもち、茎は端部ほど細くなる。	図版37
8	032	鎌	刃部残欠	——	2.2	0.2	内弯した刃部である。砥ぎのため内弯が大きくなっている。	図版37
9	032	刀子	基部残欠	——	1.1	0.4	直刃と思われる。関はあまりはっきりしない。	図版37
10	032	刀子	刃部残欠	——	0.6	0.2	直刃で、先端ほど細くなると思われる。砥ぎのため内弯している。	図版37

挿図番号	出土遺構又はグリッド	製品名	遺存度	計測値（cm）			形状	図版
				長さ	幅	厚さ		
11	表採	釘	頂部欠	(10.5)	0.6	0.5	断面はほぼ正方形で、全体にややねじれている。	図版37
12	表採	釘	ほぼ完形	13.5	0.6	0.5	断面はほぼ正方形で、折り曲げにより頂部がつくられている。	図版37

表26　小池向台遺跡遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 m	床面積㎡	主軸方位	壁高cm	主柱穴	周溝	カマド	時期	備考
001号住	方形	5.98×4.60	21.6	N－15°－W	26～32	4	全周	北壁中央	鬼高	貼床有
002号住	方形	4.16×3.98	12.2	N－29°－W	10～15	4	全周	北壁中央	鬼高	
003号住	方形	3.47×3.35	8.6	N－74°－E	6～11	1	全周	東壁中央	真間	
004号住	方形	5.78×5.51	23.0	N－21°－W	20～28	4	ほぼ全周	北壁中央	真間	貼床有
006号住	隅丸方形	6.40×5.92	(？)	N－29°－W	33～50	4	ほぼ全周	北壁中央	真間	貯蔵穴有
008号住	隅丸方形（推定）	(7.28)×(4.26)	(？)	N－15°－W	52～60	4 主柱2	全周	北壁中央	真間	½遺構検出
012号住	方形（推定）	4.12×2.60)	(？)	(？)	22～25	2	ほぼ全周	？	不明	½遺構検出

表27　001号住居跡出土土器表（第105、106図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器　甕	¾	口径18.6 底径 7.2 器高22.4	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、下方向ヘラ削り。下位、右方向ヘラ削り。	外面、口縁部、明褐色。胴部、黒褐色。 内面、明褐色。 密。砂粒多。 良。	図版46
2	土師器　甕	口縁部～胴部¼	(16.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、暗褐色。 密。砂粒多。 良。	
3	土師器　甕	口縁部～胴部⅓	(16.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、暗赤褐色。 密。砂粒やや多。 良。	
4	土師器　甕	口縁部～胴部	(17.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。胴部、黒斑。内面、暗褐色。 密。砂粒多。 良。	
5	土師器　甕	口縁部～胴部⅓	18.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、赤褐色。 密。砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
6	土師器 甕	口縁部～胴部½	(17.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、赤褐色。 密。砂粒多。黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 やや良。	
7	土師器 甕	口縁部～胴部½	(18.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、暗褐色。 密。細砂粒多。 やや良。	
8	土師器 甕	口縁部～胴部½	(17.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、暗褐色。 密、砂粒多。 良。	
9	土師器 甕	口縁部～胴部½	(20.1) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、暗褐色。内面、黒褐色。 密。砂粒やや多。 やや良。	
10	土師器 甕	口縁部～胴部	16.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、明褐色。黒斑。内面、明褐色。黒斑。 密。砂粒多。 良。	
11	土師器 甕	口縁部～胴部½	18.8 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、赤褐色。 密。砂粒多。 良。	
12	土師器 甕	口縁部～胴部½	(21.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、赤褐色。 密。細砂粒多。 やや良。	
13	土師器 甕	胴部～底部½	—— (8.4) ——	胴部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、暗赤褐色。黒斑。内面、茶褐色。 密。砂粒多。 やや良。	
14	土師器 甕	胴部～底部½	—— 9.0 ——	胴部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、赤褐色。一部、黒色。内面、赤褐色。 密。砂粒多。 やや良。	
15	土師器 甕	胴部～底部	—— 5.6 ——	胴部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、暗赤褐色。 密。砂粒多。小石を含む。 良。	
16	土師器 坏	½	23.1 8.5 4.2	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、暗褐色。一部、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
17	土師器 坏	口縁部～体部1/6	(11.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。砂粒多。小石、黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 良。	
18	土師器 甕	口縁部～胴部1/3	(18.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、赤褐色。外面、黒斑。 密。細砂粒多。 良。	
19	土師器 坏	1/4 底部中央欠	(13.2) (7.0) 3.8	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	内外面、淡明褐色。 密。細砂粒少。 良。	
20	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(14.7) —— ——	体部、下位、左方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。黒色処理。右回転ロクロ成形。	外面、暗赤褐色。口縁部、黒色。内内面、黒色。 密。砂粒少。赤色スコリア混。 良。	
21	土師器 坏	1/4	(15.0) 8.0 5.5	体部、下位、右回転ヘラ削り。底部、右回転ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。黒色処理。右回転ロクロ成形。	外面、淡明褐色。内面、黒色。 密。細砂粒少。 良。	
22	土師器 坏	1/4 底部中央欠	(12.8) (8.6) 3.5	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、淡明褐色。内面、黒色。一部、灰褐色。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部墨書、字体不明。	図版50
23	土師器 坏	底部	—— 6.4 ——	底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。	内外面、淡明褐色。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書、字体不明。	図版50
24	土師器	胴部～底部1/4	—— (6.6) ——	胴部、上方向ヘラ削りの後ナデ。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。粘土紐の輪積み痕が明瞭。	外面、暗灰褐色。内面、暗赤褐色。 密。砂粒多。 良。	
25	須恵器 甕	口縁部～胴部1/3	(22.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、縦位タタキ目。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、暗黄灰色。内面、灰色。 密。砂粒やや多。小石混。 良。	
26	須恵器 甕	口縁部～胴部1/4	(28.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、タタキ目。内面、ヨコナデ。	外面、灰黒色。内面、灰色。断面、黄褐色。 密。細砂粒多。 良。	
27	須恵器 甕	底部1/4 中央部欠	—— (16.0) ——	胴部、中位、タタキ目。下位、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、黒色。内面、暗灰色。断面、明褐色。 密。砂粒やや多。小石混。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
28	須恵器 坏	¼ 底部中央欠。	(12.8) (6.0) 4.4	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、青灰色。 密。砂粒少。小石混。 良。	
29	須恵器 坏蓋	鈕部～天井部	—— —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。内面、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	内外面、青灰色。 緻密。細砂粒少。 良好。	

表28 002号住居跡出土土器表（第107図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部～胴部½	(26.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、淡灰褐色。内面、灰褐色。 断面、黒色。 密。砂粒多。 やや良。	
2	土師器 甕	口縁部½	(18.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	内外面、暗褐色。 密。細砂粒多。 良。	
3	土師器 甕	胴部～底部¼	—— (8.4) ——	胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、黒褐色。内面、暗褐色。 密。細砂粒多。小石混。 良。	
4	須恵器 甕	口縁部～胴部½	(23.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、縦位タタキ目。内面、ヨコナデ。	内外面、赤褐色。 密。細砂粒多。 良。	
5	土師器 坏	¼ 底部中央欠	(15.1) (9.8) 3.6	体部、下位、右回転ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	内外面、黒褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	
6	須恵器 坏	¼ 底部中央欠	(14.2) (8.6) 4.1	底部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、体部、上位、灰色。下位、淡明褐色。 密。砂粒多。小石混。須恵器としては、精選されていない。 やや良。	
7	土師器 坏	口縁部¼	(8.2) —— ——	ロクロ成形。	内外面 淡明褐色。 密。細砂粒少。 良。 体部、墨書、字体不明。	図版50
8	土師器 坏	底部½	—— (6.3) ——	底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡褐色。内面、暗灰色。 密。砂粒多。 良。 底部、墨書、字体不明。	図版50

表29 003号住居跡出土土器表（第107図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
9	土師器 甕	口縁部～胴部½	(21.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、淡明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
10	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(19.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	内外面、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
11	土師器 坏	¾	12.4 7.2 3.8	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、黒褐色。黒ずんでいる。 密。細砂粒多。 良。	図版46 第115図
12	土師器 坏	¾	14.0 6.6 4.1	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、黒褐色。口縁部、一部、明褐色。 内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版46 第115図
13	土師器 坏	口縁部～体部½	(12.2) —— ——	体部、下位、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	

表30 004号住居跡出土土器表（第108図～第110図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部½	23.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒多。 良。	
2	土師器 甕	口縁部¾	20.8 —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。やや砂質。細砂粒多。 良。	図版46
3	土師器 甕	口縁部～胴部½	21.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヨコナデ。	内外面。明褐色。 やや密。細砂粒多。赤色スコリア混。 良。	
4	土師器 甕	口縁部～胴部½	(20.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
5	土師器 甕	口縁部～胴部⅛	(19.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面ヨコナデ。	外面、灰褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
6	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(20.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。	外面、灰褐色。一部、暗褐色。内面、暗褐色。 密。やや砂質。細砂粒多。 良。	
7	土師器 甕	口縁部½	21.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外面、灰褐色。内面、灰褐色。 密。やや砂質。細砂粒多。 良。	
8	土師器 甕	口縁部～胴部¾	22.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。、削り痕不明瞭。	外面、褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒多。赤色スコリア混。 良。	図版46
9	土師器 甕	口縁部～胴部	(30.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、褐色。断面、中央部、黒色。 密。細砂粒多。 良。	
10	土師器 甕	口縁部～胴部	(34.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、ナデ。	内外面、明褐色。 やや密。やや砂質。細砂粒多。 良。	
11	土師器 甕	口縁部～胴部	12.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位、下方向ヘラ削り。下位、右方向ヘラ削り。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。砂粒やや多。 良。	図版46
12	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(12.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面ヨコナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒多。 良。	
13	土師器 甕	口縁部～胴部	12.6 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削り。器面が荒れているため方向不明。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 やや密。 良。	
14	土師器 甕	胴部～底部	—— 6.4 ——	胴部、下位、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、黒褐色。内面、淡明褐色。 密。やや砂質。砂粒多。 良。	
15	土師器 甕	胴部～底部	—— 6.4 ——	胴部、下位、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、褐色。内面、灰褐色。 密。やや砂質。砂粒多。 良。	
16	土師器 坏	½	12.2 6.5 4.5	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、明褐色。黒斑。内面、明褐色 密。砂粒やや多。黄白色粘土が混じる。 良。	図版46

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・粘土・焼成他	図版他
17	土師器 坏	¾	12.1 —— 4.2	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削りの後ナデ。	外面、灰褐色。黒斑。内面、灰褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版46
18	土師器 坏	ほぼ完形	11.8 7.4 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒多。 良。	図版46
19	土師器 坏	¾	11.2 7.0 4.0	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。	外面、明褐色。黒斑。内面、褐色。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 赤褐色粘土と黄白色粘土が混じる。 良。	図版46
20	土師器 坏	¾	12.0 7.4 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、明褐色。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版46
21	土師器 坏	ほぼ完形	12.2 7.8 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 密。砂粒多。赤色スコリア混。 良。	図版47
22	土師器 坏	½	12.8 8.0 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡灰褐色。体部、黒斑。 内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版47
23	土師器 坏	¼	(11.0) (9.0) 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、黒褐色。内面、黒褐色。 密。細砂粒多。 良。	
24	土師器 坏	¾	11.9 7.4 4.2	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り内面、ヨコナデ。	外面、淡灰褐色。内面、灰褐色。黒斑。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版47
25	土師器 坏	½	11.6 7.6 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡明褐色。黒斑。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版47
26	土師器 坏	½	11.8 6.6 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、淡明褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。 底部、ヘラ記号「×」。焼成後。	図版47 図版50 第115図

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
27	土師器 坏	¼	(12.4) 8.0 4.0	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、淡明褐色。底部、黒斑。 内面、淡明褐色。 密。砂粒やや多。 良。	図版47
28	土師器 坏	完形	11.8 6.4 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、淡褐色。内面、淡褐色。口縁部、黒斑。炭化物付着。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	図版47
29	土師器 坏	½ 底部中央欠	(11.8) 8.0 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。	
30	土師器 坏	¼	(11.4) 6.6 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒少。黄白色粘土粒混。 良。	
31	土師器 坏	½	11.8 6.4 4.1	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。黄白色粘土粒混。 良。 底部、墨書「井」。	図版47 図版50
32	土師器 坏	½	11.5 6.0 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版47 図版50
33	土師器 坏	½	11.0 5.6 4.1	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡明褐色。内面、灰褐色。黒斑。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版47 図版50
34	土師器 坏	ほぼ完形	11.8 6.6 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡明褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版47 図版51
35	土師器 坏	¼	(12.0) 7.6 4.1	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削りの後ナデ。底部ヘラ削り。	内外面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。 底部、墨書「井」。	
36	土師器 坏	⅙ 底部中央欠	(12.0) (7.6) 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡明褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
37	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(12.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 良。	
38	土師器 坏	1/4 底部中央欠	(12.8) (8.0) 3.8	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	内外面、黄褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
39	土師器 坏	1/2	(12.4) (7.0) 4.2	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 良。	図版47
40	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(12.4) —— 3.5	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	外面、淡明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。黄白色粘土粒、赤色スコリア混。 良。	
41	土師器 坏	3/4	10.4 5.9 5.0	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。炭化物付着。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版47
42	土師器 坏	3/4	11.0 7.0 4.0	胴部、下位、左方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。 底部、墨書「前」	図版48 図版51 第115図
43	土師器 坏	1/2	12.2 8.0 3.7	体部、下位、右方向ヘラ削り底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。	第115図
44	土師器 坏	1/2ほぼ完形	11.4 8.0 3.6	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版48
45	土師器 坏	1/2	11.0 6.4 4.2	体部、下位、右回転ヘラ削り。底部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版48 第115図
46	土師器 坏	1/4 底部中央欠	(10.6) (7.4) 3.5	体部、下位、右回転ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	外面、淡明褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒少。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
47	土師器 坏	1/4	(11.2) 7.8 3.9	底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰褐色。内面、灰褐色。 密。細砂粒少。 良。	第115図
48	土師器 坏	ほぼ完形	11.0 7.4 4.0	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版48 第115図
49	土師器 坏	完形	11.8 6.6 4.9	体部、下位、左方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、褐色。内面、褐色。 密。細砂粒やや多。 良。 底部、墨書「中」	図版48 図版51 第115図
50	土師器 坏	1/4	11.8 7.2 4.9	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。内面、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	図版48
51	土師器 坏	1/4	12.0 8.8 4.7	底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。砂粒多。赤色スコリア混。 良。	図版48 第115図
52	土師器 坏	口縁部～体部1/4	(11.6) —— ——	右回転ロクロ成形。	外面、赤褐色。内面、褐色。 密。細砂粒少。 良。	
53	土師器 坏	1/4	11.6 7.6 3.8	体部、下位、右方向ヘラ削り。底部、回転糸切り痕。周辺部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、褐色。黒斑。内面、褐色。黒斑。 密。細砂粒やや多。 良。	図版48 第115図
54	土師器 坏	底部	—— 8.5 ——	底部、ヘラ削り。	外面。明褐色。内面、明褐色。 密。砂粒少。 良。 底部、墨書、字体不明。	
55	土師器 坏	底部	—— 6.4 ——	底部、ヘラ削り。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「×」。	図版51
56	土師器 坏	底部	—— 6.4 ——	底部、ヘラ削り。	外面、淡明褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
57	土師器 坏	底部	—— 3.5 ——	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
58	土師器 坏	底部	—— —— ——	底部、ヘラ削り。	内外面、淡褐色。 密。細砂粒少。 良。 底部、墨書、字体不明。	図版51
59	土師器 坏	底部	—— —— ——	底部、ヘラ削り。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。 密。細砂粒少。 良。 底部、墨書「家」。	図版51
60	土師器 坏	底部	—— (8.0) ——	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
61	土師器 坏	底部	—— —— ——	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。砂粒少。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
62	土師器 坏	底部	—— 7.0 ——	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
63	土師器 坏	底部	—— 6.8 ——	底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
64	須恵器 坏	¼	11.6 7.6 3.2	底部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、青灰色。口縁部、暗青灰色。内面、青灰色。表面に暗青灰色の火ダスキ。 緻密。細砂粒少。良好。	
65	須恵器 坏	⅛	11.4 8.0 3.8	体部、下位、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。底部に粘土紐の接合痕。右回転ロクロ成形。	外面、青灰色。内面、青灰色。両面に暗青灰色の火ダスキ。 緻密。細砂粒をやや多。 良好。	図版48
66	須恵器 坏	¼	11.4 8.4 4.8	底部、ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰色。口縁部、一部、赤灰色。 内面、灰色。口縁部、一部、赤灰色。 密。砂粒少。 やや良。須恵器にしては、ややあまい焼き。	図版48 第115図

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
67	須恵器 坏	1/4	13.8 8.4 4.2	体部、下位、右回転ヘラ削り。 底部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰黒色。内面、灰黒色。 緻密。細砂粒やや多。 良。	図版48 第115図
68	須恵器 高台付盤	体部～底部	—— 10.2 ——	体部下位、右回転ヘラ削り。底部、ヘラ削り。高台部、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	外面、灰白色。内面、灰白色。 密。細砂粒少。 やや良。須恵器としてはあまい焼き。	
69	須恵器 高台付盤	底部	—— 12.2 ——	高台部、ヨコナデ。底部、右回転ヘラ削り。貼付高台。	内外面、灰色。一部、明褐色。 緻密。細砂粒やや多。 やや良。須恵器としてはわるい。	
70	須恵器 坏蓋	鈕部～天井部	—— —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、青灰色。内面、青灰色。 密。細砂粒少。 やや良。須恵器としては、ややあまく、断面が褐色。	
71	須恵器 坏蓋	天井部～周縁部1/4	(14.4) —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、青灰色。内面、青灰色。 緻密。砂粒少。石英、長石粒（1㎜前後）混。 良好。	
72	須恵器 高坏	脚部	—— 16.2 ——	右回転ロクロ成形。一段透かし、3か所。	外面、青灰色。内面、青灰色。 緻密。砂粒少。長石、石英粒（1～2㎜）混。 良好。	図版48

表31 006号住居跡出土土器表（第111図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部1/4	(25.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	内外面、淡明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
2	土師器 小甕	口縁部～胴部1/4	(12.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヨコナデ。	外面、口縁部、赤褐色。胴部、黒褐色。 内面、黒色。 密。 良。	
3	土師器 甕	胴部～底部	—— —— ——	胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、赤褐色。内面、暗褐色。 密。砂粒やや多。小石混。 良。	
4	土師器 甑	1/2	30.0 12.0 30.2	口縁部、ヨコナデ。胴部、上位～中位、下方向ヘラ削り。下位右方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。成形痕。 把手は4か所と思われる。	内外面、茶褐色。 密。細砂粒多。 良。	図版49

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
5	土師器 坏	½	13.4 —— 3.9	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、右方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。細砂粒多。 良。	
6	土師器 坏	½	14.4 —— 4.0	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。底部、黒斑。内面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版49
7	土師器 坏	¼	(14.4) —— 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、赤褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版49
8	土師器 坏	口縁部～体部½	(17.6) —— 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
9	土師器 坏	口縁部～体部¼	(16.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
10	土師器 坏	口縁部～体部¼	(15.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き	外面、灰褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。 良。	
11	須恵器 坏	口縁部～体部¼	(12.8) —— ——	内面、ナデ。右回転ロクロ成形。	内外面、灰色。 密。細砂粒やや多。雲母粒、小石を含む。 良。	

表32 008号住居跡出土土器表(第112、113図)

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	土師器 甕	口縁部～胴部⅛	(24.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部ナデ。	外面、褐色。内面、灰褐色。 やや密。砂粒多。 良。	
2	土師器 甕	口縁部～胴部⅛	(26.2) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削りの後ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。内面、褐色。 やや密。砂粒多。 良。	
3	土師器 甕	口縁部～頸部¼	(24.6) ——	口縁部、ヨコナデ。頸部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。	外面、淡褐色。内面、淡褐色。 やや密。砂粒多。雲母片が多い。 良。	
4	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(17.4) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。	外面、黒褐色。内面、赤褐色。 やや密。細砂粒多。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
5	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(14.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部ナデ。	外面、赤褐色。内面、赤褐色。密。細砂粒やや多。良。	
6	土師器 甕	口縁部～胴部¼	(12.0) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削り。方向不明。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。黒斑。内面、黒色。密。細砂粒多。良。	
7	土師器 甕	口縁部～胴部	22.2 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、上方向ヘラ削り。下位、左方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、淡褐色。内面、明褐色。一部、黒褐色。密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。良。	図版49
8	土師器 甕	口縁部～胴部½	14.0 —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、下方向ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、赤褐色。内面、黒色。口縁部、褐色。密。細砂粒やや多。良。	
9	土師器 甕	口縁部¼	(15.8) —— ——	口縁部、上方向ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、褐色。内面、黒褐色。密。細砂粒やや多。良。	
10	土師器 小甕	½	11.4 6.0 10.0	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。底部、ヘラ削り。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、褐色。口縁部、黒斑。密。細砂粒やや多。良。	
11	土師器 甕	胴部～底部	—— 6.4 ——	胴部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、黒褐色。内面、灰褐色。やや密。やや砂質。砂粒多。良。	
12	土師器 甕	胴部～底部½	—— 5.8 ——	胴部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラによる調整。	外面、灰褐色。内面、灰褐色。やや密。細砂粒多。良。	
13	土師器 甕	胴部～底部½	—— 6.4 ——	胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ナデ。	外面、黄褐色。内面、黄褐色。やや密。砂粒多。良。	
14	土師器 小甕	胴部～底部	—— 6.6 ——	胴部、中位、ナデ。下位、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。右回転ロクロ成形。	外面、褐色。内面、褐色。密。細砂粒多。良。	図版49 第II図
15	土師器 無頸壺	口縁部～胴部½	(7.6) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、左方向のヘラ削りの後ナデ。内面、口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。ヘラ痕。	外面、明褐色。内面、明褐色。密。砂粒少。良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
16	土師器 盤	½	16.0 5.6 3.8	口縁部～体部、左方向ヘラ削りの後ナデ。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。赤彩。内面、明褐色。 密。砂粒少。赤色スコリア少混。 良。	図版49
17	土師器 盤	⅓	16.0 8.0 3.3	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア少混。 良。	図版49
18	土師器 坏	⅓	15.0 10.6 3.3	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、赤褐色。内面、褐色。黒斑。 やや密。砂粒多。 良。	図版49
19	土師器 坏	¼	(16.2) 9.0 3.7	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、淡褐色。体部、下位、黒斑。内面、明褐色。 密。細砂粒多。赤色スコリア少混。 良。	
20	土師器 坏	⅓	14.6 —— 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、明褐色。底部、黒斑。内面、灰褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版50
21	土師器 坏	⅛	(15.0) (7.0) 3.5	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削りの後ナデ。底部、ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。	外面、暗褐色。内面、暗褐色。 密。細砂粒やや多。部分的に褐色。黄白色粘土がまじる。 良。	
22	土師器 坏	½	14.0 —— 3.9	口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。	外面、明褐色。赤彩。内面、明褐色。 密。細砂粒少。赤色スコリア少混。 良。	図版50
23	土師器 盤	¼	20.4 14.2 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、赤彩。素地は明赤褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版49
24	土師器 坏	½	12.2 6.4 3.9	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、淡明褐色。底部、暗褐色。内面、淡明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。	図版49
25	土師器 坏	½	11.8 7.7 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒やや多。赤色スコリア混。 良。 底部、墨書「×」。	図版49 図版51
26	土師器 坏	¼ 底部中央欠	(12.0) (6.2) 3.6	口縁部、ヨコナデ。体部、左方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、淡褐色。内面、淡褐色。 密。砂粒やや多。黄白色粘土粒少混。 良。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
27	土師器 坏	底部	—— —— ——	底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。細砂粒多。赤色スコリア混。 部分的に黄白色土粒混。 良。 底部、墨書「井」。	図版51
28	土師器 坏	口縁部～体部 1/4	(13.8) —— ——	口縁部、ナデ。上端部、ヨコナデ。体部、ヘラ削り。内面、ヨコナデ。	外面、口縁部、黒褐色。体部、褐色。 内面、褐色。 密。砂粒少。 良。	
29	土師器 高台付皿	1/3ほど完形	14.0 6.3 2.5	口縁部～体部、ヨコナデ。底部回転ヘラ削り。内面、ヘラ磨き、貼付高台。	外面、明褐色。内面、明褐色。 密。砂粒少。 良。	図版50 第115図
30	土師器 皿	完形	13.6 5.2 2.3	口縁部～体部、ヨコナデ。体部下位、右方向ヘラ削り。底部、ヘラ削り。内面、ナデ。	外面、褐色。黒斑。内面、褐色。黒斑。 密。砂粒少。 良。 底部、ヘラ記号「×」。	図版50 図版51 第115図
31	土師器 高台付盤	高台部	—— 24.6 ——	高台部、回転ヨコナデ。内面、回転ヨコナデ。右回転ロクロ成形。粘土紐の接合部がみられる。	外面、明褐色。内面、明褐色。盤部、赤褐色。 やや密。やや砂質。細砂粒多。 良。 高台部、ヘラ描き木の葉文様。	図版50 第115図
32	須恵器 高台付坏	1/4 底部中央欠	(15.0) (10.2) 3.9	体部、回転ナデ。浅い沈線になっている。貼付高台。右回転ロクロ成形。	外面、灰色。内面、灰色。 緻密。砂粒ほとんどなし。 良好。	
33	須恵器 坏	口縁部～体部 1/4	(14.6) (9.0) 3.5	体部、下位、左方向ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰色。内面、灰色。 緻密。砂粒少。長石粒を含む。 良好。	
34	須恵器 高台付坏	3/4	14.2 10.0 3.8	底部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	内外面、青灰色。 緻密。砂粒少。小石混。 良好。	
35	土師器 坏蓋	鈕部～天井部	—— —— ——	天井部、鈕部から放射状にヘラ削りの後ナデ。内面、ナデ。	外面、明褐色。赤彩。内面、明褐色。赤彩。 密。砂粒少。 良。	
36	須恵器 坏蓋	鈕部～天井部	—— —— ——	右回転ロクロ成形。	外面、暗灰色。内面、暗灰色。 緻密。細砂粒やや多。 良好。	

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
37	須恵器 坏蓋	天井部～ 周縁部 ¼	(12.8) —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。	外面、灰色。自然降灰釉。内面、灰色。 緻密。砂粒ほとんどなし。 良好。	
38	須恵器 坏蓋	天井部～ 周縁部 ¼	(16.8) —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰色。内面、灰色。 緻密。砂粒多。雲母片含む。 良好。	
39	須恵器 坏蓋	天井部～ 周縁部 ¼	(15.8) —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、暗灰色。内面、暗灰色。 緻密。細砂粒ごく少。 良好。	
40	須恵器 坏蓋	天井部～ 周縁部 ¼	(16.2) —— ——	天井部、右回転ヘラ削り。右回転ロクロ成形。	外面、灰白色。内面、灰白色。 緻密。細砂粒ごく少。 良好。	

表33 011号住居跡出土土器表（第114図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
1	須恵器 坏蓋	½	14.8 —— 2.6	天井部、右回転ヘラ削り。 周縁部、回転ナデ。 右回転ロクロ成形。	内外面、淡灰褐色。 やや密。砂粒多。雲母片、小石混。 良好。	
2	土師器　坏	底部 ⅓	(11.0) —— 2.7	口縁部、ヨコナデ。体部～底部左方向ヘラ削り。内面、ヘラ磨き。黒色処理。	外面、灰褐色。内面、黒色。 密。砂粒少。 良。	

表34 012号住居跡出土土器表（第114図）

挿図番号	器種	遺存度	法量cm	調整・成形	色調・胎土・焼成他	図版他
3	土師器　甕	口縁部～ 胴部¼	(20.8) —— ——	口縁部、ヨコナデ。胴部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。 内面、ヨコナデ。	外面、黒褐色。内面、黒色。 密。細砂粒多。 良。	
4	土師器　坏	完形	14.0 6.0 5.6	口縁部、ヨコナデ。体部～底部、ヘラ削りの後ナデ。削り痕不明瞭。内面、ヘラ磨き。	内外面、明褐色。 密。細砂粒少。 良。	図版50

表35　石器表（第116図）

挿図番号	出土遺構又はグリッ	器種	遺存度	法量	特徴	色調	石質	図版
1	002	砥石	残欠	長さ(5.3) 幅　7.9 厚さ2.8	原形は短冊形と思われる。端部に打ち欠かれたような刻みがある。端部を除く4面が使用されている。	暗灰色	砂岩質	図版52

挿図番号	出土遺構又はグリッド	器種	遺存度	法量	特徴	色調	石質	図版
2	008	砥石	ほぼ完形	7.4 6.5 5.2	各面とも平らに摩耗している。棒状のものを磨いたらしく、溝状の摩耗の跡がある。	淡灰褐色	軽石質	図版52
3	A 9－98	石刀	基部残欠	(12.2) 2.2 1.2	全体にていねいに研磨されているが、つやがない。刃部の断面は三角形で、鋭さはない。	暗青灰色	粘板岩質	図版52
4	A 2－89	砥石	½	(10.3)	中央部がわずかにくぼみ、残存部は丸味のある台形を示す。端部は磨石として使用されたと思われる。	暗灰褐色	砂岩質	図版52
5	A 2－27	剥片	——	6.7 4.1 2.4	楕円形のやや大きな剥片で、横断面がほぼ三角形を示している。	黒色	黒曜石	図版52

表36 鉄器表（第117図）

挿図番号	出土遺物又はグリッド	製品名	遺存度	計測値（cm）			形状	図版
				長さ	幅	厚さ		
1	004	鉄鏃	ほぼ完形	16.5	根 0.8 鏑被0.4 茎 0.3	0.2 0.3 0.3	尖根(ほそね)式。根は断面が扁平な半円形でかえりをもつ。鏑被(のかつぎ)と茎(なかご)との境に明瞭な関(まち)をもつ。	図版52
2	004	鉄鏃	ほぼ完形	11.7	根 1.1 鏑被0.6 茎 0.3	0.3 0.3 0.2	尖根式。根は、断面が扁平な半円形で、菱形を呈す。関をもつと思われるが、錆のため不明瞭である。	図版52
3	004	鉄鏃	先端部欠	(8.6)	根 3.2 鏑被0.9 茎 0.6	0.3 0.5 0.5	広根(ひろね)式。根は扁平で、菱形を示すと思われる。茎に皮状のものが巻かれている。	図版52
4	006	刀子	完形	21.2	身 1.2 茎 0.8	0.4 0.3	ほぼ直刃で、先端部ほど細くなる。ハバキが遺存し、柄の木質におおわれている。茎は端部が曲げられている。関をもつと思われる。	図版52
5	006	刀子	刃部先端部欠部	(10.0)	身 1.8 茎 0.8	0.4 0.4	刃部は砥ぎのための内弯している。はっきりした関をもち、茎は端部が曲がっている。	図版52
6	006	鏃	ほぼ完形	8.5	根 0.6 鏑被0.4 茎 0.3	0.3 0.3 0.3	尖根式。根はやや厚手で、鏑被よりもわずかに幅が広い。関をもつと思われるが錆のため不明瞭である。	図版52

挿図番号	出土遺物又はグリッド	製品名	遺存度	計測値（cm）			形状	図版
				長さ	幅	厚さ		
7	006	斧頭	ほぼ完形	7.5	3.6	0.9	長方形で、柄に装着できるように袋状になっている。木質部が残る。木質部に削り痕がみられる。	図版52

CONTENTS

Preface

Acknowlegments

Introduction

Chapter I General Remarks

Section 1 Process of Research

Clause 1 Why we reseached

2 Outline of Prefectual Road, Narita-Matsuo Line

3 Formation for Research

Section 2 Landscape and Surroundings

Chapter II Koike-aso Site

Section 1 Location

2 Way and Process of Research

3 Found Remains

Clause 1 Dwelling Pits

2 Other Remains

Section 4 Found Artifacts

Clause 1 Potteries found in dwellings

2 Other artifacts

Chapter III Koike-mukodai Site

Section 1 Location

2 Way and Process of Research

3 Found Remains

Clause 1 Dwelling Pits

2 Other Remains

Section 4 Found Artifacts artifacts

Clause 1 Potteries found in dellings

2 Other artifacts

Chapter IV A Conclusion

Section 1 Koike-aso Site

2 Koike-mukodai Site

SUMMARY

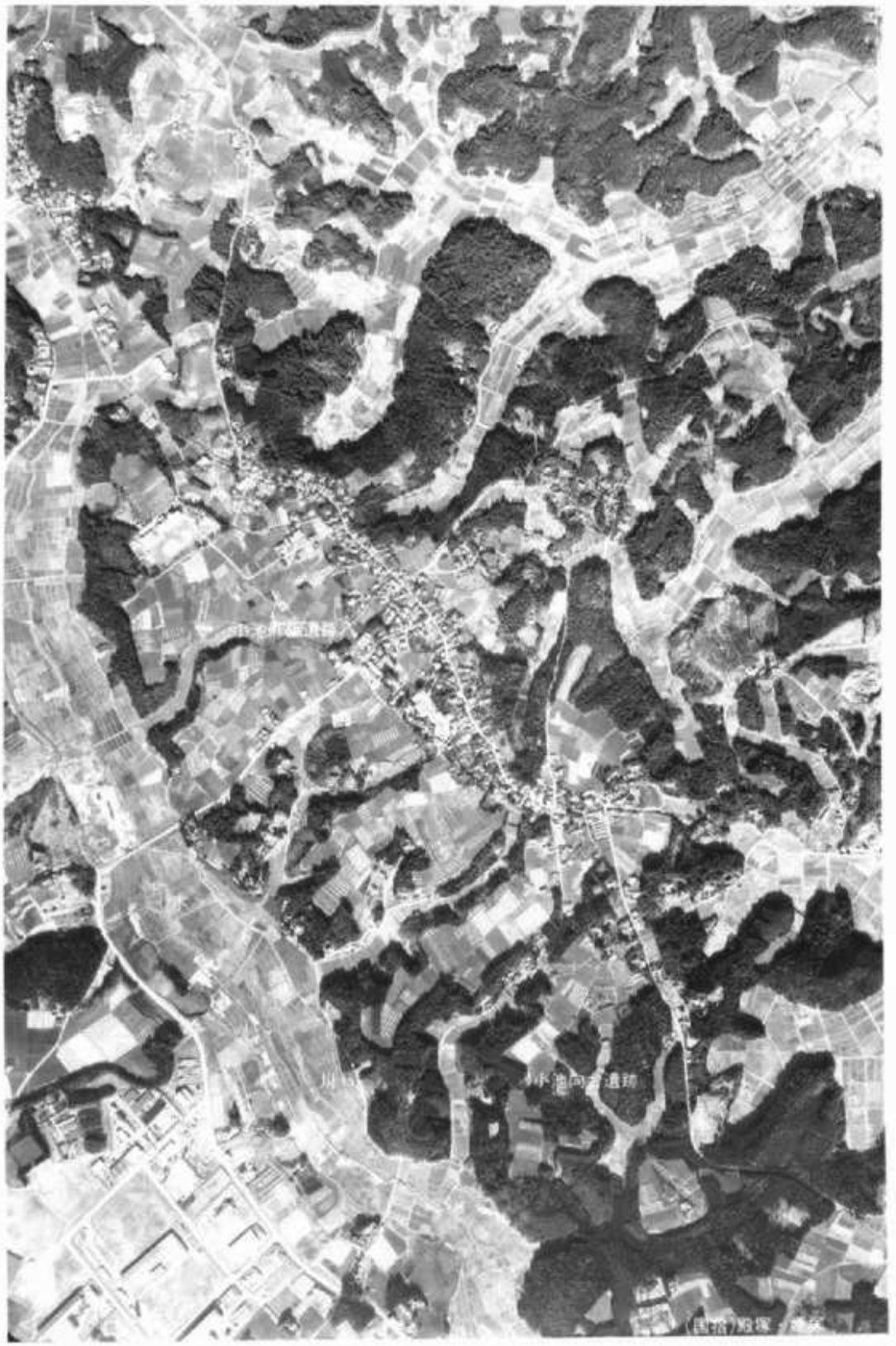
We present you a reprot of archaeology about two sites. One is Koike-aso site and the other Koike-mukodai. Both sites are found at Sibayama Town in Chiba prefecture. They are situated on a plateau between the Kido River and the Takaya River. There is a south-east part of the Shimousa plateau.

The next list is the result of the research.

Site Name	Koike - aso	Koike - mukodai
Excavated Area	3500m²	1700m²
Research Term	1978. 4.1～9.20	1978. 9.20～10.23
Found Remains	27 Dwelling Pits [2 are middle Jomon period. 11 are Onitaka period. (Late Kofun age) 14 are Historical age.] Some pilars pits for 2 houses 1 Pit(Middle Jomon period)	7 Dwelling Pits [All are Historical age.]

写真図版

図版 1



主要地方道成田松尾線関係遺跡航空写真(南西より)(1979撮影)

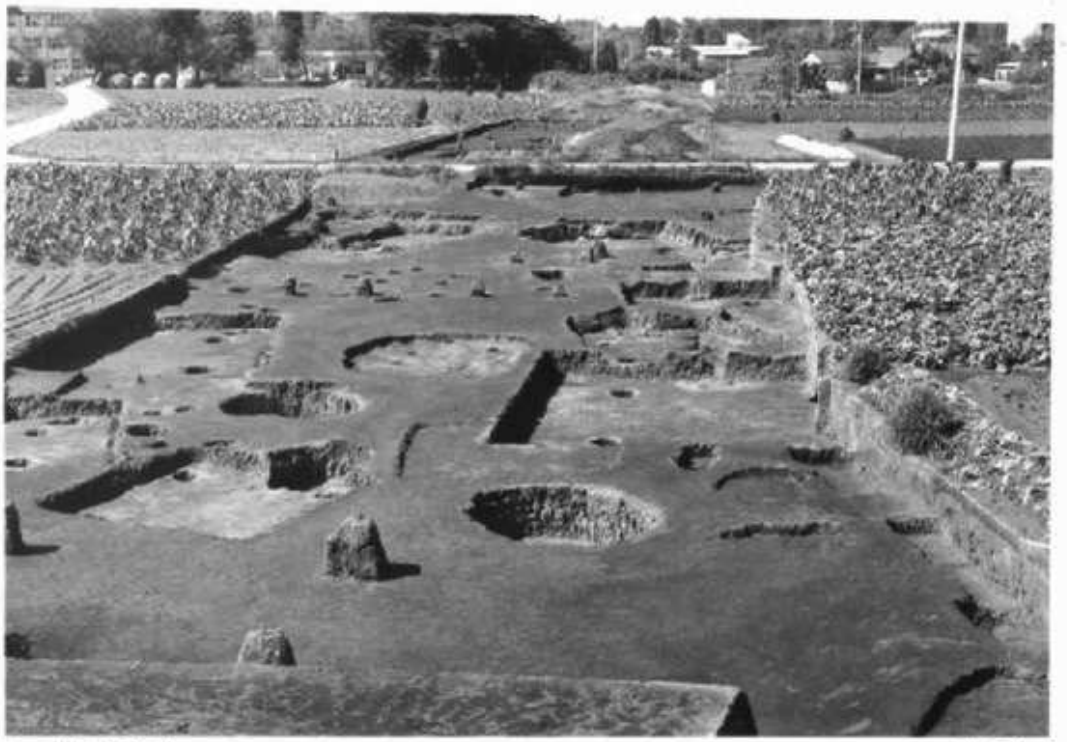
図版２　小池麻生遺跡

１．小池麻生遺跡(航空写真)　　南西より

２．同　遺跡近景　　南より

図版３　小池麻生遺跡

１．調査中全景　　南東より



２．調査後全景　　南東より

図版４　小池麻生遺跡

１．001号住居跡全景　　南東より

２．同　遺物出土状況　　南東より

図版 5　小池麻生遺跡

1．002号住居跡全景　　南より

2．同　遺物出土状況　　南より

図版６　小池麻生遺跡

１．003号住居跡全景　　南東より

２．004号住居跡全景　　南東より

図版7　小池麻生遺跡

1．005号住居跡全景　　南東より

2．006号住居跡全景　　南東より

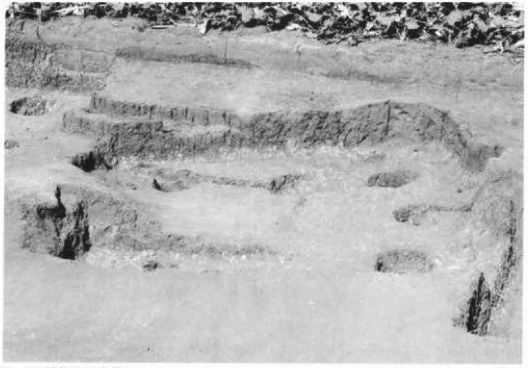
図版８　小池麻生遺跡

１．004号・008号住居跡全景　　南より

２．009号住居跡全景　　北より

図版９　小池麻生遺跡

１．012号住居跡全景　　南西より



２．013号住居跡全景　　西より

図版10　小池麻生遺跡

1．014号住居跡全景　　北より

2．同　遺物出土状況　　北東より

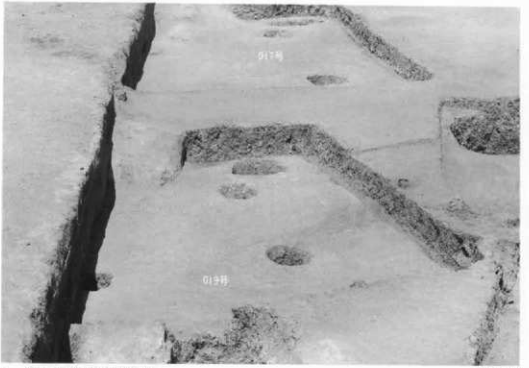
図版11　小池麻生遺跡

1．015号住居跡全景　　北西より

2．同　炭化材出土状況　　北西より

3．同　調査完了全景　　南東より

図版12　小池麻生遺跡



1．017・019号住居跡全景　　南東より

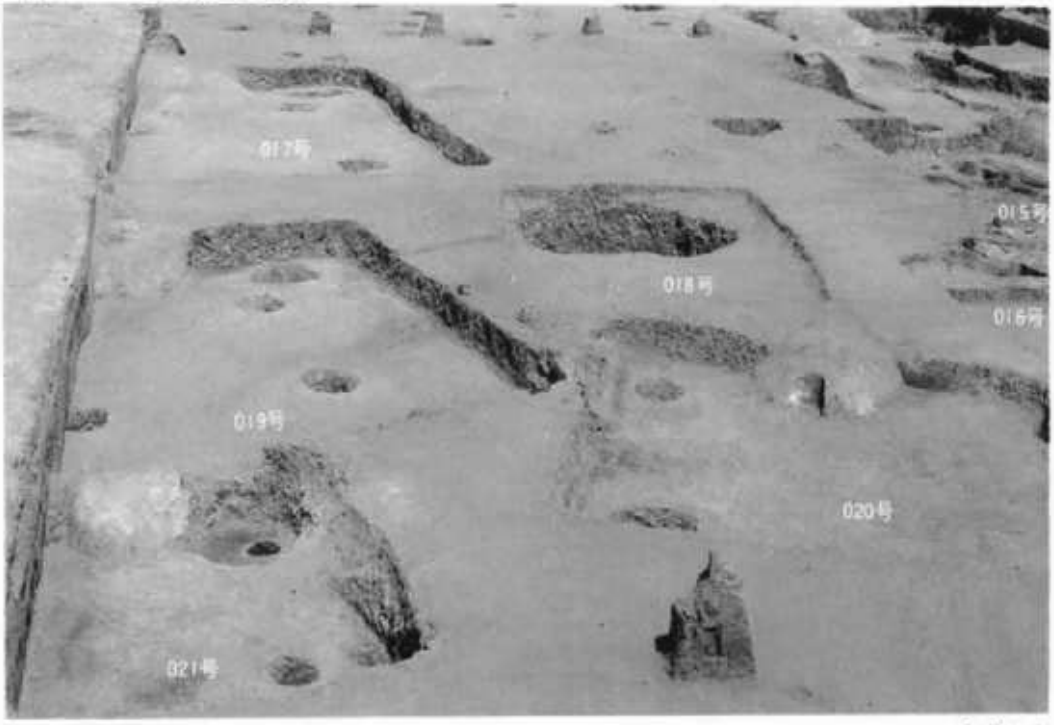
2．019号住居跡遺物出土状況

図版13　小池麻生遺跡

1．020号住居跡全景　　南西より

2．同　カマド内遺物出土状況　　南西より

図版14　小池麻生遺跡

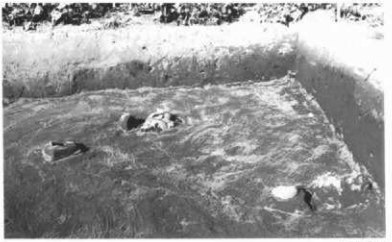


1．遺構配置状況　　南東より

2．021号住居跡全景　　南東より

図版15　小池麻生遺跡

1．024号住居跡全景　　北より



2．同　遺物出土状況　　北西より

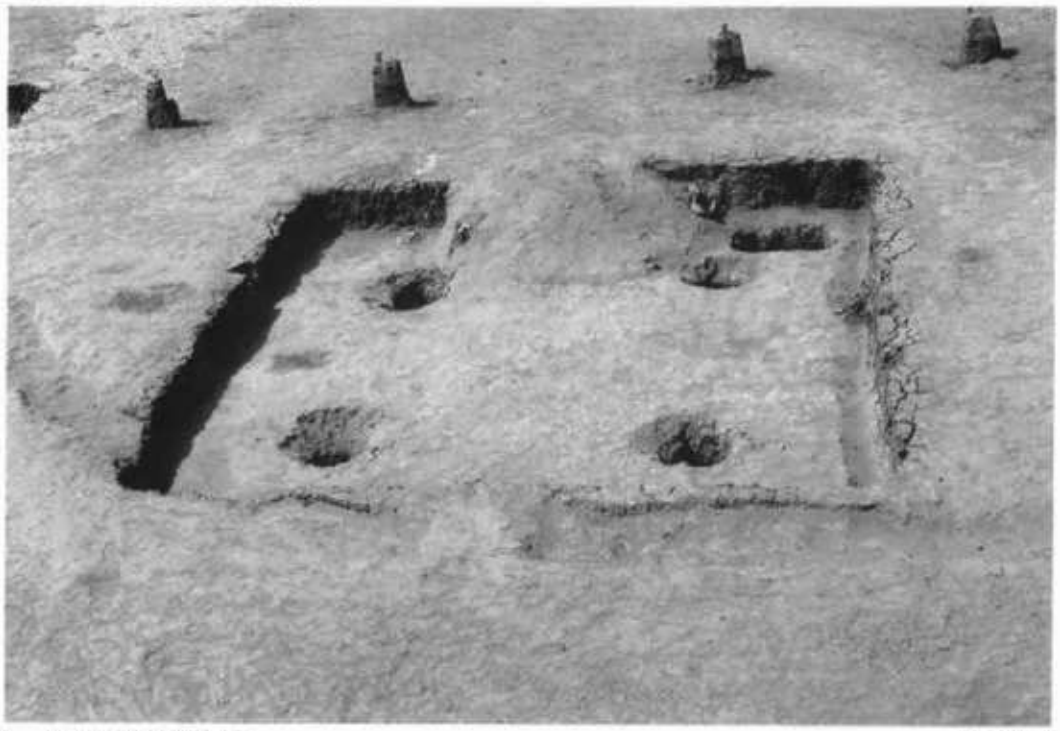
3．同　遺物出土状況　　北より

図版16　小池麻生遺跡

1．遺構配置状況　　北より

2．025号住居跡全景　　南東より

図版17　小池麻生遺跡

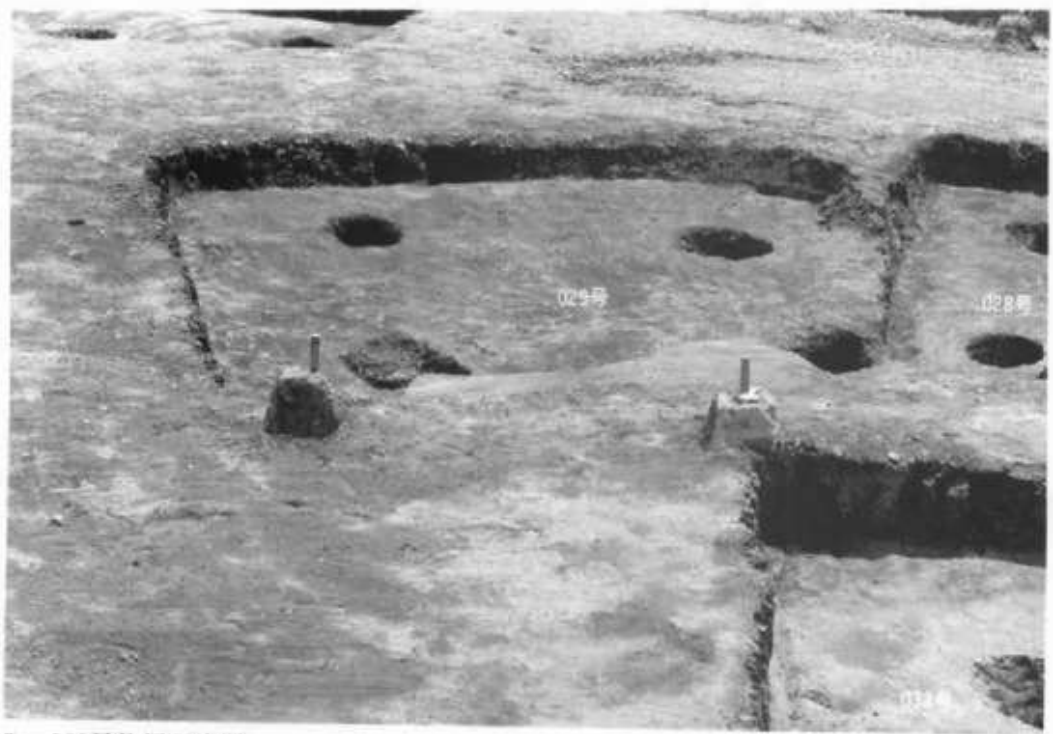


1．026号住居跡全景　　南東より

2．027号住居跡全景　　南東より

図版18　小池麻生遺跡

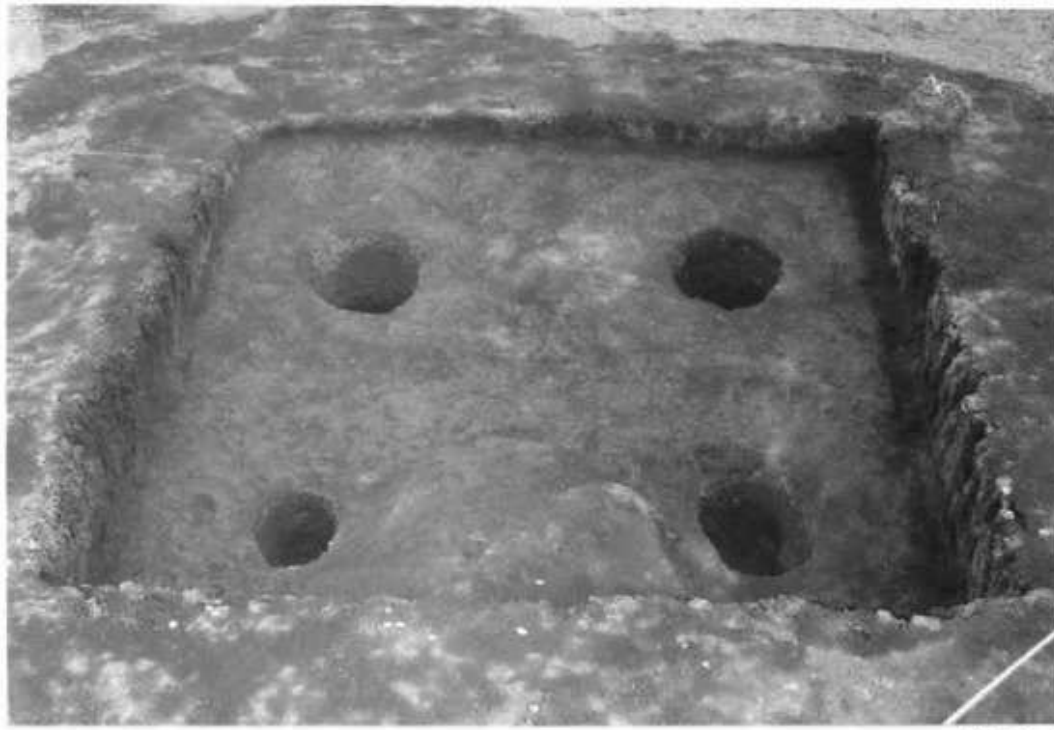
1．026号・028号・032号住居跡全景　　南西より



2．029号住居跡全景　　北西より

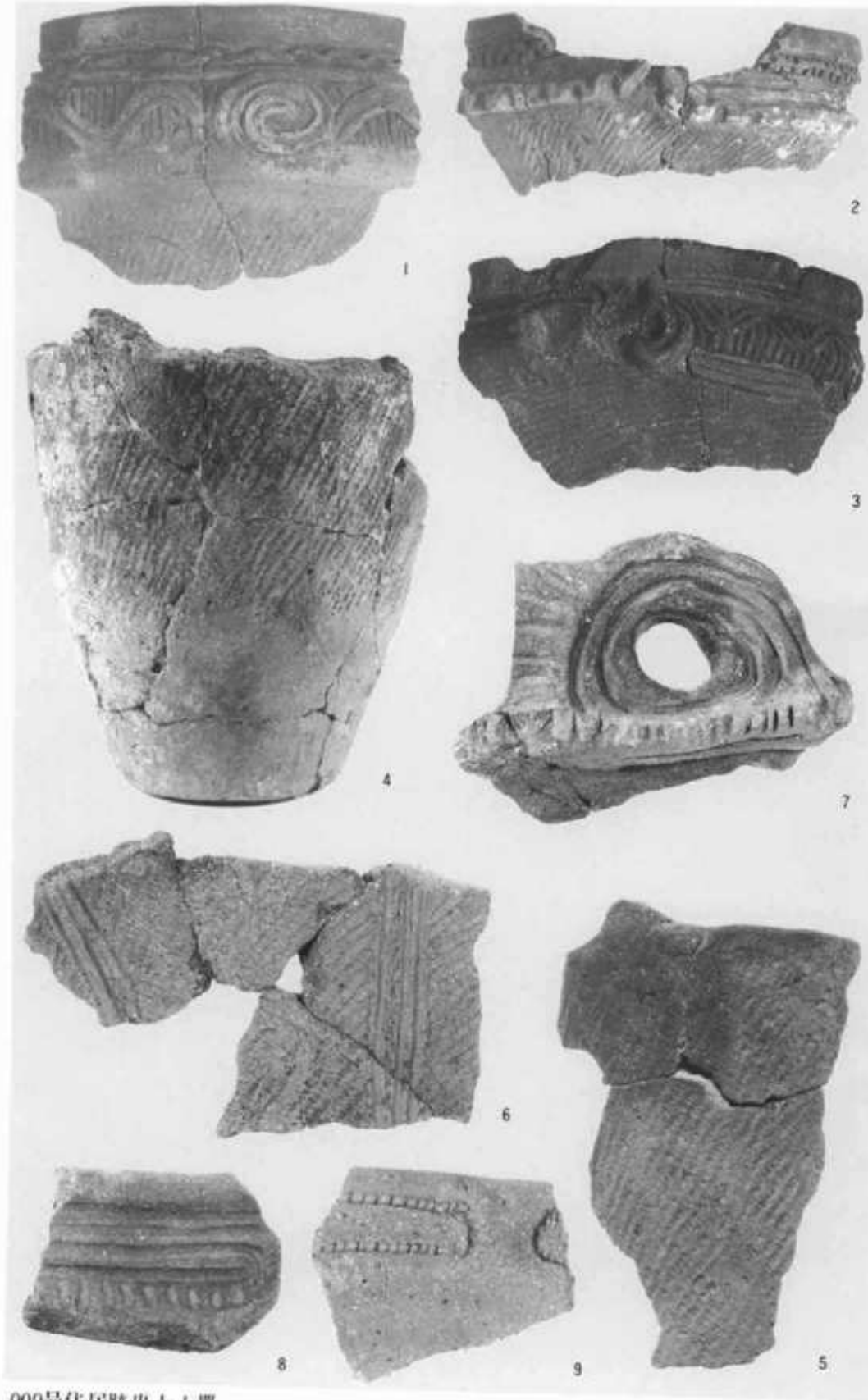
図版19　小池麻生遺跡

1．030号住居跡全景　　北西より



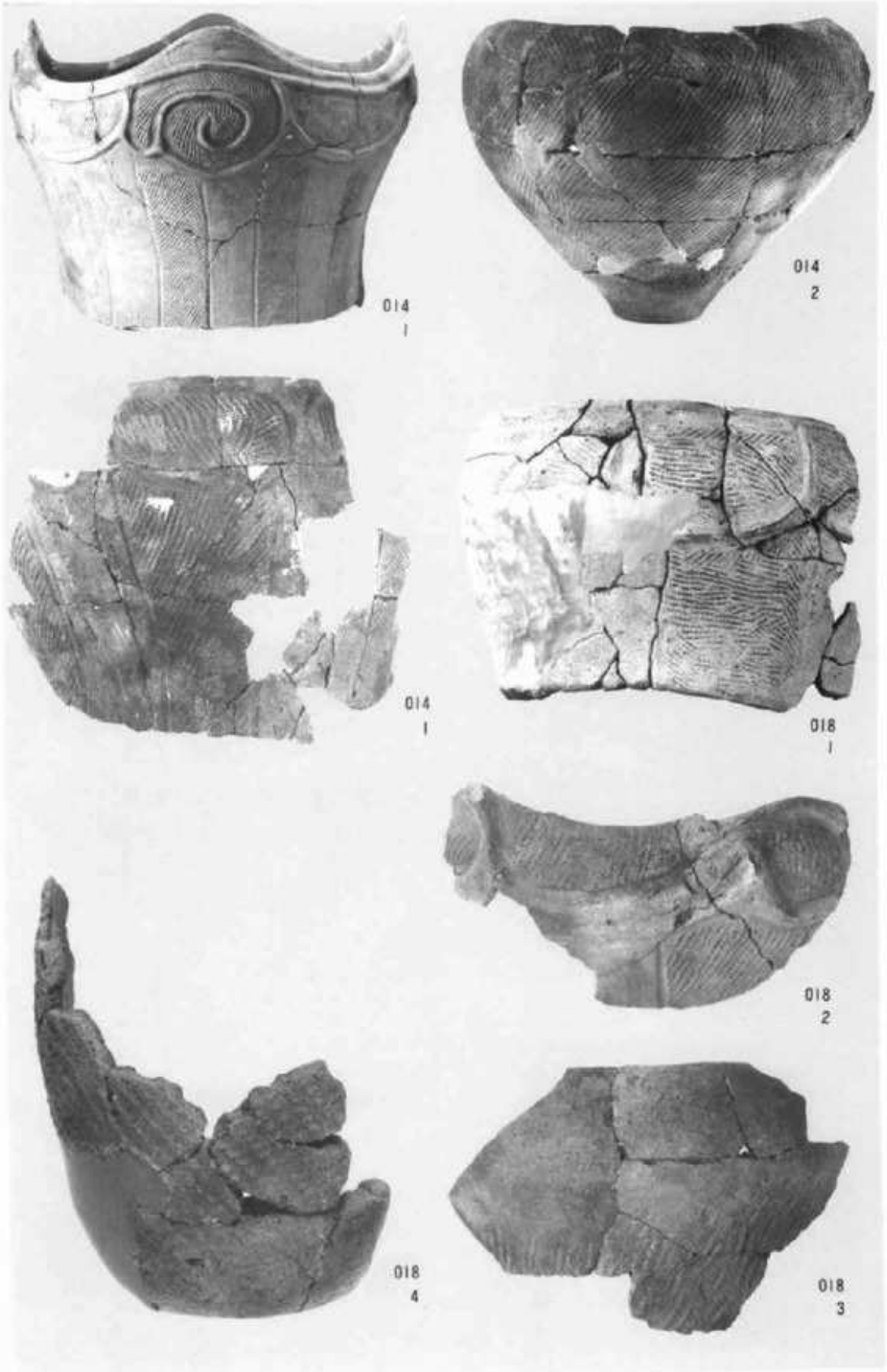
2．031号住居跡全景　　北西より

図版20　小池麻生遺跡



009号住居跡出土土器

図版21　小池麻生遺跡

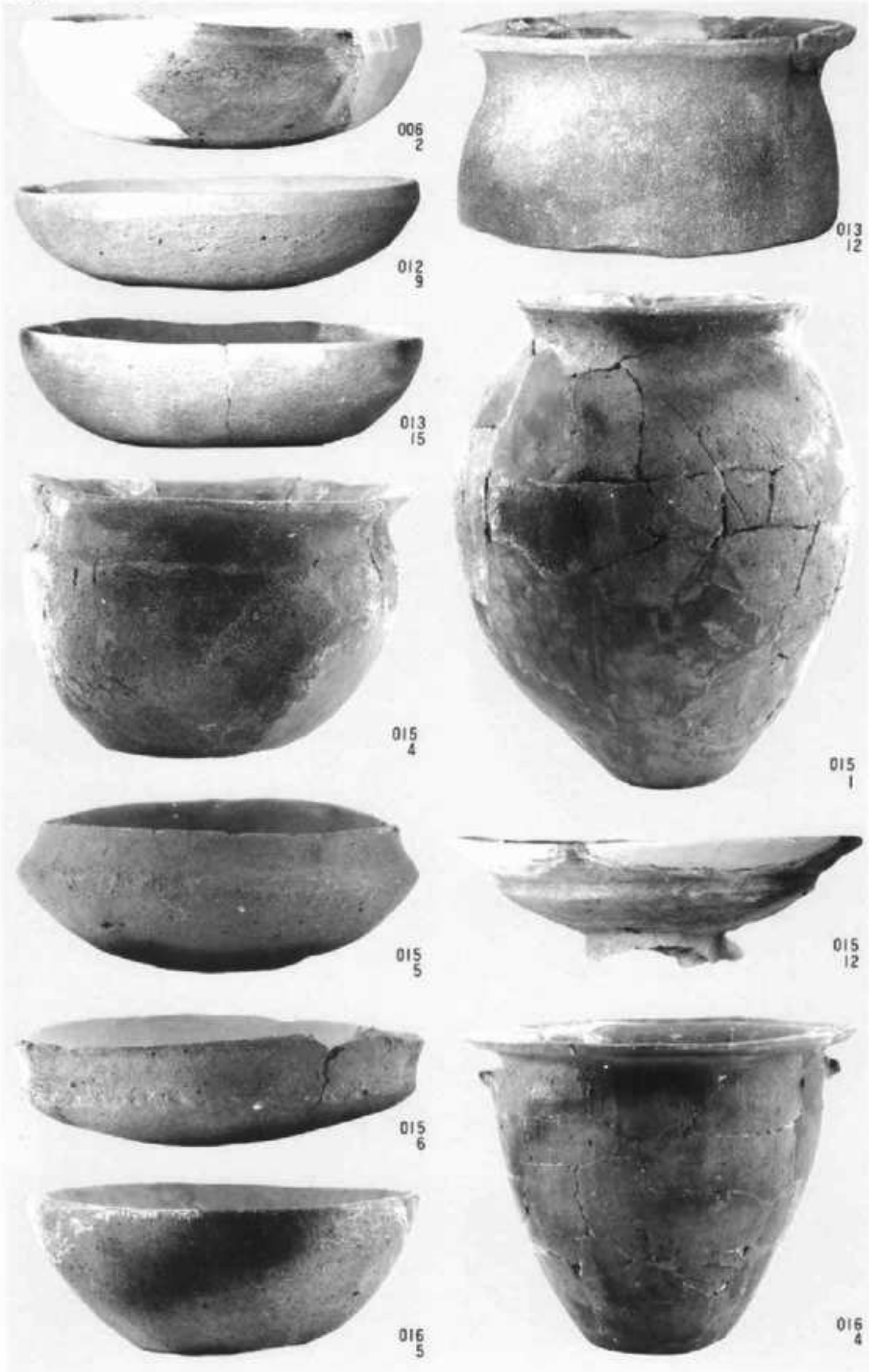


014号・018号住居跡出土土器

図版22　小池麻生遺跡

001号・002号・003号・005号・006号住居跡出土土器

図版23　小池麻生遺跡

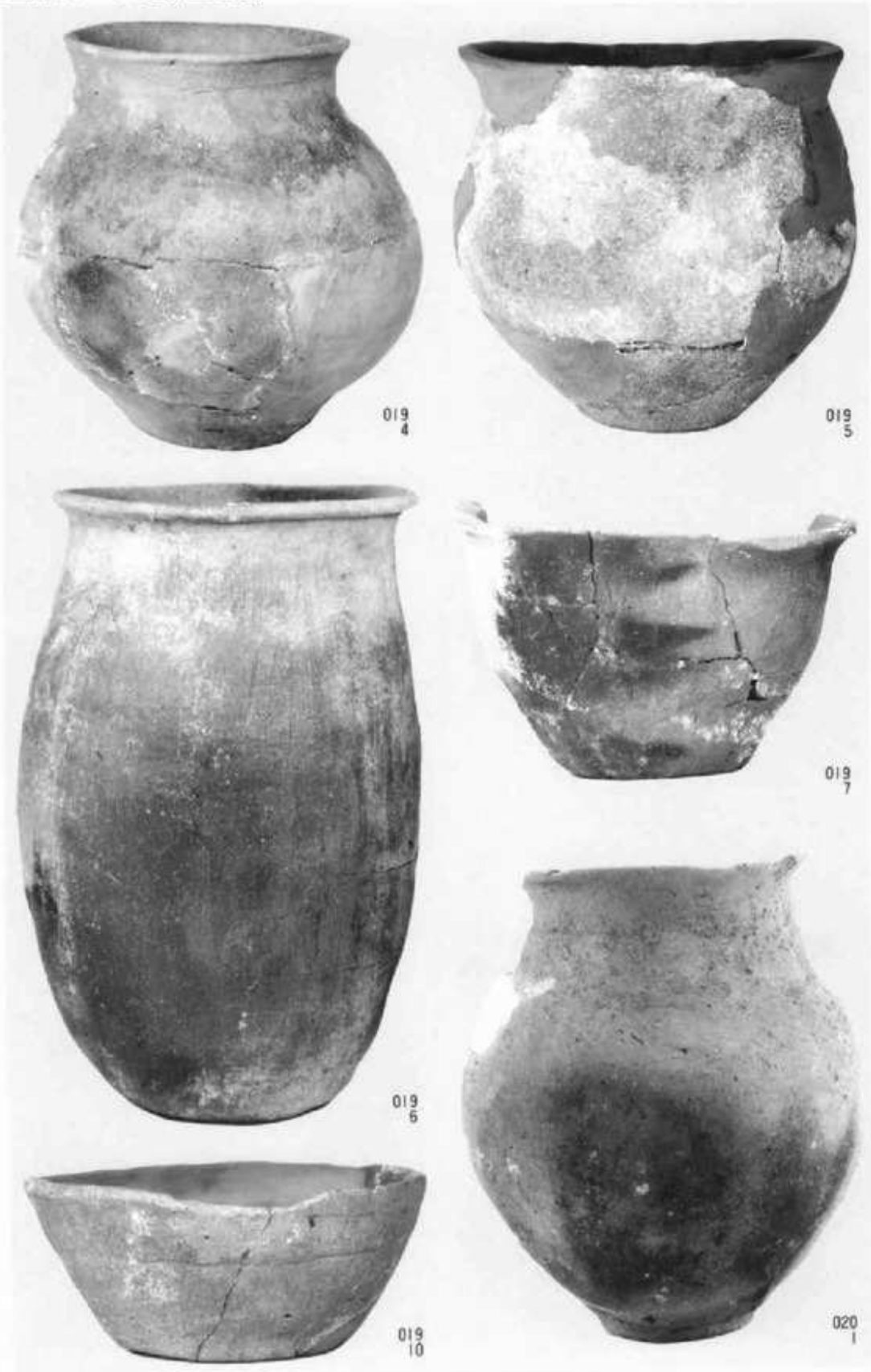


006号・012号・013号・015号・016号住居跡出土土器

図版24　小池麻生遺跡

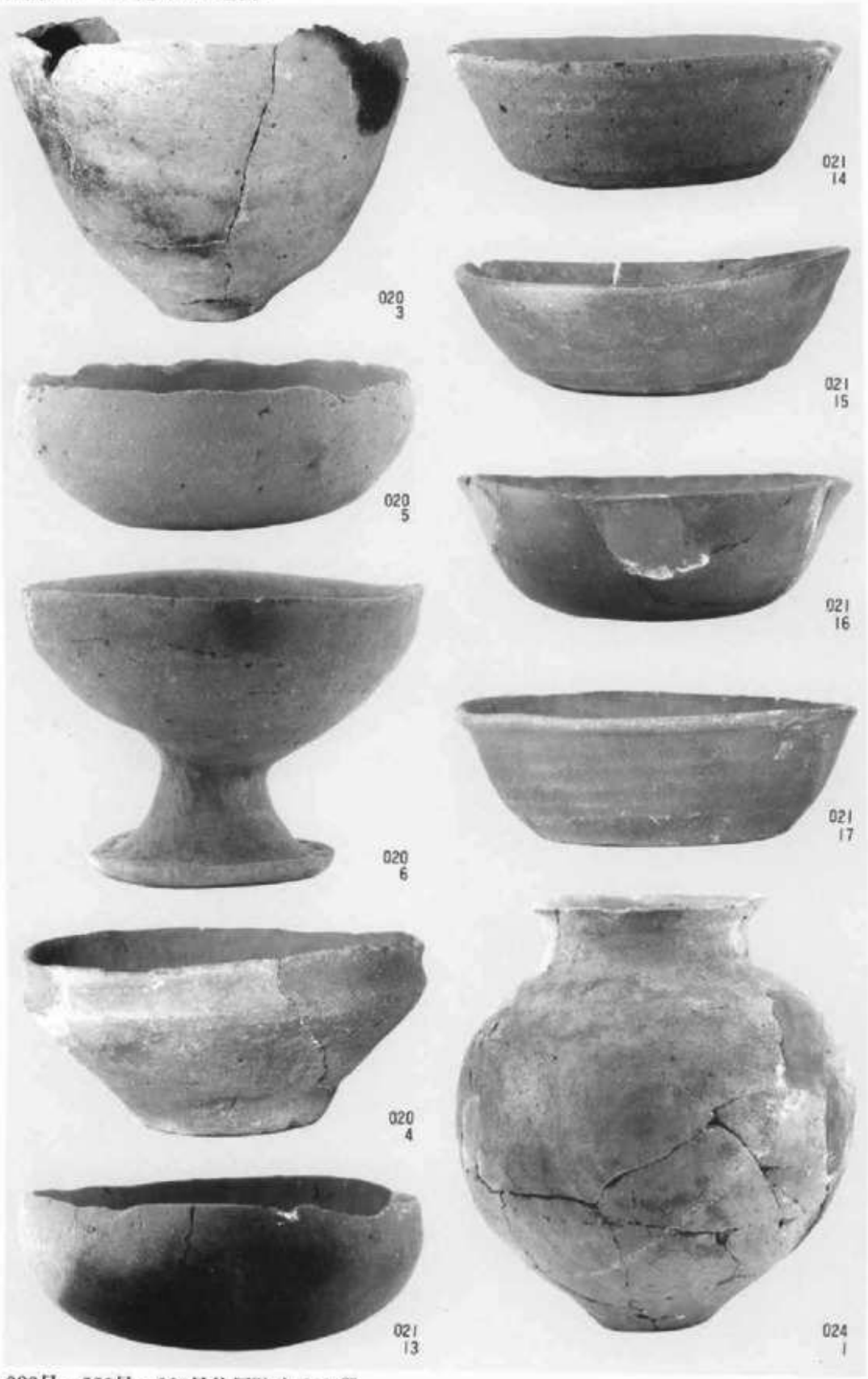
016号・017号・019号住居跡出土土器

図版25　小池麻生遺跡

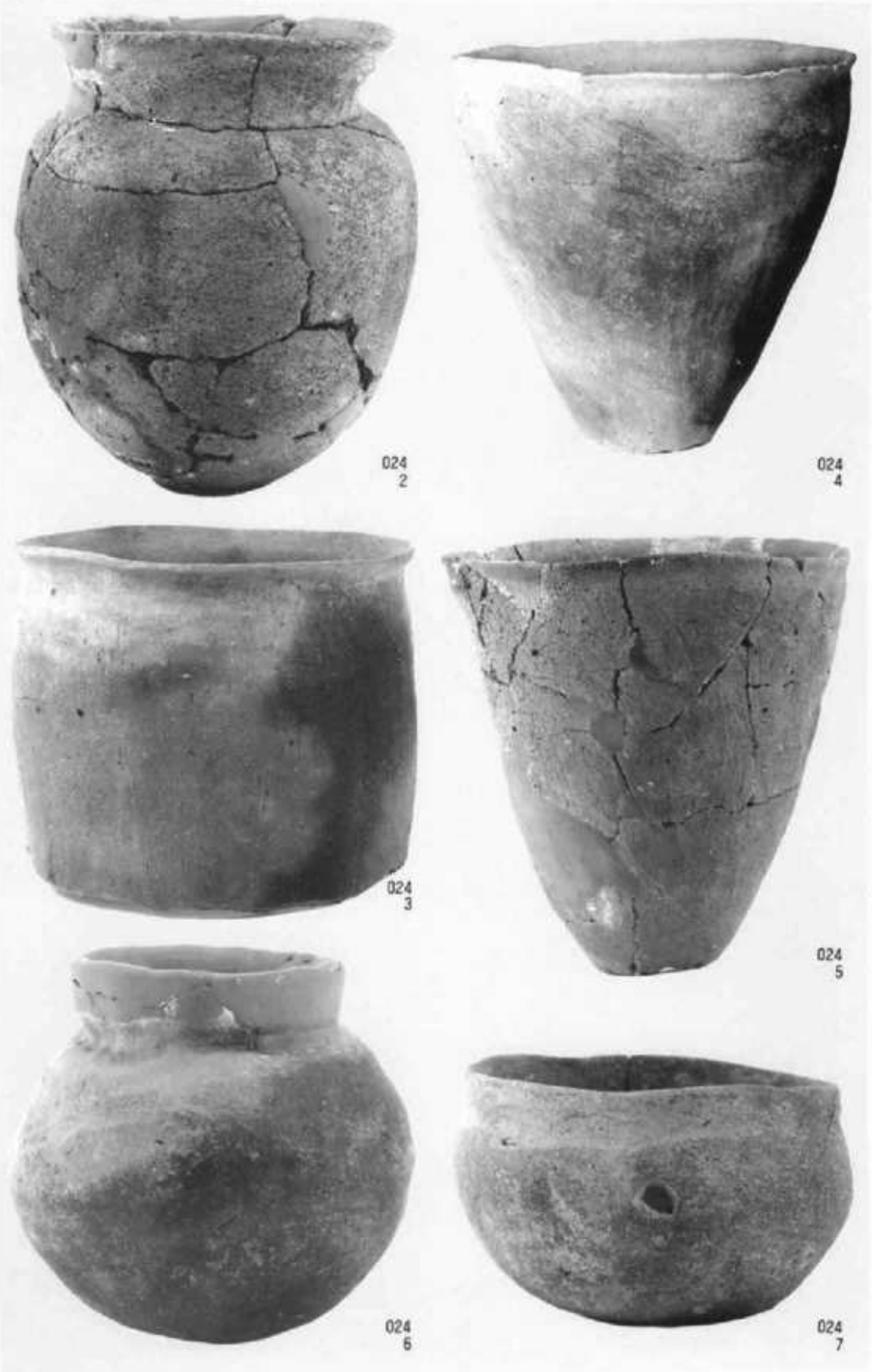


019号・020号住居跡出土土器

図版26　小池麻生遺跡

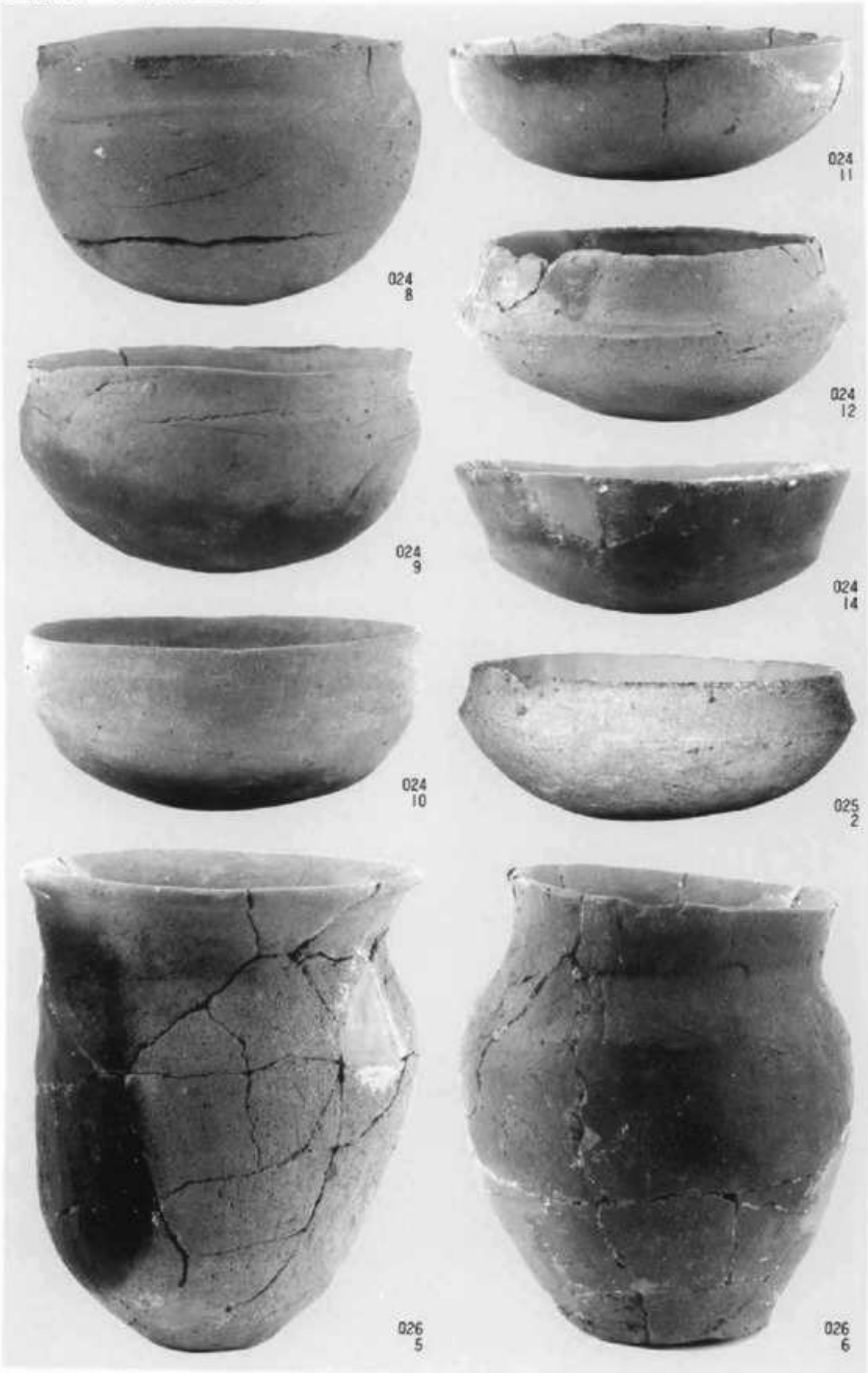


020号・021号・024号住居跡出土土器



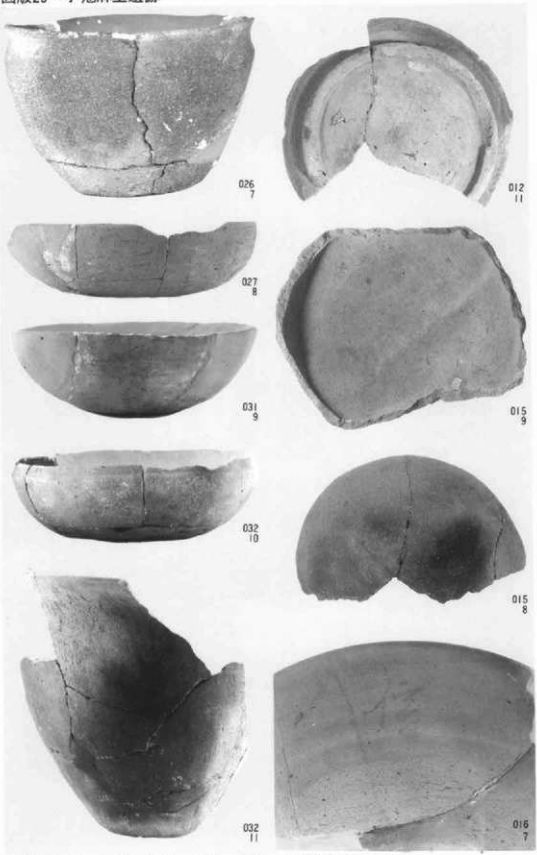
024号住居跡出土土器

図版28　小池麻生遺跡



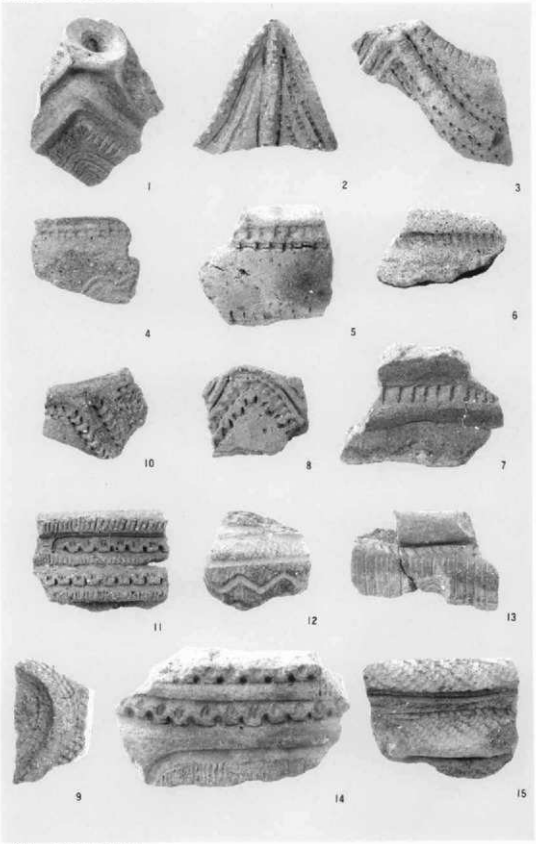
024号・025号・026号住居跡出土土器

図版29 小池麻生遺跡



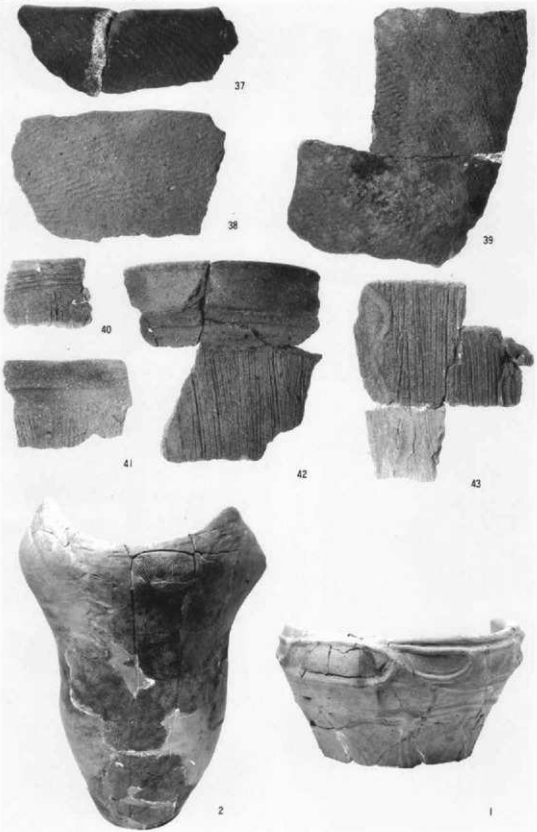
012号・015号・016号・026号・027号・031号・032号住居跡出土土器

図版30　小池麻生遺跡



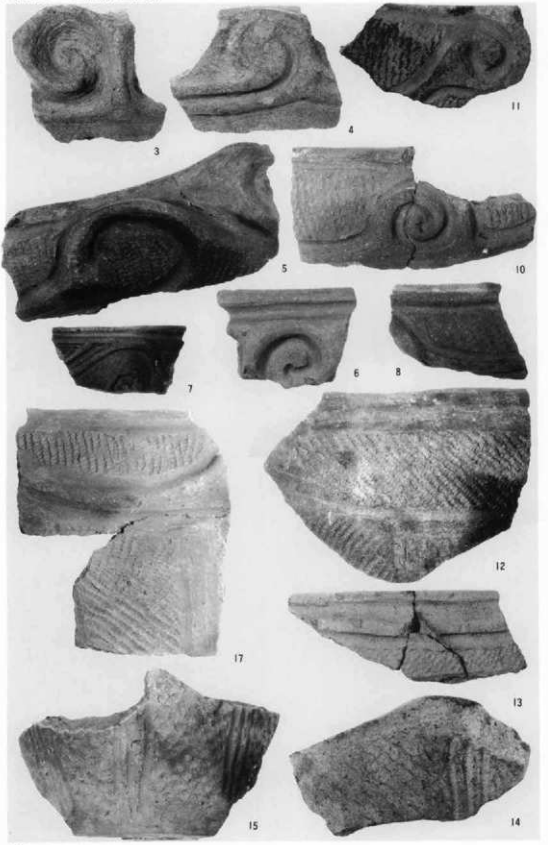
グリッド出土土器(1)

図版31　小池麻生遺跡



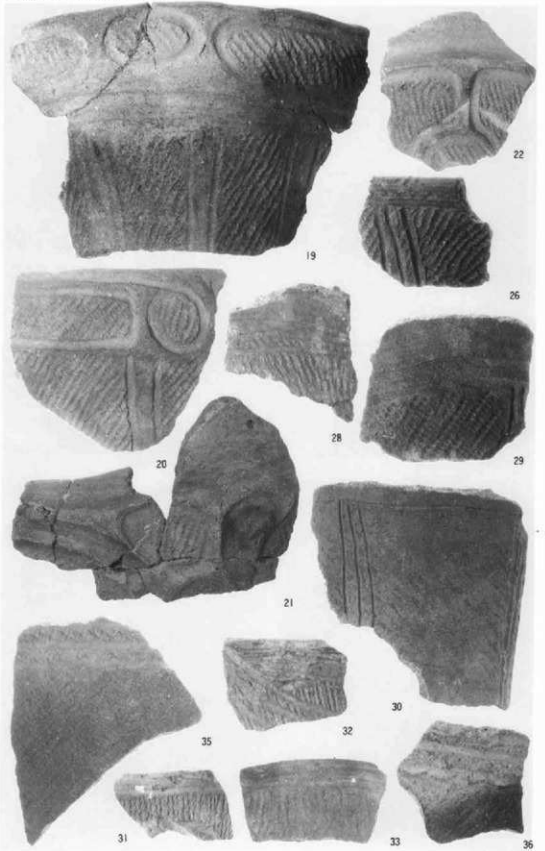
グリッド出土土器(2)

図版32　小池麻生遺跡



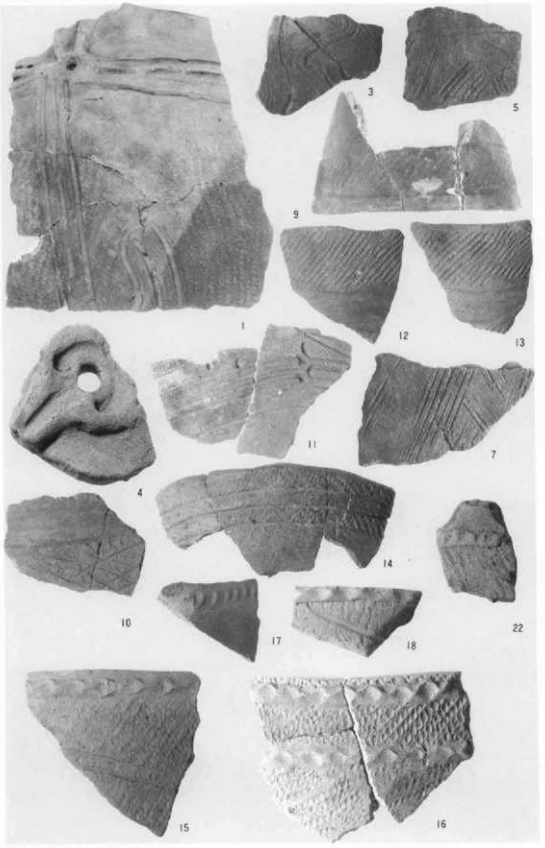
グリッド出土土器(3)

図版33　小池麻生遺跡



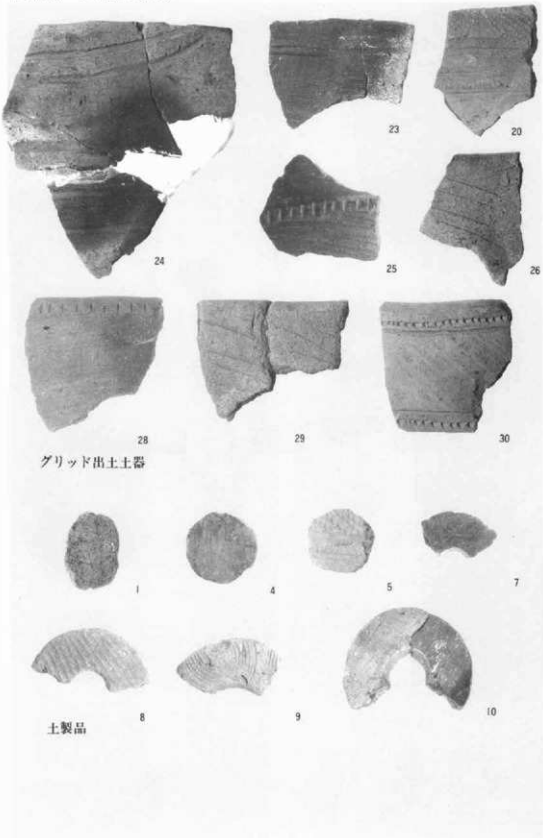
グリッド出土土器(4)

図版34　小池麻生遺跡



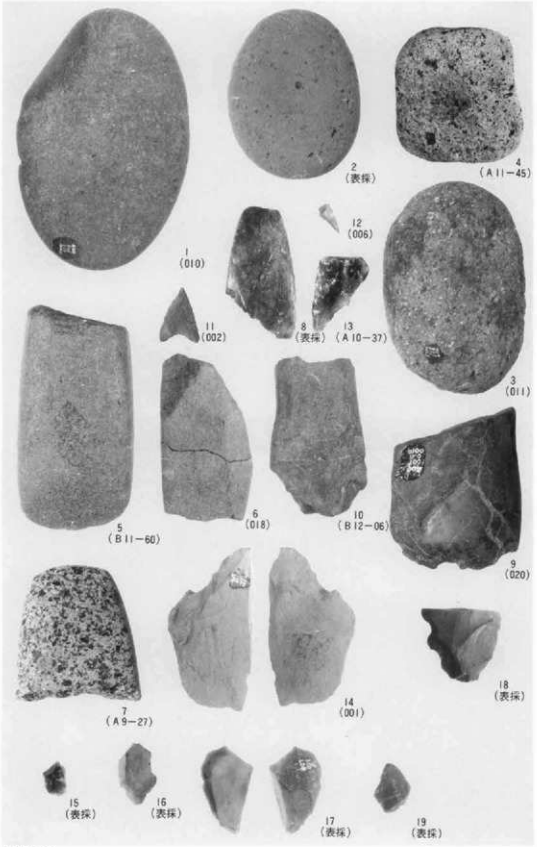
グリッド出土土器(5)

図版35　小池麻生遺跡



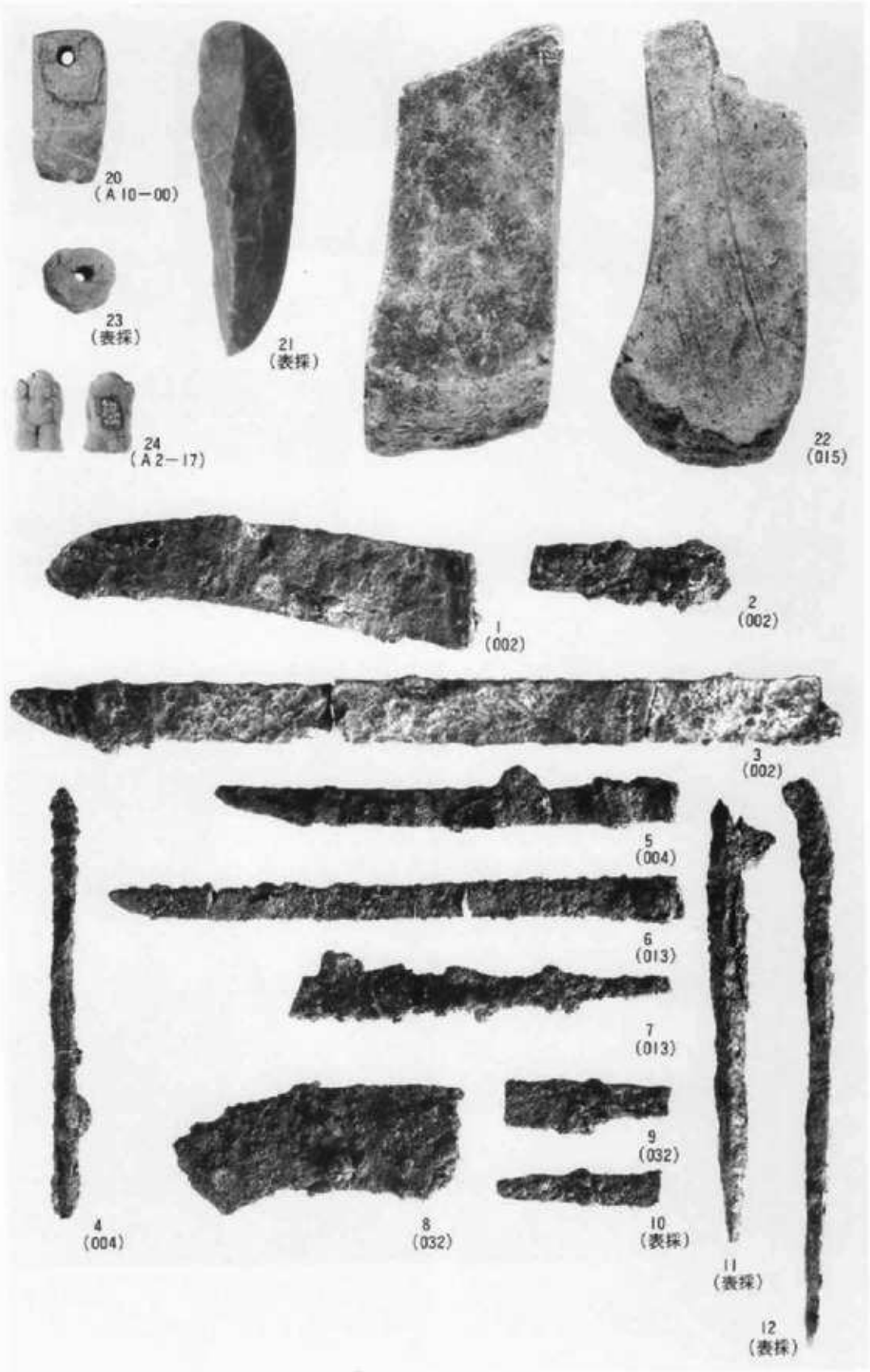
グリッド出土土器(６)・土製品

図版36　小池麻生遺跡



石器(1)

図版37　小池麻生遺跡


20
(A 10−00)
23
(表採)
21
(表採)
24
(A 2−17)
22
(015)
1
(002)
2
(002)
3
(002)
5
(004)
6
(013)
7
(013)
9
(032)
4
(004)
8
(032)
10
(表採)
11
(表採)
12
(表採)

図版38　小池向台遺跡

1．小池向台遺跡近景　　東より

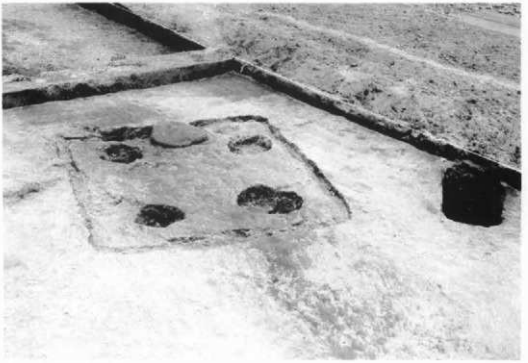
2．同　調査後全景　　南東より

図版39　小池向台遺跡

1．001号住居跡全景　　南東より

2．同　堀方全景より建物跡遺構群を望む　　東より

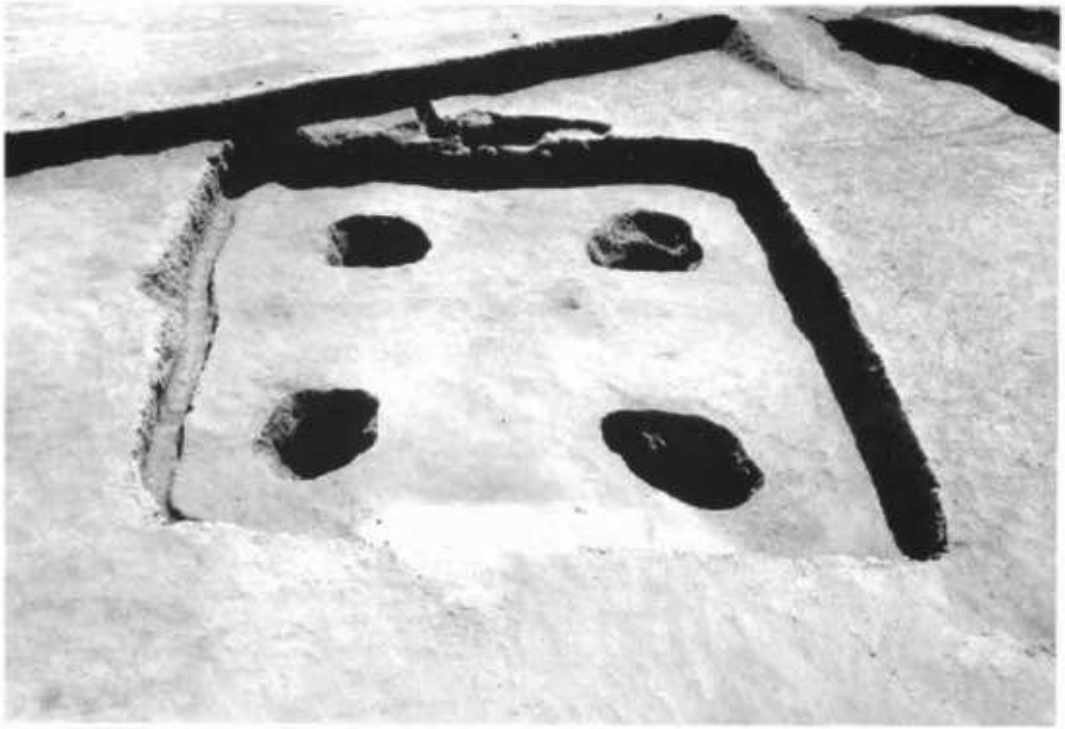
図版40　小池向台遺跡



1．002号住居跡全景　　南より

2．003号住居跡全景　　西南より

図版41　小池向台遺跡



1．004号住居跡全景　　北西より

2．同　堀方全景　　東より

図版42　小池向台遺跡

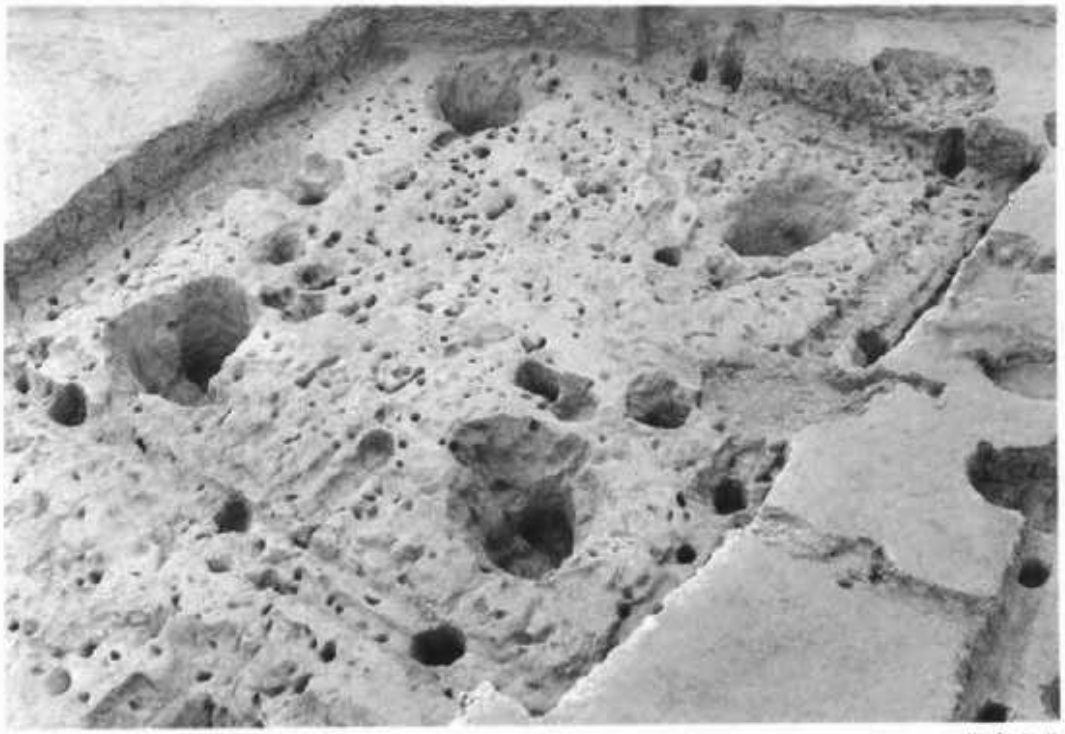
1．004号住居跡遺物出土状況　　北西より

2．同　遺物出土状況　　南より

3．同　遺物出土状況　　東より

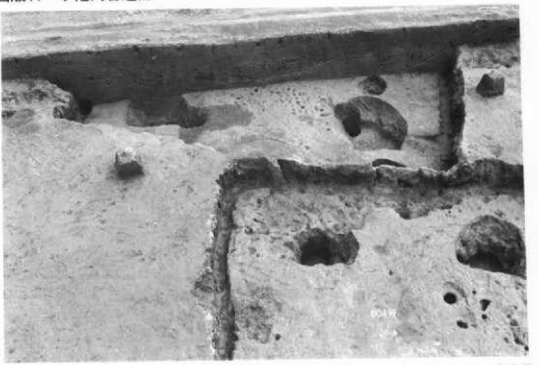
図版43　小池向台遺跡

1．006号住居跡全景　　南西より



2．同　堀方全景　　北東より

図版44　小池向台遺跡



1．008号住居跡全景　　北より

2．同　遺物出土状況

図版45　小池向台遺跡

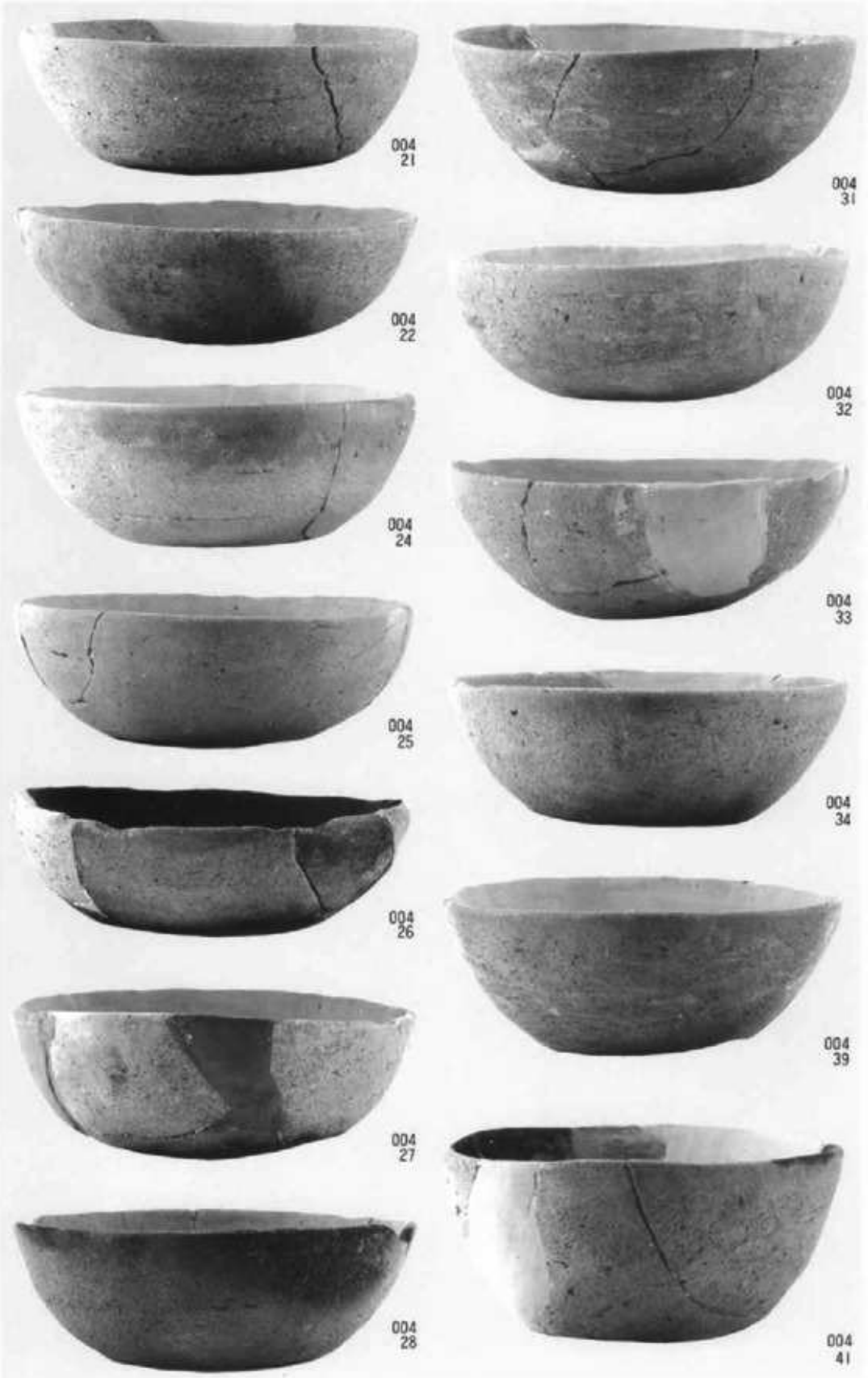
1．012号住居跡全景　　西より

2．調査風景　　南西より

図版46　小池向台遺跡

001号・003号・004号住居跡出土土器

図版47　小池向台遺跡

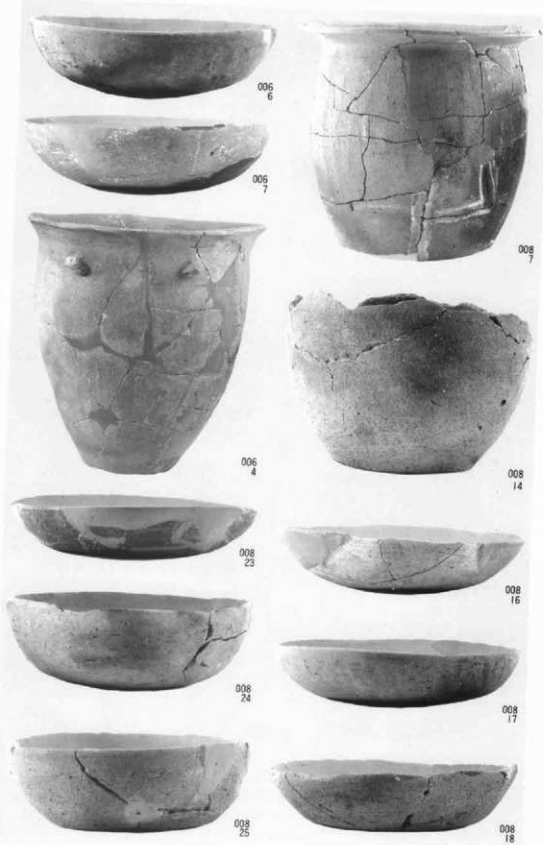


004号住居跡出土土器

図版48　小池向台遺跡

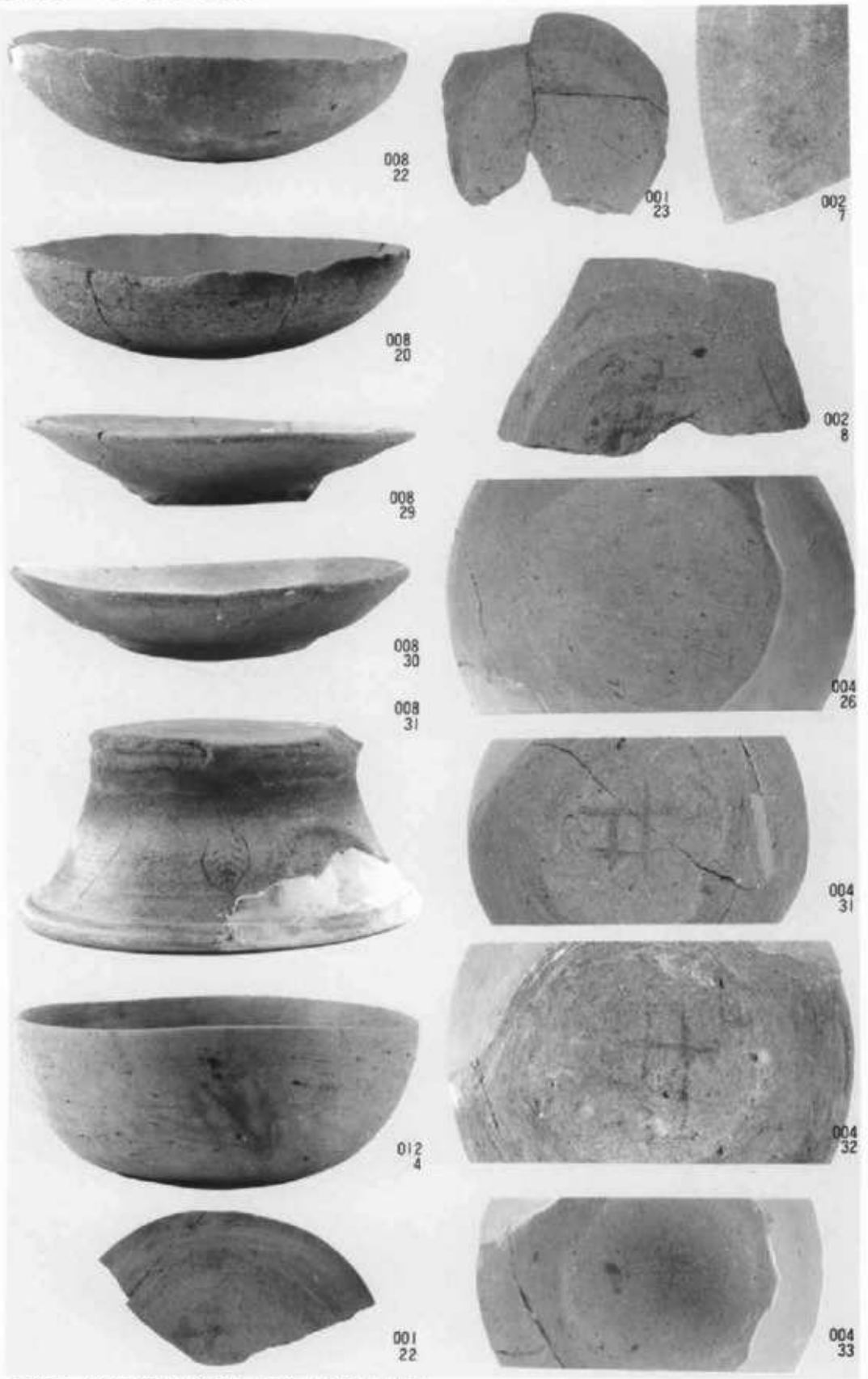
004号住居跡出土土器

図版49　小池向台遺跡



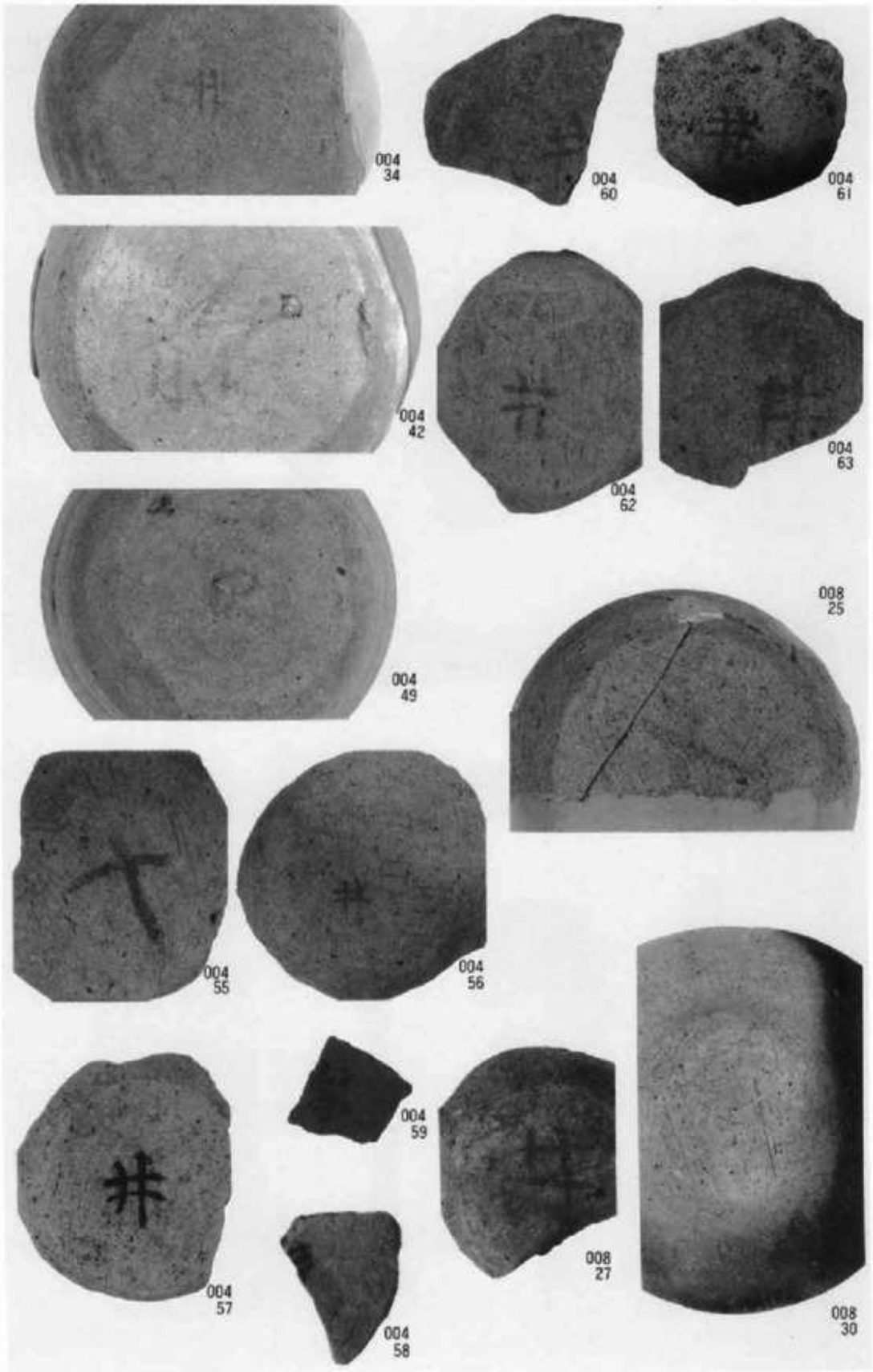
006号・008号住居跡出土土器

図版50　小池向台遺跡



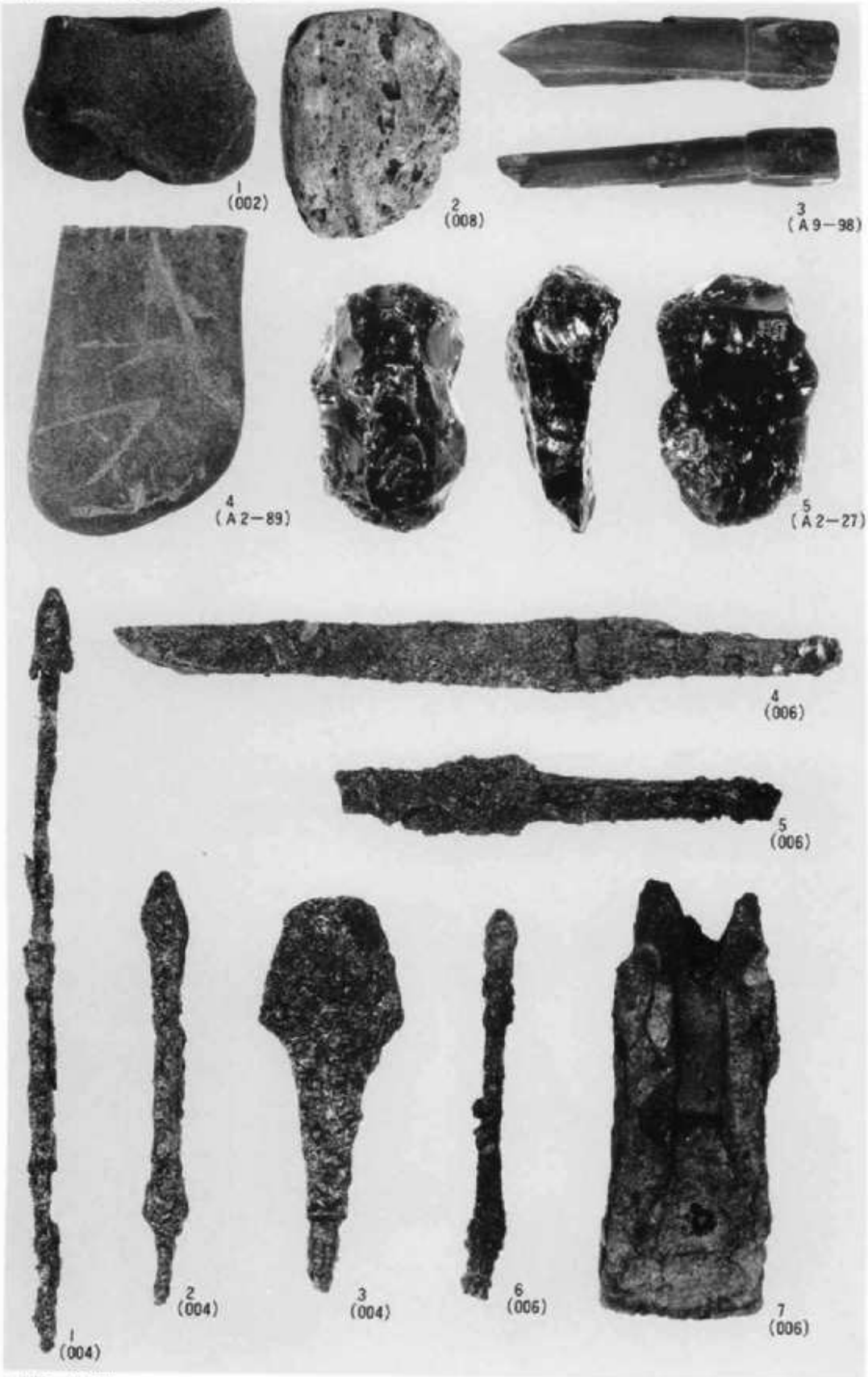
008号・012号住居跡出土土器・墨書土器(1)

図版51　小池向台遺跡



墨書土器(2)

図版52　小池向台遺跡



石器・鉄器

昭和58年３月20日　印刷
昭和58年３月30日　発行

主要地方道成田松尾線Ⅰ
小池麻生遺跡
小池向台遺跡

発行　千葉県土木部
千葉県千葉市市場町１－１
財団法人千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
印刷　株式会社ヤカ東京工場
千葉県松戸市田中新田５－５

主要地方道成田松尾線Ⅰ正誤表

本文訂正

頁	行	誤	正
6	9	先工器	先七器
12	11	B型は	D型は
53	7	029号跡	032号跡
60	8	A 6 −34	A 6 −36
63	13	波縄文	波状文
70	7	盤形の坏である。	盤である。
105	9	A 3 −11	A 3 −15
106	9	A 2 −84	A 3 −84

頁	行	誤	正
108	2	A 2 −61	A 3 −61
127	22	形式	型式
130	4	次の図の	第118·119図の
130	12	次の図の	第119図の
130	21	小池向台遺跡山土	小池向台遺跡出土
130	21	ロクロ成形形	ロクロ成形
130	23	0011	001

挿図訂正

挿図番号	誤	正
第15図	40.27m	40.20m
第26図 エレベーション図	a	a′
第26図 エレベーション図	a′	a
第27図	A 6 −92	A 7 −02
第27図	A 7 −03	A 7 −13
第28図 セクション図	ƨ	5
第37図 レベル数字	m08.ɛɛ	39.80m
第56図	019号	029
第58図	B13−61	B13−52
第59図	A12−98	A12−89
第62図	A 6 −34	A 6 −36
第62図	A 6 −44	A 6 −46
第70図 スケール	10m	10cm

挿図番号	誤	正
第74図 スケール	10m	10cm
第90図	第90図	第91図
第91図 層序	欠如	Ⅷ
第91図		第90図
第93図 レベル数字	欠如	42.50m
第95図 レベル数字	欠如	42.70m
第96図	A 3 −11	A 3 −16
第96図	A 3 −21	A 3 −15
第98図	A 2 −72	A 3 −72
第98図	A 2 −84	A 3 −84
第100図	A 2 −61	A 3 −61
第100図	A 2 −72	A 3 −72
第102図	A 4 −04	A 4 −13